

ISBN 978-4-86337-017-3
Studia Culturae Islamicae No.94
MEIS Series No.10



ČINGĪZ-NĀMA

Ötämiš Ḥājī

Introduction, Annotated Translation, Transcription
and Critical Text

by

Takushi KAWAGUCHI, Hiroyuki NAGAMINE

Supervision: Mutsumi SUGAHARA

Research Institute for
Languages and Cultures of Asia and Africa
(ILCAA)



『チンギズ・ナーマ (Čingīz-nāma)』

ウテミシュ・ハージー (Ötämiš Hāji) 著

解題・訳註・転写・校訂テキスト

川口琢司・長峰博之編 菅原睦校閲

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2008

ČINGĪZ-NĀMA

Ötämiš Hāji

**Introduction, Annotated Translation, Transcription
and Critical Text**

by

Takushi KAWAGUCHI, Hiroyuki NAGAMINE

Supervision: Mutsumi SUGAHARA

RESEARCH INSTITUTE FOR LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
ILCAA 2008

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Tokyo University of Foreign Studies

3-11-1 Asahi-cho Fuchu-shi
Tokyo 183-8534
Japan

© Takushi KAWAGUCHI, Hiroyuki NAGAMINE, Mutsumi SUGAHARA, 2008

ISBN 978-4-86337-017-3

Studia Culturae Islamicae No.94
The Research and Educational Project for Middle East and Islamic Studies
(MEIS) Series No.10

Printed by Fujiwara Printing co., Ltd

序

本書は、16世紀半ばまでにジョチ・ウルス¹の継承政権である「ヒヴァ・ハン国」においてウテミシュ・ハージーがアラビア文字チャガタイ語で著した史書『チンギズ・ナーマ』の解題・訳註・転写・校訂テキストである。

遊牧政権は文字史料をあまり残さなかったため、これまで多くのジョチ・ウルス史研究はおもに外部（ティムール朝、マムルーク朝、ロシアなど）の同時代史料の断片的な記述に依拠してきた。そのため、ジョチ・ウルス史研究には依然として不明な部分が多く、ときに研究上の混乱が生じてきた。一方、後代になると、ジョチ・ウルスの継承政権において独自の情報を含む諸史料が著されるようになる。これらは、遊牧社会の口頭伝承の伝統を背景にしている部分もあるが、英雄叙事詩とは異なり、記述史料を利用した史書としての性格を有するものである。なかでも、『チンギズ・ナーマ』は、ジョチ・ウルス史研究において高い史料的价值を持つ文献であり、すでにV.P.ユーチンによるタシュケント写本のファクシミリ・ロシア語訳・キリル文字転写が刊行されている²。しかし、その重要性にもかかわらず、『チンギズ・ナーマ』の史料的价值は多くの先行研究において必ずしも正確には認識されてこなかった。また、ユーチンの研究もいまとなつては問題点が少なくなく³、加えて、校訂テキストはいまだ出版されていない。以上の状況を鑑み、ここに『チンギズ・ナーマ』の解題・訳註・転写・校訂テキストを刊行し、今後のジョチ・ウルス史研究の発展に少しでも益することを願うものである。

¹ キプチャク草原を中心にチンギス（チンギズ）・ハンの長男ジョチの子孫が支配した遊牧政権であり、大きくは、ジョチの次男パトゥの子孫が支配する右翼ウルスと、長男オルダの子孫が支配する左翼ウルスに分かれていた。しかし、14世紀後半にはじまる混乱のなかで、断絶したオルダ家とパトゥ家にかわってジョチの五男シバンと十三男トカ・テムルの子孫が台頭し、15～16世紀にかけて、トカ・テムル家はキプチャク草原東部に「カザク・ハン国」、西部に「カザン・ハン国」「アストラハン・ハン国」、クリミア半島を中心に「クリミア・ハン国」を樹立し、シバン家は西シベリアの「シベリア・ハン国」を継承する一方、マー・ワラー・アンナフルに南下しティムール帝国を滅ぼして「シャイバーン朝（アブールハイル朝）」、ホラズムに「ヒヴァ・ハン国」を樹立した。

² Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, Факсимиле, перевод, транскрипция, текстлогические примечания, исследование В.П. Юдина, Подготовила к изданию Ю.Г. Баранова, Комментарий и указатели М.Х.Абусеитовой, Алма-Ата, 1992.

³ 例えば、36aのキリル文字転写の欠落、ロシア語訳の誤り、そして校訂註・キリル文字転写・ロシア語訳の不一致などの問題点などが見受けられる。

本書を上梓するにあたり、東京外国語大学の菅原睦准教授には本書の校閲と主として言語学の視点からの序文をお願いし、数々の貴重な助言や御意見をいただいた。また、本書を刊行することができたのは、ひとえに東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の近藤信彰准教授の御尽力によるものである。さらに、近藤氏からは本書の内容全体に関わる貴重な助言をもいただいた。ここに記して謝意を表したい。

川口琢司 長峰博之

校閲者序

13世紀に中央ユーラシアから西アジアの大部分がモンゴルの支配を受けるようになったことは、テュルク諸語の歴史にとって、それに先立つイスラーム化とは違った意味で重要な出来事であったとすることができる。即ち、モンゴル支配によって引き起こされた人口移動と言語状況の変化を契機として、いくつかの地域に新しい文章語が現れ始めたのである。これら新しく登場した文章語からは、既にそれぞれの方言的基盤の相違を認めることができ、それゆえこの時代のテュルク語文献は現代テュルク諸語との関連においても重要なデータを提供するものである。

従来、中央ユーラシア地域におけるこの時期のテュルク語文章語は、いわゆる「チャガタイ語」によって代表され、その「チャガタイ語」はまたナワーイーやパーブルらティムール朝宮廷文人がその作品で用いた言語、すなわち「古典時代チャガタイ語」で代表される傾向にあった。しかしながら、「古典時代チャガタイ語」成立の背景にどのような文章語の伝統や口語の状況が存在したのか、言い換えればこの言語の文章語としてのあり方という問題をめぐっては、いまだ解明されていない点が多く残されている。同様にまた、しばしば言われるチャガタイ語の地理的な広まりということに関しても、今後再吟味が必要であると思われる。

ここに校訂テキストおよび訳註を提出するウテミシュ・ハージー著『チンギズ・ナーマ』は、ティムール朝以後の時代に、上記の文人たちの主な活動舞台からはやや離れた地域で書かれたチャガタイ語散文文献のひとつとして、内容面ばかりでなく言語面からも注目されるものである。残念なことに、今回我々が参照することができたのはタシュケントに所蔵される一写本のみであり、そこに原著者ウテミシュ・ハージー自身の言語特徴がどの程度忠実に反映されているかを確定することは容易ではない。以下では、このタシュケント写本から窺い知ることができる範囲内で、この作品の言語特徴について述べてみたい。

まず最初に気付くのは、この作品の言語が、いわゆる古典時代チャガタイ語に比べてより古風と見なされる要素を含んでいる点である。例えば動詞 *te-*「言う」や後置詞 *teg*「～のような」は、いずれも対応する古典時代チャガタイ語 *de-*, *dek* に比べてより古い形である。また *teyür*「言う」、*yüriyür* (*yoriyur*)「歩む」に見られる動詞アオリスト形の接尾辞 *-yür* や、*bilmäyin*「知らずに」、*teyü*「～と言って」などに見

られる副動詞接尾辞 *-mäyin, -yü* も、古典時代チャガタイ語においては既に用いられなくなっていたか、あるいは用法が限られていた要素である。さらに *erdi* 「～であった」、*ermäs* 「～でない」などにおけるコピュラ動詞 *er-* や、後置詞 *birlä* 「～とともに、～によって」についても、『バーブル・ナーマ』（16世紀前半）においてそれぞれ *edi, emäs, bilä* がより優勢であったことを考え合わせるならば、『チンギズ・ナーマ』の言語の古風な性格の表れと言ってよい。

一方 *yağmur* 「雨」では古典時代チャガタイ語 *yamğur* と異なり *-ğm-* > *-mğ-* の音位転換が見られない。また3人称所有接尾辞と格接尾辞とのあいだのいわゆる *pronominal -n-* に関しては、*anıñ xānlıqıñğa* 「そのハン位に対して」、*közlärindin* 「その両目から」のようにこれを維持した形と、*iki qollarığa* 「その両手に」、*atasıdın* 「その父よりも」のようにこれを消失させた形とが並存しており、特に散文において *pronominal -n-* の消失が進んでいた古典チャガタイ語との相違点となっている。しかしこれらの特徴はまた地域的な方言差にも対応しているため、『チンギズ・ナーマ』の言語が同時代の口語要素を取り入れた結果である可能性もある。実際『チンギズ・ナーマ』タシュケント写本の言語に、少数ではあるが *barman* 「私は行かない」、*bilmän* 「私は知らない」、*dägül* 「～でない」といった、テュルク語オグズ（南西）語群の特徴を示す例が見出されることから考えるならば、*yağmur* や *pronominal -n-* の維持が同じくオグズ語群の言語に由来する可能性も否定できないであろう。

ところで、『チンギズ・ナーマ』の特徴のひとつは、それがジョチ・ウルス継承政権において著された史書であるという点にある。かつてロシアのサモイロヴィッチは、ジョチ・ウルスにおいて用いられたテュルク語文語を、後のティムール朝時代の（狭義の）「チャガタイ語」と区別して扱うことを提唱した。さらに彼は、このジョチ・ウルス文語に由来するいくつかの要素が、ホラズムをはじめとする地域のテュルク語文献において20世紀に至るまで保たれていたことを示唆した。このことは言い換えれば、ティムール朝宮廷文学で知られる狭義の「チャガタイ語」が、それ以前に存在していた中央アジア・テュルク語文章語に完全に取って代わったのではないことを意味する。もしそうであれば、上で見た『チンギズ・ナーマ』タシュケント写本に見られる「古風な」言語特徴とは、いずれもかつてのジョチ・ウルス文語から直接受け継がれたものであるという推定が可能となろう。またオグズ語群の要素が見られることも、ジョチ・ウルス文語（または「ホラズム・テュルク語」）

がオグズ語群（およびキプチャク語群）の影響を明確に受けていたこととも何ら矛盾しない。さらにここで用いられているアラビア文字正書法にも注目すべき特徴が見られる。すなわち aṭ 「馬」、aṭlan- 「出馬する」に見られる強調音文字 ṭ の使用、bärü 「～以来」の第1音節母音 ä の文字アリフによる表示、qarangǧü 「暗闇」における綴り字 -NKǧ- は、いずれも古典時代チャガタイ語の一般的な綴り字とは異なるが、一方でこれらは『天国への道』、『預言者たちの物語』といった14世紀テュルク語文献の現存写本に見られる綴り字と共通しているのである。以上のことを考え合わせるならば、『チンギズ・ナーマ』タシュケント写本の言語には、かつてのジョチ・ウルスにおける文章語の伝統がある程度まで反映されており、それらはおそらく著者であるウテミシュ・ハーギーに由来するものと考えてよいであろう。

中央ユーラシアにおいては、オスマン語のような国家権力と結びついた「強力な」テュルク語文章語が現れなかったこともあり、各地域における文章語の使用状況はかなり複雑であったと推定される。その実態の解明のためには、『チンギズ・ナーマ』に代表される各種文献資料が言語面からも詳しく分析されることが不可欠である。本出版がその契機となれば幸いである。

目次 (Contents)

序 (Foreword)	v
校閲者序 (Supervisor's Foreword)	vii
目次 (Contents)	xi
解題 (Introduction)	xiii
凡例 (Explanatory Notes)	xxix
Introduction	xxxiii
Explanatory Notes	xxxvii
『チンギズ・ナーマ』訳註 (Annotated Translation)	1
関係地図 (Map)	55
関係系図 (Genealogical Table)	56
索引 (Indexes)	59
『チンギズ・ナーマ』転写 (Transcription)	63
『チンギズ・ナーマ』校訂テキスト (Critical Text)	3

[裏面から]

解題

研究史

『チンギズ・ナーマ』の写本は、不完全なタシュケント写本と、タシュケント写本より優れているとされるが所在不明となっているA.Z.V. トガンの私蔵写本の二種類しか現在確認されていない。このうち、前者のタシュケント写本の最初期の書誌情報は1889年のカリの写本カタログに見られるが¹、この写本にもとづいて『チンギズ・ナーマ』を最初に学術的に紹介したのは旧ソ連の碩学V.V. バルトリドであった。バルトリドは、1904年の論文「トルキスタン出張報告」において、テキストの一部を紹介しながらいくつかの考察を行った²。バルトリドの考察は、一方で『チンギズ・ナーマ』の記述の伝承的要素を指摘しつつも³、基本的にその史料的价值を認めるものであった。しかし、A.Yu. ヤクボフスキーやM.G. サファルガリエフなどの旧ソ連のその後のジョチ・ウルス史研究においては、『チンギズ・ナーマ』が用いられることはなかった。

一方、トガンは1915年の論文「フェルガナ地方の東洋学の諸写本」において、オレンブルグでタタール語の雑誌『シューラー』の編集長であったR. ファフレッディン⁴から入手したという、タシュケント写本よりも「比べものにならないほど完全な」写本について報告している⁵。その後、トガンはこの写本とともにトルコ共和国に亡命したため、このトガンの私蔵写本を利用した研究はもっぱらトルコ共和国の研究者によってなされた。そのような研究として、トクタミシュまでのジョチ・ウルスの政治史・国制を考察したM. カファルの研究⁶やA. イナンの研究⁷が挙げられる。ま

¹ E. Ф. Каль, *Персидскія, арабскія и тюркскія рукописи Туркестанской публичной библиотеки*, Ташкентъ, 1889, p. 52. タシュケント写本の書誌情報としては、*Собрание восточных рукописей академии наук Узбекской ССР*, т. 1, ed. А.А. Семенов, Ташкент, 1952, p. 65; H.F. Hofman, *Turkish Literature: A Bio-Bibliographical Survey*, section III (Chaghatai), part I (Authors), 6 vols., Utrecht, 1969, vol. 6, pp. 72-74も参照。

² В.В. Бартольд, “Отчет о командировке в Туркестан,” *Сочинения*, т. 8, Москва, 1973, pp. 165-169.

³ В.В. Бартольд, “Шейбаниды,” *Сочинения*, т. 2, ч. 2, Москва, 1964, p. 545.

⁴ 小松久男「『シューラー』」「ファフレッディン」『中央ユーラシアを知る事典』小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編, 平凡社, 2005.

⁵ А.-З. Валидовъ, “Восточныя рукописи въ Ферганской области,” *Записки Восточного отделения (Имп.) Русского археологического общества*, т. 22, ч. 2, 1915, p. 320.

⁶ M. Kafalı, *Altın Orda Hanlığının Kuruluş ve Yükseliş Devirleri*, İstanbul, 1976.

⁷ A. İnan, ““Kitab-i Dede Korkut” hakkında,” *Türkiyat Mecmuası*, I, 1925, pp. 213-219.

た、ドイツのB. シュプラーもジョチ・ウルス史研究⁸のためにトガンの私蔵写本を閲覧したが、その重要性に気づかず、極めて部分的な利用にとどまった。トガンはこの私蔵写本の公刊を計画していたが、残念ながら実現されないままに終わり⁹、現在この写本は所在不明となっている。わずかに、トガン自身やカファルなどの研究からある程度この写本の内容を窺い知ることができるのみである。

このような状況において、遊牧社会の口頭伝承の重要性に注目したユーチンは、「遊牧民の口承による歴史的知識を記録」したものとして、『チンギズ・ナーマ』をはじめとしたジョチ・ウルスの継承政権内部で著された諸史料¹⁰を「草原の口承史料 (stepная устная историография / историология)」と定義し、その史料性を高く評価した¹¹。ユーチンはタシュケント写本にもとづく一連の論文において、『チンギズ・ナーマ』がジョチ・ウルス史研究の争点であった「アク・オルダ (白帳)」と「キョク・オルダ (青帳)」の問題、オロスの系譜の問題などの解決に大きく寄与することを示した¹²。さらにユーチンは『チンギズ・ナーマ』のロシア語訳・キリル文字転写を準備していたが、それは彼の死後 (1983年没) 10年近くも経た1992年にタシュケント写本のファクシミリ、そして彼の一連の論文とともに刊行された¹³。『チン

⁸ B. Spuler, *Die Goldene Horde: Die Mongolen in Rußland 1223-1502*, Leipzig, 1943.

⁹ cf. Ç. Uluçay and M.B. Dickson, "Unpublished Works of Prof. Z.V. Togan," *Zeki Velidi Togan'a Armağan*, İstanbul, 1950-55, pp. xlvii-xlviii.

¹⁰ このような史料として、ユーチンは、16世紀初頭のシャイバーン朝史料である無名氏の『選史・勝利の書』、17世紀初頭にカシモフでカーディル・アリーにより著された『集史』、17世紀にホラズムでアブールガズイーにより著された『テュルク系譜』を挙げている。また、18世紀にクリミアでアブデュルガッファールにより著された『諸情報の要諦』に注目したU. シャミルオグルは、ジョチ・ウルスの継承政権下で編纂された諸史料を「テュルク語叙述史料 (the Turkic narrative sources)」と呼んでいる (U. Schamiloglu, "The *Umdet ül-Ahbar* and the Turkic Narrative sources for the Golden Horde and the Later Golden Horde," *Central Asian Monuments*, ed. by H.B. Paksoy, İstanbul, 1992, pp. 81-93)。

¹¹ В.П. Юдин, "Орды: Белая, Синяя, Серая, Золотая....," *Чингиз-наме*, pp. 25-26; В.П. Юдин, "Переход власти к племенным биям и неизвестной династии Токатимуридов в казахских степях в XIV в. (К проблеме восточных письменных источников, степной устной историографии и предистории Казахского ханства)," *Чингиз-наме*, p. 57. 「草原の口承史料」という用語について、ユーチンは最初「историография (記述される歴史)」という単語を用いていたが、のちに口頭伝承性を重んじて「историология (語られる歴史)」という単語を用いるようになった。

¹² 訳註22、25参照。

¹³ 本書には、「オルダ：白色、青色、灰色、金色・・・」「14世紀のカザフ草原における部族のビーへの権力移行とトカ・テムル家の知られざる王朝 (東方の記述史料、草原の口承史料、そしてカザフ・ハン国の前史の問題によせて)」「ウルス・ハンの戦死についての知られざる説 (14世紀の東キプチャク草原の政治史から)」「キプチャク草原

ギズ・ナーマ』を本格的にジョチ・ウルス史研究に導入し、その史料的价值を広く知らしめた点、そしてタシュケント写本にもとづくロシア語訳・キリル文字転写を公表した点でも、ユーチンの功績は大きい。しかし、口頭伝承性を強調するあまり、ユーチンは『チンギズ・ナーマ』をはじめとしたジョチ・ウルスの継承政権の内部史料を「草原の口承史料」と定義し、とくに『チンギズ・ナーマ』について「記述史料をウテミシュ・ハーギーはほとんど利用しなかった」としてしまったことは、後述するように、『チンギズ・ナーマ』の史料性格に関して大きな誤解を与えることとなった¹⁴。

ユーチンの研究によってタシュケント写本の利用が可能になったことにより、『チンギズ・ナーマ』をジョチ・ウルス史研究の重要史料として利用した研究が現れてきている。そのような研究として、ベルケのイスラームへの改宗伝承に関わる諸史料の記述を分析したI. ヴァーシャーリの研究¹⁵、ウズ・ベグのイスラームへの改宗伝承に関わる情報を網羅的に考察したD. デウィースの研究（『チンギズ・ナーマ』のウズ・ベグの改宗に関わる部分のテキスト・英語訳が付されている）¹⁶、ジョチ・ウルスの解体と再編の歴史を再構築しようとしたわれわれの研究¹⁷などが挙げられよう¹⁸。また、近年、カザフスタンで刊行されている『カザフスタン史に関

の歴史に関する14世紀のシル・ダリヤにおけるキヤト・ジル・クトゥル廟の建設について」の四編の論考が収録されている。

¹⁴ Юдин, “Орды: Белая, Синяя,” p. 25. 『チンギズ・ナーマ』が口頭伝承のみにもとづいて書かれたという誤解は、A.A. セミョーノフ監修のウズベク社会主義ソヴィエト共和国科学アカデミー東洋学研究所の写本目録にも見られる（*Собрание восточных рукописей академии наук Узбекской ССР*, т. 1, p. 65）。また、ユーチンの研究書の編者となったB.A. アフメドフや、口頭伝承の研究者である坂井弘紀も、同様の誤解をしている（B.A. アフメドフ, “От ответственного редактора,” *Чингиз-наме*, p. 6; 坂井弘紀「語り継がれる『記憶』『イスラーム地域研究叢書 8 記録と表象—史料が語るイスラーム世界—』東京大学出版会, 2005, pp. 39-40）。

¹⁵ I. Vásáry, ““History and Legend” in Berke Khan’s Conversion to Islam,” *Aspects of Altaic Civilization III: Proceedings of the Thirtieth Meeting of the Permanent International Altaistic Conference Indiana University, Bloomington, Indiana June 19-25, 1987*, ed. by D. Sinor, Bloomington, 1990, pp. 230-252.

¹⁶ D. DeWeese, *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania, 1994.

¹⁷ 川口琢司「キプチャク草原とロシア」『岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合—9-16世紀—』岩波書店, 1997, pp. 275-302.

¹⁸ 北川誠一は『チンギズ・ナーマ』を利用してベルケとウズ・ベグの改宗伝承を紹介しているが（『世界の歴史 9 大モンゴルの時代』中央公論社, 1997, pp. 325-352）、ここではウズ・ベグの改宗譚が性急に集団としてのウズベグの形成と結び付けられており、賛同できない。

するテュルク語諸資料』と題するシリーズの第一巻としてユーチンの研究がカザフ語訳で復刊され、また、第三巻として『チンギズ・ナーマ』の言語学的研究とともに語彙集が刊行されている¹⁹。

ところで、『チンギズ・ナーマ』が16世紀前半における歴史認識を知るための手がかりとして、また、16世紀前半の同時代史料としての価値を有することはいうまでもない。赤坂恒明はその点を強調する一方で、『チンギズ・ナーマ』のモンゴル帝国期の記述の史実性について疑問を呈している。すなわち、シバン家の支配するヒヴァ・ハン国において著された『チンギズ・ナーマ』には「シバン裔中心主義」が認められ²⁰、「史料編纂時における同時代的状況を過去に仮託したものが存在し、それらの情報はモンゴル帝国期の史実を伝えたものと見做すべきではない」というのである²¹。しかし、誤解を恐れずにいうならば、そのような政治的傾向は他の少なからぬ史料にも認められるものであり、この一事をもってモンゴル帝国期に関する『チンギズ・ナーマ』の記述をすべて否定するのは極論である。『チンギズ・ナーマ』には独自の情報が多く含まれているが、同時に、他の諸史料によって史実と確認される記述も少なからず存在しているのである。肝要なのは、厳密な史料批判によって史実および史実の反映、そして伝承的要素を見極めることであろう。そして、そのような史料批判をへたうえでお、われわれは『チンギズ・ナーマ』におけるウズ・ベグの即位前後の事情、ベルディ・ベグ死後のジョチ・ウルスの情勢、トクタミシュに関する情報などに高い史料価値を見出すのである。

最後に、『チンギズ・ナーマ』の書名について検討しておこう。タシュケント写本には『チンギズ・ナーマ』という書名が付されており、バルトリドやユーチンはこれを採用している。同写本のなかで著者ウテミシュ・ハージーが書名を明言している箇所はなく、『チンギズ・ナーマ』という書名は書写を含めたどこかの段階で付された仮題であるという可能性は皆無ではない。しかしながら、内容的にはチンギ

¹⁹ Қазақстан тарихы деректемелері, I том, Өтеміс қажы, Шыңғыс-наме, Алматы, 2005; Қазақстан тарихы деректемелері, III том, Өтеміс қажының “Шыңғыс-намесі” тілінің көрсеткіш-сөздігі, Алматы, 2006. また、『チンギズ・ナーマ』の専論として、Д.Ж. Касымова, ““Чингиз-наме” Утемиш-хаджи как этнокультурологический источник,” SHYGYS, No. 1, 2005, pp. 203-207もある。

²⁰ 『チンギズ・ナーマ』の記述が著者の庇護者であるシバン家を讃える傾向にあることは、すでにバルトリド、デウィースが指摘している（Бартольд, “Отчет о командировке в Туркестан,” pp. 167-169; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 148）。

²¹ 赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房, 2005, p. 111-116, 118.

ス（チンギズ）・ハンの物語で始まるため、『チンギズ・ナーマ』という書名にはそれほど違和感がないように感じる。

一方、タシュケント写本より優れているとされる写本を私蔵したトガンは、『ドスト・スルターン史 (*Tārīx-i dost sulṭān*)』という書名を用いている²²。また、カフアルは便宜的に『ウテミシュ・ハージー史 (*Ötemiş Hacı Tarihi*)』としている²³。トガンが『ドスト・スルターン史』とした理由は明確ではないが、われわれには知りえない私蔵写本の情報を根拠にしてこのような書名を用いた可能性があり、大きな注目に値する。著者ウテミシュ・ハージーは情報源とした文献として「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書 (*tawārīḥlar*)」あるいは「ドゥースト・スルターン殿下のもとにある書冊 (*daftar*)」²⁴を挙げており、『ドスト・スルターン史』という書名はこれにちなんだ可能性もある²⁵。ここで興味深いのは、18世紀半ば頃にクリミアのアブデュルガッファールによってオスマン語で著された『諸情報の要諦』が、情報源とした文献として「ウズベグのドゥースト・スルターンの史書 (*Tārīḥ-i Düst Sulṭān-i Üzbeki*)」「ドゥースト・スルターン殿下の高名なる史書 (*ḥāzrat-i Düst Sulṭānīng tārīḥ-i mu'tabarī*)」「ドゥースト・スルターンの史書 (*tārīḥ-i Düst Sulṭān*)」に言及していることである²⁶。この『諸情報の要諦』に現れる文献は、ウテミシュ・ハージーが情報源とした文献と同一のものとも考えられるが、これがウテミシュ・ハージーの著作そのものを指している可能性もある。しかし、トガンの私蔵写本が所在不明である現時点では、最終的な判断は留保せざるを

²² A.Z.V. Togan, *Tarihde Usul*, İstanbul, 1950, p. 241. シュプラー、シャミルオグル、デウィースなどはこの書名を用いている。

²³ Kafalı, *Altın Orda Hanlığının Kuruluşu*, p. 154.

²⁴ Ötemiş Hâjî, *Çingiz-nāma*, рукопись ИВ АН Р. Узбек., No. 1552/V, facsimile, Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, pp. II-XLVIII, ff. 43a, 54a; cf. Бартольд, “Отчет о командировке в Туркестан,” p. 166. ドゥースト・スルターンについては、訳註50参照。

²⁵ H.F. Hofmanとデウィースは、本書がドゥースト・スルターンに献呈されたと推測しているが (Hofman, *Turkish Literature*, p. 72; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 144)、後述するように、本書はイシュ・スルターンの命によって執筆されたものであり、イシュ・スルターンに献呈された可能性が高い。

²⁶ ‘Abd ül-Ğaffār, ‘*Umdet ül-Aḥbār*, MS., Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2331, ff. 2a, 260b, 271b. 本史料については、Schamiloğlu, “The *Umdet ül-Aḥbar* and the Turkic Narrative sources,” pp. 88-93; 川口琢司「ジョチ・ウルスにおけるコンクラト部族」『ポストモンゴル期におけるアジア諸帝国に関する総合的研究』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書, 2002, p. 91参照。本史料については、杜撰な出来だが、校訂本もある (Qīrīmī al-Hājj ‘Abd ül-Ğaffār, ‘*Umdet ül-Tawārīḥ*, ed. by Najīb ‘Āšim Bek, İstanbul, 1343)。

えない。ユーチンの研究により『チンギズ・ナーマ』という書名が定着しつつあること、また、われわれもタシュケント写本を底本にしていることもあり、ここでは『チンギズ・ナーマ』を書名としておく。

著者ウテミシュ・ハーギーと『チンギズ・ナーマ』執筆をめぐる状況

『チンギズ・ナーマ』の著者ウテミシュ・ハーギーについては、その「ハーギー（ハーッジー）」という尊称からマッカ巡礼を果たしたことがわかるが、『チンギズ・ナーマ』に含まれる情報以外にはほとんど何も知られておらず、不明な点が多い。以下、その微細な情報をたどりながら、著者ウテミシュ・ハーギーと『チンギズ・ナーマ』執筆をめぐる状況を見ていこう。

ウテミシュ・ハーギーは、『チンギズ・ナーマ』の序文なかで自らについて以下のように語っている。

この卑しき私め、マウラーナー・ムハンマド・ドゥースティーの息子ウテミシュ・ハーギーは、主人たる今は亡きハカン陛下ヤードガール・ハンの一門の下僕の子孫たちにして古くからの奉公人の一人である。その地で、私は、慈悲深き主の恩寵によって召されたもっとも偉大なるスルターンにしてもっとも尊敬すべきハン陛下、アブールマンスール・イル・バルス・バハドゥル・ハン―神よ彼の墓を芳しくしたまえ、樂園が彼の住処とされますように―にお仕えしていた。²⁷

ここから、ウテミシュ・ハーギーの父の名がムハンマド・ドゥースティーであること、シバン家のうちヤードガールの一族に代々仕えてきたこと、そしてウテミシュ・ハーギー自身はヒヴァ・ハン国の初代君主とされるイルバルスに仕えていたことがわかる。

さらに、次の記述は、ウテミシュ・ハーギーがチンギス家の歴史に精通していたことを窺わせるものとして興味深い。

これらの者たち [=ウテミシュ・ハーギーが仕えていたシバン家] がチンギズ・ハンの子孫たちであり、私はこの王族の恩恵に浴していたので、以下のことをあるがままに知りたいと思った。すなわち、チンギズ・ハンのオグランたちの

²⁷ Ötämiš Hāji, *Čingiz-nāma*, f. 36b.

うち、その草原地方において誰がハンとなったあとに誰がハンとなったか、その後いつまで、またどのような順序で誰々がハンとなってきたのか、これらの者たちのあいだでどのような戦いと出来事が起こったか、これらのすべてをあるがままに知りたいと思った。[しかし、]私が見た諸史書は、これらの者たちのうちのわずかな名前を書きとめたものにすぎなかった。どのような出来事と状況で彼らがハンとなったかは言及されておらず、多くの[者たちの]名前もまた言及されてはいなかった。[しかし、]私はこれらの者たちの状況についてあるがままに知りたいと願っていたので、古い話をよく知っているという人物がいるといえば、必ずその人物のもとに出向き、問い質した。理性の天秤をかけ、受け入れられるものを心に留め、受け入れがたいものは考慮しなかった。そうして、いかなる集まりにおいても古の帝王たちの話に及んで問題が生じると、彼らは私めのもとにやって来て、問い質すようになった。そして、私はこの[話を]語ることによって[人々に]知られるようになった。²⁸

すわなち、チンギス家の歴史に強い関心を持ったウテミシュ・ハーギーは、諸史書の記述には満足せず、古い話をよく知っている人物のもとに出向いて歴史的知識を得るようになり、ついにはチンギス家の歴史に精通するに至った人物であった。

次に、『チンギズ・ナーマ』執筆をめぐる状況について検討してみよう。

[イシュ・スルターンは]ヨチ・ハン [=ジョチ・ハン]の子孫たちの諸状況と諸事情、順番に誰から誰のあとに誰がハンとなったか、このときにいたるまでどのような出来事と事情で彼らのあいだにどのような種類の戦いと出来事が起こったか、すべてを明らかにして記憶に留めることを願われた。このため、この卑しき私めを呼んで来させ、このようにして慈悲と哀れみを施しくださり、これらの諸状況についてお尋ねになった。[イシュ・スルターンは、]話が長大であったため聞いただけでは記憶することはできないと思い、ついには「私のためにこれらの話を書き与えよ」とお命じになった。私めはこの者たちの下僕の子たち[の一人]であったので、その命令に背くことはできず、否応なくこの記録の命令を受け入れた。(中略)この序文の意図は、この写しを私めから読み聞きした親愛なる者たち、有力・卑小な者、友人たちへの以下のような要

²⁸ Ötāmiš Hājī, *Čingiz-nāma*, f. 36b.

望にある。すなわち、この写しに書かれたこれらの言葉や話はいかなる記録や史書にもないものであり、そのすべてを私が聞いて書いているが、周知のように、耳にする言葉の大半は偽りと言われている。そこで、もし間違いや誤りが生じたならば、その誤りを取り除き、その間違いを正してほしい。²⁹

ここでは、ウテミシュ・ハージーがシバン家のイシュ・スルターン³⁰の命令によって『チンギズ・ナーマ』を執筆したことが語られている。さらに、ウテミシュ・ハージーは、ここに書かれたことはいかなる記録や史書にもないものなので、間違いがあったら正してほしい、と謙虚な姿勢も吐露している。

このように見てくると、ウテミシュ・ハージーが『チンギズ・ナーマ』を執筆したのは、イルバルスの死後（1517年没）であり、イシュ・スルターン（1558年あるいは1559/60年没）の生前ということになる。アフメドフは『チンギズ・ナーマ』の執筆年代を16世紀前半とし³¹、ホフマンは1550年³²、カファルは1551年³³、トガンとデウィースは1550年代³⁴としている。また、赤坂はイシュ・スルターンの兄ドゥースト・スルターンの「スルターン」という称号から、その即位以前としている³⁵。残念ながら、正確な執筆年代は確定できないが、1550年代というのは有力な説のように思われる。

『チンギズ・ナーマ』執筆以後のウテミシュ・ハージーについてはほとんど知られていないが、16世紀末のシャイバーン朝（アブールハイル朝）史料である『アブドゥッラー・ナーマ』の記述に注目したトガンは、ウテミシュ・ハージーが1583年にも存命であったと指摘している³⁶。それによれば、1583年にシャイバーン朝の君主アブドゥッラー（1598年没）はホラズムのヒヴァ・ハン国との軋轢の仲裁をウテミシュ・ハージーに依頼したという。ここで興味深いのは、ウテミシュ・ハージーがホラズムではなくプハラ周辺にいたと思われることである。あくまで推測であるが、かつての主君であるイシュ・スルターンとドゥースト・スルターンが殺害され

²⁹ Ötamiş Hâji, *Çingiz-nâma*, f. 37a-b.

³⁰ イシュ・スルターンについては、訳註13参照。

³¹ Ахмедов, “От ответственного редактора,” p. 5.

³² Hofman, *Turkish Literature*, p. 72.

³³ Kafalı, *Altın Orda Hanlığının Kuruluşu*, p. 5.

³⁴ Togan, *Tarihde Usul*, p.241; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 144.

³⁵ 赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』, p. 278.

³⁶ A.Z.V Togan, *Bugünkü Türkili Türkistan ve Yakın Tarihi*, cilt I, Batı ve Kuzey Türkistan, 2 baskı, İstanbul, 1981, p. 148.

たのち、ウテミシュ・ハーギーはホラズムを離れたのかもしれない。

『チンギズ・ナーマ』の史料性格

同時代史料の乏しいジョチ・ウルス史研究において、ジョチ・ウルスの継承政権であるヒヴァ・ハン国で著された『チンギズ・ナーマ』は、ジョチ・ウルス史に関して独自の情報を含む重要な史料であり、また当然、16世紀の同時代史料として、遊牧社会内部の歴史認識を探るうえでも、大きな価値を持つものである。『チンギズ・ナーマ』の史料性については否定的な評価も行われてきたが、前述したように、遊牧社会の口頭伝承の重要性に注目したユーチンが、「遊牧民の口承による歴史的知識を記録」したものとして、『チンギズ・ナーマ』をはじめとしたジョチ・ウルスの継承政権内部で著された諸史料を「草原の口承史料」と定義し、その史料価値を明らかにした。しかし、ユーチンの研究が、口頭伝承性を強調するあまり、のちの研究に大きな誤解を与えてしまったことは否定できない。ここでは、これまでの研究で看過されてきた、『チンギズ・ナーマ』の史料性格に関する重要な側面について考察しよう。

まず、ユーチンをはじめとした諸研究が、『チンギズ・ナーマ』は口頭伝承のみにもとづくものであり、「記述史料をウテミシュ・ハーギーはほとんど利用しなかった」としてきたのは大きな誤解である。上述したように、ウテミシュ・ハーギーは、『チンギズ・ナーマ』のなかで情報源とした文献として「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」あるいは「ドゥースト・スルターン殿下のもとにある書冊」を挙げているからである。残念ながら、「ドゥースト・スルターン殿下の史書」については不詳であるが、たとえば、ラシードウッディーンの『集史』における『黄金秘冊（アルタン・デプテル）』³⁷のように、ヒヴァ・ハン国の支配王家であるシバン家（ヤードガール家）に伝わる史書に関連するものが想定される。いずれにせよ、『チンギズ・ナーマ』は記述史料を利用した史書としての性格を有しているのである。

次に、ウテミシュ・ハーギーが情報源とした人物を見てみよう。ウテミシュ・ハーギーは情報源とした人物として、彼が仕えていたシバン家のイルバルス、トカ・

³⁷ 『黄金秘冊（アルタン・デプテル）』については、小林高四郎「ラシード・エッディーンに見えたる『アルタン・デプテル』について」『モンゴル史論考』雄山閣、1983、pp. 69-100参照。

テムル家のシャイフ・アフマド、ハージー・タルハン（現アストラハン）地方のハージー・ニヤーズ、「アストラハン・ハン国」の君主アブドゥルカリームの大ベグであったヒタイ・パバ・アリーなどの名を明言している³⁸。これらの人物は、素性ははっきりしないハージー・ニヤーズをのぞいて、すべてジョチ・ウルスの継承政権の中核およびその周辺にいた人物である。すなわち、ウテミシュ・ハージーが得た情報の信憑性の高さが窺われるのである。加えて、これらの人物からの情報は文献の形でもたらされた可能性も大きい。なぜならば、『諸情報の要諦』によれば、これらの人物はみな何らかの著述活動を行っていたことがわかるからである³⁹。

さらに、『チンギズ・ナーマ』の記述にはウテミシュ・ハージーの史料批判的態度を読み取れる箇所がある。前述したように、ウテミシュ・ハージーは古い話をよく知っている人物のもとに出向いて歴史的知識を得たわけだが、その際、「理性の天秤にかけ、受け入れられるものを心に留め、受け入れがたいものは考慮しなかった」という。ここには、ウテミシュ・ハージーの真摯な史料批判的態度が如実に現れている⁴⁰。また、ウテミシュ・ハージーは、しばしば「人々が語るには」とか「ウズベグたちが言うには」という言い回しを用いてさまざまな伝承を紹介している。つまり、ウテミシュ・ハージーは、信頼できる情報源にもとづく記述と、そうではない伝承を区別しているのである。ここにも、ウテミシュ・ハージーの慎重な史料批判的態度を見ることができよう。

以上、『チンギズ・ナーマ』の史料的性格について、これまでの研究が看過してきた重要な側面について検討してきた。著者ウテミシュ・ハージーは、少なくとも「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」という文献を利用したうえで『チンギズ・ナーマ』を著したのであり、また、他の文献を参照した可能性も大きい。他の情報

³⁸ Ötāmiš Hāji, *Čingiz-nāma*, ff. 51b, 41a, 42b, 54b; cf. Бартольд, “Отчет о командировке в Туркестан,” pp. 166-167. これらの人物については、訳註8、40、46、114、115参照。

³⁹ イルバルスには『ホラズム史』という著作があり、シャイフ・アフマドも何らかの著述を行っていた（‘Abd ūl-Gaffār, ‘*Umdet ūl-Aḥbār*, ff. 259a, 264b）。また、ハージー・ニヤーズは「作家（muwarriḥ）」として知られ、ヒタイ・パバ・アリーは「高名な知の遍歴者（affāq）」なる異名で知られる一方、史書を編纂し、そこではガーズイー・スルターン殿下（イルバルスの息子）から求められたことについて語っているという（‘Abd ūl-Gaffār, ‘*Umdet ūl-Aḥbār*, ff. 259b, 266b）。

⁴⁰ 赤坂は、『チンギズ・ナーマ』の当該部分の記述をもって「多様な口承伝承のうちから、シバン裔ホラズム王家に都合の良い情報のみを、自身の価値基準であるシバン裔中心主義に従って選択した可能性が高い」としているが（『ジュチ裔諸政権史の研究』, pp. 110-111）、これはまったく根拠のない曲解といわざるをえない。

源を見ても、アストラハン・ハン国などのジョチ・ウルスの継承政権の中枢に保持されていた情報にもとづいていたと思われる。また、口頭伝承の情報にせよ、記述史料の情報にせよ、ウテミシュ・ハーギーは慎重な史料批判的態度をもってそれらに臨んでいたことも『チンギズ・ナーマ』の記述から読み取ることができる。すなわち、『チンギズ・ナーマ』は、遊牧社会の口頭伝承の伝統を背景としつつも、あくまで史書としての性格を有するものであり、他の諸史料には見られない独自の情報を含むものとして、ジョチ・ウルス史研究における重要史料として位置づけることができるのである⁴¹。

『チンギズ・ナーマ』の史料的系譜

最後に、『チンギズ・ナーマ』の史料的系譜について検討しておきたい。

チャガタイ語およびチャガタイ文学は15世紀にティムール朝治下に成立したとされ、マー・ワラー・アンナフルやホラズムから東トルキスタンや北インド、さらにはクリミアやヴォルガ・ウラル地方などへと広まった。韻文作品を中心とした前古典時代（15世紀前半）を経て、古典時代（15世紀後半～16世紀）には詩人ナヴァーイーや自叙伝『パーブル・ナーマ』を著したパーブルが活躍し、シャイバーン朝治下のマー・ワラー・アンナフルでは無名氏の『選史・勝利の書』、ムハンマド・サリーフによる韻文の『シャイバーニー・ナーマ』などのチャガタイ語による史書が著された。後古典時代（17世紀～20世紀初頭）にチャガタイ文学の中心がヒヴァやコーカンドに移ると、ヒヴァにおいてはアブルガーズィーの史書『テュルク系譜』『テュルクメン系譜』（17世紀半ば）、ムーニスとアーガヒーの史書『繁栄の楽園』（19世紀前半）などが著された⁴²。また、マー・ワラー・アンナフル、ヴォルガ・

⁴¹ 誤解のないように断っておくが、われわれは『チンギズ・ナーマ』の記述のすべてを史実とみなしているわけではない。『チンギズ・ナーマ』には、他の諸史料と矛盾する記述や、著者ウテミシュ・ハーギーの誤解にもとづく記述などもみられる。ただし、それは多くの史料にもありうることであり、『チンギズ・ナーマ』の史料的性格に起因するものではないということである。

⁴² 菅原睦「チャガタイ語・文学」『中央ユーラシアを知る事典』小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編、平凡社、2005。わが国におけるチャガタイ語文献の主要な研究としては、M. HAMADA, "L'Histoire de Hotan de Muhammad A'lam (I)(II)(III)," *Zinbun; Memoirs of the Research Institute for Humanistic Studies*, Kyoto University, 15, 16, 18, 1979, 1980, 1982, 間野英二『パーブル・ナーマの研究 I～IV』松香堂、1995-2001、濱田正美『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』（ユーラシア古語文献研究叢

ウラル地方、東トルキスタンなどにおいてペルシア語文献のチャガタイ語への翻訳も盛んに行われた。

そのなかで、『チンギズ・ナーマ』は、チャガタイ文学の中心がホラズムに移る前の古典時代、すなわち16世紀半ばまでにホラズムにおいて著されたチャガタイ語の史書として注目される。さらに、『チンギズ・ナーマ』は口頭伝承の伝統を背景としつつも、ホラズムのヒヴァ・ハン国の「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」を情報源としたことに加え、アストラハン・ハン国などのジョチ・ウルスの継承政権の中枢に保持されていた情報をもとに著されたと思われ、のちのキプチャク草原の諸史書に大きな影響を与えた。

前述したように、『チンギズ・ナーマ』と共通の情報源を持つ、あるいはこれを参照した可能性の高い史書として、18世紀半ば頃にクリミアのアブデュルガッファールによってオスマン語で著された『諸情報の要諦』がある⁴³。内容的には、15世紀前半以前に関して『チンギズ・ナーマ』と類似した部分が多く、『諸情報の要諦』を利用することによって、『チンギズ・ナーマ』のタシュケント写本に欠落している部分がある程度推測することができる。

さらに、17世紀初頭にカシモフにおいてカーディル・アリーによって著されたチャガタイ語の史書『集史』⁴⁴も注目に値する。この史書は、ラシードウッディーン『集史』のチャガタイ語抄訳に続けて、14～16世紀のキプチャク草原について独自の情報を伝えるものだが、ここにも『チンギズ・ナーマ』の影響、もしくは情報源を同じくするような記述が少なからず見られる⁴⁵。また、カーディル・アリーの『集史』にあるエディギュをはじめとしたマンガト部に関する記述が、17世紀末に

書4)、京都大学大学院文学研究科、2006、久保一之「ナヴァーイー（ミール・アリーシール）の社会観—*Mahbūb al-qulūb*第1章日本語訳（付、ローマ字転写校訂テキスト）—」『京都大学文学部研究紀要』47、2008、pp. 183-295などがある。

⁴³ 『諸情報の要諦』の著者や構成、参照文献などを検討した研究として、川口琢司「18世紀クリミアのオスマン語史書『諸情報の要諦』における歴史叙述—ペルシア語史書からの影響を中心に—」『ペルシア語が結んだ世界』森本一夫・前田弘毅編、北海道大学出版会（近刊）がある。

⁴⁴ この史料については、M.A. Усманов, *Татарские исторические источники XVII-XVIII вв.*, Казань, 1972, pp. 33-96; 長峯博之「『キプチャク草原の港』スグナク—1470～90年代のトルキスタン地方をめぐる抗争とカザクのスグナク領有を中心に—」『史朋』36, 2003, p. 9参照。

⁴⁵ そのような例として、エディギュの系譜やトカ・テムル家によるテンギズ・プガ殺害の記述などが挙げられる。訳註76、98参照。

成立した無名氏のチャガタイ語文献『ダフタリ・チンギズ・ナーマ』⁴⁶に編入されている点も興味深い。

このように、これらの『チンギズ・ナーマ』をはじめとする諸史料は内容的に共通する要素を持つわけだが、さらに、歴史認識のあり方において一つの共通する特徴を持っている。『チンギズ・ナーマ』の記述においては、イスラーム的要素も認められるが⁴⁷、全体的には、チンギス家の権威が重んじられ、チンギス家の男系子孫以外はハン位につくことができないという、いわゆる「チンギス統原理」が強く認識されていたことを看取することができる⁴⁸。こうした認識はアブデュルガッファールの『諸情報の要諦』やカーディル・アリー『集史』にも共通して見られ、ジョチ・ウルスの「イスラーム化」、そしてジョチ・ウルスの解体と再編以後も、ジョチ・ウルスの継承政権が成立したキプチャク草原において「チンギス統原理」が脈々と受け継がれていったことが確認されるのである。

このように見てくると、マー・ワラー・アンナフルやホラズムとは異なる、独自の情報源にもとづくキプチャク草原における歴史叙述の体系というものが浮かびあがってくるのであり、『チンギズ・ナーマ』がそのなかで重要な位置を占めていたことが明らかになる。このことは、『チンギズ・ナーマ』をはじめとしたジョチ・ウルスの継承政権の内部で著された諸史料の史料的性格を考えるうえで、非常に重要な視座を提供するものである。これらの諸史料は、多くの独自の情報を含むと同時に、キプチャク草原の歴史認識のあり方を鮮明に伝えるものである。これらの諸史料を精査・比較検討することによって、今後、ジョチ・ウルスやその継承政権の歴史、すなわち、キプチャク草原の歴史の再構築が可能となるであろう。

⁴⁶ この史料については、小林高四郎「Çengiz nameについて一書誌学的紹介」『モンゴル史論考』、pp. 195-213; Усманов, *Татарские исторические источники XVII-XVIII вв.*, pp. 97-133参照。

⁴⁷ 北川は、『チンギズ・ナーマ』にあるベルケとウズ・ベグの改宗伝承の記述から、ジョチ家の歴史がイスラームの枠に組み込まれ、「16世紀のジョチ家の君主には、すでに自らの王朝の正統性をチンギス・ハンの子孫であることによって主張する必要」はなくなったとしているが（『世界の歴史 9 大モンゴルの時代』、pp. 331-333）、『チンギズ・ナーマ』の記述からはそういった傾向を読み取ることはできず、まったくの憶測である。

⁴⁸ 例えば、ハン位を篡奪したカラ・キシ（非チンギス家）のトク・ブガを討ってウズ・ベグが即位する話（Ötämiš Hāji, *Čingiz-nāma*, f. 44a-47b）、キヤト部族のテンギズ・ブガを討ってトカ・テムル家のカラ・ノガイが即位する話（Ötämiš Hāji, *Čingiz-nāma*, ff. 50b-53a）などにこうした「チンギス統原理」が強く反映されている。

『チンギズ・ナーマ』の写本・校訂本および訳本

1. 写本

- タシュケント写本：ウズベキスタン共和国東洋学研究所蔵の写本
(Ötämiš Hāji, Čingiz-nāma, рукопись ИВ АН Р. Узбек., No. 1552/V, ff. 36a-59a)

現在確認できる唯一の写本。『チンギズ・ナーマ』という書名が付され、他の諸作品とともに合冊されており、ユーヂンの研究書にそのファクシミリが収められている⁴⁹。写本の文字はすべて黒一色で記されており、朱の文字などは見られない。残念ながら、トクタミシュの物語の途中で中断する不完全な写本であり、55a左上部（表）と55b右上部（裏）に大きな破損もある。また、書写の状況も良好ではなく、明らかな間違いや不必要な繰り返し、乱雑な訂正の跡などが散見される⁵⁰。しかし、現時点では本写本に依拠するほかないため、本書もこれを底本としている⁵¹。

- トガンの私蔵写本

タシュケント写本より「比べものにならないほど完全な」写本というが、現在は所在不明となっている。トガンによれば、書写年代はヒジュラ暦1019 (1610-11)年、全75葉の写本で、タシュケント写本はこの写本の15b-46bにあたるという⁵²。そうだとすると、タシュケント写本の二倍強の分量を持っていることが想定される。このような価値ある写本が所在不明なのははなはだ残念なことである。ただし、前述したように、トガンの研究やこの写本を利用したカファルらの研究からある程度その内容を窺い知ることができる⁵³。

2. 校訂本および訳本

⁴⁹ Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, pp. II-XLVIII.

⁵⁰ タシュケント写本では、訂正の際には誤った字句に線を引いて削除し、その語句の後や上下に正しい表記を記している。その書体を見ると、本文を筆写した人物の書体と同一のように思われる。

⁵¹ われわれはタシュケントのウズベキスタン共和国科学アカデミー東洋学研究所で本写本を実見調査し、写本状況や破損箇所を確認、字句の確定などを行った。ただし、本書の作成にあたっては、基本的にはユーヂンの研究書に付されたファクシミリを利用した。

⁵² А.-З. Валидовъ, “Восточные рукописи въ Ферганской области,” p. 320.

⁵³ およそ15世紀前半までの記述があり、最後に補遺としてチンギス家の系譜が付されているようである。

- バルトリドによる部分的な校訂テキスト・ロシア語訳（В.В. Бартольд, “Отчет о командировке в Туркестан,” *Сочинения*, т. 8, Москва, 1973, pp. 165-169）
タシュケント写本を底本とした、序文、ヒタイ・パバ・アリーに関する記述、ベルケ軍とフラグ軍の戦闘、シバンに関する記述の部分的な校訂テキスト・ロシア語訳。
- ユーヂンによるロシア語訳・キリル文字転写（Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, Факсимиле, перевод, транскрипция, текстлогические примечания, исследование В.П. Юдина, Подготовила к изданию Ю.Г. Баранова, Комментарии и указатели М.Х. Абусейтовой, Алма-Ата, 1992, pp. 87-219）
タシュケント写本を底本にした、これまででは唯一の完訳・転写であり、ユーヂンによる校訂註、М.Кh. アブーセイトワによる訳註が付されている。
- デウィースによるウズ・ベグの改宗に関する部分の校訂テキスト・英語訳（D. DeWeese, *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania, 1994, pp. 533-565）
タシュケント写本の48a-49bを底本としたもので、デウィースによる訳註が付されている。

凡例

校訂テキスト

- 綴り字法については、原則的には底本であるタシュケント写本の綴り字にできるだけ忠実に従った。例えば、短母音を表す文字の有無(例えば、بک / بيک beg、بلا / بلا bilā)、pを表すب、cを表すج、gを表すك、同じ単語につく接尾辞の不統一(例えば、غه gaとكا gäの混在)、またその他、فيدا / فيدا、قلعه / قلعهと表わすなどの特殊な表記法も散見するが、底本の綴り字をそのまま採用した。ただし、所有格の接尾辞ning/ningについては、نيك / نك / نك など綴り字の不統一が著しいため、نكで統一した。
- 原則としては底本の綴り字に従ったが、明らかにنやىの点が省略されていると考えられる場合には補った。
- لوبのように単語の語頭が語末形のكとなっている、あるいは、طائفهのようにハムザとىが混在している変則的な表記が散見するが、これは通常の表記に訂正した。
- 底本としたタシュケント写本は、不完全であることに加えて、残念ながら良質な写本とは言い難く、明らかな単語・文章の繰り返し、誤字・脱字を訂正した箇所などが非常に数多く見られる。このような場合、煩雑さを避けるためにも、とくに註記せずに訂正・削除した。
- 底本としたタシュケント写本は、55aの左上(55bの右上)が破損しているため、四行にわたってテキストの一部が欠落している。
- 底本の葉数、底本の訂正・補足を示すために校訂テキストで用いた記号は以下である。なお、われわれの判断で底本を補足・訂正した箇所については、とくに記号を付さずに註で底本の原形を示した。

() 底本の葉数を示している。

[] 底本を補足した箇所を示している。その際、底本の欄外に補足がある場合には#を、ユーチンの校訂註を参照した場合には*を付した。

* ユーチンの校訂註を参照して訂正・補足した箇所を示している。その際、訂正した箇所については註で底本の原形を示した。

- [Юдин] 底本の表記をそのまま採用した際、またはわれわれの判断で訂正・補足した際に、ユーチンが校訂註で異なる解釈を示している場合には、その解釈を註で示して [Юдин] と付した。
- [Бартольд] 底本の表記をそのまま採用した際、またはわれわれの判断で訂正・補足した際に、バルトリドが異なる解釈を示している場合には、その解釈を註で示して [Бартольд] と付した。
- [DeWeese] 底本の表記をそのまま採用した際、またはわれわれの判断で訂正・補足した際に、デウィースが異なる解釈を示している場合には、その解釈を註で示して [DeWeese] と付した。
- ユーチンが校訂註を付して正しい読みを提示している箇所の中には、そもそも底本の原形がユーチンの提示したように読める箇所がある。このような場合、煩雑さを避けるためにもとくに註記しなかった。

転写

- 転写は、われわれが作成したアラビア文字校訂テキストにもとづいて作成した。ただし、語幹と接尾辞のあいだはあけずに続けて表記した。
- 転写法については、子音については以下の規則に従った。

ب b پ p ت t ث s ج j چ ċ ح ḥ
 خ ḫ ذ z ر r ز z ژ ž س s ش š
 ص ṣ ض ḏ ط ṭ ظ ḏ ع ʿ غ g ف f
 ق q ك k/g/ng ل l م m ن n ه h و v/w
 ي y

母音については、以下の表記を用いた。

ا ā ا̄ ā ا̇ ā و o/ō/u/ū/ō/ū ي e/i/i/ē/ī

また、写本においてpを表すب、ċを表すچ、gを表すكなどが用いられている語については、それぞれp、ċ、gの音で表記した。

- クルアーンの引用や祈願文などアラビア語で書かれた部分は、アラビア語の一般的な転写法に従った。
- 底本としたタシュケント写本は、55aの左上(55bの右上)が破損しているため、四行にわたってテキストの一部が欠落している。

- 転写テキストにおいて用いた記号は以下である。
 - () 底本の葉数を示している。
 - [] 校訂テキストにおいて底本を補足した箇所を示している。その際、底本の欄外に補足がある場合には#を付した。
 - “ ” 会話文を示している。
- ユーチンのキリル文字転写と相違点がある箇所については、註でユーチンのキリル文字転写を示した。

訳註

- 固有名詞などのカタカナ表記については、原則的にわれわれが作成したテキストに従った。その際、例えば一人の人物に対して二通りの表記があるような場合には、註記したうえで統一した。また、一般的な用語については『岩波イスラーム辞典』大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編、岩波書店、2002、『中央ユーラシアを知る事典』小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編、平凡社、2005も参照した。
- () の数字は底本の葉数を示している。
- [] 内の語句は、文意の理解を助けるためにわれわれが補足したものである。
- クルアーンの引用については、引用箇所を標準エジプト版の章番号・節番号で註記した（訳註においては、Q章番号:節番号の形で示した）。訳は井筒俊彦訳『コーラン』,上中下,岩波文庫,1964に従った。ただし、一部訳語を改めたところがある。
- ユーチンのロシア語訳、アプーセイトワの訳註を参照した場合、もしくはそれと相違点がある場合には、とくに頁数は示さずに註記した。

Introduction

This is a critical text of a historical writing called *Čingīz-nāma* written by Ötämiš Ḥājī in Chagatai language using Arabic alphabet in Khiva Khanate, a successor state of the Golden Horde (also known as Jöči Ulus), by the middle of 16th century, with introduction, annotated translation and transcription.

The nomadic state did not leave much in the way of written histories and the studies on the history of Golden Horde mainly relied upon fragmented descriptions of the state by the contemporary outside sources (literatures in Timurid dynasty, Mamuluk Sultanate, Russia etc) leaving many gaps and sometimes causing academic confusion. Later in the period, however, saw the history of Golden Horde written in its successive states, whose historical writings include original information. Among these the *Čingīz-nāma* is of a high historical value with information regarding the events before and after the coronation of Öz Beg, the situation of Golden Horde after the death of Berdi Beg and information regarding Toqtamiš. Its facsimile edition of the Tashkent manuscript with a Russian translation and Cyrillic alphabet transcription by V. P. Yudin has been published in the past¹. However, contrary to its importance, the historical value of the *Čingīz-nāma* was not rightly recognized in previous studies. Yudin's studies also raise questions these days but there has been no critical text published yet. Against this background, it was hoped to contribute to the development of the historical study of Golden Horde by publishing this critical text of the *Čingīz-nāma* with introduction, annotated translation and transcription.

Yudin, who took notice of and highly rated the oral tradition of nomad society, defined the historical texts² including the *Čingīz-nāma* written in the

¹ Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, Факсимиле, перевод, транскрипция, текстлогические примечания, исследование В.П. Юдина, Подготовила к изданию Ю.Г. Баранова, Комментарии и указатели М.Х. Абусеитовой, Алма-Ата, 1992.

² As for the example of this kind of historical texts, Yudin listed *Tawārīḥ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma* (The Selected History, The Book of Victory), anonymous and written in

successive states of Golden Horde as “oral history of the Steppe”³. However, His emphasis on oral tradition led him to state that “Ötämiş Hāji scarcely used written sources”, the comment misled later scholars and researchers on the historical nature of the *Čingīz-nāma*.

On writing the *Čingīz-nāma*, the author, Ötämiş Hāji, must at least have used a text called *Ḥaẓrat-i Dōst Sulṭānning tawārīḥlarī* (History Books of His Highness Dōst Sulṭān) and he may well have used other historical writings. Judging from the biographical data of information providers in the *Čingīz-nāma*, Ötämiş Hāji, seems to have used information held at the center of successive governments of Golden Horde such as Astrakhan Khanate. Whether it is an oral source or written material, it is also seen from the *Čingīz-nāma* that Ötämiş Hāji dealt with the sources with care and a critical attitude. Using the oral tradition of a nomad society as background, the *Čingīz-nāma* certainly possess the characteristics of historical texts with original information which cannot be seen in other texts, and thus can be positioned as one of the most important historical writings in the historiography of Golden Horde.

Further, the *Čingīz-nāma* influenced heavily the later historical writings of the world of the Kipchak Steppe (Dašt-i Qipčāq), such as *Jāmi‘ al-Tawārīḥ* (Collected History) by Qādir ‘Alī written in the early 17th century in Kasimov as well as *‘Umdet ül-Aḥbār* (The Paramount Summary of Information) by ‘Abd ül-Ġaffār of 18th century in Crimea, occupying an important position in the

early 16th century for Shaybanid dynasty, *Jāmi‘ al-Tawārīḥ* (Collected History) by Qādir ‘Alī written in early 17th century in Kasimov and *Šajara-yi Turk* by Abū al-Ġāzī Ḥān written in Ḥīrāzmi in 17th century. U. Shamiloglu, who took notice of *‘Umdet ül-Aḥbār* (The Paramount Summary of Information) by ‘Abd ül-Ġaffār of 18th century's Crimea, coined historical texts written and compiled under a successive state of Golden Horde the “Turkic narrative sources” (U. Shamiloglu, “The *Umdet ül-Aḥbar* and the Turkic Narrative sources for the Golden Horde and the Later Golden Horde,” *Central Asian Monuments*, ed. by H. V. Paksoy, Istanbul, 1992, pp. 81-93).

³ В.П. Юдин, “Орды: Белая, Синяя, Серая, Золотая...,” *Чингиз-наме*, pp. 25-26; В.П. Юдин, “Переход власти к племенным биям и неизвестной династии Токатимуридов в казахских степях в XIV в. (К проблеме восточных письменных источников, степной устной историографии и предыстории Казахского ханства),” *Чингиз-наме*, p. 57.

historic narrative of the world of Kipchak Steppe supported by original information sources which are different from that of the Mā warā' al-Nahr and Ḥwārazm regions. These historical writings, not only have common contextual elements but also share distinctive historiographical characteristic, namely "the Chingisid Principle". They confirm that the Chingisid Principle survived the "Islamization", disintegration and re-organization of Golden Horde and was handed down to the world of Kipchak Steppe where the successor states of the Golden Horde were established .

The historical texts written within the successor governments of Golden Horde, such as *Čingīz-nāma*, contain much original information and at the same time vividly demonstrate the historical perspective of the world of Kipchak Stepp. By scrutinizing, comparing and analyzing these writings, the whole picture of the history of the world of Kipchak Steppe including Golden Horde and its successor states is hoped to reveal itself.

Explanatory Notes

Critical Text

- As for spelling, we followed as faithfully as possible to the spelling of the copytext, the Tashkent manuscript. Though inconsistencies are observed in the manuscript, such as the expression of short vowels (for example, بك / بيك beg, بلا / بيلا bilä), interchange of suffixes in a same word (for example, غه ga and كا gä), as well as peculiar notation such as using ب for p, ج for č, ك for g, and فيدا for پيدا, قلغه for قلعه, we adopted the same spellings of the copytext, with the exception of possessive suffix ning / nīng, which we spelt نك whether it was spelt نيك / نك / نك in the copytext.
- As a principal we followed the spelling of the copytext, we added dots for ن and ى where we judged they were omitted.
- We corrected irregular notations in the copytext, such as ثوب, whose beginning is replaced with final form اك, and طائفه, where ى and hamza are intermingled.
- The copytext, the Tashkent manuscript, is not only incomplete but also a rather poor manuscript with many an obviously unnecessary repetition of words and phrases as well as corrections for erroneous and omitted letters. In these cases, for the sake of avoiding complexity, we amended and erased the words or sentences without special notations.
- Left upper side of 55a (right upper side of 55b) of the Tashkent manuscript as the copytext was torn, so a part of the text lacks four lines.
- The following symbols and keys were used in the critical text in order to show the sheet number, correction and supplement of the copytext. The supplements and corrections to the copytext made by us are shown without any symbols or keys but the original copytext is shown in the notes.
 - () shows the sheet number of the copytext.
 - [] shows the parts omitted in the copytext but supplemented by

us. # indicates the part where there are supplements in margin of the copytext. * indicates the part where Yudin's notes were referred.

- * indicates the parts where corrections and/or supplements were made using Yudin's notes. The original copytexts are shown in the notes.

[Юдин] When the original copytexts were used as they are or corrections and supplements were made by us while Yudin's interpretation differs from those, Yudin's interpretations were shown in the notes with [Юдин] .

[Бартольд] When the original copytexts were used as they are or corrections and supplements were made by us while Bartol'd's interpretation differs from those, Bartol'd's interpretation were shown in the notes with [Бартольд] .

[DeWeese] When the original copytexts were used as they are or corrections and supplements were made by us while DeWeese's interpretation differs from those, DeWeese's interpretation were shown in the notes with [DeWeese] .

- Among those parts where Yudin showed the correct way of reading, there are parts which can be read in that way anyway from the original copytexts. In these cases we did not make special notes in order to avoid complication.

Transcription

- The transcription was made based on the Arabic alphabet text criticized by us. The suffixes of bases are noted without spaces.
- Transcription of the consonants was made following the rules below:

ب	b	پ	p	ت	t	ث	s	ج	j	چ	č	ح	ḥ
خ	ḫ	ذ	z	ر	r	ز	z	ژ	ž	س	s	ش	š
ص	ṣ	ض	ẓ	ط	ṭ	ظ	ẓ	ع	ʿ	غ	ġ	ف	f
ق	q	ك	k/g/ng	ل	l	م	m	ن	n	ه	h		

و v/w ی y

As for the vowels, following notation were used.

ا ā a/ā/ā َ a/ā ِ o/ö/u/ü/ō/ū ی e/i/i/ē/ī

ب for p, ج for č and ك for g are used in the copytext. In these cases we used p, č and g respectively.

- Quotes from the Qur'an and prayers were transcribed as Arabic.
- Left upper side of 55a (right upper side of 55b) of the Tashkent manuscript as the copytext was torn, so a part of the text lacks four lines.
- Symbols and keys used for the transcribed texts are as follows:

() shows the sheet number of the copytext.

[] shows the parts supplemented by us in the critical text. #

indicates the part where there are supplements in margin of the copytext.

“ ” shows conversation.

- Where there are differences from Yudin's Cyrillic alphabet transcription, Yudin's Cyrillic alphabet transcription was shown in the notes.

Annotated Translation

- Katakana notation for proper nouns was followed basically by the text we created. If, for example, a person's name was spelt in two ways in the copytext, it was unified in one way with explanation in the notes. As for common terminology, *Iwanami Islam Dictionary* (Iwanami Shoten, 2002) and *Cyclopedia of Central Eurasia* (Heibonsha, 2005) was referred.
- () shows the sheet number of the copytext.
- The expressions and phrases within [] are the supplement we made to the copytext or addition we made to facilitate the understanding of the copytext.
- As for the quotes from the Qur'an, the numbers of chapters and sections in the standard Egyptian edition were used (in the main body text, the format [Q chapter number : section number] was used). As for the translation

of the Qur'an, *The Qur'an*, vol.1.2 and 3 translated by Toshihiko Izutsu (Iwanami Shoten, 1964) was used, however, we made alteration for certain words.

- Notes were made when the Russian translation by Yudin or the translator's note by M.Kh. Abuseitova were referred or differences were found, without showing the page number of respective texts.

『チンギズ・ナーマ (*Čingīz-nāma*)』

ウテミシュ・ハージー (*Ötämiš Ḥājī*) 著

訳註 (Annotated Translation)

(36a) チンギズ・ナーマ

慈悲深く慈愛あまねき神の御名において。限りない賞賛と賛美はかの崇拜されし帝王 [=神] に。[神は] 世界とアダムを無から創造され、無から生じさせた。また、アダム―彼に平安あれ―をあらゆる被造物より尊重され、天使たちの羨望的、地上の代理者とした。以下のように古の言葉で、「さておまえの主が天使らに向かって『わしは今から地上に[治国の]代理者を設置しようと思う』¹という節を仰った。あなたさまは全世界を無から創造した唯一にして絶対[の存在]であり、すべての罪を覆い隠す創造者にして[罪を]包み隠す者である。そして、神が唯一であること、絶対であることを被造物 [=人間] に知らせ、掟を広めるために、アダムの子孫たちのうち若干の者を預言者・使徒たちとした。[神は] また、一団を帝王および統治者たちとした。真実をもって人間たちのあいだで統治し、偽善の欲望を持たず、互いに圧政を増大させることのないように[するためであった]。至高なる神が仰るには、「我らはここにおまえを地上の摂政に任ずる。さ、人々のあいだを裁いてやれ。公正を旨として。やたらと欲気なぞおこして、神の道を踏みはずすでないぞ」²と。

敬虔な祈りと清らかな挨拶が、神に望まれ永遠なる神に愛されしかの神の使徒ムハンマド―神よ、彼に祝福と平安を与えたまえ―の上にありますように。世界とアダムを創造することの目的は、彼 [=ムハンマド] の本質的な聖性と優美さ [=を創造すること] であった。至高なる神が仰るには、「もしそなたがいなければ、余は天を創らなかつた³。そなたは両世界の灯であり、愛されし者である⁴」と。「余は現世と来世をそなたへの愛情ゆえに創造した」と。また、教導の道における証の星にして光り輝く灯火であった彼の一族と教友たちにも[敬虔な祈りと清らかな挨拶がありますように]。預言者 [=ムハンマド]⁵―彼に平安あれ―が仰るには、「我が教友たちは星々のようであり、彼らのうち誰であれ、従えば導かれる」。また、裁きの日まで、敬虔で善良な者たちである他のムハージュールーン、アンサール、タービウー

¹ Q 2: 30.

² Q 38: 26.

³ law lāka la-mā-ḥalaqtu al-aflāka. ユーゼンは「もしそなたがいなければ、余は天と河を創らなかつた」と訳しているが、原文には「河」に相当する単語はない。

⁴ iki jahān ḥirāgī ḥabīb sen. ユーゼンは文中の“ḥabīb”を“jib”と読んだため、「そなたは両世界の灯の容器である」と訳している。

⁵ ユーゼンは誤って「預言者 [=ムハンマド]」を「至高なる神」と訳している。

ンたち⁶にも「敬虔な祈りと清らかな挨拶がありますように」。

さて、神への賛美と理性の所有者たる使徒への祝福のあと、(36b)「以下のことが」下僕たちのあいだで知られるであろう。すなわち、この卑しき私め、マウラーナー・ムハンマド・ドゥースティーの息子ウテミシュ・ハーギーは、主人たる今は亡きハカン陛下ヤードガール・ハン⁷の一門の下僕の子孫たちにして、古くからの奉公人の一人である。その地で、私は、慈悲深き主の恩寵によって召されたもっとも偉大なるスルターンにしてもっとも尊敬すべきハン陛下、アブールマンスール・イル・バルス・バハドゥル・ハン⁸—神よ彼の墓を芳しくしたまえ、楽園が彼の住処とされますように—にお仕えしていた。これらの者たちがチンギズ・ハンの子孫たちであり、私はこの王族の恩恵に浴していたので、以下のことをあるがままに知りた

⁶ ムハージルーン（「移住者」）とはムハンマドとともにマッカからマディーナに移住した集団のことであり、アンサール（「援助者」）とはムハージルーンを受け入れたマディーナのムスリムのことである。タービウンとは「後に続く者たち」を意味し、ムハンマドに直接に接した教友からムハンマドの言行を間接的に聞いた者たちを指す。

⁷ シバン家のうち、後述のアラブ・オグラ（アラブシャー）の子孫。一般には、「ヒヴァ・ハン国」の初代君主は1511年あるいは1512年にホラズム地方を征服したイルバルス（ヤードガールの孫）とされるが、『チンギズ・ナーマ』がここで「ヒヴァ・ハン国」の王統の祖をヤードガールと認識している点は興味深い。17世紀初頭にカーディル・アリーによって著された『集史』や、19世紀前半にムーニスとアーガヒーによって著された『繁栄の楽園』などにも同様の認識が見られる（Qādir ‘Alī Beg, *Jāmi’ al-Tawārīḥ*, рукопись ВОНБ Казанский государственный университет, Т. 40, f. 65a; Şīr Muḥammad Mirāb Mūnis and Muḥammad Riḥā Mirāb Āḡahī, *Firdaws al-Iqbāl, History of Khorezm*, ed. by Yu. Bregel, Leiden and New York, København, Köln, 1988, p. 102）。欧米の研究では、この政権はしばしば「アラブシャー朝（‘Arabšahids）」もしくは「ヤードガール朝（Yadgarids）」と呼ばれる（Yu. Bregel, “‘Arabšāhī,” *Encyclopaedia Iranica*, ed. by E. Yarshater, London and Boston, 1982-; Yu Bregel, *An Historical Atlas of Central Asia*, Leiden and Boston, 2003, p. 48）。ヤードガールおよびその息子ブルゲ（ブレケ）はマングト部のムーサーと結び、15世紀半ばにキプチャク草原東部を統一したシバン家のアブールハイルの死（1468年）の前後から活発な活動を展開していた（cf. В.В. Трепавлов, *История Ногайской Орды*, Москва, 2001, pp. 101-103; 長峯博之「『キプチャク草原の港』スグナク—1470～90年代のトルキスタン地方をめぐる抗争とカザクのスグナク領有を中心に—」『史朋』36, 2003, p. 14）。

⁸ アブーセイトワは訳註においてこの人物を比定できないとしているが、ヒヴァ・ハン国の初代君主とされるイルバルスであろう。イルバルスに付された祈願文からは『チンギズ・ナーマ』執筆時にはイルバルスが故人（1517年没）であったことがわかる。『チンギズ・ナーマ』と共通の情報源を持つ、あるいは『チンギズ・ナーマ』を参照して書かれたアブデュルガッファールの『諸情報の要諦』によれば、『チンギズ・ナーマ』の著者ウテミシュ・ハーギーの情報源の一人であったイルバルスには『ホラズム史』という著作があったという（‘Abd ūl-Ġaffār, ‘*Umdet ūl-Aḥbār*, MS., Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2331, f. 264b）。

いと思った。すなわち、チンギズ・ハンのオグラたち⁹のうち、その草原地方において誰がハンとなったあとに誰がハンとなったか、その後いつまで、またどのような順序で誰々がハンとなってきたのか、これらの者たちのあいだでどのような戦いと出来事が起こったか、これらのすべてをあるがままに知りたいと思った。[しかし、]私が見た諸史書は、これらの者たちのうちのわずかな名前を書きとめたものにはすぎなかった。しかも、どのような出来事と状況で彼らがハンとなったかは言及されておらず、多くの[者たちの]名前もまた言及されてはいなかった。私はこれらの者たちの状況についてあるがままに知りたいと願っていたので、古い話をよく知っているという人物がいるといえば、必ずその人物のもとに出向き、問い質した。理性の天秤にかけ、受け入れられるものを心に留め、受け入れがたいものは考慮しなかった。そうして、いかなる集まりにおいても古の帝王たちの話に及んで問題が生じると、彼らは私めのもとにやって来て、問い質すようになった。そして、私はこの[話を]語ることによって[人々に]知られるようになった。

さて¹⁰、このとき、王権の抛り所たる至高なるハン陛下、(37a) 神の影、信仰のスルターンたちの指導者にして戦場の案内人、[神の]代理人たちの玉座のカイ・ホスロウ¹¹、勇敢さ[においては]戦場のロスタム—彼 [=イシュ・スルターン]は戦場において毎日ダスターンの息子ロスタムである¹²—、シル河のようなスルター

⁹ オグル(息子)の複数形であるオグラは一般に「少年」を意味するが、「皇子」の意味でも用いられ、モンゴル時代においてはチンギス家のハンの息子たちに対して用いられた(G. Doerfer, “oglan,” “ogul,” *Türkische und Mongolische Elemente im Neupersischen: unter besonderer Berücksichtigung älterer neupersischer geschichtsquellen, vor allen der mongolen und timuridenzeit*, 4 bande, 1963-75, Bd. II; G. Clauson, “ogul,” *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford, 1972)。

¹⁰ Basa. 『チンギズ・ナーマ』では“Basa”は十七箇所で見られる。多くの場合、話題を変えるときに使われ、「さて」「ところで」くらいの意味だが、前の文章を受けて「そこで」「だから」「つまり」という意味で使われる場合もある。

¹¹ hilāfat tahtīning Kay Husrawī. ユーチンは文中の「カイ・ホスロウ」を人名とは取らずに“ki xycpəbi”と読み、「カリフの美德の[象徴である]玉座に君臨する君主」と訳している。

¹² ここにはフィルダウシーがペルシア語で著したイランの一大民族・英雄叙事詩『王書(シャー・ナーマ)』に登場する人物の名前が見える。カイ・ホスロウはイランの伝説的なカヤーニー朝の君主。ダスターン(別名ザール)とその息子ロスタムはカヤーニー朝からザープリスターン(スイースターン)の統治権を委ねられ、ことあるごとにイランを窮地から救った。ロスタムは象の体と獅子の力を持つ超人的な勇者・英雄で、七百年の生涯のあいだに、たびたびトゥーラーン王や悪鬼・怪物と戦った。とくに、カイ・ホスロウ時代のトゥーラーン王アフラーシアーブとの戦いは『王書』の圧巻の一つである。

ンたちの庇護者、世界のある限り彼の高貴なる性質はその寛容さの鉱脈であり、恩恵の源であるイシュ・スルターン¹³—至高なる神よ、彼の支配を永遠たらしめよ、彼の統治を確固たらしめよ—は、[以下のことを]お望みになった。すなわち、ヨチ・ハン¹⁴の子孫たちの諸状況と諸事情、順番に誰から誰のあとに誰がハンとなったか、このときに至るまでどのような出来事と事情で彼らのあいだにどのような種類の戦いと出来事が起こったか、すべてを明らかにして記憶に留めることを願われた。このため、この卑しき私めを呼んで来させ、このようにして慈悲と哀れみを施してください、これらの諸状況についてお尋ねになった。[イシュ・スルターンは、]話が長大であったため聞いただけでは記憶することはできないと思い、ついには「余のためにこれらの話を書き与えよ」とお命じになった。私めはこの者たちの下僕の子たち[の一人]であったので、その命令に背くことはできず、否応なくこの記録の命令を受け入れた。課せられた者は[神の前で]許されるのである。

さて、この序文の意図は、この写しを私めから読み聞きした親愛なる者たち、有力・卑小な者、友人たちへの以下のような要望にある。すなわち、この写しに書かれたこれらの言葉や話はいかなる記録や史書にもないものであり、そのすべてを私が聞いて書いているが、(37b) 周知のように、耳にする言葉の大半は偽りと言われている¹⁵。そこで、もし間違いや誤りが生じたならば、その誤りを取り除き、その間違いを正してほしい。また、この私めの仕事—課せられた者は[神の前で]許さ

¹³ 後述のドゥースト・スルターンの弟。アブールガーズィーの『テュルク系譜』や『繁栄の樂園』によれば、兄のドゥーストがヒヴァで即位したのちに従兄弟ハーギー・ムハンマド（アブールガーズィーの祖父）の支配するウルゲンチを占領したが、のちに反撃を受けて1558年もしくはヒジュラ暦967（1559/60）年に戦死した（*Histoire des Mogols et des Tatares par Aboul-Ghâzi Bêhâdour Khan*, Publiée, traduite et annotée par Le Baron Desmaisons, tome I, texte, St. Pétersbourg, 1871, pp. 234-236; Münis and Āghāī, *Firdaws al-Iqbāl*, pp. 118-119）。

¹⁴ チンギス・ハン（チンギズ・ハン）の長男ジョチのこと。『集史』では“Jūčī”と表記されるが、ジュワイニーの『世界征服者史』では“Tūšī”、アブールハサン・アリー b. アフマド・アンナサウィーの『スルターン・ジャラルルッディーン・マンクビルティー伝』では“Dūšī”と表記される。一方、無名氏のチャガタイ語史書『選史・勝利の書』では、『チンギズ・ナーマ』と同じように“Yöčī”と表記される。「ウルス（またはウルシュ）・イディ（＝くにたみの主）」の異名でも知られる。

¹⁵ 著者が謙遜しながら述べるこの記述からは、『チンギズ・ナーマ』がもっぱら口頭伝承のみに依拠していたようにも受け取れる。しかし、実際にはウテミシュ・ハーギーは少なくとも「ドゥースト・スルターン殿下の諸史書」という文献を利用したうえで『チンギズ・ナーマ』を著したのであり、また、他の文献を参照した可能性も大きい。この問題については、解題を参照。

れる一を知ってくれるならば、神の前で無駄にはならないであろう。「まこと、神は、功労者の御褒美は絶対にお忘れになりはせぬ」¹⁶。

チンギズ・ハンの物語の始まり

チンギズ・ハンが諸地方を征服したとき、一方はバグダード、一方はヒンドゥースターン、一方はキプチャク草原、イディル河 [=ヴォルガ河] であった。これらの地方を四、五人の息子たちに贈った。イラク地方をフレグ・ハンに与えた。ウゲデイ・ハンを自身の領地に置いた。トゥル・ハン¹⁷を自身のそばにとどめた。チャガタイ・ハンにブハラ、サマルカンド、ホラーサーン、ヒサールの諸地方を与えた。さて、ヨチ・ハンはすべてのオグランたちより年長であった。[そのため、] 大軍を委ね、キプチャク草原の地方に遣わした。「おまえの馬どもの飼葉とせよ」と言って、ホラズム地方を与えた。ヨチ・ハンがキプチャク草原の地方に向かったとき、有名なウルグ・タグに到達した。ある日、山のなかで狩をしていた。[そのとき、] 彼は一群の鹿に出くわした。それを追いかけて矢を射掛けているとき、落馬して首を折り、亡くなった¹⁸。

エジェン・ハンとサイン・ハンの物語の始まり

エジェン・ハンとサイン・ハンがよく知られている。トゥラル・ハンの娘で、彼 [=ヨチ] の妻から生まれた¹⁹。また、他の妻から生まれた十七人の息子がいた²⁰。

¹⁶ Q 9: 120.

¹⁷ チンギズ・ハンの末子で、モンケ、クビライ、フレグ、アリク・ブケ四兄弟の父であるトゥルイのこと。ジュワイニーの『世界征服者史』では『チンギズ・ナーマ』と同じように“Tūli/Tūli”と表記されるが、ラシードウッディーンの『集史』では“Tūlay”と表記される。また、「ウルグ・ノヤン」「イエケ・ノヤン」（どちらも「偉大な貴顕」の意）の尊称でも知られる。

¹⁸ ラシードウッディーンの『集史』では、ジョチの死は明示されているわけではないが、病死したものと理解される。『諸情報の要諦』では、ジョチは狩猟中に落馬して背骨が折れて死んだということになっている（‘Abd ūl-Gaffār, ‘Umdet ūl-Aḥbār, f. 258a）。

¹⁹ この部分の記述によれば、トゥラル・ハンは、エジェン（＝オルダ）とサイン（＝パトゥ）の母方の祖父に当たることになるが、これは理解しがたい。そもそもエジェンの母はコングラト部族のサルタク、サインの母は同じくコングラト部族のアルチ・ノヤンの娘オキ・フジンであるから、エジェンとサインは同じ母から生まれた兄弟では

このエジェンとサインは(38a)ハン位を互いに譲り合った。サイン・ハンが年下であり、[彼は]兄エジェンに「あなたは私の父に代わる兄である。まさにあなたは私の父である。私は他所の牧地に去りましょう。あなたがハンになってください」と言った。エジェンは、「私がおまえより年長であることは確かである。しかし、父はおまえを非常に愛し、大事に育ててきた。いままで、私はおまえの[父の]寵愛と立場を尊重してきた。もし私がハンとなったら、おそらく以前のようにおまえの立場を尊重することはできないだろう。また、われわれのあいだに争いと敵意が生じるだろう。おまえこそがハンとなれ。おまえの統治に私は甘んじよう。しかし、私のハン位におまえは甘んじないだろう」と言った。[サイン・ハンは、]「何を言うのですか。ヤサクにより[ハンとなるべき]兄²¹がいるのに、どうして私がハンになることがふさわしいのでしょうか」と言って、兄に強く[ハンになるよう]勧めた。

[エジェン・ハンは]同意せず、「それならば、こうしよう。われわれの偉大な祖父チンギズ・ハンのもとへ行こう。私は私の意見を申し上げるので、おまえはおまえの言葉を申し上げる[とよい]。どのような祖父のご命令であれ、それに従おう」と言ったので、[サイン・ハンは]この言葉に納得して同意した。一人の母から生まれた二人の息子と、別の母から生まれた十七人の息子は、全員集まって、偉大なるハンへの謁見へと赴いた。ハンは、ハンのお側に至ったこれらの者たちのために三つの天幕を建てた。金の入口の白い天幕をサイン・ハンのために、銀の入口の(38b)

ない(川口琢司「ジョチ・ウルスにおけるコンクラト部族」『ポストモンゴル期におけるアジア諸帝国に関する総合的研究』, 2002, pp. 76-77)。サルタクの父の名前がわからないため、サルタクの父がトゥラル・ハンであるかどうかは不明である。

²⁰ エジェンとサイン以外のジョチの十七人の息子の名前は『チンギズ・ナーマ』には現れない。ジュワイニーの『世界征服者史』にはジョチの息子として八人の名前しか挙げがっていない(*The Ta'rikh-i-Jahān-gushā of 'Alā'u 'd-dīn 'Aṭā Malik-i-Juwaynī (composed in A.H. 658 = A.D. 1260)*, part I, ed. by Mirzā Muḥammad ibn 'Abdu'l-Wahhāb-i Qazwinī, "E.J.W. Gibb Memorial" Series, vol. XVI, I, Leyden and London, 1912, pp. 145, 221-222)。ラシードウッディーンの『集史』には、ジョチの息子として十四人の名前が挙がる(Rašīd al-Dīn Faḥr al-Dīn Hamadānī, *Jāmi' al-Tawārīḥ*, ed. by Muḥammad Rawšān and Muṣṭafā Mūsawī, vol. I, Tehran, 1373, p. 730)。モンゴルに関する二種の系図集のうち、『五族譜』にはジョチの息子として十五人(Anonym., *Šu'ab-i Panjgāna*, MS., Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Ahmet 2937, f. 108b)、『ムイヅルアンサーブ』には十八人の名前が挙げられている(Anonym., *Mu'izz al-Ansāb fī Šajarat Salāṭīn Muḡūl*, MS., Bibliothèque Nationale, Ancien fonds, Persan 67, f. 18b)。

²¹ これは、ヤサク、つまりチンギス・ハンのヤサに年長者がハンになるという規定があったことを示唆している。

青い天幕をエジェンのために、鉄の入口の灰色の天幕をシパンのために建てた²²。

さて、三つの点で、シパン・ハンのオグランたちはトクタミシュ・ハン²³とテムル・クトル²⁴、オロス・ハン²⁵のオグランたちに「われわれはおまえたちよりも勝っ

²² ここに見られる天幕の色についての記述は、ジョチ・ウルス史における「アク・オルダ（白帳）」と「キョク・オルダ（青帳）」の問題に関する重要史料となっている。1227年のジョチの没後、ジョチ・ウルスは、大きくは長男オルダの左翼ウルスと、ジョチの後継者となった次男パトゥの右翼ウルスに分かれた。ティムール帝国史料の『ムイーン史選』およびこれを情報源とする諸史料は左翼ウルスを「アク・オルダ」、右翼ウルスを「キョク・オルダ」と伝えており、ヤクポフスキーなどはこれに依拠していた（Б.Д. Греков, А.Ю. Якубовский, *Золотая Орда и её падение*, Москва-Ленинград, 1950, pp. 261-262）。しかし、サファルガリエフ以後の研究によって実際には逆であったことが明らかにされており（М.Г. Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, Саранск, 1960, pp. 14-15; Г.А. Федоров Давыдов, *Общественный строй Золотой орды*, Москва, 1973, pp. 141-144; 堀川徹「遊牧ウズベグ史研究（1）」『COSMICA』20, 1990, pp. 165-177）、とくにユーチンが『チンギズ・ナーマ』の記述を用いてこの問題を論じている（В.П. Юдин, “Орды: Белая, Синяя, Серая, Золотая...,” Утемиш-хаджи, *Чингиз-наме*, Факсимиле, перевод, транскрипция, текстлогические примечания, исследование В.П. Юдина, Алма-Ата, 1992, pp. 26-28）。『チンギズ・ナーマ』の記述には伝承的要素も認められるが、ジョチ・ウルスの継承政権内部で著された『チンギズ・ナーマ』において、サイン・ハンが「白い天幕」、エジェンが「青い天幕」に関連付けられている意味は大きいだろう。「アク・オルダ」と「キョク・オルダ」の問題については、『ムイーン史選』の記述の合理的解釈やシパン家のウルスの位置づけをめぐる諸説が展開されているが（cf. *История Казахской Литературы в трех томах*, т. 2, Алма-ата, 1997, pp. 106-116, К. Ускенбай, “Улусы первых Джучидов. Проблема терминов Ак-Орда и Кок-Орда,” *Тюркологический сборник 1975, Тюркские народы России и Великой степи*, Москва, 2006, pp. 365-382）、そもそも『ムイーン史選』の記述そのものを疑う必要があるように思われる。また、「灰色の天幕」については、Юдин, “Орды: Белая, Синяя,” pp. 30-32参照。

²³ 『チンギズ・ナーマ』には「トクタミシュ (Тоқтамış)」と「トフタミシュ (Тоғтамış)」の二つの表記が見られるが、ティムール帝国史料などで一般的な「トクタミシュ」の表記で統一した。

²⁴ 14世紀末にジョチ・ウルスのハンとなったトカ・テムル家のテムル・クトルクのこと。『チンギズ・ナーマ』には「テムル・クトルク (Temür Qutluq)」という表記も見られるが、「テムル・クトル (Temür Qutli)」で統一した。

²⁵ オロスの系譜についてはオルダ系とトカ・テムル系の二説が議論されてきたが（cf. 堀川徹「ウズベグ族とカザク族の『分離』について」『宋元代の社会と文化に関する総合的研究』昭和54年度科学研究費補助金研究成果報告書, 1980, pp. 57-59）、オルダ系説をとるヤクポフスキーやサファルガリエフなどの研究は系譜や年代に問題の多い『ムイーン史選』に依拠するものであった（Греков, Якубовский, *Золотая Орда и её падение*, pp. 310; Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, p. 129）。これに対して、ユーチンは『チンギズ・ナーマ』の記述も用いてトカ・テムル系説をとっており（В.П. Юдин, “Переход власти к племенным биям и неизвестной династии Токатимуридов в казахских степях в XIV в. (К проблеме восточных письменных источников, степной устной историографии и предьстории Казахского ханства),” *Чингиз-наме*, 1992, p. 67）、現在ではトカ・テムル系説がほぼ定説とされている（cf. 川口琢司「キプチャク草原とロシア」『岩波講座世界歴史 11 中央ユーラシアの統合—9-16世紀—』岩波書店, 1997, p. 289; 赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』風間書房, 2005, pp. 83-84）。

ている」と自慢し、誇っている。その一つは、天幕である。彼らが言うには、「われわれの祖先ヨチ・ハンが亡くなったあとに、われわれの祖先たちが偉大なる父祖チンギズ・ハンのもとに赴くと、[チンギズ・ハン] エジェンとサインのあとにわれわれの祖先シバン・ハンのために天幕を建てた。おまえたちの祖先のためには[天幕などを運ぶ] 荷馬車²⁶さえもつくらなかった」と。また二つめは、「ウズ・ベグ・ハンは激怒し、キヤト・イサタイ²⁷に編成した軍[の一部]を分け与え²⁸、すべてのオグランたちを民とともにコシュン²⁹として与えたときに、彼はまたわれわれに敬意を示し、『剣を振るい、牧地を切り開いた者は、勇者シバンのオグランたちである』と言って、二つの服属した民をわれわれに与えた[ことである]。一つはカルルク[部族]、一つはボイレク[部族]である。われわれはこの二つの民を取り、サイン・ハンの定めたわれわれの牧地において、[サイン・ハン] われわれの自由にさせたのである。われわれは、[他のオグランたちが] かのジル・クトルの館³⁰のために石と

²⁶ telägän. この単語を、バルトリドは「天幕」(B.V. Бартольд, “Отчет о командировке в Туркестан,” *Сочинения*, т. 8, Москва, 1973, p. 168)、赤坂は「望むもの」(『ジュチ裔諸政権史の研究』, p. 113)と訳している。しかし、この単語は56aにも「一台の荷馬車(telägän)に二頭の馬を繋ぎ」として現れており、ユーチンが訳しているように、これは「四輪馬車」「荷馬車」を意味している。

²⁷ トクタ、ウズ・ベグに仕えたキヤト部族出身のベグ(またはアミール)。イブン・バットウータはその旅行記において、彼をアミール・イーサーと呼び、ジョチ・ウルスを訪れた1333年当時彼が存命であったことを伝える(イブン・バットウータ著、イブン・ジュザイイ編、家島彦一訳注『大旅行記4』平凡社, 1999, pp. 43-44)。また、彼が国政の最高責任者たるウルスのアミールの地位にあったこと、彼がウズ・ベグの娘イト・キュチュクを娶る(このため、しばしば彼の名前にハンの女婿を意味する「キュレゲン」の称号が付される)代わりに、自分の娘オールドチャをウズ・ベグに嫁がせていたことなど、彼のウルスにおける政治的立場や婚姻を通じたハンとの結びつきからは、彼がウルスにおいてきわめて有力な人物であったことが窺われる。なお、ウルスのアミールについては、B. Spuler, *Die Goldene Horde. Die Mongolen in Rusland 1223-1502*, Leipzig, 1943, pp. 301-302; 本田実信『モンゴル時代史研究』東京大学出版会, 1991, pp. 95-96参照。

²⁸ örüm çešip. ユーチンは“өрүм четiб”と読み、「慈悲を示し」と訳している。

²⁹ qošun. アブーセイトワは訳註において「百人隊」とするが、バルトリドが指摘しているように(B.V. Бартольд, “Улугбек и его время,” *Сочинения*, т. II, ч. 2, Москва, 1964, pp. 50)、正しくは千人隊より小さな人数不定の部隊である。

³⁰ ジル・クトルは前述のキヤト・イサタイの息子。ヤクボフスキーはスグナクの遺跡調査において近郊にある「キョク・ケセネ(青い建物)」という遺跡について報告しており(A.Yu. Якубовский, “Развалины Сыгнака (Сугнака),” *Сообщения Гос. Академии истории матер. Культуры*, т. 2, Ленинград, 1929, pp. 157-158)、それを16世紀初頭のイブン・ルーズビハーンの『ブハラ客人の書』に見られるウズベグのハンたち(シバン家)の墓に関連付けている(Faḡl Allāh b. Rūzbihān Ḥunjī Iṣfahānī, *Mihmān-nāma-yi Buḥārā*, ed. by M. Sütüda, Tehran, 1341, p. 201; Греков, Якубовский, *Золотая Орда и её*

煉瓦を積んだとき、また彼 [=ジル・クトル] の息子テンギズ・ブガ³¹の [天幕の] 入口に立って控え、天幕に [向かって] 跪いたときにも、われわれはそのようなことはしていない」と、彼らは言う。サイン・ハンのオグランたちがベルディ・ベグ・ハンのときに途絶えたとき、ジャーニ・ベグ³²・ハンの母タイ・トゥグル・ベギム³³は、「いまや、牧地とハン位はシバン・ハンの子孫たちのものである」と言って、マングタイの息子ヒズル・ハンを呼び寄せ、サライ地方においてハンとした³⁴。「サイン・ハンの子孫 (39a) たちの後、そのハン [=サイン・ハン] の玉座におけるハン

падение, pp. 309-310)。しかし、ユーチンはこの「キョク・ケセネ」こそ『チンギズ・ナーマ』に現れるジル・クトルの館ではないかとしている (В.П. Юдин, “Переход власти к племенным биям,” p. 62; cf. 長峯『『キプチャク草原の港』スグナク』, p. 14)。

³¹ ユーチンは、テンギズ・ブガを、『選史・勝利の書』に現れるアブールハイル配下のキヤト・イサタイの子孫ブダンチャル・ベグ (Budançař Beg) に比定しているようである (Anonym., *Tawārīḥ-i Guzīda, Nušrat-nāma*, MS. British Library, Or. 3,222, f. 119a; Юдин, “Переход власти к племенным биям,” p. 62)。

³² 14世紀中葉のジョチ・ウルスの君主。『チンギズ・ナーマ』には「ジャーニ・ベグ (Jān Beg)」と「ジャーニー・ベグ (Jānī Beg)」の表記が見られるが、前者の表記で統一した。

³³ ここでは「タイ・ドゥアル・ベギム (Tay Dualī begim)」と表記されているが、『チンギズ・ナーマ』後段ではしばしば「タイ・トゥグル・ベギム (Tay Tuğlī begim)」として多く現れるため、こちらの表記で統一した。ロシア年代記では、タイダラなどと表記される。表記とその意味について、詳しくは P. Pelliot, *Notes sur l'histoire de la Horde d'Or: Suivies de quelques noms turcs d'hommes et de peuples finissant en "ar"*, Paris, 1950, pp. 101-105 を参照。ウズ・ベグの第一の正室 (ハトゥン) で、ジャーニー・ベグとティーニー・ベグの母。イブン・バトゥータは旅行記の中でタイトウグリー (Ṭaytuğlī) と記し、彼女がソロモン王から王権を奪ったシドン王の皇女ジャラーダの子孫であるという伝承を伝える (イブン・バトゥータ『大旅行記4』, pp. 40, 110-111)。

³⁴ 『ムイッズルアンサーブ』によれば、マングタイはシバンの曾孫である (Anonym., *Mu'izz al-Ansāb*, f. 23a)。『チンギズ・ナーマ』でヒズルをマングタイの息子とする点は『選史・勝利の書』に見えるシバン家の系譜に一致する (Anonym., *Tawārīḥ-i Guzīda, Nušrat-nāma*, f. 71a; 川口「キプチャク草原とロシア」, p. 285)。他の諸史料はヒズルについて断片的にしか伝えていないが、『チンギズ・ナーマ』の記述はヒズルがジョチ・ウルスのハンに即位した状況を具体的に伝えるものであり、バトゥ家からシバン家への権力の移行を窺わせるものとして、大きな注目に値する (cf. 川口「キプチャク草原とロシア」, p. 284-286)。ロシア年代記および貨幣資料によれば、ヒズルの即位は1360年のことである (Полное собрание русских летописей, т. XI, летописный сборник, именуемый патриаршей или никоновской летописью, С.-Петербургъ, 1897, p. 232; Г.А. Федоров-Давыдов, “Клады Джучидских монет (основные этапы развития денежного обращения и денежно-весовых норм в Золотой Орде),” *Нумизматика и эпиграфика*, т. 1, Москва, 1960, pp. 133-155; N. Aġat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları Kataloġu 1250-1502*, 1976, p. 74-76)。ヒズルの即位については H. H. ハワースも『チンギズ・ナーマ』と同様の状況に言及しているが、これは『チンギズ・ナーマ』と共通の情報源を持つ、あるいはこれを参照した可能性の高い『諸情報の要諦』に間接的に依拠したものである (H. H. Howorth, *History of the Mongols: from the 9th to the 19th Century*, part II, the so-called Tartars of Russia and the Central Asia, division I, London, 1880, pp. 195-196)。

位はわれわれのものである」と彼らは言う。この度の話は、ここにおいておおよそのところが語られた。

さて、再び先ほどの話の最初に戻ろう。チンギズ・ハンは息子たちのために天幕を建て、その晩に食料の支給³⁵義務を算定すると、翌朝に接見を与えた。十二の円形の宴席が設けられ、ベグたちが順番に座った。[宴が]盛り上がり、食事が行われたあと、サイン・ハンが来て跪き、[チンギズ・ハンに]言うには、『われわれの父 [=ヨチ・ハン] が亡くなったので、父の代わりにまさにあなた [=エジェン・ハン] が我が父である。われわれは他所の牧地へ行くので、あなたがハンとなってください』と私は言いました。[エジェン・ハン]は承諾しませんでした。[エジェン]がなぜ承諾できないのか、私には理解できません。この意見をあなた様に申し上げるために私は参りました』と。[チンギス・] ハンが言うには、「サインはヤサクに則った言葉を述べている。なぜそなた [=エジェン・ハン] は同意しなかったのか」と。エジェンもまた跪いて述べた。「いかにも、我がハンよ、私が年長であることは確かです。しかし、我らの父は彼 [=サイン・ハン] を非常に愛し、大事に育ててきました。これまで、私は彼の立場を尊重してきました。彼は私の立場を尊重しませんでした。もし私がハンになったら、以前のように彼の立場を尊重できないでしょう。[また、] われわれのあいだに恨みや敵意が生じるでしょう。あなた様に不快な思いをさせます」と言って、「このため、私は同意しないのです。いまや、彼 [=サイン・ハン]こそがハンになるべきです。私は彼の統治に甘んじましょう」と述べると、[チンギス・] ハンはこれらの言葉に心を動かされ、息子のヨチ・ハンを思い出し、目から涙を流し、二人を大いに賞賛した。そして、「明日ベグたちと協議し、そなたたちへの返答を与えよう」と述べた。翌朝、ベグたちと協議して、右

³⁵ *suysun*. ジョチ・ウルス発行のウイグル文字チュルク語文書、クリミア・ハン国、カザン・ハン国発行のアラビア文字チュルク語文書には“*süsün*”の形でも現れる。A.M. オズイェトギンは「保存食糧」「食糧」の意味を充てる (A.M. Özyetgin, *Altın Ordu, Kırım ve Kazan sahasına ait yarlık ve bitiklerin dil ve üslûp incelemesi*, 1996, pp. 107, 113, 115, 131, 233)。一方、I. ヴァーシャーリはこの術語について詳細な考察をしており、それによれば、“*suysun*”の形の最古の事例はメングリ・ギレイのヤルリク (1467年)に見られ、“*süsün*”よりも新しい形とされる。そして、その前後にしばしば見られる“*ulûfe*” (「飼葉手当て」の意) という術語と二詞一意で「糧食」「口糧」を意味するという (I. Vásáry, “*Susun and süsün in the Middle Turkic texts*,” *Acta Orientalia Hungarica*, 31, Budapest, 1977, pp. 51-59)。ただし、ここではより正しくは「君主から支給される食糧」を意味するものと思われる。

翼とともに (39b) イディル河の諸地方を、[チンギス・] ハンのヤサクによってサイン・ハンに与えた。左翼とともにシル河流域の諸地方をエジェンに与えた³⁶。

さて、[サイン・ハンとエジェン・ハンは] ハンへの謁見から戻り、ハンによって遣わされた諸地方に来た。サイン・ハンはイディル河の岸辺に来るや、軍隊の装備を整え、オロス [=ルーシ] 地方の町マスカウ [=モスクワ] に遠征した。人々が語るには、[サインは] その遠征においてシバン・ハンに三万人をつけ、先遣隊として送った。自らはその後から進んだ。[シバン・ハンは] 三日行程の場所に先に進んだ。マスカウの帝王は知らせを受け、十五万人とともに迎え出た。これらの者たち [=シバン軍] はマスカウの帝王が迎え出ているという知らせを受けた。シバン・ハンは、「これに対して急行しよう」と言った。どれほどベグたちが止めようとしても、彼は聞かなかった。[シバンは] 三日行程の場所から急行して、何も知らずにいた [モスクワ] 軍のなかに襲いかかった。オロス [=ルーシ] の帝王は [シバン軍を] 撃退することができず、[シバン軍は] 帝王を捕らえた。[モスクワ] 軍のうち、殺す者を殺し、生き残った者は捕囚した。数えることも記録することもできないほどの多くの財物や装備品、武具・甲冑が [シバン軍の] 手に入った。しかし、シバン・ハンは、「各人が手に入れたあらゆる財物や装備品を奪われないようにせよ。すべてを持って来させよ」と命じた。人々が語るには、各種 [の戦利品] から一つずつ山をつくると、数え切れないほどの戦利品の山になったという。

二日後、[サイン・] ハンが到着して、この勝利を見た。[シバン・ハンは] この

³⁶ 『チンギズ・ナーマ』の右翼（原文では「右腕 (ong qoli)」）と左翼（原文では「左腕 (sol qoli)」）に関する記述は、ジョチ・ウルスの分地を考える際に重要となる。1227年のジョチの没後、ジョチ・ウルスは大きくは長男オルダとジョチの後継者となった次男バトゥに分与され、イルティシュ河を中心とした東部にオルダ家が統治する左翼ウルス、ヴォルガ河流域のサライを中心とした西部にバトゥ家が統治する右翼ウルスが形成された。当初、左翼ウルスは独立の地位を保っていたが、次第に疲弊して右翼ウルスへの従属を強め、14世紀初頭には本営をシル河中・下流域に移し (Th.T. Allsen, "The Princes of the Left Hand: An Introduction to the History of the Ulus of Orda in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries," *Archvum Eurasiae Medii Aevi* 5, Wiesbaden, 1987, pp. 5-26)、スグナクを中心都市とするようになった (長峯「『キプチャク草原の港』スグナク」, pp. 1-8)。14世紀初頭のバヤン以降のオルダ家の統治者については不明な点が多いが、オルダ家はこの頃の混乱のなかで断絶したと考えられる (川口「キプチャク草原とロシア」, pp. 282-284)。『チンギズ・ナーマ』の記述は、まさにこうしたジョチ・ウルスの分地を背景としているのである。また『チンギズ・ナーマ』は、ベルディ・ベグの時代に反乱が起こってキヤト・ジル・クトルの息子チンギズ・ブガが左翼をシル河畔に奪い去ったとしているが、このことはこの頃の左翼ウルスの混乱に関連している可能性がある。

財物や装備品すべてを[サインのもとに]もたらし、差し出した。[サイン・ハンは]非常に喜び、シバン・ハンを大いに褒め称えた。その後、シバン・ハンが来て謁見すると、[サイン・ハンがシバン・ハンに]多くの恩恵と(40a)慈悲を示し、下賜品を与えた。[サイン・ハンが]手に入れた財物や装備品のすべてをシバン・ハンに下賜し、[シバン・ハンが]そのすべてを自身の軍隊へ褒美として与えた。[シバン・ハンが]翌朝に出発し、マスカウ地方に侵入した。数か月そこにおり、その地方の諸事を監督し、地租を徴収し、監督官たちを置き、勝利のうちに自身の領地に戻った。

さて、これらの者たちが戻って来るまでに、エジェン・ハンのノケルたち³⁷が主人に対して反乱を起こし、エジェン・ハンをすべてのオグランたちとともに殺害した³⁸。この知らせはサイン・ハンのもとに届き、大きな不幸が[サイン・ハンを]襲った。[サイン・ハンが]天幕に入り、[弔いの]食事を振舞ったのち、軍隊の装備を整え、この敵に向かって進軍した。これらの者たちは持ちこたえられず、その主だった者たちは逃げた。[サイン・ハンが]他の民のすべてを移住させ、連れて来て、自身の民に加えた。そして、それぞれの部族をベグ[一人一人に]にコシュンとして与えた。今日まで、反逆者と敵対者は剣の油になるという[掟は]、このために残っているのである。

さて、サイン・ハンがこれらの地方とこれらの民を支配した。その後、すべての兄弟たちに民を与え、牧地を割り当てた。しかし、シバン・ハンに民を与え、領地を与えるときにベグたちと協議すると、ベグたちが述べた。「この方は非常に偉大な

³⁷ newkärleri. ノケルは本来「仲間」「僚友」という意味のモンゴル語である。モンゴル帝国時代のノケルについては、氏族・部族の指導者に隷属的に仕える身分とする説(護雅夫「Nökür考—「チンギス＝ハン国家」形成期における—」『史学雑誌』61-8, 1952, pp. 1-27; 護雅夫「Nökür考序説—主として主従関係成立の事情について—」『東方学』5, 1952, pp. 56-68)、「チンギス汗一門に仕える御家人」という説(志茂碩敏『モンゴル帝国史研究序説—イル汗国の中核部族—』東京大学出版会, 1995, pp. 451-461)が提示されている。ポスト・モンゴル時代のノケルについては、もはや特定の身分を表わす術語としての意味を失い、単に「従者、家臣、家来」を意味する普通名詞となっていた可能性が指摘されている(間野英二『パーブル・ナーマの研究 IV 研究篇—パーブルとその時代—』松香堂, 2001, p. 252)。また、ティムール帝国期の史料の用例から、ノケルに奴隸的起源を想定する必要性も指摘されている(川口琢司『ティムール帝国支配層の研究』北海道大学出版会, 2007, p. 336)。

³⁸ ラシードゥッディーンの『集史』などの諸史料はオルダの死については言及していないため、『チンギズ・ナーマ』のオルダの死に関する記述は非常に興味深い。

働きをしました。いまやこの方の心は増長しています。あなたがこの方に民と領地を与え、[この方を] あなたご自身のそばに置くことはよいとは思われません。あなたが彼 [=シバン・ハン] に最近分け与えた三万人に、その [あなたが新しく与える] 人員を兵士として加え、征服していない諸地方に派遣してください。いかなる地方であれ、彼が征服したならば、彼のものになるように [するとよいでしょう]。この言葉はハンを納得させ、その分け与えた三万人にさらに一万のキヤト [部族] とユラルダイ [部族] を加え、クリム [=クリミア] とケフェ [=カプファ] の諸地方に派遣した。

シバン・ハンの物語の始まり (40b)

シバン・ハンには驚嘆すべき事柄が多い。そのうちの一つの事柄を、この梗概のなかで言及しておこう。その一つの事柄とはこうである。クリム地方にクルク・イエルという岩でできた堅固な城砦があり、その堅固さは世界に知られている。数年間、[シバン軍はこの城砦を] 包囲し、戦ったが、占領することはできなかった。ついに [シバン・ハン] は、「夕方から夜が明けるまで、あらゆる音を出す物を打ち合わせて鳴り響かせよ」と命じた。[兵士たちは] 両手に [音を出す物を] 取り、打ち合わせて鳴らし始めた。銅の大鍋、皿、水差しを叩き始めた。軍隊の中に、地面と空が揺れ、耳をつんざくほどの轟音や騒音が上がった。砦の人々はすっかりうろたえて、「どうしたのだ」と言って、四方に走り回った。その夜は、夜明けになるまで轟音と騒音が止まなかった。砦の人々は横になり眠ることができなかった。夜明けになると、[シバン軍は轟音と騒音を] 止めた。再び夜となり、前日のように再び轟音と騒音を立てた。一週間か十日にわたり、このような状況であった。砦の人々は不眠のため疲れ果てた。ついには、「もし彼らが何かする [つもりがある] ならば、しただろう。おそらく、彼らにはこの時期にこのような慣習があるのだろう」と言って、休息を取った。シバン・ハンが彼らが休息を取ったことを知り、軍隊を集めた。人々が語るところによれば、その砦は剥き出しの岩の上にある。この夜に轟音と騒音をいっそう大きく立てた。砦の四方から穴を掘った。夜明けになるまでに人が通れるくらいの道をつけた。砦の人々は騒音のため、つるはしの音が聞こえず、[地下道には] 気づかなかった。地下道が通ると、正門を襲撃した。砦の人々は正

門に駆けつけた。[シバン軍は] 一団の勇者たちをその地下道に割り当てた。[勇者たちは] その地下道から走り (41a) 出るや、砦に急行した。そして砦を占領した。私 [=筆者] は砦を見た旅行者たちに質問した。「まだその地下道の跡がある」と彼らは言った。

その後、アウラク [=ワラキア] 地方に向かって進軍し、そこを征服した。それからクラル [=ポーランド] 地方に向かって進軍した。クラルは非常に大きな地方であり、そこをめぐる多くの戦いがあった。[シバン軍は] ついに征服し、クラルを居所とした。彼はそこで亡くなった。いまもクラルの帝王の子孫 [=シバン・ハンの子孫] がいる³⁹。シャイフ・アフマド・ハンはそこで数年間囚われの身となり、そして無事にそこを去り、自身の領地ハージー・タルハンに来た⁴⁰。彼が語ったところでは、「われわれウズベグ⁴¹の民のうち、いかなる部族であろうともそのすべてがそこ [=クラル] にいる。シバン・ハンとともに行き、そこにとどまっているからである」ということだそうである⁴²。

³⁹ 他の史料には見られない記述である。『諸情報の要諦』はこの記述を採用しておらず、その代わり、ドイツ皇帝とモスクワのツァーリがポーランド地方を統治したシバンの子孫から王位を奪い、ザクセン公をポーランド王にしたと述べる ('Abd ūl-Gaffār, 'Umdet ūl-Aḥbār, f. 259a)。ザクセン公とはザクセン選帝侯アウグスト3世 (ポーランド王としての在位は1733-63年) と思われるが、その記述の信憑性は別に検討しなければならない。

⁴⁰ シャイフ・アフマドは、トカ・テムル家のうち、後述のテムル・クトルクの子孫。いわゆる「大オルダ」の君主としてサライを支配したが、1502年にサライがクリミア・ハン国のメングリ・ギレイに征服されると、一時期リトアニア (リトアニア・ポーランド同君連合) に避難し、その後、『チンギズ・ナーマ』が伝えるようにアストラハン [=ハージー・タルハン] に帰還した (И.В. Зайцев, *Астраханское ханство*, Москва, 2004, pp. 63-65)。「アストラハン・ハン国」と「大オルダ」の関係については、Зайцев, *Астраханское ханство*, pp. 30-62; 赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』, pp. 240-243参照。

⁴¹ 「ウズベグ」の起源については、現在わが国ではジョチ・ウルスのウズ・ベグ・ハンに由来するという説が有力となっている (赤坂『ジュチ裔諸政権史の研究』, pp. 218-230; 小松久男「ウズベグ [人]」『中央ユーラシアを知る事典』 (小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編) 平凡社, 2005)。しかし、その含意や歴史の変遷についてはさらに検討が必要であろう。とりわけ、ウズ・ベグ治下のジョチ・ウルスのイスラーム化と「ウズベグ」の形成を結びつける言説は、モンゴル諸君主の改宗伝承の問題とも絡んで、再検討を要する。ここではひとまず、「ウズベグ」をジョチ・ウルスの支配下にあったキプチャク草原とその民を含意するものとしておきたい。『チンギズ・ナーマ』では随所に「ウズベグ」が登場しており、16世紀においても「ウズベグ」がキプチャク草原とその民を含意していたことがわかる。

⁴² 『諸情報の要諦』はシャイフ・アフマドを情報源とする話を伝える際に、「シバン一門の出身であるウズベグのシャイフ・アフマド・ハンは詳細に書いたそうだ」としている ('Abd ūl-Gaffār, 'Umdet ūl-Aḥbār, f. 259a)。シャイフ・アフマドが「シバン一門の出身」というのは誤りであるが、ここからはシャイフ・アフマドが何らかの著述を行

さて、シバン・ハンの物語を終え、再びサイン・ハンの物語に戻ろう。サイン・ハンは草原地方において偉大な帝王となった。数年間、吉兆のうちに統治が続いた。死期に達し、現世から身罷ったが、[彼には]二人の息子がいた⁴³。一人の名はサル・タク、一人の名はトガンであった。サル・タクは彼 [=サイン・ハン] 自身より先に八歳で亡くなった。トガンもまだ子供であった。ベグたちは一致してフレグ・ハンのもとへ使者を送り、剣のない鞘、襟のない肌着⁴⁴を贈った。それはすなわち、民は帝王もなく残され、女は夫もなく残されたということである。フレグ・ハンはこの知らせを聞くと、進軍してシルワーン地方にやって来て、大軍を整え、[使者に大軍を] 付き従わせ、派遣した。いまこの軍隊 [の話] が出たところで、ベルケ・ハン—彼に神の慈悲と恩寵あれ— [の物語に] 入ろう。

ベルケ・ハンの物語の始まり

件のお方 [=ベルケ・ハン] —彼に神の慈悲あれ—は、母親から生まれたときからムスリムであったことで有名である。この世に生まれたとき、自分の母の乳も(41b) 他の異教徒の女たちの乳も吸わなかった。このため、[ヨチ・ハンはベルケ・ハンを] 占い師たちと賢者たちにお見せになった。彼らが「この方は賞賛すべきお方です。ムスリムは異教徒の女の乳は飲みません」と言ったので、一人のムスリムの女を見つけ出して、連れて来させた。[ベルケ・ハンは] その女の乳を吸い始めた。

この出来事から数年ののち、彼 [=ベルケ・ハン] の父ヨチ・ハンが亡くなると、異教徒のあいだにとどまることができずにスグナクの町に来た。[ベルケ・ハンが] その地方に来たとき、諸極の中の極、シャイフ・ナジュムッディーン・クブラー様の後継者の一人である世界のシャイフ、シャイフ・サイフッディーン・パーハルズ

っていたことが窺われる。

⁴³ 『チンギズ・ナーマ』ではサルタクはバトゥ (=サイン・ハン) より先に死んだことになっているが、ラシードウッディーンの『集史』には、バトゥの死後にモンケ・カアンのもとに来たバトゥの長男サルタクがカアンの命により後継者となったこと、そのサルタクも帰国の途上で死亡し、カアンの命でバトゥの四男ウラグチに後継させたこと、そのウラグチもまもなく死亡したことが記されている (Rašīd al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīḫ*, pp. 736-737)。バトゥの次男トガンはラシードウッディーンの『集史』ではトゴガン (Tūqūqān) と表記される

⁴⁴ yaqasız könglāk. J. Eckmann, *The Divān of Gadā'i*, Uralic & Altaic Series, vol. 113, 1971, p. 327に従って、“könglāk”を「肌着」と訳した。

イーの賞賛すべき資質を聞き、切望して奉仕に来て、数年間大いに努力して、聖者たちの究極の完全さを体得した⁴⁵。[ベルケ・ハンが] シャイフにお仕えしているあいだに、サイン・ハンが亡くなり、彼のベグたちは一致してフレグ・ハンに使者を送った。ある日、シャイフ様がベルケ・ハンに仰るには、「おお、息子よ。至高なる神の御命令は、『そなたが行き、父祖の牧地において統治せよ』とのことである」と。

[ベルケ・ハンは、]「私はあなた様にお仕えいたします。行って、この世の統治に[つくことは]困難に我が身を置くこととなります」[と言った]。[しかし、] シャイフが、「もしそなたが混乱に陥ったとしても、そしてもしそなたが困難に陥ったとしても、至高なる神の御定めから逃れる術はない」と仰ると、件のハンは仕方なく同意した。数日間、装備を整え、出発した。シャイフ様は、プハラからカラ・キョルまで見送りに来た。ハンはシャイフの手綱[を持って]歩いて来た。カラ・キョルからシャイフは別れの挨拶をして、戻った。ハンは草原(42a)地方に向かった。

ハージー・タルハン地方に、ハージー・ニヤーズ⁴⁶という富裕で知られた人物がいた。彼が言うには、「ハン陛下はカラ・キョルから八人を伴って出発し、草原地方に進軍なされた。この八人のそれぞれは、千の天幕の祖先である」と。ハン一彼に神の慈悲あれーカラ・キョルを出発してウルゲンチに来て、ウルゲンチからサライチュクに行った。人々が語るには、[ベルケ・ハンが] サライチュクに向かったとき、五百人が集まった。サライチュクを通過し、イディル河の岸辺に到着するまでに、千五百人が集まった。イディル河の岸辺に到着したとき、フレグ・ハンが大軍とともにクルズム海⁴⁷に沿って来ているという知らせを受けた。この[ベルケ・ハンの

⁴⁵ ナジウムッディーン・クブラーはクブラヴィー教団の名祖である中央アジアの高名なスーフィーであり、モンゴルのホラズム侵攻の際に殉教したとされる。サイフッディーン・パーハルズィーは彼の弟子。ベルケがサイフッディーン・パーハルズィーに師事したことについては、『諸情報の要諦』も伝えている(‘Abd ūl-Gaffār, ‘Umdet ūl-Aḥbār, f. 259b; I. Vásáry, “History and Legend” in Berke Khan’s Conversion to Islam,” *Aspects of Altaic Civilization III: Proceedings of the Thirtieth Meeting of the Permanent International Altaic Conference Indiana University, Bloomington, Indiana June 19-25, 1987*, ed. by D. Sinor, Bloomington, 1990, p. 240, 246)。ベルケの改宗にサイフッディーン・パーハルズィーが関与したことをめぐる議論については、矢島洋一「モンゴルのイスラーム改宗とKubrawiyya」『西南アジア研究』53, 2000, pp. 62-65参照。

⁴⁶ 『チンギズ・ナーマ』の著者ウテミシュ・ハージーの情報源の一人であったハージー・ニヤーズは、『諸情報の要諦』によれば、「著作家(muwarriḥ)」であったという(‘Abd ūl-Gaffār, ‘Umdet ūl-Aḥbār, f. 259b)。

⁴⁷ 一般に「クルズム海」といえば紅海を指すが、文脈から判断して、ここではアブーセイイトワが註記するようにカスピ海を意味している。カスピ海は「ハザルの海」と呼ば

もとに] 集められた兵士たちは怖気づき、皆が一致して言うには、「フレグ・ハンは偉大な帝王である。彼には[大]軍がある。われわれは少数である。そのため、われわれが出陣して戦うのはよろしくない」と。人々が言うには、「当時、ハンの手もとには覆いのない盾が一つあった」と。ある者たちが言うには、「覆いのない兜が一つあった。また、羊の小骨も用意されていた」と。ハンがこれらの者たちに答えて言うには、「私は、自身の判断や考えで出発したのではなかった。おまえたちは私を信用していない。いま、この小骨を盾や兜の丸い部分に私自身の手で置いたとしても、それは立たないだろう。いま、おまえたちと一つの約束をしよう。私はこの小骨をこの盾や兜の丸い部分の上に叩きつけよう。もし、これらの丸い部分の上に小骨が立つならば、私が敵を打ち負かすと知れ。至高なる神が(42b) 私に[勝利を]与えてくださるのだ。もし小骨が立たなければ、おまえたちが言ったことに私は背かない」と。この一団がまた言うには、「もし小骨が立てば、われわれは命ある限りあなた様に従いましょう」と。ハン—彼に神の慈悲あれ—が小骨を手に取り、至高なる神を想いながら叩きつけると、丸い部分の上に小骨はまっすぐに立った。この状況を見て、心から疑いを取り除き、全員が従順になり、イディル河を渡り、クルズム海岸沿いに行き、フレグ・ハンの軍隊に向かって進軍した。

その途上、入江がクルズム海から枝状、割れ目状の流れとなって出ている。道はそれらの流れの先端を横切って通っている。[そこには] 高い砂丘がある。私めはその場所を見たことがある。[そこは] クル・マチャク⁴⁸と呼ばれている。そこから先には、海から枝状の流れは出ていない。そこに一つの大きな丘がある。ベルケ・ハンの前衛はその丘に登った。シルワーンの方から巨大な砂塵が現れた。ハンに、「敵の砂塵が現れました。[砂塵には] まったく終わりも果てもありません」という知らせがもたらされた。これらのベグたちは再び怖気づき始めた。ハンが語るには、「私とその丘に登ろう。おまえたちはここから見ているがよい。そして、至高なる神の力を見よ。もし敵が来て私を捕らえたならば、ここから直ちに逃げるがよい」と。

れることが多いが、アラビア語地理書などにおいてはしばしば誤って「クルズム海」とも呼ばれた (G. Le Strange, *The Land of the Eastern Caliphate: Mesopotamia, Persia, and Central Asia from the Moslem conquest to the time of Timur*, Cambridge, 1905, p. 458; M. Dunlop, "BAHR al-KHAZAR," *Encyclopaedia of Islam, new edition*, 12 vols., Leiden, 1954-2002)。

⁴⁸ 「クル・マチャク」とは「乾いた入江」の意味。

これらの者たちは同意した。ハンは丘の頂に登った。まもなく、向こうから軍隊が現れた。[敵は]群れをなし、戦闘隊形になってやって来た。接近すると、対峙して翼を展開し始めた。大きく翼を広げていた。軍隊の最前列と最後尾が到達したが、軍隊の端を見ることができない[ほどの大軍であった]。そのとき、ハン陛下は三度鞭を振るい、敵に向かって馬を走らせた。まだ、丘から下に降りないうちに、至高なる神(43a)の力によって[敵]軍は混乱し、敗走した。ハン陛下はこの状況を見て、ハンに続いて馬を走らせた。数日間追跡し、殺す者を殺し、殺さない者を捕虜にして、帰還した。[敵の]馬と装備をすべて奪った。その捕らわれた者たちに、「おまえたちはあの丘の上にいる[たった]一人の人物からどうして逃げたのか」と尋ねた。これらの者たちが言うには、「丘の上に登っていたその人物の両側には、二つの大軍が立っていた。われわれがどれほど眺めても、その二つの軍隊の端も見ることができなかった。われわれが装備して翼を展開したのは、そのためであった。その丘の上の人物がわれわれに向かって馬を走らせると、その二つの大軍も馬を走らせた。われわれには、天と地がわれわれの上に崩れ落ちてきたかのように思われた。そのため、とどまることができず、われわれは逃げた」と。ハン陛下[=バルケ・ハン]のこの奇跡は、人々のあいだで有名である。

ある者たちが言うには、「フレグ・ハンの[息子]⁴⁹がその軍隊の中にいた。彼はこの軍隊が打ち破られたときに死んだ。誰も彼が死んだことに気づかなかった」と。しかし、ドゥースト・スルターン殿下⁵⁰の史書においては、「この軍隊が打ち破られたとき、彼[=フレグ・ハン]は悲しみから病となり、二ヶ月後に亡くなった」と語られている⁵¹。神はよく知り給う。

⁴⁹ ユーヂンは原文においてフレグ・ハンに所有格の接尾辞(ning)が付されていることから、そのあとに「自身(özi)」か「息子(oğlı)」を補足して「フレグ・ハン[自身]」もしくは「フレグ・ハンの[息子]」とすべきであると註記し、ロシア語訳では「フレグ・ハン[自身]」を採用している。しかし、『諸情報の要諦』によれば、ここは「フレグ・ハンの[息子]」とすべきである(訳註51参照)。

⁵⁰ 『チンギズ・ナーマ』の著者ウテミシュ・ハーギーにその執筆を命じたイシュ・スルターンの兄。ヒヴァ・ハン国の君主としてはじめてヒヴァで即位したが、のちに従兄弟のハーギー・ムハンマドによって1558年もしくは967(1559/60)年に殺害された(*Histoire des Mogols et des Tatares*, pp. 234-236; Münis and Āghāhī, *Firdaws al-Iqbāl*, pp. 118-119)。

⁵¹ 『諸情報の要諦』は「ドゥースト・スルターン殿下の高名な史書」に依拠しながら、この軍隊を率いていたのはフレグの息子であり、フレグは息子の軍隊が壊滅したことが原因となって病になったとしている(‘Abd ūl-Gaffār, ‘*Umdet ūl-Aḥbār*, f. 260b)。ラン

草原地方がベルケ・ハンのものとなったとき、非常に多くの異教徒たちをムスリムにした。ある者たちが言うには、[彼は]十三年[統治した]、ある者たちが言うには、十六年統治したという。それから、神の慈悲のもとに召された。ハン陛下 [=ベルケ・ハン] から子孫は残らなかった。先に述べたように、サイン・ハンには二人の息子がいた。一人はサル・タク、一人はトガンだった。サル・タクは父より(43b)先に八歳で亡くなった。トガンからは二人の息子が残った。一人の名はトデ・マンガ、もう一人の名はムング・テムル⁵²[であった]。[ベルケ・ハンが亡くなったとき、]このムング・テムルは子供であった。トデ・マンガは成年に達していたが、愚かで、極めて思慮分別のない人物であった。サイン・ハンの子孫からこれ以外の人物は見つからなかったため、ベグたちは一致して件の人物 [=トデ・マンガ] をハンとした。彼については、不思議な話、そして奇妙な物語が多い。さて、一つ二つの物語をこの梗概において回想しよう。

人々が語るころでは、あるとき、トゥブ・ハン⁵³から使者たちが到着した。ベグたちが一致して件のハン [=トデ・マンガ] に言うには、「遠方よりの使者が来ております。彼が見ているところで取り乱すようなことをしたり、考えたりしてはなりません。ハン健康を尋ね、民の安寧をお尋ねください。それ以外のことを尋ねてはなりません」と。さらに、「あなた自身に意思はないのです。あなたの足に紐を結びましょう。そして、玉座の下にある者が入り、その紐を握って座させます。わ

ードウッディーンの『集史』はフレグがベルケ軍との戦いの約二年後に病死したと伝えており (Rašid al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīḥ*, pp. 1044-1051)、年月は違うがフレグが病死したという点で『チンギズ・ナーマ』と一致している。

⁵² トデ・マンガとムング・テムル (『チンギズ・ナーマ』においては「ムンク・テムル (Mung Temir)」という表記も見られる) は、ラシードウッディーンの『集史』では「トデ・モンケ (Tūdā Mūngka)」、*「モンケ・テムル (Mūngka Timūr)」*と表記される。『チンギズ・ナーマ』ではトデ・モンケがモンケ・テムルより年長で、先にハンに即位したことになっている。しかし、『集史』やヌワイリーの『学芸の究極の目的』によれば、モンケ・テムルの方が先にハンに即位したことになっている (Rašid al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīḥ*, pp. 740-741; *Сборникъ матеріаровъ, относящихся къ исторіи Золотой Орды В. Тизенгаузена, т. I, извлеченія изъ сочиненій арабскихъ, Санктпетербургъ, 1884, p. 132, 134*)。ただし、ヌワイリーはトデ・モンケがトレ・ブカなる人物にハン位を譲ったとするが (*Сборникъ матеріаровъ, т. I, p. 135*)、ラシードウッディーンはトデ・モンケが狂人であるという理由でモンケ・テムルの息子たちと甥たち (その一人がトレ・ブカ) がトデ・モンケを退位させたという (Rašid al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīḥ*, p. 741)。

⁵³ Tüb Hān. ユーチンは「最高の(?)ハン」と訳している。“tüb”はテュルク語で「根」「基礎」「起源」などを意味しているが、正確にどのように解釈すべきかは不明である。

れわれのこの忠告を忘れて、あなたが取り乱して話し始めたならば、その紐を引かせます。そのときには話すことをおやめください」と言ったところ、彼は同意した。人々が言うには、「彼の長所は、その思慮分別のなさにもかかわらず、何であれベグたちが一致して彼に述べたことをすべて受け入れ、彼らの言葉に背かなかったことである。そのため、[彼は]十八年間草原地方において統治した」と。

エディギュ・ビー⁵⁴—彼に神の慈悲あれ—が言ったことには、「そなたの敵に災いを願うならば、『唯一の神よ、我が敵を無知にしたまえ。そしてまた、知識ある者の言葉にも従わないようにしたまえ』というように祈るがよい」と。(44a) [また、]「もしその者自身が知らずとも、知識ある者の言葉に従うならば、まさにその者は知っているのである。それに違いはない」と言っていた。

さて、翌日 [トデ・マンガは] 使者に接見した。ハンの健康を尋ね、民の安寧を尋ねた。その後、[トデ・マンガは、]「そなたのくにに鼠は多いのか」と言った。「[たくさん] います」と [使者は] 答えた。またさらに、「そなたのくにに雨はたくさん降るのか」と [トデ・マンガは] 尋ねた。「ええ、たくさん降ります」と [使者は] 答えた。その紐を握って [玉座の下に] 座っていた者は、[トデ・マンガが] 脈絡のないことを話し始めたのに気づいた。彼は紐を引いた。ハンは使者に、「そなたにさらに尋ねたいところだが、私の足が [紐で] 引かれている」と言った。ベグたちはただちに使者を引き下がらせて、馬と衣服を与えて、帰らせた。その使者は戻り、自身の帝王の御前に参上した。そのハンが、「我が兄弟のハンをどのようにして見たか、どのような人物であるのか」と尋ねると、使者は、「一度だけ謁見しました。よく分かりませんでした。その謁見において、あなた様の健康を尋ねられました。また、民の安寧を尋ねられました。さらに、『そなたのくにに鼠はたくさんいるのか』と尋ねられたので、『はい、たくさんいます』と私は答えました。そして、『そなたのくにでは雨がたくさん降るのか』と尋ねられましたので、『はい、[たくさん] 降ります』と私は答えました。さらに、『そなたにさらに尋ねたいところだが、私の足が [紐で] 引かれている』と仰いました。それから、ベグたちはただちに立ち上がって引き下がりました。私もまた下がりました。私がハンにお会いしたのは、この

⁵⁴ 「ビー (bi)」は「ベグ (beg)」が後代に変化したものと考えられている。『チンギズ・ナーマ』においては、エディギュと後述のヒタイ・ババ・アリーに対して「ビー」が用いられている。

ような次第でした」と。このハンと彼のベグたちはこの言葉の意味をよく考え、言うには、『雨がたくさん降るのか』と言ったことはよい。なぜならば、すべてのものに雨からの恩恵があるからである。そしてまた、鼠のことを尋ねたことも悪くはない。鼠からすべてのものに害が及ぶからである。しかし、(44b) いくら考えても、彼が『[私の足が] 紐で引かれている』と言ったことは理解できなかった」と。

もう一つの話はこうである。[トデ・マングは] 自らイディル河を渡り、遠征に出かけた。遠征から戻ると、彼に錯乱が生じた。彼はいつも、錯乱が生じると、誰の言葉にも注意を向けなくなった。ある場所に来て、彼は下馬した。十五日間、その場所から出発しなかった。軍隊の糧食が尽きた。[軍隊の] 状況は困窮を極めた。ベグたちが協議して、言うには、「この方はいま自分の妻のことを忘れている。髭のない顔の若者を女装させて、遠くから見せよう。おそらくは、自分の妻を思い出し、出発するだろう」と。そして、ある若者を女装させて見せると、彼は見るなり妻のことを思い出した。思い出して、言うには、「私の住まいにもそのような人がいたぞ」と。ただちに騎乗して、急いで出かけた。ある者たちは、この物語をいくぶん歪めて伝えている。筆者はそれらをこの記録に書き記すことを適切とは思わなかった。

[トデ・マングは] 馬を駆りたて、急いで行くと、二日後にイディル河の岸辺に到着した。彼の側には、二人の下僕がいた。河の近くには、バスグンチャク塩湖⁵⁵のところの高い丘のような山がある。イディル河をバスグンチャクの側からヤイク河 [=ウラル河] の方へ渡ろうとすると、その山は一日行程近くもその者の側から離れずについてくるほど [の大きさ] である。ハンはいディル河を渡って急いだが、山が少しも離れないのに気づいた。一、二度、怒って見て、言うには、「おまえは行け。私は行かない」と。ただちに下馬し、横になった。彼の側にいた下僕たちもまた仕方なく下馬した。その日は、(45a) 夜になるまでそこで横になった。夜に人を見分けられなくなると、その二人の下僕のうちの一人は分別のある人物で、機転を利かして、言うには、「もう遅くなりました。あれ [=山] も休んでいます。あれが眠っているうちに、われわれは騎乗して駆けましょ。あれはわれわれには気づか

⁵⁵ 『チンギズ・ナーマ』には「バスグンチャク (Busgunčaq)」という表記も見られるが、「バスグンチャク (Basgunčaq)」で統一した。ヴォルガ河に平行して流れる支流アフトバ河流域のアフトゥピンスクから東に60～70kmに位置するバスグンチャク湖に比定されよう。

ずに取り残されるでしょう」と言うのと、この言葉はハンに大いに受け入れられた。そして、[ハンは]「おまえはよくぞ言った。馬に鞍を置け」と言った。彼 [=下僕] は鞍を置いた。いまや [山が] 眠ったというときに騎乗した。そして朝になるまで駆けた。朝になると、[山は] どこにも見えず、ハンは非常に喜んだ。人々が語るところでは、ハン是天幕に戻ったのち、多くの下賜を行ったという。このように、[トデ・マングは] 奇妙で気がふれた人物であった。

ある者たちが言うには、彼は十八年間ハンであった。またある者たちが言うには、彼は八年間統治した。その後、彼の弟のムング・テムルが成人に達すると、彼 [=トデ・マング] 自身は公明正大に振る舞い、言うには、「長らく、[ハンになるべき] 人物がいなかったためにおまえたちは私をハンとしてきた。おまえたちも苦しんだし、私も苦しんだ。いまや我が弟一神に讃えあれ一は立派に成長した。私の心はおまえたちに満足している。我が弟をハンとせよ」と言って、自らはハン位を退いた。彼のベグたちもこの言葉を喜んだ。彼の弟のムング・テムルをハンに推戴した。

ムング・テムル・ハンの物語の始まり

非常に公正で、思慮深く、聡明な帝王であった。ムング・テムルの時代、民は大いに安寧であった。彼の無類の素晴らしさから、キュリュグ・ハン⁵⁶の名が与えられた。それで、ムング・テムル・キュリュグ・ハンとして知られている。人々が語るには、「彼は十三年間統治した。その後亡くなった」と。彼から二人の息子が残った。一人の名はトクタガ、もう一人の名はトゥグルルである⁵⁷。父の死後、トクタガがハンとなった。

トクタガ・ハンの物語の始まり

⁵⁶ 「キュリュグ」とはテュルク語で「すばらしい」「名高い」という意味 (Doerfer, "külük," *Türkische und Mongolische Elemente*, Bd. III)。

⁵⁷ トクタガとトゥグルルは、ラシードウッディーンの『集史』では「トクタ (Tūqtāy)」、「トゥグリルチャ (Tuğrilča)」と表記され、モンケ・テムルの十人の息子のうち、トクタガが第五子、トゥグリルチャが末子である (Rašid al-Dīn, *Jāmi' al-Tawārīḥ*, pp. 721-722)。

このトクタガ・ハンはきわめて偉大な帝王であった。サイン・ハンの子孫のなかで、彼と比肩しうる帝王はほとんどいなかった。人々が語るには、[トクタガ・ハンの] 食卓は(45b) 豪勢であった。すなわち、馬、牛、羊、その他の動物のほか、毎日九十頭の猪が彼の食卓に供された。彼にはイル・ピスヤール⁵⁸という名の息子がいた。「私の死後に[誰かが] 息子 [=イル・ピスヤール] とハン位を争うことになる」と言って、自身の近親や一族のすべてを殺した。彼の弟のトゥグルルも殺したときえ言われる。しかし、ある者たちが言うには、トゥグルル自身は病で死んだという。ケリン・バヤルン⁵⁹という名のトゥグルルの妻がいた。美しい女性であった。トゥグルルが死んだとき、[彼女には] 一人の息子 [=ウズ・ベグ] がいた。[ケリン・バヤルンは、] トクタガ・ハンが息子 [=イル・ピスヤール] のために近親を殺していることを知った。[彼女は自身の息子を] 数名とともに逃がし、チュルケスの山地へ行かせた。有名なウズ・ベグ・ハン—彼に神の慈悲あれ—は、そのオグランのことである。しばらくして、ケリン・バヤルンを[トクタガ・] ハンが娶った。[トクタガ・ハンは] 彼女を非常に愛した。この[近親の] 死から数年が過ぎた。[トクタガ・] ハンの生涯は九十歳であったと言われている。十歳でハンとなり、八十年間統治した。ある者たちが言うには、二十歳でハンとなり、七十年間統治したという。

死期が近づくと、「自分の死後にハンになるように」と言って庇護していた息子 [=イル・ピスヤール] が、結局ハン自身より先に死んだ。そこで、[トクタガ・ハンが思うには、] 「私には一人の息子がいた。『私の死後に[誰かが] 彼 [=イル・ピスヤール] とハン位を争うことになる』と考えて、自分の一族をすべて殺した。もはや、自分は年老いて人生の終わりにさしかかったが、この息子も自分よりも先に

⁵⁸ イル・ピスヤールは、『ムイッズルアンサーブ』ではトクタの三人の息子の一人で「イル・バサル (Īl Basār)」と表記される (Anonym., *Mu'izz al-Ansāb*, 22a)。ユーチンは「イル・バサル」と読んでいるが、ここでは写本の表記を尊重した。『諸情報の要諦』によれば、イル・バサルの母は「ヒタイのハンの娘」であるという ('Abd ūl-Ġaffār, 'Umdet ūl-Aḥbār, f. 261b; D. DeWeese, *Islamization and Native Religion in the Golden Horde: Baba Tükles and Conversion to Islam in Historical and Epic Tradition*, Pennsylvania, 1994, p. 151)。

⁵⁹ 「ケリン」とは「花嫁」の意味であり、『諸情報の要諦』によれば、ケリン・バヤルンはチャガタイ家出身であるという ('Abd ūl-Ġaffār, 'Umdet ūl-Aḥbār, f. 261b; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 151)。

死んでしまった。それがどれほどの災いと後悔であるかは明白である⁶⁰」と。ついには〔トクタガ・ハンは〕その悲しみのため病となり、病は長引いた。ある日、〔トクタガ・ハンは〕床に臥し、寝返りを打ち、呻いていた。ケリン・バヤルンは、なぜ〔トクタガ・ハンが〕衰弱しているのかを知って、言うには、「あなたはいつも苦痛に苛まれていました。今度はなぜ弱りきっているのですか」と。(46a) ハンが言うには、「どうして弱りきらないでいられようか。『[誰かが] 唯一の息子イル・ピスヤールとハン位を争うだろう』と思って、私は一族すべてを殺した。私の息子にも、同じようなことが起こった。私自身にも死が近づいた。私の牧地が他人のものとなる。私が弱りきっているのは、そのためである」と言うと、ケリン・バヤルンが言うには、「あなたの御命令に背いて、私はある事をしました。もし、私の罪を許してくれるならば、話しましょう」と。ハンはすぐに起き上がって、座って、「何をしたのだ」と尋ねた。〔ケリン・バヤルンが〕言うには、「あなたの弟〔=トゥグルル〕が亡くなったとき、あなたの弟には一人の息子がいました。『[トクタガ・ハンが] おまえ〔=トゥグルルの息子〕を殺すでしょう⁶¹』と言って、逃がし、チェルケス地方に向かわせました。いまも毎年、彼の無事の知らせが届いています。今年で十四歳になります。もし、あなたがお命じになり、人を向かわせるならば、彼は来るでしょう」と言うと、ハンは喜びのあまり、まるで病ではなくなったかのようになった⁶²。〔トクタガ・ハンは〕万人隊のうちの二千人を〔贈って〕、ケリン・バヤルンを喜ばせた。翌朝、ベグたちを呼んで、キヤト・イサタイとスィジユト・アラタイ⁶³に四万人を与えて、ウズ・ベグ・ハン—彼に神の慈悲あれ—を連れて来るため

⁶⁰ この会話文は“Basa ma'lüm turur kim”で始まっているため、われわれは原文を尊重して本文のように「さて、・・・は明白である」と解釈した。ユーチンはここを“Бәсі мәлүл түрүр kim”と読み、「・・・を彼は非常に嘆いた」と訳している。

⁶¹ Sizni öltürgäy. ユーチンは誤って文頭の“Sizni”を“Siz”、すなわち主語ととり、「あなた〔=トクタガ・ハン〕が〔トゥグルルの息子を〕殺すでしょう」と訳している。

⁶² ユーチンの訳では、「まるで病ではなくなったかのようになった」の部分が欠落している。

⁶³ トクタ、ウズ・ベグに仕えたスィジユト部族出身のベグまたはアミール。イブン・バットゥータの旅行記には、アミール・イーサー（=キヤト・イサタイ）の娘でウズ・ベグの第四ハトゥンとなったオールドチャの妹がアミール・アリーb.アルザンの妻であったと記される（『大旅行記4』, pp. 43-44）。アブーセイトワは訳註においてこのアミール・アリーをアラタイに比定している。この比定が正しければ、アラタイはイサタイの女婿となり、ウルスのこの二人の有力者は互いに強固な姻戚関係で結ばれていたことになる。

に遣わした。これらの者たちが行って「戻って」来るまでに、トクタガ・ハンは亡くなっていた。

バジル・トク・ブガという名のウイグル部族出身の者がいた。彼の氏族・部族は非常に強力な民であった。また、彼はハン [=トクタガ] の師傅であった。悪魔が「トク・ブガを」誘惑し、カラ・キシ⁶⁴であったのに、彼はハンとなった。彼は、ケリン・バヤルン、そしてハンの他の妻たちをも娶った。ある者たちが言うには、バジルはウイグル【部族の出身】であるが、トク・ブガはヌティン【部族の出身】であるという。この話は誤りであろう。なぜなら、二つの部族出身の【二人の人物が】同意して同じ場所でハンになることは困難だからである。(46b) より正確には、彼の名がバジルで、ラカブがトク・ブガであった⁶⁵。つまりは、このバジル・トク・ブガがハンとなり、【トクタガ・】ハンの妻たちを娶り、民のすべてを服従させたのである。

このあいだに、その【チェルケス地方に】行ったベグたちがウズ・ベグ・ハン陛下を連れて【イディル河の】岸辺まで来た。【彼らは、トクタガ・】ハンが亡くなり、バジル・トク・ブガがハンとなって民のすべてを服従させたという知らせを受けた。彼らはこの知らせに非常に動揺し、悲しみ、どうすればいいのかを協議した。キヤ

⁶⁴ *qara kiši*. 「黒い人」という意味のチュルク語で、モンゴル語では「ハラチュ」という。チンギス家の出身でない者を指す術語である。カラチまたはハラチュの語義・用法の変化については、В.В. Вельяминов-Зернов, *Исследование о Касимовских царях и царевичах*, II, Труды Восточного отделения Императорского Русского археологического общества, 10, СПб, 1864, pp. 411-437; ウラチミルツォフ著、外務省調査部訳『蒙古社会制度史』原書房, 1980, pp. 160-161, 274-275参照。15～16世紀の中央アジアの社会状況を詳細に伝える『パーブル・ナーマ』では、「キシ・カラ」「カラチュ・キシ」の形で広く「配下の者」「臣下の者」の意味で使われており（間野英二『パーブル・ナーマの研究 III 訳注』松香堂, 1998, pp. 51, 288, etc）、そこにチンギス家出身者と明確に区別する意図はまったく見られない。この事実はパーブルの属したティムール帝国が非チンギス家の政権であったことと無関係ではなからう。

⁶⁵ バジル・トク・ブガについて、ユーチンはいくつかの仮説を提示している。まず、カーディル・アリー『集史』において「バチキル (Bačqir)・トク・ブガ」と記載されていること (Qādir 'Alī Beg, *Jāmi' al-Tawāriḡ*, f. 60a)、そして『チンギズ・ナーマ』においては人物名の前に部族名が付されていることから、バジル・トク・ブガは「バシキル・トク・ブガ」と読むべきであり、すなわちバシキル部のトク・ブガであるとした。また、ウズ・ベグが即位後にトクタの重用したウイグル（すなわち仏僧）や呪い師を殺害したというマムルーク朝史料の『ビルザーリー史』の記述 (*Сборникъ матеріаловъ*, т. I, р. 173) に拠りながら、文中に現れる「ウイグル」とは部族ではなく仏教徒を意味し、「ヌティン」とは「仏僧 (toyin)」のことであるとし、トク・ブガを仏教に関連する有力者であったとしている (Юдин, “Переход власти к племенным биям,” pp. 68-69)。

ト・イサタイが言うには、「以前、その [=トク・ブガの] 氏族・部族は非常に強力な民だった。いまは、すべての人々が彼に臣従している。いまここから立ち上がって敵意をあらわにすれば、事はうまくいかないだろう。策略を用いて、彼に近づくように努めよう。その後、心中に望むことを行おう」と言うと、全員がこの言葉に納得して、[トク・ブガに] 使者を派遣した。彼らが [トク・ブガに伝えるために] 言うには、「私の主人であるハン [=トクタガ・ハン] は、命じて [われわれを] 遣わしました。われわれはその方 [=ウズ・ベグ・ハン] を連れてきております。この方は、父祖からのあなたの主 [=チンギス家] の子孫です。[しかし、] あなたはそのように [チンギス家を主人と] するべきではありません。いまや、[ハン位は] あなた自身にふさわしく、あなたがハンになっておられます。すべての人々があなたに臣従しております。われわれも同様にあなたに臣従いたします。われわれが [あなたに] 背くことはありません。背こうにも、われわれの力は及びません。この方は年端もいかぬオグランであります。[この方を] 連れてきて、あなたの手に委ねましょう。あなたの心が何を望もうと、それを行ってください」と。「このためにわれわれが天幕や民から離れることはない」と言って、[トク・ブガに使者を] 派遣した。

これらの者たちの使者が到着すると、[トク・ブガは] 非常に喜び、[使者を] 出迎え、歓待した。そしてすぐに人を伴わせて送り (47a) 返した。[トク・ブガが] 言うには、『『あのお方が来るまでに他の者が頭をもたげハン位を望むだろう』と言って、この [ハンになる] ことを私が行ったのである。[しかし、] 私の主人の子孫がいるのに私がハンになることが許されるであろうか。帝王を [ここに] 来させるべきである。ハン位であれ、民であれ、そのすべてはあのお方のものである』と言って、[使者を] 送り返した。この言葉がこれらの者たちに伝わると、ただちに彼らは出立した。これらの者たちが到着しないうちに、バジル・トク・ブガはベグたちと協議し、一致したことには、「彼らが [トクタガの] 未亡人の天幕の入口に入って涙を流し、二度「おーい、おーい」と叫んで涙を流したあと、襲いかかろう」と。

さて、カルマク⁶⁶の慣習は、帝王たちや有力者たちが亡くなったとき、[人々が]

⁶⁶ ジュンガル盆地を中心に主にモンゴル高原西部で活動したモンゴル系遊牧部族連合オイラトのことを呼んだテュルク語。バルトリドによれば、この術語はティムール帝国期に書かれたシャラフッディーン・アリー・ヤズディーの史書の序章に初めて現れるという (В.В. Бартольд, “Калмыки,” *Сочинения*, т. V, Москва, 1968, pp. 538)。

集団になって諸氏族とともにやって来て、三度「おーい、おーい」と嘆いて、涙を流すというものである。ウルグ・タグにおいては、彼らのあいだにその慣習がいまもある。

ある日、ウズ・ベグ・ハンはベグたちとともに夜が明けないうちに出かけた。一人のまさに叫んでいる者が彼らの前からやって来て、通り過ぎようとしていた。そしてその者が言うには、『おーい』と叫べ、『おー』と叫べ』と。一度言うと、去っていった。[彼らはその者の言葉を] 気にとめなかった。二度目に言ったとき、キヤト・イサタイが、「おまえは何を言ったのだ」と言った。その人物は、「私の名はサングスン。察せよ、その続きを」⁶⁷と云った。キヤト・イサタイは、「何か話があるのか」と云った。この者を追いかけて、「私にその話を言え。何の話なのだ」と云った。その者が言うには、「バジル・トク・ブガはベグたちと同意して協議した。おまえたちが現れ、天幕の入口に入り、二度『おーい、おーい』と叫んで涙を流したあと、彼らは襲いかかり、おまえたちを殺すだろう。もし、おまえたちが一度だけ『おーい』と叫ぶや、彼 [=トク・ブガ] に向かって突進して襲いかからなければ、おまえたちはみな殺されるだろう。私の話の(47b)内容は、[すべて] おまえに話した」と。イサタイがこの知らせをベグたちに伝えると、彼らは[一度だけ]「おーい」と叫ぶや[トク・ブガに] 襲いかかることで一致した。翌朝、彼らは出立して、天幕のある場所に到着した。バジル・トク・ブガは天幕のなかの玉座に座っていた。ベグたちとノケルたちは入口に立って控えていた。これらの者たちが来て、入口で下馬した。そして一度「おーい、おーい」と叫んで涙を流したあと、「おー」と叫ぶやバジル・トク・ブガに向かって襲いかかった。[トク・ブガが] 立ち上がるまでに

⁶⁷ 「私の名はサングスン。察せよ、その秘密を (Mening atim Sangg'isun. Anglagay sen songg'usun)」の文は一種の掛詞になっている。すなわち、この人物が名乗っている「サングスン (Sangg'isun)」という名は、「その続きを (songg'usun)」とほぼ同音になっている。ユーチンはこの人物を、アブルガーズィーの『テュルクメン系譜』に現れる、ジャーニー・ベグに仕えたウイグル部族の「サンクル・スン (Sanqlī Sīn)」なる人物に比定している (Родословная Туркмен: Сочинение Абу-л-Гази хана хивинского, А.Н. Кононов, Москва-Ленинград, pp. 72-73; Юдин, “Переход власти к племенным биям,” pp. 70-71)。一方、デウィースは、ラシードウッディーンの『集史』に現れる、トクタガとの戦いでノガイを裏切った「サンクイ」なる人物に比定している (Rašid al-Din, *Jāmi' al-Tawāriḥ*, p. 745; DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 153)。

⁶⁸イサタイが駆け寄り、彼の首をはねた。彼の首は一步先のところに転がった。アラタイが短刀⁶⁹で[首を]突き刺し、高く持ち上げるや叫ぶには、「ここにおまえたちの主人の首がある。いまいる場所から動くな」と言うと、みな呆然として立ち尽くした。それからその首を部隊ごとにまわし、「カラ・キシがハンになることはこれをもってなくなるように」と叫んだ。バジル・トク・ブガを殺すと、ウズ・ベグ・ハン陛下をハンに推戴し、玉座に座らせた。

ウズ・ベグ・ハンの物語の始まり

ハン陛下が玉座に座し、民が平穏を見出したのち、[ウズ・ベグ・ハンは]ヨチ・ハンの[息子たちのうち、ウズ・ベグ・ハンの祖先であるサイン・ハンの母とは]別の母から生まれた十七人の息子のオグランたちを呼んで来させて言うには、「おまえたちは祖先 [=ヨチ・ハン] の子孫ではなかったのか。おまえたちはカラ・キシの奴隷やノケルとなりあの者に服従するくらいなら、おまえたちの一人でも[カラ・キシと]ハン位を争うべきではなかったか。おまえたちがカラ・キシの奴隷やノケルであることを認めたのならば、私もおまえたちをカラ・キシにコシュンとして与えよう」と言って、激怒し、ノケルとセウデル⁷⁰と民のすべてをキヤト・イサタイに下賜した。

さて、筆者は先にも以下のように言及していた。シバン・ハンは剣を振るい、敵どもや諸地方を征服したので(48a)、彼のオグランたちや子孫たちをすべての人々が尊敬していた。[ウズ・ベグ・]ハンはこのオグランたちに激怒して、[彼らを]イサタイにコシュンとして与えたが、イサタイもシバン・ハンのオグランたちのために、彼らの祖先 [=シバン] への敬意を表して、ともに配下の民であるボイレク[部族]とカルルク[部族]を取り、これらの者たち [=シバンのオグランたち]をそのままにしておいた。彼らはサイン・ハンが定めた牧地にいたという。そして

⁶⁸ 解釈が難しい文章である。ユーチンは“Такдын раст кыргунча”と読み、「[玉座から]立ち上がるまでに」と訳しているが、ユーチンの解釈には疑問が残る。“tāq”が“taht”の誤写である可能性はないだろうか。われわれは原文を尊重して“tā qaddin rāst qilgunča”と読み、本文のように解釈しておいた。

⁶⁹ böydä. この語釈については、DeWeese, *Islamization and Native Religion*, p. 154参照。

⁷⁰ sewdär. テュルク語で「従者」の意味。『チンギズ・ナーマ』では「ノケル」と同格で並列されており、同様の意味で用いられていると思われる。

アラタイにはミング〔部族〕⁷¹の配下の民を分け与えた。[このことは]よく知られている。ウズベグのあいだで、「[ウズ・ベグ・ハンは]イサタイに編成した軍〔の一部〕を分け与え⁷²、アラタイにはミング〔部〕を分け与えた」と言われるが、その意味は以上述べたとおりである。

さて、件のハン陛下 [=ウズ・ベグ・ハン] 一彼に神の慈悲あれ一はきわめて偉大な帝王であった。数年間統治したあと、至高なる神の恩寵に浴し、ムスリムになった。

ウズ・ベグ・ハンのイスラーム〔改宗〕の理由についての物語

[ウズ・ベグ・ハンの] イスラーム〔改宗〕の理由は以下のものであった。当時の聖者たちのうちの四人に、至高なる神から、「おまえたちは行き、ウズ・ベグをイスラームのもとに呼び寄せよ」という啓示がくだった。そして至高なる神のご命令により、彼らはウズ・ベグ・ハンの〔天幕の〕入口に来て、天幕の外に座り、〔天幕の方を〕向いた⁷³。次のような伝承が伝えられている。不信仰の魔術師や占い師たちがハンに次のような奇跡を見せた。ハンが催した集いに壺⁷⁴と〔蜂蜜〕を持って来させて置いた。小瓶と水差し⁷⁵を準備した。蜂蜜の上澄みが〔ひとりで〕水差しを流れ、小瓶に落ちた。そして小瓶自体をその人 [=ウズ・ベグ・ハン] に渡した。すべての魔術師や占い師をハンが彼自身のシャイフとみなし、側に座らせ、大いに尊敬と敬意を払った。

さて、ある日、これらの者たちが来て、〔天幕の方を〕向いて座った。いつものようにハンは集いを準備した。〔ハンは〕シャイフたちとともに来て、みな座り、い

⁷¹ Ming. ここでは「ミング」を部族と解釈したが、「千人隊」を意味している可能性もある。

⁷² örüm çeşip. ユーチンは“өрүм чериб”と読み、「イサタイに〔コシュンを〕分け与え」と訳している。

⁷³ mutawajjih boldilar. ユーチンは「祈り始めた」と訳している。

⁷⁴ sapčaq. 取っ手付きの大きな容器を意味し、本文後段では“paymāna”の語で現れている (DeWeese, *Islamization and Native Religion*, pp. 551-554)。

⁷⁵ jorgatī wa düstgānlarnī. “jorgatī”は飲み物を注ぐための容器、“düstgān”は注ぎ口のある容器を意味しており、デウィースはとくに前者を「馬乳酒用の容器」と訳している (DeWeese, *Islamization and Native Religion*, pp. 555-557)。ユーチンは“jorgatī”を「管」と訳しているが、これは誤りであろう。

つものように壺と蜂蜜を持って来させた。水差しと小瓶を持って来させて置いた。
[しかし、]しばらくたっても、蜂蜜はいつものように水差しを流れず、小瓶に落ちなかった。ハンがシャイフたちに言うには、「どうしてこの蜂蜜は止まって（48b）いるのか」と。シャイフたちが言うには、「おそらく、この近くにムハンマドの民が来ています。これはその印です」と。ハンは、「天幕をまわって探せ。もしムハンマドの民がいるならば、連れて来るように」と命じた。従者たちが天幕をまわって探すと、天幕の外に四人の異なる姿をした者たちが頭を低く垂れて座っていたのを見た。従者たちは、「あなた方はどなたですか」と尋ねた。これらの者たちは、「われわれをハンの前に連れて行きなさい」と答えた。[従者たちはこれらの者たちをハンの前に連れて]来た。ハンの目はこれらの者たちに止まった。教導の光で至高なる神がハンの心を照らしたので、[ハン]はこれらの者たちを見ると、好意と愛着が心に生じた。ハンは、「おまえたちは誰か。どんな用件で来ているのか。どんな用件で行くのか」と尋ねた。これらの者たちが答えるには、「われわれはムハンマドの民です。至高なる神の命令によりあなたをムスリムにするために来しました」。このあいだに、ハンのシャイフたちが叫んで言うには、「これらは悪い者たちです。これらの者たちと話してはなりません。殺すべきです」と。ハンが言うには、「なぜ殺すのだ。私は帝王である。おまえたちの誰も恐れはしない。おまえたちのどちらかの信仰が正しければ、それに頼ることにしよう。もしこれらの者たちの信仰が正しくなければ、おまえたちの今日の仕事はどうしてうまくいかず、[蜂蜜は]止まったままなのか。論議せよ。おまえたちのどちらかの信仰が正しければ、私はそれに従おう」と。この二つの集団は互いに論争を始め、大いに騒ぎたて、言い争った。ついには、次のように決まった。すなわち、二つの炉を掘り、それぞれに十台の荷馬車分のタマリスクを燃やして熱する。一つの炉には魔術師の一人が入り、もう一つの炉にはこれらの者たち [=ムスリム] の一人が入る。燃えずに出て来る者の信仰が正しい、ということに決めた。翌朝、二つの大きな炉を掘った。タマリスクの薪を集めて火をつけた。一つを魔術師たちに割り当て、もう一つをムスリムたちに割り当てた。この聖者たちは、「われわれの誰が [炉に] 入るのか」と互いに遠慮しあった。

これらの者たちの一人は、パバ・テュクレス⁷⁶と呼ばれた。(49a) [彼は] 体全

⁷⁶ ウズ・ベグがイスラームに改宗するうえで大きな役割を果たしたとされる伝説的な聖

体が毛で覆われていた。彼が言うには、「私に許しを下され。私が入りましょう。あなた方は私をお守りください」と。これらの聖者たちは彼のために [『クルアーン』の] 開扉章を唱えた⁷⁷。そのババは、「私に鎧を用意してください」と言った。彼らが鎧を用意すると、彼 [=ババ・テュクレス] は裸の体に鎧を着た。そして至高なる神への想いを唱え始め、炉の方に向かった。ババの毛が逆立ち、鎧の隙間からはみ出ていたという。この状況を皆が見ていた。この人物 [=ババ・テュクレス] は歩いて炉に入った。一頭の羊の肉を持って来させて炉に吊るし、[炉の]蓋を閉めた。さて、占い師たちの物語に移ろう。占い師たちはやむなく一人を選び出し、炉に投げ入れた。[その者が炉に] 落ちるや否や、彼の灰は蒼色や碧色⁷⁸となり、炎が炉の蓋から出てきた。この状況を、ハンをはじめとしたすべての者たちが見ると、彼らの心は異教の信仰から転向し、ムスリムの信仰に傾いた。そして、ババの [神への想いを] 唱える声が炉から絶え間なく聞こえていた。羊の肉が焼けた頃に、炉の蓋を開けた。ババは祝福された顔の汗を拭うや、「どうして急いで [蓋を開け] たのだ。もししばらく待ってくれるならば、仕事 [=神への想いを唱えること] をやり終えたのに」と言って、炉から出た。人々は、鎧が炭のように赤くなっているを見た。しかし、至高なる神のお力により、ババの一本の毛も燃えずに [ババ・テュクレスは炉から] 出たのである。この状況を、ハンをはじめとしたすべての者たちが見ると、ただちにシャイフたちの裾にすがって⁷⁹ムスリムになった。イスラームの信仰に神の賞賛あれ。

ところで、バルケ・ハンの時代にウズベグの民はムスリムになっていた。その後、

者。カーディル・アリー『集史』によれば、この聖者は初代正統カリフ、アブー・バクルの子マフムードの子孫で、ジョチ・ウルスの有力者エディギユ（マンギト部族出身）の祖先であるという（Qādir 'Alī Beg, *Jāmi' al-Tawārīḥ*, f. 62b）。ほぼ同様の記述が『諸情報の要諦』にもみられる（ただし、アブー・バクルの子はムハンマドとなっている）（'Abd ūl-Ġaffār, *'Umdet ūl-Aḥbār*, f. 322b）。明らかに、これは、この聖者が由緒正しいイスラームの系譜の流れを汲む者であると創作することでエディギユの権力をイスラーム的な要素で正統化しようとしたものであろう。なお、デウィースは、『チンギズ・ナーマ』やこれら諸史料の情報も含め、この聖者に関して諸史料に残された情報を網羅的に考察しており、詳しくはそちらを参照されたい（DeWeese, *Islamization and Native Religion*, pp. 533-565）。

⁷⁷ Fātiḥa oqudīlar. ユーチンは「祝福した」と訳している。

⁷⁸ küli kökli yāsilli. ユーチンは「虹色」と訳している。

⁷⁹ etāklārini tutup. 「裾にすがる」とは、その人の庇護の下に入ることを意味している（『デデ・コルクトの書』菅原睦・太田かおり訳、東洋文庫 720, 2003, p. 323）。

また信仰を捨て、(49b) 異教徒になった。こうして、ウズ・ベグ・ハンはムスリムになった。それ以来、ウズベグの民のイスラーム [への信仰] は揺らぐことはなかった⁸⁰。人々が言うには、ウズ・ベグ・ハンは二十年間統治した。またある者たちが言うには、十八年間統治した。それから神の慈悲のもとに召された。「まことにわれわれは神のもの。われわれはやがて神のお傍に還らせて戴ける身」⁸¹。

ジャーン・ベグ・ハンの物語の始まり

高名なジャーン・ベグ・ハン陛下に彼に神の慈悲あれ—が父の玉座においてハンとなったとき、かのお方の公正さ、敬虔さ、寛大さはよく知られている。草原地方でかのお方のように公正、敬虔、強力な帝王が現れたことはない。父 [=ウズ・ベグ・ハン] の国のすべてを統治していた。その後、マリク・アシュラフ⁸²というタブリーズの長官がいたが、悪魔が彼を正道から逸れさせ、彼は自身の娘を娶った。その物語とは以下のものであった。彼には一人の美しい娘がいた。この呪われた者 [=マリク・アシュラフ] は娘を愛してしまい、[彼は] まったく平静を失ってしまった。彼はタブリーズのウラマーたちに、「ある人物が木を植えてその果実が実ったならば、[その人物] 自身で食べるのがよいか、それとも誰かに与えるのがよいか」と尋ねた。ウラマーたちが言うには、「自身で食べてもよいですし、誰かに与えてもよいです」と。この呪われた者の目的は自身の娘であったのである。この言葉に従

⁸⁰ 『チンギズ・ナーマ』では、ベルケやウズ・ベグのイスラームへの改宗におけるサイフディーン・バーハルズイーやババ・テュクレスなどのスーフィー聖者の役割が強調されているが、こうした改宗伝承はスーフィー教団の成立と拡大に緊密に結びついており（濱田正美『世界史リブレット 70 中央アジアのイスラーム』山川出版社、2008、pp. 73-74）、その史実性については慎重に検討すべきである。

⁸¹ Q 2: 156.

⁸² スルドゥズ部族の出身。祖父はイル・ハン朝アブー・サイード・ハンの治世（1316-35年）の前半にイル・ハン朝随一の実力者となったチョパン、父は同時期にルームの支配者となったテムルタシュ。アブー・サイードの死後、兄弟の小ハサンがイル・ハン朝の権力を握ったが、小ハサンの死後、十二年にわたって西北イランを支配した（志茂碩敏『モンゴル帝国史研究序説』、pp. 150-155）。『シャイフ・ウワイス史』では、『チンギズ・ナーマ』の物語と異なり、アシュラフはフレグ・ウルスを征服するために遠征を取行したジャーニー・ベグ・ハンに抵抗したために殺されたことになっている（*Ta'rikh-i Shaikh Uwais (History of Shaikh Uwais): An Important source for the History of Adharbaijān in the Fourteenth Century*, persian text, ed. by J.B. Van Loon, 's-Gravenhage, 1921, pp. 176-179）。

って、[彼は自身の] 娘を娶った。

そこで、タブリーズのウラマーたちが [ジャーン・ベグ・] ハンに嘆願するには、
「この人物は詭弁を弄してわれわれにある問題について尋ねました。われわれは彼の目的を知らずに、額面どおりに [受け取って] 裁定してしまいました。この人物の目的は自身の娘にあったのです。いまや彼は娘を娶りました。この人物自身は異教徒となりました。われわれもまた異教徒の奴隷となっております。今日、あなた様がイスラームの帝王です。いまや、あなた様はムスリムたちの前からこの異教徒を駆逐すべきです」と。人々が言うには、嘆願が届いたとき、[ジャーン・ベグ・] ハンは午後の礼拝 [の文句を] 唱え、モスクに座っていた。(50a) ただちにウラマーたちを集めて尋ねるには、「おまえたちはこの言葉に対して何と答えるか」と。彼らが言うには、「はい、あなた様はこの異教徒をムスリムたちの前から駆逐すべきです」と。[ジャーン・ベグ・ハン] はこの言葉を聞くと、モスクからもはや [自身の] 天幕には戻らなかった。三日間、そのモスクに留まり、装備を整えて出立した。そして [タブリーズに] 行き、マリク・アシュラフを殺し、タブリーズとイラクの諸地方を征服した。三十年間統治した。それから、至高なる神の慈悲のもとに召された。「まことにわれわれは神のもの。われわれはやがて神のお傍に還らせて戴ける身」⁸³。

ベルディ・ベグ・ハンの物語の始まり

彼 [=ジャーン・ベグ・ハン] の息子、ベルディ・ベグが父の玉座においてハンとなった。このベルディ・ベグは非常に愚かで無分別な人物であった。自身の親族たちと息子たちを、「自分とハン位を争う」と言って殺した。人々が語るには、カンクリ・トゥルバイ⁸⁴という人物がおり、彼の部族や親族は非常に強力であった。この人物はハンの師傅であった。[カンクリ・トゥルバイが] 何を言おうとも、[ハン

⁸³ Q 2: 156.

⁸⁴ その名前から明らかなように、カンクリ部族の出身。『ムイーン史選』には「トゥグル・バイ (Tuġlū Bāy)」の表記で現れ、彼はジャーニー・ベグの重臣だったが、ジャーニー・ベグを暗殺し、その息子ベルディ・ベグをハンに即位させたという (Anonym, *Muntahab al-Tawārīḥ-i Mu'inī*, MS., Bibliothèque Nationale, Supplément Persan 1651, ff. 30 8b-309a)。しかしながら、『シャイフ・ウワイス史』にはそのような記述はまったく見えない。

は] 彼の言葉に背かなかった。彼 [=カンクリ・トゥルバイ] には、スマイという名の一人の息子がいた。勇敢な射手であった。そのスマイはジャーン・ベグ・ハンの時代に盗みを働いた。そのため、[ジャーン・ベグ・] ハン—彼に神の慈悲あれ—は彼を殺した。トゥルバイはその息子の恨みから、[ベルディ・ベグに] 次のような忠告を与えて言うには、「あなたはいまは若い。[しかし、] いま生まれたあなたの息子は、あなたが日々年老いていくのと同じように成長する。その息子は若者になります。この先、あなたが年老いたのちにあなたのハン位を争い、奪うでしょう。いまこれらの者たちを殺しておくべきです。あなたが年老いても、その後は[平穏で] いられるように」と。その不幸な者 [=ベルディ・ベグ] は、この言葉に従い、[息子たちを] 殺した。このため、彼はケレキン・キュテン・ハン⁸⁵と呼ばれている。

彼の時代には反乱が多かった。右翼をキヤト・ママイが奪い、民とともにクリムへ去った⁸⁶。左翼を(50b) キヤト・ジル・クトルの息子テンギズ・ブガがシル河畔に奪い去った。[ベルディ・ベグ・] ハンは、自身の廷臣たちとともにサライにいた。三年間、サライの町において帝王であった。その後、亡くなった。

有名なタイ・トゥグル・ベギムは、ウズ・ベグ・ハンの妻であり、ジャーン・ベグ・ハンの母であった。当時、彼女は生きていた。サイン・ハンの子孫のうち誰一人残っていなかった。件のベギムが言うには、「いまや、ハン位と牧地はシバン・ハンの子孫のものである」と。当時、シバン・ハンの子孫のうちマンガタイの息子でヒズル・オグランと呼ばれる者がいた。サイン・ハンの定めたマンガタイの牧地は、アク・キョルという場所にあった。[マンガタイが] 他の[ヨチ家の] オグランたちから離れて、その牧地にいた理由については、私は先に述べておいた。こうして、件のベギムはヒズル・オグランを呼びよせ、連れて行って、サイン・ハンの玉座のあるサライ地方においてハンとした。この話はここで中断しよう。われわれは、キヤト・ジル・クトルの息子テンギズ・ブガの宮廷にいたオグランたちの話と、テン

⁸⁵ 「ケレキン・キュテン」とは、「必要なものを護る」という意味に解釈できよう。ここでは、ベルディ・ベグが我が身の保身に執着する様を指していると思われる。

⁸⁶ キヤト・ママイはその名が示すようにキヤト部族出身であり、『諸情報の要諦』によれば、前述のキヤト・イサタイの甥とされる(‘Abd ūl-Gaffār, ‘Umdet ūl-Aḥbār, f. 264b)。ママイは、ベルディ・ベグ・ハン死後のジョチ・ウルスの混乱のなかでジョチ家のアブドゥッラーなる人物をハンに擁立して一時期はサライを掌握し、クリミア(クリム)地方を含むジョチ・ウルス西部は「ママイ・オルダ(Мамаев Орда)」と呼ばれた(Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, pp. 116-117)。

ギズ・ブガを殺してカラ・ノガイ⁸⁷がハンになった物語に移ろう。

ところで、ウズ・ベグ・ハン—彼に神の慈悲あれ—は激怒して、ヨチ・ハンの[サイイン・ハンの母とは]別の妻から生まれた十七人の息子の子孫たちを、民とともにキヤト・イサタイにコシュンとして与えていた。件のイサタイの死後、[彼らのすべては]息子のテンギズ・(51a)ブガに残された⁸⁸。このテンギズ・ブガは非常に粗野で残虐な人物であった。このオグランたちは彼の主君の一門の者たちであったが、彼はこの者たちを非常に虐待し、侮辱した。たとえば、彼の父ジル・クトルのために廟を建てたとき、「彼らを人夫にせよ」と言って、他の者たちを加えず、廟[の建設]にかかわるすべての仕事をこれらの者たちに命じた。水を運んだ者、煉瓦を積んだ者、そして煉瓦を運んだ者たちも、これらの者たちであった。ある者は背中に傷を負い、ある者は胸に傷を負い、ある者は足に怪我をして苦しんだという。神はよく知り給う。

さて、このオグランたちは毎朝来て、[テンギズ・ブガの天幕の]入口に立って控えていた⁸⁹。宴を催すときには、自らの手に酒杯が来ると、楽師たちがオタク・キュイ⁹⁰を奏でた。まさに天幕の中でオタク・キュイを奏で始めたとき、ベグの手もとに酒杯が届いたことを[オグランたちは]知るのである。このオグランたちは、[テンギズ・ブガが]酒杯を飲み干し、オタク[・キュイ]の演奏が止むまで、帽子を取って跪いていた。そのあと、彼らは帽子をかぶった。

⁸⁷ カラ・ノガイ、および後述の弟トゥグル・テムルは、それぞれシャーミーの『勝利の書』に掲げられるジョチ・ウルスの歴代のハンのうち、第十六代、第十七代として名前があがっている(ただし、カラ・ノガイは「サシ・ノガイ (Sāsi Nuqāy)」、トゥグル・テムルは「トゥグルク・テムル (Tūglūq Timūr)」と表記され、後者は前者の甥とされている)(*Histoire des conquêtes de Tamerlan intitulée Zafarnāma par Niẓāmuddin Šāmī: avec des additions empruntée au Zubdat-i-Tawārīḥ-i Bāysungurī de Ḥāfiẓ Abrū*, ed. by F. Tauer, tome I, text persan du Zafarnāma, Praha, 1937, p. 13)。カラ・ノガイ、トゥグル・テムル、そして後述のボグリ・ホージャ・アフマドの三者は、ハン扱いはされていないが、『ムイッズルアンサーブ』、『選史・勝利の書』においてトカ・テムル家のサシの息子としてそれぞれその名を確認できる(ボグリ・ホージャ・アフマドは「ボグルク・クトルク・ホージャ (Būkr Qutluq Ḥājā)」と表記されている)(Anonym., *Tawārīḥ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 75a; Anonym., *Mu'izz al-Ansāb*, f. 25b; Юдин, “Переход власти к племенным биям,” pp. 72-74)。

⁸⁸ ここではテンギズ・ブガはイサタイの息子となっているが、実際はイサタイの息子ジル・クトルの息子である。

⁸⁹ qorlar erdi. ユーゼンは「車座になっていた」と訳している。

⁹⁰ ötäk küy. ユーゼンは「賛美のキュイ」と訳している。テュルク語で“küy”は「歌」であるが、“ötäk”の解釈は難しい。“ötük küy”と読むならば、「祈願の歌」と解釈できよう(Doerfer, “ötük,” *Türkische und Mongolische Elemente*, Bd. II)。

人々が語るには、あるとき、冬の極寒の日に、この不幸な者 [=テンギズ・ブガ] は宴を催した。不意にオタク [・キューイ] の音が聞こえた。このオグランたちはいつもどおりに帽子を脱ぎ、跪いた。その日は寒かった。フサイン・オグランという、テムル・クトル・ハンとオロス・ハンの祖先の親族の者がいた。耳が凍傷になり、その半分以上が剥れ落ちた。その後、彼をチョナク⁹¹・フサインと呼ぶようになった。

こうして、ベルディ・ベグ・ハンの即位から三年が過ぎると、四年目の秋の(51b)初めにハンは病にかかった。ハンの病は長引いた。冬が訪れた。件のテンギズ・ブガの冬営地は常にシル河畔にあった。

さて、これから述べるこれらの物語は⁹²、亡きハン陛下一神よ彼の墓を芳しくしたまえ、楽園が彼の住処とされますように—イル・バルス・ハン陛下から聞いている。かのお方は古い話をよくご存知であった。

ベルディ・ベグ・ハンの即位から三年が過ぎた。四年目の冬、ハンは秋の初めから病にかかっていた。テンギズ・ブガはシル河畔に冬営していた。ハンの病の知らせが絶え間なく届いた。ある日の朝のことだった。これらのオグランたちはベグ [=テンギズ・ブガ] の [天幕の] 入口に立って控えていた。テンギズ・ブガはその日の早朝から起きて、宴を催していた。彼の楽師たちが曲を奏で、歌い手たちが歌い、賑やかであった。その朝は寒かった。一頭の灰褐色の馬に乗り、狼の毛皮の服を巻きつけるように着て、馬に服をきつく結びつけていた人物が、天幕の近くに来て、下馬した。そして馬を馬車に繋ぎ、矢の入った籠を馬車の上において、天幕に入った。演奏していた楽師たち、歌っていた歌い手たちのすべてが静かになった。しばらくのあいだ、この集いにいる人々は [誰も天幕から] 出てこなかった⁹³。その後、再び楽師たちが演奏し始め、宴は活気づいた。外にいたこれらのオグランたちがこの状況を見て考えるには、「いったい、このやって来た人物は何者であろうか。人々が集いの最中に⁹⁴このように驚くとは」と。

⁹¹ 「チョナク」とは「片耳」の意味。

⁹² bu hikāyatlār bu sözlār ki emdi zikr qilgum. ユーチンは「いま述べているこれらの物語」と訳しており、前段までの話を指しているように解釈している。

⁹³ bu el [ki] majlisda dūr čiqmadı. ユーチンは“бу эл-мәжлисдә дүр чыкмады”と読み、「その天幕からはいかなる音も聞こえてこなかった」と訳している。

⁹⁴ bu el majlisda. ユーチンは“бу эл-мәжлисдә”と読んだため、主語の「人々」を訳してい

さて、これらのオグランたちのなかに二人の人物がいた。一人は聡明で分別があり、その名をボグリ・ホージャ・アフマドといった。サグシュ・アルトゥク・サユチュ・オグラン⁹⁵ (52a) とも呼ばれていた。またもう一人は、当時彼に並ぶ者はいないほどの勇敢な射手、勇者であった。彼の名をカラ・ノガイといった。のちに宴が活気づき、しばらくしてカラ・ノガイのもとに伝令が来て、「ベグがあなたを呼んでいる」と言った。彼 [=カラ・ノガイ] は立ち上がり、ベグの御前に赴いた。しばらくのあいだ、[彼らは] 静まった。その後また、宴は賑やかになった。

件のボグリ・ホージャ・アフマドがこれらのオグランたちに言うには、「見たか。ベルディ・ベグ・ハンは死んだのだ。あのやって来た者は、ハンが死んだという知らせをもたらしたのだ。これらの者たちが、一度の料理ほどのあいだ沈黙し、驚いていたのは、そういう訳だったのだ。カラ・ノガイを呼び寄せたのは、彼をハンに推戴し、そして明日の謁見でわれわれすべてを殺すためだ。われわれの状況は厳しい。今夜手を打てば、うまくいく。さもなければ、明日の朝、われわれすべては死ぬことになるだろう」と。彼らは、彼の考えが変わらないことを常々知っていたので⁹⁶、彼らのすべてが、「あなたがどのような策を考えようとも、そのようにしましょう」と言った。件のホージャ・アフマドが言うには、「策はこうである。ノガイはここから遅くに出て行く。家路に着いたところを捕らえ、馬から引きずり倒し、きつく縛り、短刀を喉元に突きつけ、この知らせについて問いただそう。もし真実を語ってわれわれに同調するならば、われわれもまた彼をハンに推戴しよう。もし真実を語らなければ、その場で[彼を] 殺し、どこへなりと逃げよう」と言うと、皆がこの言葉に同意し、誓いをたてた。

夜の礼拝が近づくと、ノガイはベグ [=テンギズ・ブガ] の集いを辞して出かけた。これらのオグランたちもまたともに出発した。彼らは、いつものような彼の表情ではなかったことに気づいた。いつもは、謁見から戻って[自身の] 天幕に向かうとき、彼は陽気に振舞っていた。[ところが] 今日は誰にも言葉をかけず、気を許さない様子で進んだ。彼らが家路に着くと、暗くなった。すかさず彼らは[カラ・

ない。

⁹⁵ 「サグシュ・アルトゥク・サユチュ」とは、「賢明で、思慮深く、先見の明のある」という意味に解釈できよう。

⁹⁶ *čün bular dāyim sinap erdilär, munung kengäši özgä bolmas erdi.* ユーチンは、「彼らがどれほど彼をいさめても、彼の考えは変わらなかった」と訳している。

ノガイの] 馬の手綱をつかみ、[カラ・ノガイを] 馬から引きずり倒し、きつく縛った。件のノガイが言うには、「私がどんな罪を犯したというのだ。[どうして] このようなことをするのだ」。ホージャ・アフマドが言うには、「おまえに一つ尋ねよう。もし真実を語り、われわれに (52b) 同意するならば、おまえをハンに推戴しよう。そして、忠誠の誓いをたてよう。[われわれは] おまえのノケルであることに背かないだろう。もし真実を語らなければ、われわれがおまえをこの場で殺すことを思い知れ」。[カラ・ノガイは、]「何を尋ねるといふのだ。尋ねよ」と言った。ホージャ・アフマドが言うには、「真実を語れ。あのやって来た者は何を言ったのか。そしておまえを呼んでベグは何を言ったのか」と。[カラ・ノガイが、]「あのやって来た者が何を言ったのか、私は知らない。[テンギズ・ブガは] 私を呼んだが、何も言わなかった」と言うと、件のホージャ・アフマドが言うには、「おお、なんということだ。おまえが言わなければ、私が言おう。あのやって来た者はハンが死んだことを伝えるに来たのだ。そして [テンギズ・ブガは] おまえを呼んで、『あなたをハンに推戴しましょう。しかし、あなたの兄弟たちを殺すことに同意しなさい。もし殺さなければ、彼らはあなたより年長であるから、あなたのハン位には従わないでしょう』と」言った。そして、おまえはそのことに同意したのだ。いまとなっては、そのようなことをするな。この者 [=テンギズ・ブガ] からわれわれがどれほどの侮辱を受けたことか。おまえがわれわれのなかでハンとなり、われわれの長となるならば、彼を殺し、彼への恨みを晴らすのはたやすいことである。私のこの話に同意しろ」と。

[さらに、ホージャ・アフマドが、]「おまえをハンに推戴しよう。推戴して、われわれがおまえのノケルとなることにどれほどの条件を出そうとも、[それを] われわれは飲もう。われわれの死の原因となって、最後の審判の日まで汚名を背負うな」と言うと、彼 [=カラ・ノガイ] は、「それならば、私の手足をほどけ。おまえたちに真実を話そう」と言った。彼らが手足をほどくと、[カラ・ノガイは] 体を起こし、座って、件のホージャ・アフマドを大いに褒め称えた。[カラ・ノガイが] 言うには、「おまえの話は的を射ており、何の誤りもない。そして、すべて正しい。いまや、おまえが私の即位に賛同の誓いをたてるならば、私はおまえの策略には背くまい」と。彼らは (53a) 誓いをたてた。ノガイが言うには、「翌朝われわれが謁見にのぞむとき、彼 [=テンギズ・ブガ] は私を呼び寄せる。その後、[彼は] おまえたちを呼ばせる。おまえたちは天幕に入ったらずぐに彼の周りにいる者たちに対峙しろ。

私は彼自身に対峙する」と。

翌朝、彼らが謁見にのぞむと、彼 [=カラ・ノガイ] が言ったとおりに [テンギズ・ブガは] ノガイを呼び寄せた。しばらくして、彼らを呼びに人が来た。彼らも武装して来ていた。みなが勇敢に進み、[天幕の] 入口から入るとすぐに [武器を持った] 腕を振り上げた⁹⁷。ノガイはテンギズ・ブガといっしょに上座に並んで座っていた。即座に [テンギズ・ブガを] 押さえつけるや、首をはねた。[首を] 短刀で突き刺し、[天幕の] 外に運び出して、「他の者を殺すことはない。その場から動くな」と触れまわった⁹⁸。人々がその場で動きを止めたのち、ノガイを白いフェルトに乗せ、みな同意をもってハンにした⁹⁹。

こうして、マングタイの息子ヒズル・ハンとカラ・ノガイの二人は、ひと月のうちにハンとなった。しかし、ヒズル・ハンはサライにある玉座においてハンとなり、カラ・ノガイはシル河畔の左 [翼] においてハンとなった。さて、ヒズル・ハンの物語に移ろう。

タイ・トゥグリ・ベギムはヒズル・ハンを呼び寄せ、[ヒズル・ハンを] サライの玉座においてハンとすると、ウズ・ベグ・ハンとジャーン・ベグ・ハンから残された金色の天幕を建てた。人々が語るには、ベギムは髪を黒く染め、ハンに嫁ぐことを望んだ。ハンにもまた [ベギムを] 娶る意思があった。しかし、ナイマン部族

⁹⁷ qol tebrät dilär. ユーチンは、「武器を振るった」と訳している。

⁹⁸ カーディル・アリー『集史』は、ここに見えるカラ・ノガイらによるテンギズ・ブガ殺害を、同じくトカ・テムル家のオロスによるジル・クトル (テンギズ・ブガの父) 殺害として伝えている (Qādir 'Alī Beg, *Jāmi' al-Tawārīḥ*, f. 68b)。両者の記述の相違について、ユーチンは、カーディル・アリー『集史』はオロスの子孫であるオラズ・ムハンマドに献呈されたものであり、オロスとその子孫の統治の正統性を強調している、と説明している (Юдин, “Переход власти к племенным биям,” p. 72)。

⁹⁹ 白いフェルトによる即位儀礼は、中央ユーラシアの遊牧君主の即位儀礼としてよく知られている。護雅夫はこの儀礼で使われるフェルトの意味について、「地上の人間にとっては、神霊・精霊をわが身に招ぎくだしてそれをわが身にいれ、それとおなじ力を体得して、おのれみずから神霊・精霊そのものになりうるための、つまり人間から神霊へ転化するための聖なる場であり、神霊・精霊にとっては、降臨して地上の人間に憑るための、つまり神霊から人間に転化するための聖具にほかならないのです」と述べている (護雅夫『遊牧騎馬民族国家』講談社現代新書116, 1967, pp. 105-106)。R. セラによれば、14世紀初頭までの記録ではテュルク・モンゴルのあいだでハンを持ち上げるために使われたフェルトの色は黒だったが、以後の記録は、いくつかの例外を除いて、フェルトの色は白だったとし、さらにモンゴルが白をより幸運な色であるとみなした広範な証拠があるという (R. Sela, “Ritual and Authority in Central Asia: The Khan's Inauguration Ceremony,” *Papers on Inner Asia*, No.37, Bloomington, 2003, p. 38)。

出身のクトゥルグ・ブガという名のベグがいた。彼は〔この結婚に〕賛同しなかった。彼が言うには、「彼女は、ウズ・ベグとジャーン・ベグに従ってきた者です。あなたは反対の境遇〔=チンギズ家〕で育った方です。〔分不相応の結婚を望んだために〕あなたに懲らしめられるべきです。娶ってはなりません」と。〔ヒズル・ハンは〕彼の言葉に従い、〔ベギムを〕娶らなかった。ベギムは、〔クトゥルグ・ブガがヒズルに自身を〕娶らせないことを知ると、以前ほど（53b）には〔ヒズル・ハんに〕敬意を示さなくなった。ハンもまたベギムに対抗し、金色の天幕を壊し、カザクたち¹⁰⁰に分け与えようとする、ベギムはそれを知ってハンのもとに人を送り、言うには、「そのようなことをしてはなりません。ハンとなった人にとって、〔天幕は〕金銀が得られない場所ではありません¹⁰¹。それなのに、昔の立派な方々が建てた建物を壊してはなりません」と。〔ヒズル・ハンは、〕彼女の言葉に従おうとはせず、〔金色の天幕を〕壊して〔カザクたちに〕分け与えた。ベギムも彼に怒り、ベグたちのなかの腹心を集め、ハンを追い払った。ハンは戻り、再びアク・キョルに來た。

件のベギムは、ある人物を「ケルディ・ベグである」と言ってハンに推戴した。ウズベグたち¹⁰²は、彼を偽ケルディ・ベグと呼ぶ。すべての人々が言うには、「ケルディ・ベグをベルディ・ベグが殺した。彼はどうして生き返ったのだ」と¹⁰³。

¹⁰⁰ 「カザク」という術語は、13～14世紀頃から「逃亡者」、「放浪者」の意味で用いられるようになり、15～16世紀の中央アジアの諸史料にもそのような意味での使用例が見受けられる（В.П. Юдин, *Центральная Азия в XIV-XVIII веках: глазами востоковеда*, Алматы, 2001, pp. 151-156）。『チンギズ・ナーマ』においては、動詞化した形（「放浪・掠奪を行い（qazaqlap）」）でも現れている。のちに、とくにオロスの子孫が「カザク」という呼称を帯びるようになり、その政権は「カザク・ハン国」と呼ばれる。

¹⁰¹ *altun kümüş tapulmas yer dägül dur*. 解釈しづらい文章である。ユーチンは“Хан борган кимигә алтун-кумуш та бормас йәрдә гүл дур”と読み、「金銀がないとき、ハンとなった人物にとって、〔金色の天幕は〕財宝です」と訳している。

¹⁰² 写本では“özgä beglär”となっており、ユーチンはこれを採用して「他のベグたち」と訳している。しかし、ここは「ウズベグたち（Özbeğlär）」の誤りであろう。『チンギズ・ナーマ』においては、「ウズベグたちは○○と言う」とか「ウズベグたちが言うには」という言い回しがしばしば見られる。

¹⁰³ シャーミーの『勝利の書』のジョチ・ウルスの歴代ハンの一覧に、第九代ベルディ・ベグ・ハンに続いて、第十代ケルディ・ベグ・ハンの名前が見える（*Histoire des conquêtes de Tamerlan*, p. 13）。ヒジュラ暦761（1359/60）年、762（1360/61）年に新サライで、762（1360/61）年、763（1361/62）年にアザクで、彼の名前で鑄造された銀貨が現存していることから（S. Lane-Poole, *Catalogue of Oriental Coins in the British Museum, vol. VI, The Coins of the Mongols in the British Museum*, London, 1881, pp. 153-154; Федоров-Давыдов, “Клады Джучидских монет,” pp. 133-155; Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 77)、その実在はあきらかである。『チンギズ・ナーマ』ではベルディ・ベグがケルディ・ベグを殺したことになっているが、シ

民が彼 [=偽ケルディ・ベグ] に従わなかったので、[ベギムは] ポアウルの子孫¹⁰⁴である、バザルチという名の者をハンに推戴した。当時、大ベグたちのなかに、スイジウト・アリー・ベグがいた。彼が「バザルチには従わない」と言ったので、[ベギムは] 彼 [=アリー・ベグ] を呼び出させて、殺した。アリー・ベグにはハサンという名の息子がいた¹⁰⁵。彼は、コングラト・ナガダイの息子で、ホラズム地方の総督であった、アク・フサイン [のもとへ] 逃れた¹⁰⁶。このハサンは彼の甥であった。[ハサンが] 彼 [=アク・フサイン] のもとに来ると、[アク・フサインは] ベギムのこのよからぬ行為を嫌悪して、ベギムを見放した¹⁰⁷。

このとき、アク・フサインがヒズル・ハンのもとに使者を送って、言うには、「あの女は悪魔の道に踏み込み、このような行為をしております。われわれも (54a) あの女を見放しました。あなたがもし先頭に立って大望を抱くのであれば、われわれはあの女に対して行動を起こしましょう」と。彼 [=ヒズル・ハン] もまた [ベギムへの] 怒りを抱く人物であった。[彼に神の] 大いなる恩恵あれ。アク・フサインはホラズムの軍をすべて集結させ、アク・キョルへ行き、件の [ヒズル・] ハンをハンに推戴し、サライ地方に進軍した。サライで戦いが起こり、バザルチとベギム

チャーミーの記述では、ベルディ・ベグのあとにケルディ・ベグが即位したことになっており、両者の記述はたがいに矛盾していることになる。

¹⁰⁴ 『選史・勝利の書』では、バザルチはジョチの息子のなかでもポアル (ポアウル) の子孫ではなく、タングトの子孫となっている (Anonym., *Tawāriḥ-i Guzīda, Nusrat-nāma*, f. 122b)。チャーミーの『勝利の書』のジョチ・ウルスの歴代ハンのリストには、第十五代ハンとしてバザルチの名前が挙げられている (*Histoire des conquêtes de Tamerlan*, p. 13)。

¹⁰⁵ スイジウト・アリー・ベグおよび息子ハサンについては不詳であるが、興味深いのは、『チンギズ・ナーマ』がハサンをコングラト・ナガダイの息子アク・フサインの甥としていることである。すなわち、ハサンの母がコングラト・ナガダイの娘であると推定される。この推定が正しければ、スイジウト・アリー・ベグはコングラト・ナガダイの娘婿ということになる。また、スイジウト部族出身ということから、前述のスイジウト・アラタイの近親者である可能も大きい。

¹⁰⁶ コングラト・ナガダイはその名が示すようにコングラト部族の出身で、チャーミーの『勝利の書』では「ナンカダイ (Nankqadāy)」と表記される (*Histoire des conquêtes de Tamerlan*, p. 67)。ナガダイの息子アク・フサインはティムール帝国史料に現れるフサイン・スーフイーを指すものと思われる。フサイン・スーフイーは1365年までにホラズム地方に「スーフイー朝」と通称される地方政権を樹立していた。ナンカダイとスーフイー朝については、川口「ジョチ・ウルスにおけるコングラト部族」、pp. 81-82, 85, 90参照。

¹⁰⁷ *oray gardān boldīlar*. “*oray gardān*”という表現はもう一箇所54aにも見られるが、その解釈には不明な点が残る。ここでは、ユーゼンの訳も参照して本文のように訳した。

は捕らわれた。ベギムを一台の幌馬車に乗せ、その口を〔轡で〕きつくふさいだ¹⁰⁸。そして、凶暴な暴れ馬¹⁰⁹を繋ぎ、〔馬を〕走り回らせた¹¹⁰。この凶暴な暴れ馬は、ベギムが死ぬまで、〔幌馬車を〕四方に引き回して、穴や窪地に打ちつけた。ウズベグたちは、「タイ・トゥグル・ベギムをヒズル・ハンが殺した」と言うが、その事情は以上のようなのである。

彼女〔＝ベギム〕を殺し、ヒズル・ハンは再びハンとなり、一年半統治した。彼にはブルト¹¹¹という名の悪辣な息子がいた。彼は父のハン位に我慢できず、不意に〔ヒズルを〕刺し殺し、自身がハンとなった。二、三日もしないうちに彼もまた殺された。その後、争乱が生じた。あらゆる者が方々で頭をもたげた。サライの町は荒廃した。民の多くはクリム地方のキヤト・ママイのもとに去った。この話はここで終わりにして、再びカラ・ノガイの物語に戻ろう。

カラ・ノガイはシル河岸において三年間統治し、トルキスタン地方¹¹²を支配していた。三年後に亡くなった。彼の弟のトゥグル・テムルという者が(54b)ハンとなった。スルターンたちの誉れ、ドゥースト・スルターン殿下のもとにある書冊においては、「このトゥグル・テムルは偉大な帝王となり、サマルカンド、ブハラを統治した」と述べられている¹¹³。しかし、その統治期間は知られていない。

¹⁰⁸ *agzini mazbut qildilar*. ユーチンは「ひざかけをしっかりと結んだ」と訳しているが、これは誤りであろう。

¹⁰⁹ *amlag aygir*. 原義では、「飼いならされていない、去勢されていない馬」の意味である。

¹¹⁰ *bas saligga qoya berdilar*. ユーチンは“*bas*”を“*bes*”と読み、「四方に解き放った」と訳している。

¹¹¹ シャーミーの『勝利の書』のジョチ・ウルの歴代ハンの一覧に、第十三代ヒズルに続いて、第十四代ハンとして名前が挙がる「ムルド (Murud)」を指すものと思われる (*Histoire des conquêtes de Tamerlan*, p. 13)。『選史・勝利の書』では、ムルド (ブルト) はヒズルの息子ではなく兄弟とされている (Anonym., *Tawarih-i Guzida, Nuşrat-nāma*, f. 71a)。ヒジュラ暦762 (1360/61)、763 (1361/62)、764 (1362/63) 年、いずれもグリスタン (アフタバ河左岸、新サライの近くに位置した) で、「ムリード (Murid)」の名前で鑄造された銀貨が現存する (Lane-Poole, *Catalogue of Oriental Coins*, pp. 154-155; Федоров-Давыдов, *Клады Джучидских монет*, pp. 133-155; Aġat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 79)。

¹¹² 一般に中央アジアを意味するトルキスタンとは異なり、ここでのトルキスタン地方とは、スグナク、サイラム、ヤス、オトラルなどのオアシス諸都市が点在するシル河中流域を指している (К.А. Пищулина, “Присырдарьинские города и значение в истории Казахских ханств в XV-XVII веков,” *Казахстан в X-XVIII веков*, Алма-Ата, 1969, pp. 11-12)。

¹¹³ 『諸情報の要諦』は「ドゥースト・スルターン殿下の史書」に依拠しながら、トゥグル・テムルの統治はチャガタイの諸王の国々、ウルグ・オルダのカラ・クムの諸地方にまでおよんだとしている (‘Abd ül-Gaffār, ‘*Umdet ül-Ahbār*, f. 266a)。

その後、バディク・オグランの息子オロスがハンとなった。このオロス・ハンは大偉大な帝王となり、全トルキスタン地方を統治した。トクタミシュ・ハンとテムル・クトル・ハンには、当時ハン位はまわってこなかった。彼らはこの件のハンに仕えていた。[神の]永遠なる恩寵により帝王の荣誉がトクタミシュ・オグランのものとなって現れたため、[オロス・]ハンのノケルたちとその他の人々は進んでこの件のオグランのもとにおもむいた。このため、件の[オロス・]ハンは悪意を抱き、トクタミシュ・オグランを殺害しようとした。

さて、ヒタイ・ババ・アリー・ビー¹¹⁴という、ハージー・タルハンのアブドゥルカリーム・ハン¹¹⁵の大ベグにしてナーイブの人物がいた。件のハンの死後、彼はマッカでタワーフ¹¹⁶を行い、ハージーになって戻って来た。その後、スルターン・ガーズイー・スルターン¹¹⁷に仕えた。スルターン殿下が昔の話に大いに関心を抱き、[彼に]尋ねた。「トクタミシュ・ハンはオロスの宮廷から逃れたと言われている。それはどのようにして起こったのか」と聞くと、件のハージーは以下のように語った。私めはかのお方¹¹⁸から聞いたのである。かのお方は仰った。[すなわち、]オロス・ハンがトクタミシュ・オグランを殺そうとしたとき、その直前にケネゲス・クガンの息子ダルウィシャク・ムルザ¹¹⁹をチャガタイ[・ウルス]の帝王のもとに(55a)使者として送った。シリンド¹²⁰送った。これらの者たちがおもむき、¹²¹

¹¹⁴ アストラハン・ハン国の大ベグであり、ジョチ・ウルスの歴史に通暁していたと思われるこの人物は、『諸情報の要諦』によれば、「エジュデルハン [=アストラハン/ハージー・タルハン] のダルガ・ベグ」であり、「高名な知の遍歴者 (affāq)」であった。また、史書を編纂し、そこで後述のガーズイー・スルターンから求められたことを語ったという ('Abd ūl-Gaffār, 'Umdet ūl-Aḥbār, f. 266b)。

¹¹⁵ アブドゥルカリーム・ハンはトカ・テムル家のテムル・クトルクの子孫で、15世紀初頭のアストラハン・ハン国の君主 (cf. Зайцев, *Астраханское ханство*, pp. 63-72)。

¹¹⁶ ṭawāf. マッカのカアバ神殿を黒石の地点から左方向に七周回る儀式のこと。

¹¹⁷ シバン家の人物で、ヒヴァ・ハン国の君主イルバルスの長男。『繁栄の楽園』によれば、1530年代半ばにホラズム地方のヴェズィール (アブールガーズイーの『テュルク系譜』によれば、ウルゲンチ) において、同じくシバン家のアワナシュによって殺害された (Mūnis and Āgahī, *Firdaws al-Iqbāl*, pp. 111-112; *Histoire des Mogols et des Tatares*, p. 195; Зайцев, *Астраханское ханство*, p. 67)。

¹¹⁸ olar. ユーチンは、この「かのお方」はヒタイ・ババ・アリーを指していると解釈している。しかし、そうではなく、チンギス家の人物を指している可能性もある。

¹¹⁹ ケネゲスはこの父子の所属部族名と思われる。おそらくは『元朝秘史』にみえるゲニゲス (格泥格思)、ラシードウッディーン『集史』にみえるキンキトのことであろう。ミールザー (ムルザ) はアミールザーデ (「アミールの子」の意) の短縮形で、ティムール帝国やノガイ・オルダなどにみられる王族身分を示す称号である。

¹²⁰ 写本の55a左上 (表) と55b右上 (裏) が失われているため、表裏ともに四行に

本営はシル河岸に置かれていた。・・・[シル河に] 沿って行き、ハンの本営にやって来た。寒い日であった。シル河の・・・氷が浮いていた。ウルク・テムルがムルザのあとにやって来た。不意に彼がシル河の岸辺に目をやると、葦の茂みの根元に、薄い服一枚しか着ていない若者¹²²が水から出て、顔を伏せ、体を折り曲げて、震えながら横たわっていたのを見た。[ウルク・テムルは] 心中で、「あの者に何か起こったのだ」と思って、急いでムルザに追いついた。そして言うには、「我がムルザよ、慈悲を下さい。私は[オロス・] ハンの命令によりあなたにお仕えするために参りました。あなたは無事に[チャガタイ・ウルスの] 民のなかに入り、本営の近くまで来ました。ハンに謁見する者は私ではありません。私を苦しめ、連れて行ってどうするのですか。私はここから私の天幕を探しに行ってもよいでしょうか」と言うと、そのムルザは許可を与えた。彼[=ウルク・テムル] は戻り、さきほどの場所に来た。馬を遠くに繋ぎ、自身は徒歩となって来た。その人物のもとに来て見ると、[その人物は] 顔を伏せ、震えながら横たわっており、足にひどい怪我をしていた。彼[=ウルク・テムルは、]「おまえは何者だ」と聞いた。[その人物は、]「何を聞くのだ。私は苦しむ奴隷だ」と言った。彼[=ウルク・テムル] は「おまえが苦しんでいるのは見て[分かって] いる。名を名乗れ」と言った。[その人物が] 言うには、「私はトクタミシュ・オグランである。以前にも[こうなると] 思っていた。明け方だったが、[オロス・] ハンの手の者たちが来て、私の天幕を襲った。矢を射合いながら[天幕から] 出たが、敵が多勢であるのを見た。河が近かったので、河に身

わたって部分的な欠落がある。ただし、『諸情報の要諦』に類似の記述があるので、内容を推測することはある程度可能である。この欠落部分の内容について、『諸情報の要諦』には「シリン部族の有力者たちのうち著名なダンギ・バイ (Dānggī Bāy) という名の人物の聡明・勇敢なルク・テムル (Ruk Temür) という名の息子をもダルヴィシャク・ムルザ(ミールザー)の供をさせた」とある(‘Abd ūl-Ġaffār, ‘Umdet ūl-Aḥbār, f. 266b)。ここに現れるルク・テムルはウテミシュ・ハージーが記すウルク・テムルのことである。シャーミーの『勝利の書』では、“Ūruk Timūr”あるいは“Ūrunk Timūr”と表記される。トクタミシュの「代理にして、掣肘なき権能者」であり、パリン部族のアク・ブガヤコングラト部族のアリー・ベグとともに、ティムールによる恩寵と庇護への見返りとして、たえずティムールへの忠誠をトクタミシュに説いていたという(川口「ジョチ・ウルスにおけるコングラト部族」, pp. 84, 90)。

¹²¹ この欠落部分と次の欠落部分の内容について、『諸情報の要諦』には「(使者たちがチャガタイ・ウルスから) 戻って来るあいだ、オロス・ハンの本営もまた冬に近づくにつれシル河畔に置かれたことを聞いて」とある(‘Abd ūl-Ġaffār, ‘Umdet ūl-Aḥbār, f. 266b)。

¹²² bir yalang terlik keygän yigit. ユーチンは「ある裸の、馬用の鞍褥を身に着けた人物」と訳しているが、“bir yalang terlik”で「薄い服一枚」と解釈することができる。

を投げた。水に入ったとき、矢を射られた。この傷は (55b) . . . ¹²³体を動かすこともできなかった . . . ¹²⁴と言った。ウルク・テムルが言うには、「私が探して . . . でした。私の首はあなたのものであり、あなたに預けましょう¹²⁵ . . . ¹²⁶至高なる [神が] あなたに幸運をお与えになるならば、私を忘れないでください」と言った。[トクタミシュが] 言うには、「至高なる神が私に幸運をお与えになるときは、おまえを私の幸運にあずからせ、おまえの言葉、考え¹²⁷、望みを軽んじることはない」と誓った。ウルク・テムルはすぐに肩にまとった上着を脱ぎ、[トクタミシュを] しっかりとくるみ、携帯していた食糧を彼 [=トクタミシュ] の前に置いた。そして、「私が『来ない』と言って気を悪くしないでください。私は生きて、必ずあなたのもとに [戻って] 来て、あなたをこの場所で見つけましょう」と言って、出発した。そして、天幕に着いた。そして、同族のうちの数人と同意して、馬と装備を整え、戻って来た。そして、件のオグランをテムル・ベグ [=ティムール] のもとに連れて行った。テムル・ベグは当時、新たに頭角をあらわし、ブハラとサマルカンドを占領した。これらの者たちが到着すると、[テムル・ベグは] 非常に快く出迎えた。[テムル・ベグは] 外科医たちを呼んで来させ、彼の足の齧を取り出させ、さまざま薬を処方させた。[トクタミシュは] 一ヶ月後には快復した。

その冬、彼らは [テムル・] ベグに仕えて過ごした。春になると、ベグは [トクタミシュに] 数人を付き従わせた。[オロス・] ハンが夏営地に向かうと、[トクタミシュは] 民のあとからやって来て、家畜を追い立てた。追いつき、戦い、これらの者たちを打ち破った。再び、[テムル・] ベグのもとに戻って来た。つまり、トクタミシュ・オグランは放浪・略奪を行い、ハンの民の家畜を追い、民を襲撃した。

さて、シリン、バリン、アルガン、そしてキプチャクはトクタミシュ・オグラン

¹²³ 『諸情報の要諦』によれば、「この私の傷は川の中でできた。私はなんとか泳いでこちら側に出た」とある ('Abd ül-Gaffār, 'Umdet ül-Aḥbār, f. 267a)。

¹²⁴ この欠落部分と次の欠落部分の内容について、『諸情報の要諦』には「もっとも慈悲深き神がそなたを私にお遣わしになった。そのあとのことはそなたが知っている」とある ('Abd ül-Gaffār, 'Umdet ül-Aḥbār, f. 267a)。

¹²⁵ bašim māling, sening yolıngda qoyayın. 解釈しづらい文章である。“māling”が“mālim”の誤りである可能性はないだろうか。もしそうならば、「私の命も財産もあなたに差し出そう」と訳することができるだろう。

¹²⁶ 『諸情報の要諦』によれば、「私と私の一門全員が滅ぶまで、あなたの [進むべき] 道に [奉仕するよう] 努めましょう。神は全能にして自立自存です」とある ('Abd ül-Gaffār, 'Umdet ül-Aḥbār, f. 267a)。

¹²⁷ oyungni. この「考え」の部分は、ユーチンの訳には欠落している。

の父祖の代からの古い民であった¹²⁸。この件のオグランは放浪・略奪を行い、このような(56a) こと [=オロス・ハンの民への襲撃] を行い始めた。これらの民のうち向こう見ずな若者たちは[トクタミシュのもとに] 行き、彼のノケルとなり、[彼を] 支援し始めた。そして、オロス・ハンはこれらの民を大いに迫害し始めた。彼らもまたトクタミシュ・オグラんに人を遣わし、「あなたのためにハンはわれわれに対してお怒りになり、われわれの家畜を掠奪している。われわれの首もまた危ない。あなたが少しでもわれわれに配慮してくださらないければ、最後の審判の日にあなたの襟をわれわれの手がつかむことになるでしょう」と言った。[トクタミシュ・] オグランはこの言葉を聞くと、心を痛め、やって来た者に言うには、「今年、おまえたちが夏営地に行くときに、[オロスの] 民のあとを追って移動せよ。ある河の岸辺で夏営し、そして装備を整えておけ。神がお望みになり、私が死ななければ、必ずやおまえたちのもとに行こう」と。

春になり、[オロス・] ハンは夏営地に移動した。この[トクタミシュに人を遣わした] 民もまた[オロスの] 民のあとから移動した。夏営地に着くと、それぞれの民はある河の岸辺に向かった。これらの民は合流することになっていた河の岸辺に来て、夏営した。[オロスに従う] 人々は馬乳酒を飲み、享楽に耽った。このあいだに、トクタミシュ・オグラがこの民に加わってきた。合流したときには[約束どおりに] 装備を整えていたので、それぞれの家長は一台の荷馬車に二頭の馬を繋ぎ、子供たちを乗せ、ただちにイディル河の方へ逃げた。

二日後、[オロス・] ハンのもとに、「トクタミシュ・オグラが来て、シリン、バリン、アルグン、キプチャク、(56b) そしてその他の民を引き連れてイディル河へ近づいた」という知らせが届いた。[オロス・] ハンは[そばに] いた民とともにただちに出立するや、四方に人を走らせ、彼自身はこの[逃げた] 民の後を追った。

¹²⁸ 『諸情報の要諦』はこの四部族をトクタミシュの「特別なノケル」あるいは「ケシク」と呼び、四部族がトクタミシュ配下の中核的集団であったことを示唆する(‘Abd ül-Gaffār, ‘*Umdet ül-Ahbār*, f. 267b)。この点については、Uli Shamiloglu, “The *Umdet ül-Ahbār* and the Turkic Narrative Sources for the Golden Horde and the Later Golden Horde,” *Central Asian Monuments*, ed. by H.B. Paksoy, Istanbul, 1992, p. 92; 川口「キプチャク草原とロシア」, p. 292; D. DeWeese, “TOKTAMISH,” *Encyclopaedia of Islam, new edition*なども参照。このうち、シャミルオグルは、ジョチ・ウルスとその後継諸国家においては最有力の四つの部族の各指導者、すなわち四人のベイが国家の組織と統治を指導したとし、これを「四ベイ制度 (four-bey system)」と呼んでいる。

[オロス・] ハンの民は夏營地に分散していた。馬が肥えたときだった。ハンは猛烈な勢いで進軍した。遠くにいた民の軍隊はハンに追いつくことができなかった。近くにいた民の馬は肥えていた。[オロス・ハンが] これら [逃げた民] の近くに到達したとき、ハンのもとにはわずかな者しかおらず、二百人、多くても三百人であった。日が沈もうとしていたときに、この逃げた民の歩哨がハンの [軍隊が巻き上げた] 砂塵を見て、戻ってきた。彼らは協議して、「彼らは馬の首を並べて来ている¹²⁹。多かれ少なかれ、追いついたならば、[彼らは] われわれに襲いかかるだろう。われわれは死ぬ運命にある者だ。われわれは民や家族のために死のう。せめて、われわれの一族が絶えないように。馬に慣れたオグランたちとともにジャラルッディーン・スルターンとヤフシ・ホージャ¹³⁰を選び出して、道を知る者二人¹³¹を彼らに割り当てよう。[オグランたちをわれわれの] 声の聞こえるほどの範囲で [われわれの] 軍勢のそばを進ませよ。もし敵をわれわれが打ち負かしたならば、われわれの鬨の声を聞いて、彼らはわれわれのあとから来るだろう。もし敵がわれわれを打ち負かしたならば、敵の鬨の声を聞くだろう。[そうしたら] 立ち止まらずに逃げるように」と言って、同意した。ジャラル (57a) ッディーン・スルターンをはじめとして、ウルク・テムルの長男であったヤフシ・ホージャ、および数人の馬に慣れたオグランたちを選び出した。ジャラルッディーン・スルターンは当時十二歳であった。ヤフシ・ホージャもそのくらいの年であった。

彼らはこの夜、軍勢のそばを声の聞こえるほどの範囲のところを進んだ。夜の帳が下りたとき、[オロス・] ハンは彼らの後方から追いついてきた。彼ら [=ウルク・テムルたち] は妻子たち¹³²を前において、そのあとから [隊列を] 整えながら進んだ。[オロス・] ハンが言うには、「この者たちはわれわれより多勢である。じきに

¹²⁹ olarning aqlarining boyni qatip kelä turur. ユーゼンは「彼らは疲れ果てた馬に乗ってきている」と訳している。

¹³⁰ ジャラルッディーン・スルターンはトクタミシュの息子で、1410年代初頭、ジョチ・ウルスのハンとなった。ヤフシ・ホージャは、後述されるように、シリ部族のウルク・テムルの息子。ヤズディーの『勝利の書』によれば、1395年のテレク河畔でのトクタミシュ軍とティムール軍との決戦においてトクタミシュ軍の左翼の側面援護部隊の指揮官として名前が見えている (Šaraf al-Dīn ‘Alī Yazdī, *Zafar-nāma*, facsimile texts, ed. by A. Урунбаев, Ташкент, 1972, f. 275a)。

¹³¹ iki yol bilür kişi. 「二つの道を知る者」とも訳せるが、文脈から本文のように訳した。ユーゼンは単に「道中を知る者」と訳している。

¹³² köklärin. ユーゼンは「馬車」と訳しているが、文脈から本文のように解釈した。

夜が明けて、われわれが少数であることを見られるのはまずい。夜のうちに雄叫びをあげて襲いかかろう。彼らはわれわれが多勢か無勢か知らずに逃げるだろう」と。そして、関の声をあげて襲いかかった。ひとたび入り乱れて戦い、[ウルク・テムルの軍勢が] 後退したとき、ウルク・テムルの馬は倒れ、彼は叫んだ。彼が言うには、「おお、卑怯なトクタミシュよ。われわれの約束はこういうことだったのか。[皆は] 後退したが、私は取り残されてしまった」と。そのとき、[離れて進んでいた] そのオグランたちは[手綱で馬の] 頭を引き、ある場所に立ち、耳を澄ませていた。ヤフシ・ホージャは彼の父の声を聞いて、ジャラルルッディーン・スルターンに言うには、「見たか。あれは私の父だ。私の父が捕らわれた。いまにおまえの父も捕らわれるだろう。父から離れて、われわれのような未熟なオグランがどのような日々を過ごせるだろうか。われわれも一緒に死ぬほうがよいのではないか」と言うと、至高なる神のご加護によりジャラルルッディーン・スルターンとこのオグランたちは本隊の方へ来て、それぞれが勇敢な若者のように関の声を上げ、一気に馬を走らせた。[オロス・] ハンの配下の者たちは恐れて、手綱を引いて[逃げようとした]。トクタミシュ・オグランは急いで戻って、[戦場に] 駆けつけ、[ウルク・テムルを自分の馬に] 抱え上げるや、立ち去った。[トクタミシュたちはオロス・] ハンの配下の者たちの(57b) 馬の首を並べ¹³³、多くの者たちをその場で捕らえた。しかし、「背後に[オロス・ハンの] 本隊がいる」と言って、恐れて追跡しなかった。捕らえた者をその場で矢で射殺し、馬と装備を奪い、軍勢の跡を追いかけて進んだ。

捕らわれなかった[オロス・] ハンの配下の者たちは遠くへ逃げ、集結した。どこにもハンがいないことに気づいて、彼らのうちの一人が言うには、「私はハンのおそばにいた。二人の者が来てハンを捕らえるのを見た。そのあと、[ハンが] どうなったかは知らない」と。[オロスの配下の者たちは] 戻って、戦場まで来た。ハンの遺体を見つけた。ただちにハンの遺体を担いで、天幕に急いで戻った。彼ら[=トクタミシュたち] もまた、「背後からハンが追ってくる」と言って、その方[=自身の軍勢の方] へ逃げたのである。オロス・ハンの死の状況はこのようであった¹³⁴。

¹³³ atlarining boyini qatip. ユーチンは「馬を疲れさせ」と訳している。

¹³⁴ シャーミー、ヤズディーの『勝利の書』はオロスの死についてとくにふれていない。

『ムイーン史選』はオロスの死を病死としている(Anonym., *Muntaḥab al-Tawāriḥ-i Mu'ini*, f. 312a)。また、カーディル・アリーの『集史』は北方のキシュティムという場所ですんでたと伝える(Qādir 'Alī Beg, *Jāmi' al-Tawāriḥ*, f. 60b)。これらと異なり、『チン

ウズベグたちが言うには、「ジャラールッディーン・ハンがオグラランだったとき、一団のオグラランたちを率いて彼の父 [=トクタミシュ] とオロス・ハンが戦ったときに、側面から馬を走らせ、オロス・ハンを襲って、殺した」という。その理由はこのようである。

トクタミシュ・オグラランはオロス・ハンが死んだことを知らずに逃げ、コカダイ・イスバガという素晴らしい草と水の豊かな場所があったが、その場所に向かった。当時、シバン・ハンの子孫のうち、イルファク・ハンの息子カン・パイ¹³⁵が自身の民のなかでハンとなり、コカダイを夏営地としていたが、[トクタミシュは] 彼のもとに来た。彼は[トクタミシュに] 不遜な態度をとり、彼 [=トクタミシュ] に (58a) タング河 [=ドン河] が入江のようになっているところ¹³⁶の土地を与えた。数日過ぎたのち、[トクタミシュが] イナクたち¹³⁷を通じて [カン・パイに] 言うには、「玉

ギズ・ナーマ』はトクタミシュとの戦いにおいて、その息子ジャラールッディーン・スルターンがオロスを戦死させたと伝えるものであり、この記述に注目したユーチンが詳細に紹介している (Юдин, “Неизвестная версия гибели Урус-хана (из политической истории Восточного Дашт-и Кыпчака XIV в.),” *Чингиз-наме*, pp. 76-82)。一方、『チンギズ・ナーマ』と他の諸史料の記述を比較検討した K.Z. ウスケンバイは、『ムイーン史選』の病死説を採用している (K.Z. Ускенбай, “Некоторые моменты политической деятельности Урус-хана (анализ средневековой и современной историографии),” *Отан тарихы-отечественная история*, No. 3, Алматы, 1999, pp. 105-106)。

¹³⁵ イルファク・ハンは、『ムイッズルアンサーブ』では「イルベグ (İlbeğ)」、『選史・勝利の書』では「イルパク (İrāk)」と表記されており (Anonym., *Mu'izz al-Ansāb*, f. 23a; Anonym., *Tawārīḥ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 69b)、ヒジュラ暦 775 (1373/74) 年にサライチュク、776 (1374/75) 年に新サライで貨幣を発行している (Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, p. 127; Aḡat, *Altınordu (Cuḡi Oḡulları) Paraları*, p. 91)。イブン・ハルドゥーン の『イバルの書』にはアイベグ・ハンの名で現れ、ある期間サライを統治し、その死後には息子のカリ・ハン [=カン・パイ] がサライを統治したが、オロスに敗れ、逃げたという (Сборникъ матеріаловъ, т. I, p. 391; Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, p. 128)。カン・パイは、『ムイッズルアンサーブ』では「カアン・ベグ (Qā'ān Bag)」、『選史・勝利の書』では「カアン・バイ (Qā'ān Bay)」と表記されており (Anonym., *Mu'izz al-Ansāb*, f. 23a; Anonym., *Tawārīḥ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 69b)、ヒジュラ暦 777 (1375/76) 年にカガン・ベグ・ハンの名で新サライで貨幣を発行している (Сафаргалиев, *Распад Золотой Орды*, p. 128; Федоров-Давыдов, “Клады Джучидских монет,” pp. 155-166; Aḡat, *Altınordu (Cuḡi Oḡulları) Paraları*, p. 93)。

¹³⁶ Tang kalīda. ユーチンは「河口」と訳しているが、“kal”とは河岸が陸に向かって入り込んだ部分を指す。

¹³⁷ 『チンギズ・ナーマ』にみえるイナクの用例はこの場所以外には見当たらないが、この場合のイナクも、小野浩がかつてアク・コユンルにおけるイナクの事例研究で示したように、「君主の信任する親臣として傍近く仕えていたこと、さらには戦時も君主直属軍を形成したと考えられる」存在であったとひとまず考えておきたい (小野浩 「Arz nāma」にみえる ināq と bōy nawkar」『アジア・アフリカ言語文化研究』35, 1988, pp. 8-13; Yu. Bregel, “ĪNAK,” *Encyclopaedia of Islam, new edition*).

座の人物であるハンは、私の父であり、私の兄です。彼らのために剣を振るうことを私は怠りません¹³⁸。カラ・キシであるママイがくにの民のすべてを奪っています。

[カン・パイが] われわれを率いてくれるならば、彼 [=ママイ] に対して進軍しましょう。至高なる神¹³⁹が彼 [=ママイ] をわれわれに引き渡すならば、[カン・パイは] 偉大な大ハンとなるでしょう。われわれも馬と衣服を持てる身となるでしょう」と。カン・パイもまたこの言葉を聞いて、初めは遠征に賛同した。のちに改めて協議し、遠征を中止した。「シバン [家] の後戻りの協議」という諺がこの言葉から生じた。

トクタミシュ・オグランは件の人物 [=カン・パイ] に失望し、許しを求めて立ち去った。当時、アラブ・オグランの、ヤードガール・ハン陛下の三世代前¹⁴⁰のアガで、カン・パイとは従兄弟¹⁴¹である、非常に富裕な人物がいたが、彼はトクタミシュ・オグランを呼び寄せ、天幕に住ませた。[アラブ・オグランは] 多くの馬と羊を屠って歓待したのちに言った。「いままでアガであり、われわれの民の長となっていた人物はカン・パイであった。彼が率いて『進軍しよう』と言うことを期待していた。[しかし、] この呪われた人物は考えを翻して、進軍しなかった。これほどの名声を保っているあいだは、彼 [=カン・パイ] の敵 [=ママイ] を倒しに

¹³⁸ men olarnıñ qılıçın çapargā yupanman. “yupanman”とは、動詞“yuban-/yupan-”「怠る」「困難から逃れる」の否定形と考えられる (Clauson, “yuban-,” *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*; M. Erdal, “yupan-,” *Old Turkic Word Formation Vol. II*, Wiesbaden, 1991)。

¹³⁹ Tengri ta‘ālā. 『チンギズ・ナーマ』には、「至高なる神」を示す言葉として、“Allāhu ta‘ālā”, “Ḥudā-yi ta‘ālā”, “Tengri ta‘ālā”が用いられている。とくに最後の“Tengri ta‘ālā”は、遊牧社会のテングリ信仰を反映していると思われ、非常に興味深い。

¹⁴⁰ 写本の欄外に、「アラブ・ハン、ハージーム・ハン、アガタイ・ハン、アラシュ・ハン、ヤードガール・ハン」と補足されているが、アラブ・オグランの系譜としては不正確である。アラブ・オグランの系譜については、訳註141参照。

¹⁴¹ 『ムイヅルアンサーブ』や『選史・勝利の書』では「アラブシャー (‘Arabšāh)」と呼ばれ、ヤードガールの曾祖父にあたる (Anonym., *Mu‘izz al-Ansāb*, f. 23a; Anonym., *Tawāriḥ-i Guzīda, Nuṣrat-nāma*, f. 69b)。彼の兄弟イブラーヒームの孫がアブルハイルである。アブルハイルの『テュルク系譜』によれば、アラブシャーの父フラド (プラド) の死後、アラブシャーとイブラヒームの兄弟はヤイク (ウラル) 河の上流に夏営し、シル河の下流に冬営したという (*Histoire des Mogols et des Tatares*, pp. 183-184)。ヒジュラ暦775 (1373/74) 年に新サライ、776 (1374/75) 年にサライチュク、779 (1377/78) 年、782 (1380/81) 年に再び新サライで貨幣を発行している (Федоров-Давыдов, “Клады Джучидских монет,” pp. 155-166; С.А. Янина, “Общий образ джучидских монет из раскопок и сборов Куйбышевской экспедиции в Болгарах (1946-1958 гг.),” *Материалы и исследования по археологии СССР*, No. 111, Москва, 1962, p. 161; Ağat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paralari*, p. 90)。

行くことは、私自身にはできない。あなたは将来有望で素晴らしい人物になるように見える¹⁴²。(58b) 至高なる神が、あなたの所業を正しく導きますように。このように、私からあなたへの支援は、私の馬を駆り立て〔あなたの〕前に差し出すことである。私には、搾乳用の雌馬が残っていれば十分だ。雄馬と雌馬のうち、あなたの目的に役立つほどのものがあれば、取って行きなさい」と言って、彼の馬を連れて来て、彼〔=トクタミシュ〕の前に差し出した。人々が語るには、〔トクタミシュは〕四、五歳の雄馬と雌馬のほか、六十四頭の子馬を手に入れたという。

それから遠征して、イディル河に到着した。サライの町にはハンもスルターンもいなかった。〔そこに〕やって来て、サライを占領した。そして、金曜モスクで〔人々は〕一致して、フトバを読み、〔トクタミシュは〕ハンとなった。遠征して、キヤト・ママイに向かって進軍した。ママイもまた大軍とともに迎え撃った。激戦が起こった。ママイの軍隊は敗れた。彼自身も捕らわれた。〔トクタミシュはママイを〕殺した。〔トクタミシュは〕彼〔=ママイ〕の民を移動させ、イディル河岸にやって来た。今度は、トクタミシュ・ハンがサライの町でサイン・ハンの玉座において偉大なる帝王となった¹⁴³。

ジャーン・バグ・ハンから残ったノケルや民の多くがママイのもとにいた。〔トクタミシュが〕ママイを殺し、その民とノケル、セウデルを奪ってサライ地方にやって来ると、草原地方のいたるところで(59a) 反抗して頭をもたげていた者たちは、なす術もなく自ら〔トクタミシュのもとに〕やって来て、服従し、ノケルとなった。件のカン・バイもまた〔トクタミシュのもとに〕やって来た。〔トクタミシュは〕彼に、「あなた自身が〔私に〕与えた土地である」と言って、タング河が入江のようになっているところの土地を与えた。しかし、〔トクタミシュは〕アラブ・オグランのもとに行って、会った。〔トクタミシュはアラブ・オグラんに〕右翼を委ね、彼自身

¹⁴² Sen ilgärü umädlig yahşi kişi körüp turur men. ユーチンは、「以前、あなたは将来有望で素晴らしい人物であろう〔と私は思った〕」というように過去形で訳している。

¹⁴³ トクタミシュはジョチ・ウルス右翼の都サライを占領してジョチ・ウルスの左翼と右翼を統合する共通の君主となった。貨幣資料によれば、このサライにおけるトクタミシュの即位はヒジュラ暦781(1379/80)年のことと推定される(Федоров-Давыдов, Клады Джучидских монет, pp. 155-166; Aġat, *Altınordu (Cuçi Oğulları) Paraları*, p. 94)。一方、サライ占領後におこなわれたトクタミシュと宿敵ママイ(ママイ)との決戦は1380年9月のクリコヴォの戦いの直後のこととされる。

のそばに座らせ、競馬を催した。その集いにおいて、ジャトバ¹⁴⁴が詠われたという。

おまえはコカダイにおいてハンとなった おまえは多くのおまえのドウルマンを感わした¹⁴⁵

おまえは小さな胸を膨らませた われわれはおまえに何度も平伏して頭をたれた

どうしてわれわれの尻を追いかけて来たのだ、カン・パイ¹⁴⁶

つまり、[トクタミシュは] アラブ・オグラにさまざまな恩寵と下賜を与えて、命じた。「シバン・ハンに属していた民のすべてをあなたのもとに集めよう。そして、どこであれ主人から逃れた奴隷、ヤサク¹⁴⁷から逃れた民がいれば・・・¹⁴⁸」

¹⁴⁴ ジャトバは歌謡のジャンルの一つと思われる。『諸情報の要諦』によれば、この詩をケマルベクザーデ・ジャハン・パイ・ムルザなる人物が、カン・パイを風刺してネヴァ調で詠ったという（‘Abd ül-Gaffār, ‘*Umdet ül-Aḥbār*, f. 269b）。

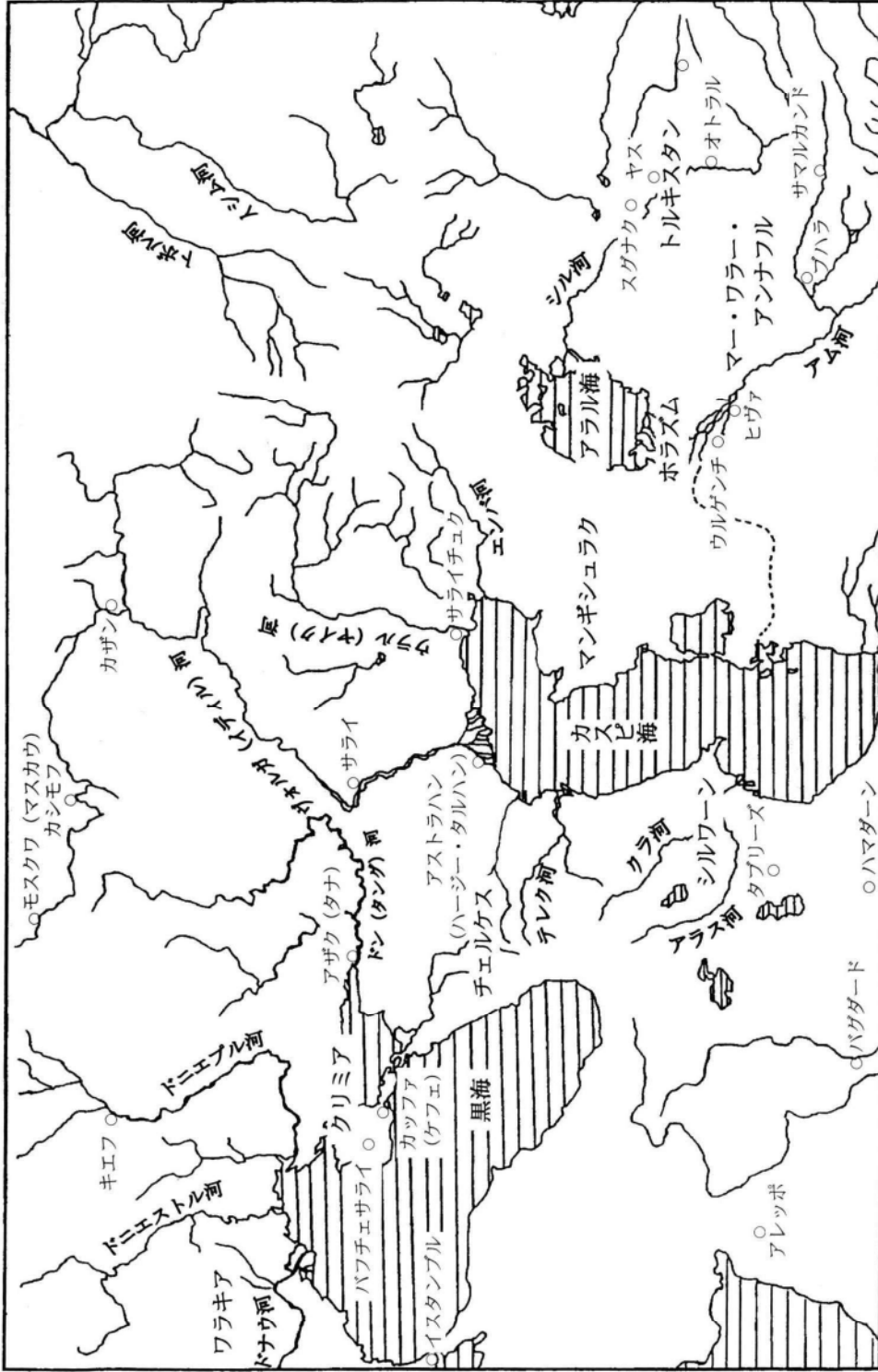
¹⁴⁵ köp Durmang ayartdıng. 訳註146で示しているように、「ドウルマン（Durman）」は部族名であり、『サングラーフ』もこれをウズベグの部族名としている（*Sanglax, A Persian Guide to the Turkish Language by Muhammad Mahdī Xān*, Facsimile Text with an Introduction and Indices by G. Clauson, “E.J.W. Gibb Memorial” Series, vol. XX, London, 1960, f. 225r）。しかし、ユーチンが訳しているように、「尊大になるな、[おまえは民を] 感わした」とも解釈でき、この文は一種の掛詞になっている。

¹⁴⁶ 『諸情報の要諦』では、この詩の各単語の文字ごとに発音記号が付されており、それによりコカダイ、ドウルマンと読むべきことが判明する。さらに続けて、著者アブデュルガッファールはオスマン語で次のようにこの詩を解釈している。「おまえは昔コカダイと呼ばれた場所でハンとなり、とどまった。おまえはドウルメンという名の多くのおまえのノケルをある悪行のために四散させた。おまえはすっかり自惚れて胸を張って強がり、大威張りで歩いた。そのとき、われわれはおまえのもとに行き、助けを求め、立ち寄り、かがんで、何度も平伏した。しかし、おまえはわれわれの懇願を聞き入れなかった。いまや、おまえはわれわれを追いかけて、なぜ恥とも思わずに来たのだ。おまえ、カンパイよ」（‘Abd ül-Gaffār, ‘*Umdet ül-Aḥbār*, f. 269b）。

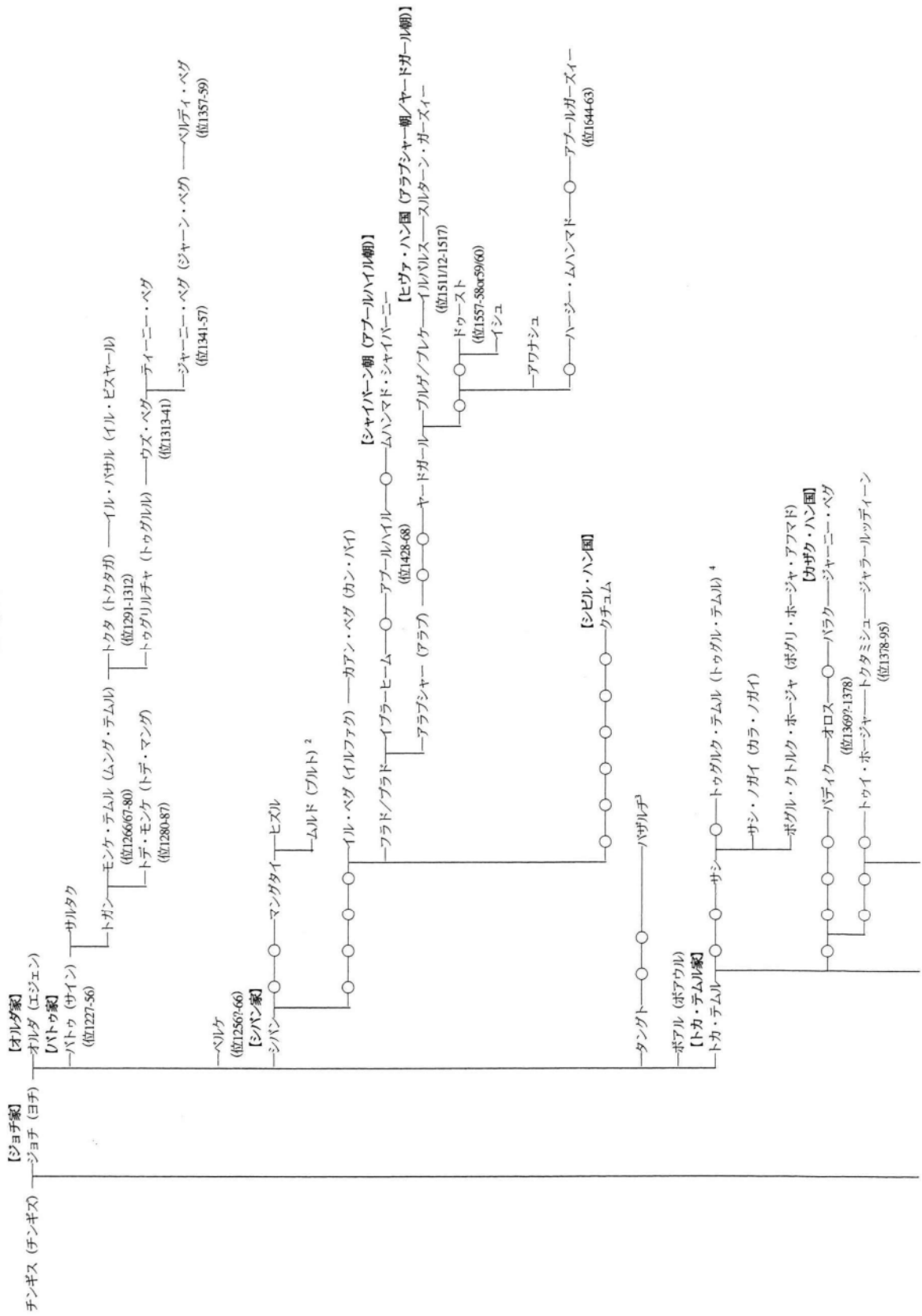
¹⁴⁷ ここでの「ヤサク」は、チンギス・カンによって制定されたといわれる法律の意味ではなく、税の意味。

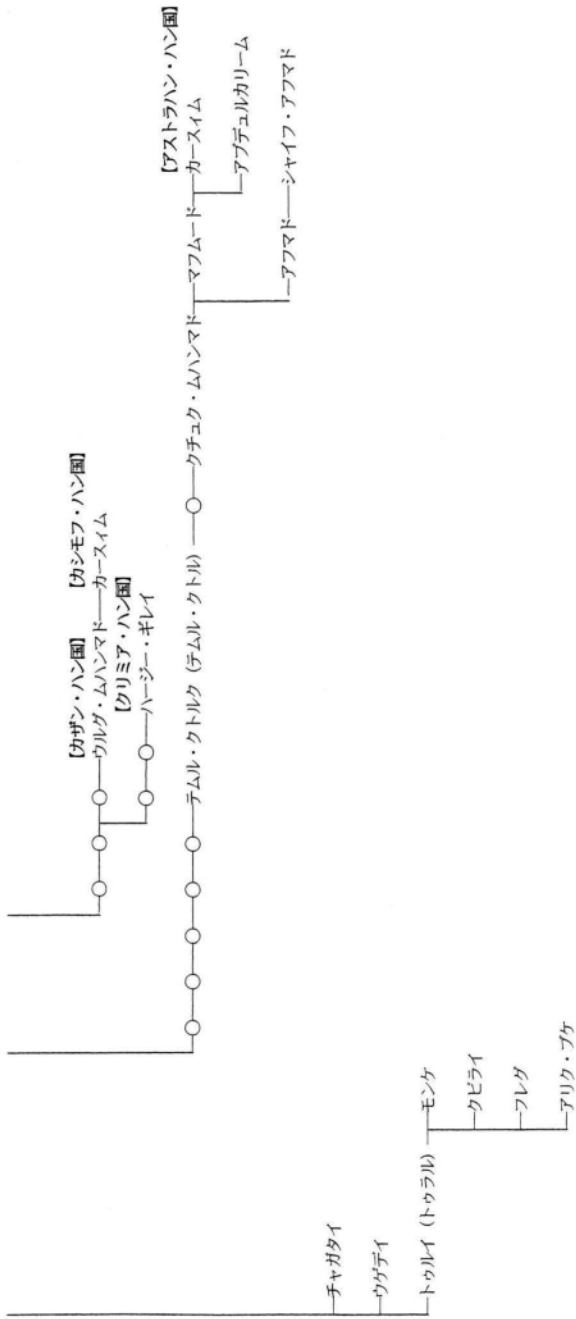
¹⁴⁸ 原文は途中で切れているが、『諸情報の要諦』により、欠落している部分のある程度推測することができる。それによれば、「『どこから、誰かから逃げる者、ヤサクから逃げる者があれば、要するに、そなたのノケル、民とするように』と敵命が下された。現在、集まった民たちに『アラブ・ウランの話』と呼ばれていることは、ウズベグのあいだでは有名である」（‘Abd ül-Gaffār, ‘*Umdet ül-Aḥbār*, f. 269b）とある。

関係地図



関係系図





1 『チンギズ・ナーマ』に現れる人名表記が他の族史料の表記と異なる場合、()で『チンギズ・ナーマ』の表記を付した。
 2 『チンギズ・ナーマ』によれば、ムルド (ブルト) はヒズルの息子。説註111参照。
 3 『チンギズ・ナーマ』によれば、バサルチはボアル (ボアウル) の子孫。説註104参照。
 4 『チンギズ・ナーマ』によれば、トウグルク・テムル (トウグル・テムル) はサシ・ノガイ (カラ・ノガイ) の弟。説註87参照。

索引

人名索引

- アク・フサイン 43
 アダム 3
 アブドゥルカリーム・ハン 45
 アブルマンスール・イル・バルス・バハ
 ドゥル・ハン 4
 → イル・バルス・ハン
 アラブ・オグラシ [=アラブシャー] 52-54
 イシュ・スルターン 5, 6
 イル・バルス・ハン 4, 38
 イルファク・ハン [=イル・ベグ] 51
 イル・ピスヤール [=イル・バサル] 25, 26
 ウゲデイ・ハン 7
 ウズ・ベグ・ハン 10, 25-31, 34, 36, 37, 41,
 42
 ウテミシュ・ハーギー 4
 ウルク・テムル 46, 47, 49, 50
 エジェン・ハン [=オルダ] 7-10, 12-14
 エディギユ・ビー 22
 オロス・ハン 9, 38, 45-51
 カラ・ノガイ [=サシ・ノガイ] 37, 39-41,
 44
 カンクリ・トゥルバイ 35, 36
 カン・バイ 51-54
 キヤト・イサタイ 10, 26-31, 37
 キヤト・ジル・クトル 10, 11, 36, 37
 キヤト・ママイ 36, 44, 52, 53
 キュリュグ・ハン 24
 → ムング・テムル・ハン
 クトゥルグ・ブガ 42
 カイ・ホスロウ 5
 ケネゲス・クガン 45
 ケリン・バヤルシ 25-27
 ケレキン・キュテン・ハン 36
 → ベルディ・ベグ・ハン
 ケルディ・ベグ 42
 コングラト・ナガダイ 43
 サル・タク 17, 21
 サイン・ハン [=バトゥ] 7, 8, 10-14,
 17, 18, 21, 25, 30, 36, 37, 53
 サグシュ・アルトゥク・サユチュ・オグラ
 シ 39
 → ボグリ・ホージャ・アフマド
 サンクスン 29
 シバン・ハン 9-11, 13-17, 30, 36, 51, 52, 54
 シャイフ・アフマド・ハン 16
 シャイフ・サイフッディーン・バーハルズ
 イー 17, 18
 シャイフ・ナジュムッディーン・クブラー
 17
 ジャラールッディーン・スルターン 49-51
 ジャーン・ベグ・ハン [=ジャーニー・ベ
 グ] 11, 34-36, 41, 42, 53
 スイジュト・アラタイ 26, 30, 31
 スイジュト・アリー・ベグ 43

- スマイ 36
- スルターン・ガーズィー・スルターン 45
- タイ・トゥグル・ベギム 11, 36, 41-44
- ダスターン 5
- ダルウィシャク・ムルザ 45
- チャガタイ・ハン 7
- チョナク・フサイン 38
→ フサイン・オグラン
- チンギズ・ハン 4, 5, 7, 8, 10, 12
- テムル・クトル・ハン [=テムル・クトル
ク] 9, 38, 45
- テムル・ベグ [=ティムール] 48
- テンギズ・プガ 11, 36-41
- トゥグル・テムル [=トゥグルク・テムル]
44
- トゥグルル [=トゥグルルチャ] 24-26
- トゥブ・ハン 21
- ドゥースト・スルターン 22, 44
- トゥラル・ハン 7
- トゥル・ハン [=トゥルイ] 7
- トガン 17, 21
- トクタガ・ハン [=トクタ] 24-28
- トクタミシュ・ハン 9, 45-48, 50-54
- トデ・マング・ハン [=トデ・モンケ]
21-24
- 偽ケルディ・ベグ 43
- バザルチ 43
- ハサン 43
- ハージー・ニヤーズ 18
- バジル・トク・プガ 27-30
- バディク・オグラン 45
- ババ・テュクレス 32-33
- フサイン・オグラン 38
- ヒズル・ハン 11, 36, 41-44
- ヒタイ・ババ・アリー・ピー 45
- ブルト [=ムリド] 44
- フレグ・ハン 7, 17-20
- ベルケ・ハン 17-21, 33
- ベルディ・ベグ・ハン 11, 35, 36, 38, 39, 42
- ボアウル [=ボアル] 43
- ボグリ・ホージャ・アフマド [=ボグル・
クトルク・ホージャ] 39-40
- マウラーナー・ムハンマド・ドゥースティ
ー 4
- マリク・アシュラフ 34, 35
- マングタイ 11, 36, 41
- ムハンマド 3, 32
- ムング・テムル・ハン [=モンケ・テムル]
21, 24
- ヤードガール・ハン 4, 52
- ヤフシ・ホージャ 50
- ヨチ・ハン [=ジョチ] 6, 7, 10, 12, 17, 30,
37
- ロスタム 5

地名索引

- アウラク [=ワラキア] 16
- アク・キョル 36, 42, 43

- イディル河 [=ヴォルガ河] 7, 13, 18,
 19, 23, 27, 48, 53
 イラク 7, 35
 ウルグ・タグ 7, 29
 ウルゲンチ 18
 オロス [=ルーシ] 13
 カラ・キョル 18
 キプチャク草原 5, 7, 17, 18, 21, 22, 34,
 53
 クラル [=ポーランド] 16
 クリム [=クリミア] 15, 36, 44
 クルク・イエル 15
 クルズム海 18, 19
 クル・マチャク 19
 ケフェ [=カフファ] 15
 コカダイ・イスプガ 51, 54
 サマルカンド 7, 44, 47
 サライ 11, 36, 41, 43, 44, 53
 サライチュク 18
 シル河 5, 13, 36, 38, 41, 44, 46
 シルワーン 17, 19
 スグナク 17
 草原 [=キプチャク草原] 5, 7, 17, 18,
 21, 22, 34, 53
 タブリーズ 34, 35
 タング河 [=ドン河] 51, 53
 チェルケス 25-27
 チャガタイ [=ウルス] 45, 46
 トルキスタン 44, 45
 バグダード 7
 ハージー・タルハン 16, 18, 45
 バスグンチャク塩湖 23
 ヒサール 7
 ヒンドウスターン 7
 ブハラ 7, 18, 44, 47
 ホラーサーン 7
 ホラズム 7, 43
 マスカウ [=モスクワ] 13, 14
 マッカ 45
 ヤイク河 [=ウラル河] 23

部族・集団名索引

- アルガン 47, 48
 ウイグル 27
 ウズベグ 16, 31, 33, 34, 42, 44, 51
 カザク 42
 カルマク 28
 カルルク 10, 30
 カンクリ 36
 キプチャク 47, 48
 キヤト 10, 15, 26-30, 36, 37, 44, 53
 ケネゲス 45
 コングラト 43
 シリン 45, 47, 48
 スイジュト 26, 43
 ドウルマン 54

ナイマン 41
ヌティン 27
パリン 47, 48
ヒタイ 45

ボイレク 10, 30
ミング 31
ユラルダイ 15

『チンギズ・ナーマ (Čingiz-nāma)』

ウテミシュ・ハージー (Ötämiš Hāji) 著

転写 (Transcription)

(36a)¹ Čingiz-nāma

Bismi Allāhi al-raḥmāni al-raḥīmi. Ḥamd-i nā-maḥdūd wa šanā'-yi [nā]-ma'dūd ol pādšāh-i ma'būdğa kim 'ālamnī wa ādamnī yoqdīn bar qıldi wa 'adamdīn wujūdğa keltürdi wa ādam, 'alayhi al-salām, nī barča maḥlūqātdīn 'azīz wa mukarram qılıp mujhad-i malā'ika wa ḥalīfa-yi rōy-i zamīn qıldi. Andağ ki kalām-i qadīmda yarılıqadī. "İz qāla rabbuka li-l-malā'ikati innī jā'ilu fī al-arzi ḥalīfatan" ki āyat tep, barča 'ālamnī 'adamdīn bar qılğan bir wa bar sen, barčanīng 'aybīnī yapqan šānī' [wa] sattār sen. Taqī ādam oğlanlarındīn ba'zīsīnī anbiyā' wa mursallar qıldi, tā anīng birligini wa barlıgīnī ḥalāyiqğa bildürüp aḥkāmni yürütgäy wa yenä bir gurōhnī pādšāhlar wa ḥākimlar qıldi. Tā rāstlıq bilä ḥalāyiqqlar arasında ḥukm qılıp mīl-i mudāhana qılmağaylar wa birbiringä zulm ziyādaliq qılmağğa qoymağaylar, qāla Allāhu ta'ālā, "İnnä ja'alnāka ḥalīfatan fī al-arzi fa-uḥkum bayna al-nāsi bi-al-ḥaqqi wa lā tattabi' al-hawā fa-yuzillaka 'an sabīli Allāhi" āyat [tep].

Wa šalawāt-i zākiyāt wa taslīmāt-i ṭāhirāt ol maqşūd wa maḥbūb-i lam-yazal Muḥammad rasūl Allāhi, šallā Allāhu 'alayhi wa šallama, üzrā bolsun, kim 'ālam wa ādamnī yaratmaqđin maqşūd anīng zāt-i šarīf wa 'unşur-i laṭīfī erdi. Kamā qāla Allāhu ta'ālā, "Law lāka la-mā-ḥalaqtu al-aflāka [tebän sözin iki jahān čirāgī ḥabīb sen" tedi. "Bu dunyā ham ol dunyā sening dōstluqung üçün yaratdīm"]# wa taqī anīng ālīna wa aşḥāb-i maḥşūşlarīna ki har birisi hidāyat yolıda sitāra-yi burhān wa šam'-i rōşan erdilār. Kamā qāla al-nabīyu, 'alayhi al-salām, "Aşḥābi ka-al-nujūmi bi-aynahum iqtadamatum ihtadayatum" wa 'alā sāyiri al-muhājirīni wa al-anşāri wa al-tābi'īni al-abrāri wa al-aḥyāri ilā yawmi al-qarāri.

Ammā ba'd-i ḥamd-i Ḥudā wa darūd-i rasūl-i arbāb-i zawī al-'uqūl (36b)

¹ ユーヂンによるキリル文字転写は36bから始まっており、36aの転写は欠落している。

hizmatlarida ma'lum bolgay kim bu faqir-i haqir Otamiš Hāji ibn Mawlānā Muḥammad Dōsti ḥazrat-i ḥāqān-i maḡfūr-i maḥdūm Yādgār Hān ḥānzādasining ḥānazād bandazādalarī wa qadīm hizmatkārлариндін² turur. Ol maḥallda ḥazrat-i sulṭān al-a'zam wa al-hān al-mukarram al-maḡfūr bi-'ināyati al-maliki al-mannāni³ Abū al-Manšūr II Bārs Bahātīr Hān, la-ṭayyaba⁴ Allāhu ṣarāhu wa ju'ila al-jannatu maṣwāhu, hizmatlarında bolur erdim. Čūn bular Čingiz Hān nabiralari⁵ erdi wa men bu ḥānadānning ni'mati birlā farwarda bolup erdim [tilār erdim]# ki kamā huwa ḥaqquhu⁶ bilsām, Čingiz Hān oḡlanlaridin ol Dašt wilāyatında kim ḥān bolḡandīn song kim ḥān boldī wa andīn song nā waqtga tegrū nā tartīb birlā kimlār ḥān bola keldilār wa bularning arasında nā türlü uruṣ wa nā türlü mājarālar kečti, bularning barčasīn kamā huwa ḥaqquhu⁷ bilsām. Tawāriḥlar ki kördim, bularning bir azraqinīng atlarī bitiglig erdi. Wa basa⁸, nā iṣ birlā wa nā kayfiyat birlā ḥān bolḡanlarī mazkūr ermās erdi wa köpräkinīng atlarī ham mazkūr ermās erdi. Čūn manga dā'iya ol erdi kim bularning aḥwālīdin kamā huwa ḥaqquhu⁹ bilsām, bu jihatdin ötrū kim fulān kiṣi qarī sözni yaḥṣī bilūr tesālār, al-batta andīn barīp taḥqīq wa taftīṣ qīlur erdim wa 'aql tarāzūsīga muwāzana qīlip ma'qūlin ḥāṭirīmda kizlāp nā-ma'qūlnī barṭaraf qīlur erdim. Andaḡ boldī kim har majlisda qadīm pādšāhlar sözindin söz kečip muṣkilē wāqi' bolsa, biz faqirdin kelip taftīṣ wa taḥqīq qīlur boldīlar wa men bu suḥbat birlā maṣhūr boldīm.

Basa¹⁰, bu aṣnāda ḥazrat-i 'ālī ḥān-i (37a) mamlakat-panāh, zillu Allāhi, sarwar-i salāṭīn-i imān¹¹ wa rahbar-i ma'raka-yi maydān, ḥilāfat taḥtīnīng Kay

² хизматкарларыдын

³ мінан

⁴ табә

⁵ болуб

⁶ кәмахәкқ

⁷ кәмахәкқә

⁸ бәс. "Basa"に関して、ユーチンは、40aに現れる二箇所を除いて、この単語を前文の文末につくものとしている。

⁹ кәмахәкқ

¹⁰ Бәс

¹¹ айман

Ḥusrawī¹² wa šajā‘at maydānīning Rustamī ol ki maydān ičrā har¹³ kün Rustam-i Dastān erür, Sīr Daryāsīčā salāṭīn panāh, Iš Sulṭān erür tā jahān barīnča bolğay ol šarīf-i zātī anīng ma‘dan-i jūd wa karam ham manba‘-i iḥsān erür, ḥallada Allāhu ta‘ālā mulkahu wa ayyada salṭanatahuğa¹⁴ dā‘iya boldī kim Yöči Ḥān oğlanlarīning aḥwālāt wa kayfīyātlarī wa tartīb birlä kimdin song kim ḥān bolğanlarī tā bu waqtğa tegrü nä iş bilä wa nä kayfīyat birlä aralarında nä türlü uruşlar nä türlü mājarālar bolğanın barčasın ma‘lūm qılıp ḥāṭīrlarında saqlarğa rağbat qılıp, ol jihatdīn bu faqīr-i ḥaqīrnī čarlatıp keltürüp andāğ ‘ināyat šafqatlar qılıp bular aḥwāl kayfīyātlarīndīn sorar erdi. Čün ḥikāyat köp erdi, kördilər kim ešitmäk bilä zabṭ qılmaq bolmas, āḥīr ḥukm qıldılar kim “Manga bu ḥikāyatlarnī kitābat qılıp beringiz” tep. Čün faqīr alarnīng bandazādalarī erdim, ḥukmlarīnī özgä qıla almay bē-iḥtiyār bu amr-i ḥaṭṭnī iḥtiyār qıldım, al-ma‘mūr ma‘zūr.

Basa, ğaraž bu muqaddimātdīn ol turur kim bu nuşhanī ḥaqīrdin oquğan wa ešitkän ‘azīzlardīn wa uluğ küčükdin yārānlardīn iltimās ol dur kim bu sözlär bu ḥikāyat ki bu nuşḥa bitildi, hēč daftarda wa hēč tawārīḥda yoq turur barčasın išitmäk birlä bitip turur men, (37b) mašhūr turur kim qulaq ešitkän sözning köpräki yalğan terlär. Nāğāh agar ḥaṭāsī yā ğalaṭī wāqī‘ bolmīš bolsa, ğalaṭnī čıqarıp ḥaṭāsīnī rāst qılsalar. Taqī faqīrnī bu işim ma‘mūr ma‘zūr bilsälär, ‘ında Allāhida zāyī‘ bolmağay, “Innā Allāha lā yuzī‘u ajra al-muḥsinīna”.

Āğāz-i dāstān-i Čingiz Ḥān

Čün Čingiz Ḥān wilāyatlarnī fath qıldılar, bir¹⁵ ṭarafī Bağdād wa bir ṭarafī Hindūstān wa bir ṭarafī Dašt-i Qipčāq, Daryā-yi ‘Idil erdi. ¹⁶Bu wilāyatlarnī tört

¹² ki хусрәви

¹³ бір

¹⁴ сәлтанәтәм-ғә

¹⁵ бу

¹⁶ Бә

[beš]# oğliğa baħšiš qıldı. ‘Irāq wilāyatını Hülāgü Hānga berdi. Ögädäy Hänni öz wilāyatında qoydı. Tulı Hänni öz qaşında saqlar erdi. Čağatay Hānga Buħārā wa Samarqand wa Hūrāsān wa Hıšār wilāyatlarını berdi. Ammā Yöji Hān barča oğlanlarındın uluğraq erdi. ‘Azim laşkar qoşup Dašt-i¹⁷ Qipčāq wilāyatına salğap yibardı. Aqlarıngğa yem bolsun tep, H^wārazm wilāyatını berdi. Čün Yöçi Hān Dašt-i Qipčāq wilāyatına ki mutawajjih boldı, Uluğ Tağ ki maşhūr turur, anga yetişdilär. Bir gün tağ arasında aw awlayı çiqıp erdi. Bir böläk maral keyiklär yoluqdı. Anı qowalap atarda atdın yiqılıp boynı sinip wafāt boldı.

[Āgāz-i dāstān-i] Ejān Hān [wa] Şayin Hān

Ejān Hān bilä Şayin Hān maşhūr turur. Turalı [Hān qızı]# za‘ifasındın toğgan¹⁸ erdi. Yenä on yetti oğul [bar erdi] kim özgä za‘ifalarındın bolup erdi. Bu Ejān birlä Şayin (38a) hānlıqnı bir-birising mura‘āt qıldılar. Şayin Hān küçük erdi, ağası Ejāngä aydı, “Atam ornuğa ağam sen. Hamān atam turur sen. Yat yurutğa bara turur biz. Hān bolğil” tedi. Ejān aydı, “Mening sendin yaşğa uluğ ekānim rāst. Ammā atamız seni bisyār sewip¹⁹ erkä östürüp erdi. Bu çağğa tegrü sening erkālikingni wa maħāllarıngni çekip turur men. Şāyad ki hān bolsam burunqı teg maħāllarıngni çekä almağay men. Taqı aramızda uruş ‘adāwat bolğay. Sen oq hān bolğil. Sening hānlıqıngğa men čidar men. Ammā mening hānlıqımğa sen čidamas sen” tedi. “Ol tegän nä söz bolur. Yosaqlı ağam turganda manga nä oħşar ki hān bolğay men”, tep, ağasığa köp taklif qıldı. Qabul qılmadı ersä, aydı, “Bolmasa bir iş qılalı. Uluğ babamız Čingiz Hān qaşığa baralı. Men ham sözüمنى ‘arz qılayın, siz ham sözüngizni ‘arz qilingiz. Har nä babamız yarlıgı bolsa, aning birlä bolalı”, tedi ersä, bu sözni ma‘qul körüp qabul qıldı. Bir anadın toğgan iki oğul wa özgä anadın toğgan on yetti oğul barçası qoşulup uluğ hān körünişigä bardılar. Bular ki hānning hizmatığa

¹⁷ Дәштә

¹⁸ туған

¹⁹ сүйип

yetişdilär, hān bularğa üç örgä saldī. altun busağalı aq örgäni Şayin Hānğa saldī, kümüş busağalı (38b) kök ordanı Ejāngä saldī, bolat busağalı boz ordanı Şibanğa²⁰ saldī.

Basa, üç yerdä Şiban Hān oğlanları Tohtamış Hān bilä Temür Qutlı wa Oros Hān oğlanlarığa fahr qılıp maqtanurlar. “Biz sizlärدين artuq turur biz” tep. Ol biri örgä turur. Ayturlar, “Atamız Yöçi Hān ölgändin song uluğ babamız Čingiz Hān qaşinga atalarmız bardılar ersä, Ejān birlä Şayindin song bizning atamız Şiban Hānğa örgä saldī. Sizlärning atalaringizğa telägan ham salmadī”, teyürlär. Taqī ikinči ol kim “Öz Beg Hān qahr qılıp Qiyat İsatayğa örüm çeşip²¹ barča oğlanlarını el-günläri bilä qoşun berdi ersä, ol taqī bizni ‘izzat wa hürmat qılıp, “qılıç çapğan yurt açgan är Şibanning oğlanları dur”, tep, iki bağliğ elni bizgä berdi. Biri Qarlıq, biri Böyräk turur. Ol iki elni alıp Şayin [Hān] salğagan yurtumuzda öz hālmizğa qoyğandur. Biz ol Jir Qutlining kāsānasığa taş kerpiç qoyğanda wa taqī oğlı Tengiz Buğaning eşikindä qurlap ötäkinä yüküngändä ol işlärde biz yoq turur biz” teyürlär. Ol kim Şayin Hān oğlanları Berdi Beg Hānda tamām boldī ersä, Jān Beg Hānning anası Tay Duali Begim, “Emdi yurit taqī hānliq Şiban Hān oğlanlarığa tegär”, tep, Manggtay oğlı Hizr Hānni ündätip eltip Saray wilāyatında hān qıldı. “Şayin Hān oğlan(39a)larindin song ol hān tahtında hānliq bizgä teggän dur”, terlär. Bu bir daf’a söz munda taqrīb birlä aytıldı.

Emdi keldük²² yenä awwalqı²³ sözning başığa. Čün Čingiz Hān oğlanlarığa örgälär salıp ol aḥşam suysun qonalğanı hisāb saldī²⁴, tanglası körünüş berdi. On iki qorı tüzüldi wa beğleri bir yak²⁵ birlä olturdılar. Jawalān çekip aş ta’am yeyilgändin song Şayin Hān qaytıp yükündi, taqī aydı, “Atamız öldi ersä, ornığa

²⁰ Шәйбанғә. 以下、“Şiban”に関しては同様。

²¹ четіб

²² кәлдик

²³ ユーチンの転写には欠落。

²⁴ йасады

²⁵ бәйяк

hamān atam sen. Yat yurtğa bara turur biz tep hān bolǵıl” tedim. Qabūl qılmadılar. Nā jihatdīn qabūl qıla almağanlarīn bilā almay men. Bu ‘arziṁnī sizgā aytayīn tep keldim” tedi. Hān aydī, “Şayīn yosaqlī söz ayta turur. Nā üçün qabūl qılmadīng” tedi. Ejān ham yükünip aydī, “Balē hānīm, yaşğa uluǵ ekānim rāst. Wa lēkin atamīz anī bisyār sewip²⁶ ergā östürüp erdi. Tā bu çaqğa tegrū men anīng maḥāllarīn čekkān erdim. Ol mening maḥāllimnī čekkān²⁷ emās erdi. Hān bolsam, burunqī teg anīng maḥāllinī čekā almaǵay men. Aramīzda kīna wa ‘adāwat bolǵay. Sizning közingizgā yaman körinūr men tep, bu jihatdīn qabūl qılmay men. Emdi ol oq hān bolsun. Men anīng hānlīqīngā čīdar men” tedi ersā, hānning bu sözlārgā köngli buzulup oǵlī Yōči Hān yādīgā tüşüp közlārindin yaşlar aqıtıp ikisigā taqī köp du ‘ā’ alqışlar qıldī. Taqī aydī, “Tangla beglār birlā kengāşip sizlārgā jawāb berāli” tedi. Tanglasī beglār birlā kengāş qılıp ong qolī birlā (39b) ‘Idil Daryāsīdagī wilāyatlarīnī hān yosuqīna Şayīn Hāngā berdi. Sol qolī birlān Sīr Daryāsī boynundaqī wilāyatlarnī Ejāngā berdilər.

Basa, Hān körünüşindin qaytıp hān salǵağan wilāyatlarīngā ki keldilər. Şayīn Hān ‘Idil Daryāsī boynunǵa kelgāč čerig yaraǵīn qılıp Oros wilāyatīning šahrī Maskawgā yüridi. Ayturlar, ol yürüşdā Şīban Hāngā otuz ming kişi qoşup qarawīl yibardı. Ōzi songīnča yürür erdi. Üč künlük yer[gā]# ilgārū yürüyür erdi. Maskaw pādšāhī ḥabar tapdī, yüz ellik ming kişi bilrā qarşu čīqdī. Bular ḥabar tapdılar, Maskaw pādšāhī qarşu kelā turur tep. Şīban Hān, “Munīng üstüngā ilgār men” tep aydī. Har nečā beglār man‘ qıldılar, qabūl qılmadī. Üč künlük yerdin ilgār²⁸ salıp, bē-ḥabar yatǵan laşkarīning ičingā enip keldi. Oros pādšāhī basa almay, pādšāhīnī tutdılar. Laşkarīning öltürgānin öltürdilər, qalǵānīn yesir qıldılar. Čandān māl wa yaraǵ jība jawşan tüşüp edi, hēč ḥisābī wa kitābī yoq erdi. Ammā Şīban Hān ḥukm qıldī ki “Har māl wa yaraǵ ki har

²⁶ сүйіп

²⁷ ユーヂンの転写には欠落。

²⁸ Ылғал

kišigä tüšüp dur dast-yābī alıp qalmasunlar. Barčasın keltürsünlär”. Ayturlar, har jinsdin bir ħarman qıldılar, bē-ħisāb ħarman bolup erdi.

Iki kündin song [Ĥān]# yetüšdi, bu fath nuşratnī kördi. Bu māl yarağlarnī barčasını keltürüp çekdilär. Bisyār ħ^w aš ħāl bolup, Šıban Ĥānga köp āfarin qıldılar. Andin song Šıban Ĥān ki kelip körünüslär qıldı ersä, köp türlüg ‘ināyat (40a) šafaqatlar qılıp, soyurğallar etdi. Tüškän māl wa yarağning barusini Šıban Ĥānga soyurğal qılıp, barusın öz laşkarigä baħšiš qıldı. Tanglası köčüp Maskaw wilāyatıgä barıp kirdilär. Bir nečä ay anda bolup, wilāyatning işin güčün zabt rabt qılıp, māl ħarājın qabul qıldurup, daruğä ħākimlar qoyup, mużaffar wa manşür öz wilāyatıngä qaytdılar.

Basa, bular qaytıp kelgünčä, Ejän Ĥānning²⁹ newkärleri iyäsigä ‘āšī bolup Ejän Ĥānnı tamām oğlanları birlä öltürüp erdi. Bu ħabar ki Şayin Ĥānga keldi, uluğ muşibat tutdı. Ewigä tüšüp āb aš bergändin song çerig yarağın³⁰ qılıp bu yağı üstüngä³¹ yüridi. Bular ham turuş bermäy uluğları qaçtı. Özgä el-güning barçasın köçürüp alıp kelip öz eligä qoşdı. Wa taqı har aymaqnı bir beggä qoşun berdi. Tā bu čaqğa tegrü ‘āšī bilä yağıning³² qılıč yalı bolmaqlıqı ol jihatdın qalıp turur.

Basa, Şayin Ĥān bu wilāyatlar bilä bu ellärni ki zabt ki qıldı. Andin song barča qarındaşlarıngä el-gün berip yer yuritlar ta‘yın qıldı. Ammā Šıban Ĥānga el-gün berür wilāyatlar berür čaqıda beğleri birlä kengäşdi ersä, beğleri aydı, “Bu kişi bisyār uluğ iş qıldı. Ĥālā munung köngli ösüp turur. Munga el-gün [wa] wilāyat berip öz qaşingda saqlamağing oħşamağay. Ol otuz ming kişigä, anga yaqın ayırdıng, ol kişini yenä laşkar qoşup baqmağan wilāyatlarğa yibärgil. Har nä wilāyat ki baqdursa, anıng bolsun” tedi. Bu söz ħānga ma‘qul

²⁹ Ежэн-ханны

³⁰ йарағыны

³¹ үстүнінгә

³² тәма билә йалун

kelip, ol tabun qılğan otuz ming kişigä yenä on ming Qiyat Yuraldayni qoşup Qırım Kefäwiläyatlarığa salğap yibärdi.

Āgāz-i dāstān-i Šīban (40b) Hān

Šīban Hānning ‘ajāyib wa ġarāyib işlari bisyār turur. Ol jumla[din] bir işni bu muhtaşarda yād qıldıuq. Ol bir işi ol erdi kim Qırım wilāyatında Qırq Yer tegān hārā āfarin berk qalqa bar turur³³ kim aning berkliki wa mazbūtlıqı ‘ālamda maşhūr turur. Nečā yıllar qabap uruş saldılar, ala bilmädilär. Āhir hukm qıldı kim aḡşamdın³⁴ tang atqunča har nä kim āwāz qılur anı bir-biringä uruşdurung. İki qollarığa alıp bir-birigä čaqışdura başladılar. Wa baqır qazanlarinı wa ṭabaqlarinı wa čanaqlarinı ura başladılar. Qolning içindä bu şadāyī wa ‘alāmatı qopdı ki yer kök zilzilagä keldi, qulaqlar tondı. Qalqa ḡalāyiqłari sarāsar ang tang bolup har sarı yügürüşürlär, “Nä ḡāl boldı” tep, ol aḡşam tang atqunča ol şadā wa ol ġawġā tınmadı. Qalqa ḡalāyiqłari ham yatıp uqlamadılar. Tang³⁵ ki atdı, bas qıldılar. Yenä aḡşam ki boldı, bayaqı teg yenä ‘alāmatı wa ġawġā qopardılar. Tā bir hafta on küngä tegrü iş güclari bu boldı. Qalqa ḡalāyiqłari uyqusızlıqdın ḡarāb bolur erdi. Bu ġāyatġa tegrü ayturlar kim, “Aġar bir iş qılır bolsa, qılır erdilär. Šāyada bularning bu aylarda wa bu künlärdä rasmı wa ‘adatı bu ṭariqa bar bolġay” tep, farāġat boldılar. Čün Šīban Hān bildi ki bular farāġat boldılar, laşkarin yıġdurdı. Ayturlar ki ol qalqa bir yalang qayaning üstündä tururlar. Bu aḡşam ġawġā wa şadānı köpräk qıldı. Qal’aning törüt yanidin čaqlar saldı. Tā tang atqunča bir kişi čiqar čaqlı yol qıldılar. Qal’a ḡalāyiqłari ġawġā wa şadā jihatidin mitin āwāzin ma’lüm qılıp ḡabar-dār bola almadılar³⁶. Yol ki³⁷ tayyār bolġaç darwāzaġa uruş saldılar. Qalqa ḡalāyiqłari yügürüp darwāzaġa keldilər. Bir jamā’at bahādirlarinı ol yolġa ta’yin qılıp tururlar. Ol

³³ туруп

³⁴ ахшамдын соң

³⁵ Та тан

³⁶ бормадылар

³⁷ Йөлөк

yoldin yügürüp (41a) čiqqač qal'agā özin saldılar. Taqı qal'anı aldılar. Ol qal'anı körgän rawandalardın soraduq. Hanüz ol yolning hudüdi bar turur" tedilär.

Andin song Awlaq³⁸ wilāyatı üstüngä yüridilär, Anı fath qıldı. Andin Kural wilāyatı üstüngä yüridi. Kural 'azım uluğ wilāyat turur. Aning köp uruşları boldı. 'Aqibat fath qılıp Kuralnı pāytaht qıldı. Anda wafāt boldı. Taqı hālā Kural pādšāhining awlādı turur. Şayh Aħmad Hān nečä yıl anda tutqun bolup yenä andin salāmat čiqıp öz wilāyatı Hāji Tarhānga keldi. Ol aytur ekän dur, "Bizning Özbeg tã'ifasında har ki omaqlı el ki bar turur, barčasındın anda bar turur. Şıban Hān birlä barıp anda qalıp tururlar" ter.

Basa, Şıban Hān hikāyatın ki tamām qıldıuq, yenä keldük Şayin Hān hikāyatınğa. Şayin Hān Dašt wilāyatıda uluğ pādšāh boldı. Nečä yıllar dawlat sa'adat bilä pādšāhlıq sürdi. Čün ajal yetişip duniyādın naql qıldı ersä, iki oğlı bar erdi. Birining atı Sarı Taq, birining atı Toğan erdi. Sarı Taq özindin burun sekiz yaşda ölüp erdi. Toğan taqı yaş qaldı. Beglär ittifaqı birlä Hülägu Hānga elçi yibärdilär, qılıcsız [gün]³⁹ yaqasız köngläk yibärdilär, ya'ni el qaldı pādšāhları yoq za'ifaları qaldı ärläri yoq. Hülägu Hān bu ħabarnı eşitdi ersä, aţlanıp Şirwān wilāyatınğa keldi. Taqı 'azım laşkar yarağın qılıp, qoşup⁴⁰, yibärdi. Bu laşkar hanüz kelmäkdä biz keldük Berkä Hān, 'alayhi al-raħmat wa al-rizwān.

Āgāz-i dāstān-i Berkä Hān

Mazkür, 'alayhi al-raħma, maşhūr turur, anasındın toğgandın bärü musulmān erdi. Ol maħallda duniyāgä keldi, öz anası süti (41b) taqı özgä kāfir za'ifalarnıng

³⁸ Улак

³⁹ ғылаф

⁴⁰ кошун

sütini emmädi. Bu jihatdın kähinlar birlä bilgälärini baqturdılar. Olar aydılar, “Bu Muḥammad turur. Muḥammadiya kāfir za‘ifa sütini emmäz” tedilär ersä, bir musulmān za‘ifa faydā qilip keltürdilär. Anıng sütini emmä başladı.

Bu wāqi‘adın nečä yildın song atası Yöči Ḥān öldi ersä, kāfirlar arasında yüriy bilmäy Sığnāq šahrınga kelip erdilär. Ol wilāyatğa kim keldilär, šayḥ al-‘ālam Šayḥ⁴¹ Sayf al-Dīn Bāḥarzi ki ḥazrat-i quṭb al-aqṭāb Šayḥ Najm al-Dīn Kubrānıng ḥalifalarındın turur, olarnıng awşāf-i ḥamīdalarını ešitip ištıyāq wa rağbat bilän ḥizmatlarığa kelip nečä yıllar riyāzatlar çekip awliyālar⁴² kamālınıng nihāyatını ḥāşil qilip erdi. Hanüz šayḥnıng ḥizmatlarıda erdilär, bu ašnāda ki Şayın Ḥān öldi, begläri ittifāq qilip Hülägü Ḥānga elçi yibärdilär. Bir kün Ḥazrat-i Šayḥ Berkä Ḥānga aydı kim “Ey farzanda, Ḥudā-yi ta‘ālānıng amrī andağ boldı kim sen barip atalarnıng yurtında pādšāhlıgını [qilgıl” tedi]#. “Sizning ḥizmatda tapğay men. Taqi barip dunyānıng pādšāhlıgğa taqi maşaaqatğa⁴³ özümni salğay men”. Šayḥ aydı, “Agar tafarruqğa⁴⁴ tüşär sen, agar maşaaqatğa⁴⁵ tüşär sen, Ḥudā-yi ta‘ālānıng taqdırına čāra yoq turur” tedi ersä, Ḥān-i mazkūr ham bē-čāra bolup qabul qıldı. Bir nečä kün yarağ qilip čiqdılar. Ḥazrat-i Šayḥ Buḥārādın Qara Kölgä tegrü uzata keldi. Ḥān Šayḥnıng jilāwıda fiyāda keldilär. Qara Köldin Šayḥ du‘ā qilip qaytdılar. Ḥān Dašt (42a) wilāyatına mutawajjih boldılar.

Ḥāji Tarḥān wilāyatında Ḥāji Niyāz tegān dawlatı maşhūr kişi bar erdi. Ol aytur erdi, “Ḥazrat-i Ḥān Qara Köldin sekiz kişi [birlä] čiqip Dašt wilāyatına yüridilär. Ol sekiz kişining har birisi ming ewigä⁴⁶ atam turur” ter erdi. Čün Ḥān, ‘alayhi al-rahma, Qara Köldin čiqip Örgänč[gä] keldi, Örgänčdin

⁴¹ ユーチンの転写には欠落。

⁴² әвлийаларда

⁴³ мәшәккәтинә

⁴⁴ тәфәрруқинә

⁴⁵ мәшәккәтинә

⁴⁶ 「天幕 (ew/öy)」をユーチンは“өй”と読んでいるが、本書においてこの単語はاوと書かれることが多く、“ew”と読むべきと思われる。以下、“ew”に関しては同様。

Sarāyčuq[ğa] bardī. Ayturlar, Sarāyčuqğa barganda beš yüz kiši jam‘ boldılar. Sarāyčuqdīn ki ötdilār, ‘Idil Daryāsīning yaqasīnga teggünčä ming beš yuz kiši jam‘ boldılar. Čün ‘Idil Daryāsīning yaqasīnga kim keldilār, ħabar tapdılar kim Hülāgü Ĥān ‘azīm laškarī bilān Qulzum Daryāsīnī yaqalap kelā turur, tep. Bu yīgīlğan laškarlarī bē-dil bolup barčasī ittifāq qīlīp aydılar kim “Hülāgü Ĥān uluğ ‘azīm pādšāh turur. Laškarī bar. Biz az kiši turur biz. Anga utru čīqīp urušmaqīmiz mašlahat bolmağay” tedilār. Ayturlar, “Ol ħālda Ĥānning elindā bir qapsız qalqan turur erdi. Ba‘zīlar aytur erdi, “Bir qapsız tolğa turur erdi. Bir qoynīng ašuqī ham ħāzīr erdi”. Ĥān bularnīng jawābīnda aydī kim “Men öz rāyīm öz fikrīm bilān yūrigān kiši emās erdim. Sizlār manga ħinanmay turur siz. Ĥālā bu ašuqīnī qalqanīng yā tolğanīng qubbasīnga öz qolīmiz bilān ⁴⁷ qoysaq, ħ^wad toĥtamas. Emdi sizlār birlā bir šarĥ qīlalī. Men bu ašuqīnī bu qalqanīng yā tolğanīng qubbasī üzā urayīn. Agar bularnīng qubbasī üzā omqa tursa ħ^wad biling ki men bu yağīnī ⁴⁸ basar men. Ĥudā-yi (42b) ta‘ālā manga berūr. Agar omqa turmasa, har nā sizning aytğanīngīzdīn čīqmayīn” tedi. Bu jamā‘at ham aydılar, “Agar omqa tursa, biz ham sizgā yak-jihat bolalī, tā jānīmiz barīnča” tedilār. Ĥān, ‘alayhi al-raĥma, ašuqīnī qolīğa alīp Allāhu ta‘ālā yād qīlīp ki urdī, qubbanīng üstündā rāst omqa turdī. Bu ħālatnī kördilār ersā, köngüllārīndin šakk šubhanī ketārip barčasī muĥī‘ wa farmān-bardār bolup, ‘Idil Daryāsīnī kečip Qulzum Daryāsīnī yaqalap Hülāgü Ĥān laškaringā utru yūridilār.

Ol yolda mačaqlar Qulzum Daryāsīdīn šāĥča šaqqča sular čīqar. Yol ol sularnīng bašlarīn kesā kitār. Qumli beyik tepālārī bolur. Faqīr ol yerlārni körgān turur men. Qīr Mačaqlar terlār. Andīn naru daryādīn šāĥča su čīqmas turur. Anīng bir uluğ tefāsi bar. Berkā Ĥānning qarawīllārī ol tefāgā čīqdılar. Šīrwān ĥarafīdīn‘azīm gard faydā boldī. Ĥānga ħabar keltürdilār kim, “Yağīnīng gardī faydā boldī. Hēč učī qīraqī yoq turur” tep. Bu beglār yenā bē-dillik qīla bašladılar. Ĥān aydılar, “Men ol tefāgā čīqayīn. Sizlār mundīn qarap turung.

⁴⁷ Омқа

⁴⁸ Мәһ

Taqi Ҳudā-yi ta‘ālāning qudratini körüngüz. Agar yaği kelip meni alur bolsa, sizlär mundin oq qačğay sizlär” tedi. Bular ham qabul qilip turdilar. Ҳān tepā bašinga čiqdı. Az zamāndin song ol țarafdin laškar faydā boldi. Gurōh gurōh qol qol bolup kelur erdilär. Hamin ki yaqin keldilär, taqi muqābalasinda yasal čekā bašladilar. Čandān yasal čekip turdilar. Laškarning ongı songı yetüšdi, laškarining qirıgın körsä bolmas erdi. Ol ašnāda Ҳāzrat-i Ҳān üç karrat qamčisın sildädi, taqi yağıga utru aț saldı. Hanuz tepädin ašaq enmäyin, Ҳudā-yi ta‘ālā(43a)ning qudrati birlä [yaği] laškarı buzuldı, taqi qačtı. Ҳānning laškarı bu Һālatini kördi ersä, Ҳān songindin aț saldilar. Nečä kün qowip, öltürgänin öltürüp, öltürmägänin asir qilip, qaytdilar. Ațlarin yarağlarin tamām aldilar. Ol tüškän kišilärdin sorar erdilär, “Siz ol tepā bašindaqi bir kišidin nečük qačtingiz”. Olar aytur erdilär, “Ol bir kiši kim tepāning üstündä čiqip turur erdi, aning iki yanında iki uluğ laškar-i bisyar turur erdi. Har nečälär kim qaralar erdük, ol iki laškarning učini taqi qırağini körä bilmäs erdük. Yaraq yasal čekip turğanimiz ol jihatdin erdi. Čün ol tepädäki kiši bizgä aț saldı, ol iki ‘azim laškar ham aț saldilar. Һayāl qilduq kim yer kök üstümüzgä yiqilip kelä turğan teg boldı. Ol jihatdin tura bilmäy qačduq” tedilar. Ҳāzrat-i Ҳānning bu karāmatı Һalq arasinda mašhūr turur.

Ba‘zilar ayturlar, “Hülägü Ҳānning [oğli]⁴⁹ bu laškarning içindä erdi. Bu laškar basilganda öldi. Hēč kiši aning ölgänidin Һabardār bolmadı”. Ammā Ҳāzrat-i Dōst Sulțānning tawāriřlarıda aytup tururlar, “Bu laškar ki basilip bardı, gušsasindin Һasta bolup, iki aydin song öldi” dep tururlar. Wa Allāh a‘lam.

Čün Dašt wilāyatı ki Berkä Ҳānğa musallam boldı, akšarı köp kāfirlarnı musulmān qıldı. Ba‘zilar, on üç yıl, ba‘zilar, on altı yıl pādšahlıq qıldı, tep tururlar. Andin Һaqq raħmatıga wāšil boldı. Ҳāzrat-i Ҳāndin nasl qalmadı. Yuqarıda mazkūr bolup erdi, Šayin Ҳānning iki oğli bar erdi. Biri Sarı Taqi, biri

⁴⁹ Һүлөгү-хан

Toğan erdi. Sarī Taqī atasīdīn (43b) burun sekiz yaşarīda öldi. Toğandīn iki oğul qalīp erdi. Birining atī Tödä Mangī, yenä birining atī Mung Temür. Bu Mung Temür yaş erdi. Ammā Tödä Mangī agarči yigit⁵⁰ yetilip erdi, walē bē-‘aql bisyār dēwāna kiši erdi. Şayīn Hān naslīdīn mundīn⁵¹ özgä kiši tapmayīn, beglār ittifāq qīlīp muşār ilayhinī hān qīldīlar. Mundīn ‘ajāyib wa ġarāyib sözlār, ʔurfa hikāyatlar bisyār turur. Ammā bir iki hikāyat bu muhtaşarda yād qīlīndī.

Ayturlar, bir waqtda Tüb Hāndīn elčilār keldi. Beglāri ittifāq qīlīp Hān-i mazkürgä aydīlar, “Bu ıraqdīn kelgān elči kelip turur. Munung közünčä farēşān [qīlmağīl]# körmāgil. Hānning salāmatlıqīnī sorgīl, taqī elning rafāhīyatlıqīnī sorgīl. Özgä söz sormağīl” tedilār. Yenä aydīlar, “Sizning özüngizgä ihtiyāringiz yoq turur. Sizning ayaqingizgä bir yip taqalī. Taqī tahtning astingä bir kiši kirip ol yipni tutup oltursun. Har gāh ki bizning bu naşihatimīznī unutup farēşān sözlāy başlasangiz, ol yipni tartsun. Ol hālda sözlāmākni bas qīlgay siz” tedilār ersä, ol ham qabūl qīldī. Ayturlar, “Anīng bir yaşşı işi ol erdi. Bā wujūd-i ol dēwānalīq bilä ham⁵² har işni ki beglār ittifāq qīlīp [anga]# tesälār, anī qabūl qīlīp olarnīng sözindīn čīqmas erdi. Ol jihatdīn on sekiz yıl Daşt wilāyatında pādşāhlıq qīldī” terlār.

Edigü Bī, rahmatu Allāhi ‘alayhi, aytur ekān dur, “Duşmaningizgä yaman du‘ā qīlur bolsangiz, bu ʔarīqa du‘ā qīlingiz kim, “Bir hudāya, mening duşmanimnī biligsiz qīlgīl, wa taqī bilgānlarning ham tilingä enmäs qīlgīl” tep, du‘ā qīlingiz” ter ekān dur. (44a) “Agar kiši özi bilmägäy, bilgānlarning sözigä engäy, ol hamān biliglig turur, anīng tafāwutī yoq turur” der ekān dur.

Al-qīşşa, tanglasī elčigä körnüş berdilār. Hānning salāmatlıqīnī sordī, el-

⁵⁰ ユーヂンの転写には欠落。

⁵¹ ундын

⁵² бәдһәм

günniŋ rafāhiyatini sordı. Andin song aydı, “Sizning eldä sičqan köp bolur mu”. Aydı, “Bolur”. Andin yenä sordı kim, “Sizning eldä yağmur köp bolur mu”. Aydılar, “Balē, köp yağar”. Ol yipni tutup olturğan kişi kördi ki farēšan sözläy başladı. Ol yipni tartdı. Hān elčigä aydı, “Sendin yenä söz sorar erdim, walēkin ayaqımdin tarta tururlar” tedi. Beglär fi al-ḥāl elčini alıp qaytdılar, taqı aṭ ton berip uzatdılar. Ol elči qaytıp öz pādšāhi hizmatığa keldi. Ol Hān sordı kim, “Qarındaşımız Hānni nečük kördüng wa nä türlüŋ kişi turur” tedi ersä, elči aydı, “Bir karrat oq körnüş qıldım. Äzgü bilmädım. Ol körnüşdä sizning salāmatlıqıngizni sordı. Taqı el-günnüŋ rafāhiyatlıqini sordı. Yenä sordı kim, “Sizning eldä sičqan köp bolur mu”. Men aydım, “Balē, köp bolur”. Yenä sordı kim, “Sizning eldä yağmur köp yağar mu”. Men aydım, “Balē, yağar”. Yenä aydı kim, “Sendin yenä söz sorar erdim, walēkin [ayaqımdin]# tarta tururlar” tedi. Andin beglär fi al-ḥāl turup qaytdılar. Men ham qaytdım. Hānni körgänim oşal boldı” tedi. Bu hān taqı beglari bu sözgä tafakkur qıldılar, aydılar, “Yağmur köp yağar mu tegäni yaḥşi, anıŋ üçün kim barča ḥalāyiqğa yağmurdin rafāhiyat bolur. Wa taqı sičqanni ham sorğanı yaman ermäs. Andin barçağa ziyān tegär. Ammā (44b) har nečä fikr qıldılar, yipni tarta tururlar tegänini bilä almadılar” tep tururlar.

Yenä bir ḥikāyat kim, Özi ‘Idil Daryāsini kečä čerig aṭlanıp erdi. Čerigdin kim, qaytdı, dēwānalıqı gālib [boldı]. Anıŋ ‘ādati ol erdi, har gāh ki dēwānalıqı gālib bolsa, heč kişining sözingä iltifāt qılmas erdi. Bir yergä kelip tüşdilär. On beş kün ol yerdin [aṭlanmadı]. Čerigning azuqi tükändi. Aḥwällari ḥarāb boldı. Beglari kengäş qıldılar wa taqı aydılar, “Bu ḥālā za‘ifasini unutup turur. Bir yalang yüzli yigitni za‘ifa şūratığa yasap İraqdin körsätäli. Bolğay kim, za‘ifasi ḥātirinğa tüşüp aṭlangay” tedilär. Taqı bir oğlan yigitni za‘ifa şūratığa yasap körsättilär ersä, körgäč za‘ifasi ḥātirinğa keldi. Tüşüp aydı, “Bizning ewdä hammunung teg kişi bar erdi” tep. Fi al-ḥāl aṭlanıp ilğadı. Ba‘zilar bu ḥikāyatni bir türlüŋ qabiḥraq ayturlar. Munāsib körmädük bu daftarda bitilgäy.

Čün ilğalıp ki, saldī, iki künden song ‘Idil Daryāsīning qırağığa keldi. Qatında iki jurasī qalıp erdi. Daryā[nīng yanında] Basğunçaq Tuzlaqīning [yanında] beyik tepä teg tağı bar turur. Har kiši ki, ‘Idil Daryāsīni Busğunçaq yanındin⁵³ kečip Yayıq Daryāsīnga ki, ärtülür, ol tağ bir künlükä yaqın bir kišining yanındin qalmas turur. Hān ki ‘Idil Daryāsīni ki, kečip ilğadi, kördi ki, bir tağ hēč qalmas. Bir iki karrat gāzab birlä baqdī, taqī aydī, “Sen oq bar. Men barman⁵⁴” tep. Atdin fi al-ḥāl tüšdi, yatdı. Qatındaqī juralarī ham čārasiz bolup tüšdilär. Ol kün (45a) tā aḥšam bolğunča anda yatdılar. Čün aḥšam kiši tanımas bigin ki boldī, ol iki jurasīning birisining idrākī bar erdi, faḥmlig kiši erdi, ol aydī, “Hālā keč boldī. Ol ham tüšüp turur. Dam ba-dam dur ki uqlaganda biz aṭlanıp ilğasaq, ol bizni tuymayin qalur” tedi ersä, bu söz hānga bisyār ma‘qūl keldi. Taqī aydī, “Yaḥšī ayding. Aṭ eyärläng”. Eyärlädi. Emdi uqladī tegän waqtda aṭlandī. Taqī ilğadilar, tang atğunča. Tang ki atdı, hēč yerdä körmädi, tā Hān bisyār ḥ^waš ḥāl boldī. Ayturlar, ordasīğa bargandin song köp soyirğallar qıldī, terlär. Bu yanglıg turfa dēwāna kiši bolğan dur.

Ba‘zilar ayturlar, on sekiz yil hān boldī. Ba‘zilar ayturlar, sekiz yil hānlıq qıldī. Andin song inisi Mung Temür yigit yetildi ersä, özi oq inšāf etdi, aydī, “Munčadın berü kiši yoqdin meni hān qilip erdingiz. Sizlär ham qınaldingiz, men ham qınaldım. Emdi inim, šukr, bu čaqlı [ösdi]#. Mening könglüm sizlärğä ḥ^waš turur. Inimni hān qilingiz” tep, özni hānlıqdin ‘azl qıldī. Beglari ham bu sözni⁵⁵ ḥ^waš ḥāl boldilar. Inisi Mung Temürni hān kötärdilär.

Āgāz-i dāstān-i Mung Temür Hān

Bisyār ‘ādil wa zābiṭ ‘āqil pādšāh erdi. Mung Temür zamānında el-gün bisyār

⁵³ йақындын

⁵⁴ бармаймән

⁵⁵ сөздін

rafāhiyatda boldılar. Anıng ġayat yaḫşılıqındin Külüg Hān at berdilər. Andag Mung Temür Külük Hān maşhūr turur. Ayturlar, “On üç yıl hānliq qıldı. Andin song wafāt tapdı”. Andin iki oğul qaldı. Birining atı Toqtağa, birining atı Tuğrul. Atası ölgändin song Toqtağa hān boldı.

Āġāz-i dāstān-i Toqtağa Hān

Bu Toqtağa Hān bisyār uluġ pādşāh erdi. Şayin Hān oġlanlarıda munung muqābalasında pādşāh az boldı. Ayturlar, ol ʔarıqa (45b) mu‘azzam şulanı bar erdi, aʔdın siġirdin qoydın özgä jānwārlardın başġa har kündä toqsan qaban şulanıda bişār erdi. Munung bir oġlı bar erdi, II Bisyār⁵⁶ atliġ. “Men ölgändin song anga hānliq talaşur” tep, öz qarındaşlarin taqı öz naslin barçasin qırdı. Hattā ki inisi Tuğrulnı öltürdi terlər. Ammā ba‘zilar ayturlar, Tuğrul özi ḫastalıqdın öldi. Kelin Bayalın atliġ Tuğrulnung za‘ifası bar erdi. Körlük erdi. Tuğrul ölgän maḫallda bir farzandı boldı. Kördi ki Toqtağa Hān oġlı jihatdın qarındaşlarin qıra turur, bir neçä kişi birlä qaçirip Çerkäs taġıġa yibärdilər. Öz Beg Hān-i maşhūr, ‘alayhi al-raḫma, ol oġlan turur. Az furşatdın song Kelin Bayalinnı Hān aldı. Anı bisyār sewār erdi. Bu qāziyalardın neçä yıllar keçti. Ayturlar, Hānning ‘umri toqsan yaşar erdi. On yaşıda hān bolup erdi, seksän yıl hānliq qıldı. Ba‘zilar ayturlar, “Yigirmi yaşıda hān boldı, yetmiş yıl hānliq qıldı” teyürlär.

Çün āḫir-i ‘umringä yaqın keldi, al-qışsa, “Özümdin song hān bolsun” tep, saqlaġan oġlı özüdin burun öldi. Basa, “Ma‘lüm⁵⁷ turur kim bizdin bir oġlı bolġay, “Mendin song anga hānliq talaşur” tep, öz uruġın tamām qırġan bolġay. Yenä özi ham firlik birlä āḫir-i ‘umringä yetmiş bolġay. Bu oġul taqı özidin burun ölgäy. Anıng nä türlüġ muşibatı wa nadāmatı bolġay”. ‘Āqibat bu ġuşşadın ḫasta bolup ḫastalıqı uzaqġa çekdi. Bir kün töşäkdä yatıp ol yan bu

⁵⁶ Әл-Басар

⁵⁷ Бәси мәлүл

yan aġnap āh urar erdi. Kelin Bayalīn bildi ki nā jihatdīn bē-ṭāqat bola turur, aytdī, “Siz dāyim ḥasta bolur erdingiz. Bu yol nečük bē-ṭāqat bola turur siz” tedi. (46a) Ḥān aytdī, “Nečük bē-ṭāqat bolmayīn. “Yalguz oġlum Il Bisyar⁵⁸ ga ḥānliq talašur” tep, öz uruġumnī tamām qīrdīm. Oġlumnīng ham iši ol ṭariqa boldī. Özümgā ham ölüm yaqīn keldi. Yurutum yat kišiġā tüšār. Bē-ṭāqatlīġim ol jihatdīn turur” tedi ersä, Kelin Bayalīn aytdī, “Sizning yarliġingizdīn taš [men bir] iš qīlīp turur men. Agar gunāhīmnī baġišlasangiz aytayīn” tedi. Ḥān fī al-ḥāl qopup olturup sordī kim, “Nā iš qīlīp erding”. Aytdī, “Ol maḥallda ki iningiz öldi, iningizdīn bir oġul bolup erdi. “Sizni öltürgäy” tep, qačīrīp Čerkās wilāyatīngā yibārip erdim. Ḥālā har yīlda anīng salāmatliq ḥabarī kelā turur. Bu yīl on tört yašında turur. Agar yarliq qīlīp kiši yibārsāngiz, ol kelūr edi bolġay” tedi ersä, Ḥān ḥ^w aš ḥālatdīn andaġ boldī, göyā ki ḥasta bolmaġan teg boldī. Iki ming tümān el Kelin Bayalīngā sewinčā etdi. Tanglasī beġlārni čarlap Qīyat İsatay bilā Sījut Alatayġa qīrq ming kiši qošup Öz Beg Ḥān, ‘alayhi al-raḥma, nī keltürmäkkā yibārdi. Bular barīp kelgünčā Toqtaġa Ḥān wafāt boldī.

Bājīr Toq Buġa tegān Uyġur omaqlī bolur erdi. Qawmī qabilasī köp küčlüġ el erdi. Wa taqī Ḥānning ataliqī erdi. Šayṭān waswasa berip, qara kiši ekān, ol ḥān boldī. Kelin Bayalīnnī taqī Ḥānning özgā za‘ifalarīnī ham aldī. Ba‘zīlar ayturlar, Bājīr Uyġur erdi, Toq Buġa Nutīn erdi. Bu söz ġalaṭ oḥšar anīng üçün kim iki qawmdīn iki ittifaq birlā bir yerdā ḥān bolmaqī muškil turur. Durust(46b)raqī ol turur, atī Bājīr erdi, laqabī Toq Buġa erdi. Al-qīšša, bu Bājīr Toq Buġa ḥān bolup Ḥānning za‘ifalarīn alīp el-günning tamāmīn öziġā musaḥḥar qīlīp erdi.

Bu ašnāda ol barġan beġlār Ḥāzrat-i Öz Beg Ḥānnī alīp [‘Idil daryāsīnīng] qīraġīġa keldilār. Ḥabar tapdīlar ki ḥān öldi, taqī Bājīr Toq Buġa ḥān boldī, barča el-günni öziġā musaḥḥar qīldī, tep. Bu ḥabardīn bisyar parišān wa ġamnāk

⁵⁸ Әл-Басар

bolup kengäš qıldılar kim nä iş qılsaq bolur. Qıyat İsatay aydı, “Burunda qawmı qabılası köp küçlüg kişi erdi. Hälä h^wad tamām hălāyiq anga yüz keltürüp turur. Hälä bu yerdin turup duşmanlıq zāhir qılsaq işimiz rāst kelmägäy. Bir hıla birlä özümüzni anga yetkürä köräli. Andın song har iş hātirimizğa tiläsä⁵⁹ qılur biz” tedi ersä, barčaları bu sözni ma‘qül körüp elçi yibärdilär. Aydılar, “Iyämiz hān yumuşığa yibärip erdi. Ol kişini alıp kelä turur. Bu kişi ham ata atadın⁶⁰ iyälaringiz oğlı erdi. Keräk erdi, andağ qılmasangiz. Emdi özingizgä ohşatıp hān bolup turur siz. Barča hălāyiq sizgä muṭi‘ wa farmān-bardār bolup turur. Bizlär ham sizgä uşandağ muṭi‘ farmān-bardār turur biz. Sarkaš qılurimiz yoq turur. Qılalı tesäk ham küçümüz yetmäs. Bu bir yaş oğlan dur. Eltip qolungizğa beräli. Könglüngiz nä tiläsä, anı qılur siz bolğay” tedilär. “Munıng üçün ew elimizdin jalā’-i waṭan bolurimiz yoq turur” tep, yibärdilär.

Bularning elčisi ki keldi, bisyār šādmān bolup körä alıp siladi. Taqı fī al-hāl kişi qoşup qaytarıp (47a) yibärdi. Aydı ki, ““Olar kelgünčä özgä kişi baş kötärıp hānliq tilägäy” tep, bu işni qıldım. Rawā bolğay mu kim öz iyām oğlı turganda men hān bolayın tegäy men. Pādšāh kelsünlär. Ošta⁶¹ hānliq ošta el-gün barçası olarnıng turur” tep, yibärdi. Bu söz ki olarğa yetüşdi fī al-hāl köçdilär. Bular kelmäsdin burunraq Bājir Toq Buğa beğlari [birlä] kengäşip ittifaq qıldılar, olar ki ṭul ordanıng eşikingä tüşüp yas tutarlar iki karrāt “Jaw jaw” tep yas tutğandın song qol tebrätäli” terlär.

Basa, Qalmaqnıng qā‘idası⁶² ol turur kim pādšāhlari yā uluğlari ötkändä gurōh gurōh qawmlari birlä kelip üç karrat “Jaw jaw” tep faryād qılıp yas tutarlar erdilär. Uluğ Tağda olarnıng arasında ol rasm ham hanüz bar erdi.

Bir kün Öz Beg Hān beğlari birlä tang atmasdın burunraq köçüp erdilär. Bir

⁵⁹ кәлсә

⁶⁰ ата-анадын

⁶¹ Әвшәт

⁶² қағыдәсі

oq suran kiši bularniŋ alnindin kelip ötär erdi. Taqı aytur kim, ““Jaw” tegil, taqı “Ja” tegil” tep, bir karrāt aytıp ötdi. Parwāy qılmadılar. Ikinči karrāt yenä aytıp Qiyat İsatay aydı kim, “Ol nā teganing bolur”. Ol kiši aydı, “Mening atim Sanggısun. Anglağay sen, songgusun” tedi. Qiyat İsatay aydı, “Bir söz bar” tep. Bu kişining artınča bardı taqı aydı kim, “Mengä bu sözni aytgıl. Nā söz turur”. Ol aydı kim, “Bājir Toq Buğa begläri birlä ittifāq qılıp kengäşdilär kim sizlär barıp ordalar eşikigä tüşüp iki karrāt “Jaw jaw” tep yaslağandın song olar qol tebrätip sizlärni qırmaq boldılar. Agar sizlär bir karrāt “Jaw” tegäç⁶³ üstigä yürüp qol tebrätmäsängiz, ⁶⁴ barča halāk boldingizlar. Bu sözümnin (47b) kayfiyatı bu erdi ki sengä aytdım” tedi. İsatay bu ħabarnı beglärigä aydılar ersä, ittifāq qıldılar ki “Jaw” tegäç qol tebrätmäk boldılar. Tanglası yürüp orda olturğan yergä yetdilär. Bājir Toq Buğa orda [içindä]# taht üstündä olturup erdi. Begläri wa newkärleri eşikidä qorlap erdilär. Bular kelip eşikdä tüşdilär. Taqı bir karrāt “Jaw jaw” tep yaslağandın song “Ja” tegäç Bājir Toq Buğanin üstigä qoyuldılar. Tā qaddin⁶⁵ rāst qılğunča İsatay yetip boynunğa çapdı. Başı bir qadam yergä barıp tüşdi. Alaṭay böydä bilä sançıp yoqaru kötärgäç faryād qıldı⁶⁶ kim, “Muna iyängizning başı. Yerlig yeringizdin tebränmängiz” tedilər ersä, barçası sust bolup oltura qaldılar. Andın song bu başnı qor qorğa kezdürüp faryād qılur erdilär⁶⁷, “Qara kişi ħān bolmaq mundin kesilsün” tep. Čün Bājir Toq Buğanı ki öltürdilär Ĥazrat-i Öz Beg Ĥänni ħān kötärip tahtda olturdılar.

Āğaz-i dāstān-i Öz Beg Ĥān

Ĥazrat-i Ĥān ki tahtda olturdı wa el-gün qarār tapğandın song Yöçi Ĥännin özgä anadın toğğan on yetti oğulnin oğlanlarinı çarlatıp keltürüp aydı ki “Sizlär ata oğlı emäs mi erdingiz. Qara kişigä qul-newkär bolup anga muṭı’

⁶³ тегәні

⁶⁴ бардыңызлар

⁶⁵ Тақдын

⁶⁶ ユーゼンの転写には欠落。

⁶⁷ кылура бардылар

bolganča sizlārdin biringiz hānlīq talašsangiz mi⁶⁸. Čün sizlār qara kišining qulluqini newkārlikini qabūl qıldingiz ersä, men ham sizlārni qara kišigä qoşun beräyin” dep, qahr qilip newkār sewdārni wa el-günlāri barčasın Qiyat İsatayğa soyirgal qıldı.

Basa, yoqarıda ham tağrib bilä zikr qilip erdük. Čün Şıban Hān qiličlar çapip yağilar wilāyatlar açip erdi, ol jihatdın (48a) aning oğlanlarini wa nabiralari ni barča halāyiq lar ‘izzat wa ħurmat qılurlar erdilār. Hān ki bu oğlanlarğa qahr qilip İsatayğa qoşun ki berdi, İsatay taqı Şıban Hān oğlanlarığa ataları ħurmatın qilip Böyräk bilä Qarlīq ki iki bağli el turur anı alip⁶⁹ bularnı öz hālīğa qoydılar. Şayin Hān salğagan yurtlarıda bolur erdi tep tururlar. Wa taqı Alaṭayğa Ming bağli el ayirdi. Ol maşhūr turur. Özbeglār arasında ayturlar, “İsatayğa örüm çeşip⁷⁰ Alaṭayğa Ming berdi” derlār ma’nāsı bu turur.

Basa, Hāzrat-i Hān-i mazkūr, ‘alayhi al-raħma, ‘ažamat uluğ pādşāh erdi. Bir nečä yıl pādşāhlīq qilğandın song Allāhu ta’ālānıng ‘ināyatı bolup musulmān boldılar.

Ĥikāyat-i sabab-i Islām-i Öz Beg Hān

Sabab-i Islāmı ol erdi kim ol zamānnıng walılarıdın⁷¹ tört walığa Allāh-i ta’ālādın ilhām boldı kim “Sizlār barip Öz Begni Islāmğa da’wat qilingizlar”. Taqı Allāhu ta’ālānıng amrı bilä Öz Beg Hānnıng eşikigä kelip qorunıng taşıda olturup mutawajjih boldılar. Andağ riwāyat qılurlar, kāfir sāħirlar birlä kāfir kāhinlar Hānğa andağ karāmat körsätip erdilār ki Hānnıng majlisığa sapçaqı bilä [bal] keltürüp qoyar erdilār. Jorgatı wa düstgānlarnı ṭayyār qılur erdilār. Bal özi jorgatığa quyulur erdi wa düstgānğa süzülür erdi. Wa düstgān özi ol kişigä

⁶⁸ эрди

⁶⁹ беріб

⁷⁰ чегіб

⁷¹ турур

barur erdi. Barča bu sāḥir kāhinlarīnī Ḥān özlārigā šayḥ bilip yanlarīda yanaša olturup bisyār i'zāz wa ikrām qīlur erdi.

Ammā bir kün ki bular kelip mutawajjih bolup olturdīlar. Kündāki teg Ḥān majlis ārāsta qīldī. Šayḥlarī birlā kelip barī olturdīlar kündāki teg paymānasī bilā bal keltürdilār. Jorgatī wa düstgānnī keltürüp qoydīlar. Bir ḥayli muddat ötdi kim nā bal kündāki teg jorgatīga quyulur nā düstgānga süzülür erdi. Ḥān bu šayḥlarīnga aydī, “Nā jihatdīn bu bal mu'aṭṭal qalīp (48b) turur”. Šayḥlarī aydīlar, “Ġālib bu yaqīn Muḥammadī kelip turur. Bu anīng 'alāmatī turur” tedilār. Ḥān ḥukm qīldī kim “Qor-qordīn yürüp istāngizlār taqī Muḥammadī bolsa, alīp kelingizlār”. Mulāzimlar čiqīp qor-qordīn taftīš qīldīlar ersā, kördilār qornīng tašīnda tört özgā šūratlīg kišilār bašlarīnī quyu salīp olturur erdi. Mulāzimlar aydīlar kim “Sizlār nā kišilār turur siz”. Bular aydīlar, “Bizlārni Ḥān qašīga alīp [barīngiz]”. Keldilār. Ḥānning közi bularga tüšdi. Čün nūr-i hidāyat bilā Allāhu ta'ālā Ḥānning könglini munawwar qīlīp erdi, bularnī ki kördi, mayl wa maḥabbatī könglündā paydā boldī, sordīlar ki “Sizlār nā kišilār turur, nā iškā yürüyür siz, nā iškā barur siz”. Bular aydīlar, “Bizlār Muḥammadī turur biz. Ḥudā-yi ta'ālānīng [amrī birlā] kelip turur biz kim sizlārni musulmān qīlgaymīz”. Bu ašnāda Ḥānning šayḥlarī faryād qīlīp aydīlar, “Bular yaman kišilār bolur. Bularnī söylämäk [kerākmāz] öltürmāk kerāk” tedilār. Ḥān aydīlar, “Nečün öltürā dur men. Pādšāh men. Sizlārning hēč qaysīngīzdīn farwāyīm yoq turur. Qaysīngīznīng dīnīngiz bar-ḥaqq bolsa, anīng birlā bolur men. Agar bularnīng dīnī nā-ḥaqq bolsa, sizlārning bu kündāki išlāringiz nečük bāṭil bolup mu'aṭṭal qaldī wa sözlāšingiz, qaysīngīznīng dīnīngiz ḥaqq bolsa, anga tābi' bolur men” tedi. Bu iki jamā'at biri-birisi birlā baḥškā tüšdilār, köp ḡawḡā wa jadal qīlišdīlar. 'Āqibat anga qarār berdilār kim iki tanūr qazḡaylar, har birisini on araba süksük bilā qīzdurḡaylar. Bir tanūrğa sāḥirlardīn bir kiši kirḡay, yenā bir tanūrğa bulardīn bir kiši kirḡay. Har qaysī küymāy čiqsa, anīng dīnī ḥaqq bolḡay, tep qarār berdilār. Tanglasī iki uluḡ tanūr qazdīlar. Süksük otunlardīn yīḡip qīzdurdīlar. Birisini sāḥirlarğa ta'yīn qīldīlar. Yenā birisini

musulmānlarğa ta'yīn qıldılar. Bu 'azīzlar biri-birisi birlä murā'at qılışdılar, "Qaysimüz kirär biz".

Bularning birisigä Baba Tükläs der edilär. (49a) Tamām a'zālarini tük basip erdi. Ol aydı, "Mengä ijāzat beringiz. Men kiräyin. Siz mengä himmat tutungiz" tedi. Bu 'azīzlar aning haqqına Fātiha oqudılar. Ol Baba aydı, "Mengä jebä hāzır qilingiz". Jebāni hāzır qıldılar ersä, jebä keydi yalang etkä. Taqī Allāh-i ta'alā yādī talqin başlap tanūr tarafığa mutawajjih boldi. Aytur, Babaning tükläri örä qopup jebāning közläridin čiqip erdi. Bu hālätni barča körär erdilär. Bular yürüp tanūrğa kirdi. Bir qoy etini keltürüp tanūrğa asdılar, aǵzini berkittilər. Emdi keldük kähinlar qışsasına. Kähinlar zaruratdin birisini čiqarip tanūrğa saldı. Hamin ki tüškäč küli kökli yaşilli bolup yalnı tanürning aǵzindin čiqar erdi⁷². Bu hālätni Hān başlıg barča halāyiqqlar kördilär ersä, köngülläri kāfir dinidin ewrölüp musulmānliqğa mayl qıldılar. Wa taqī Babaning talqin aytqan āwāzī tanürdin muttaşil kelür erdi. Qoy eti bişdi tegän maħallda tanürning aǵzın açdılar. Baba mubāarak yüzlärindin terlärini sürtkäč, "Nä aşuqdingiz. Agar bir zamān tawaqquf qilsangiz erdi, işim tamām bolup erdi" tep, tanürdin čiqdı. Kördilär ki jebä joǵ bigin qızıl bolup erdi. Ammā Hūdā-yi ta'alāning qudratı birlä Babaning bir tügi küymäyin čiqdı. Bu hālän Hān başlıg barča halāyiqqlar kördilär ersä, fi al-hāl šayhlarning etäklärini tutup musulmān boldılar. Al-ħamdu li-llāhi 'alā dīni al-İslāmi.

Basa, Berkä Hān zamānında Özbek tā'ifası musulmān bolup erdilär. Olardın song yenä murtadd (49b) bolup kāfir bolup erdilär⁷³. Bu yol ki Öz Beg Hān musulmān boldi. Andin bärü Özbek tā'ifasining Islāmī taǵayyur tapmadı. Ayturlar, Öz Beg Hān yigirmi yıl pādšāhlıq qıldı. Wa ba'zilar ayturlar, on sekiz yıl pādšāhlıq qıldı. Andin Haqq rahmatigä wāşil boldi. "Innā li-llāhi wa innā ilayhi rāji'ūna".

⁷² чықара барды

⁷³ болдылар әрди

Āgāz-i dāstān-i Jān Beg Hān

Čün Hāzrat-i Jān Beg Hān-i mašhūr, ‘alayhi al-rahma, atası tahtında hān boldi, olarnıng ‘adālati, wilāyatı, karāmatı mašhūr turur. Dašt wilāyatında olar bigin ‘ādil wa ‘ābid wa zābiṭ pādšāh kečkāni yoq turur. Atasıning tamām dawlatını hıkm qılır erdi. Andın song Malik Ašraf tegān Tabrız hākimı erdi, šayṭān anı yoldın čıqarıp öz qızını aldı. Anıng qışsası ol ıarıqa erdi kim bir šāhib-i jamāl qızı bar erdi. Bu bad-baht anga ‘āšiq boldi, hēč türlüg āramı qararı qalmadı. Tabrız ‘ulamālarındın sordı ki, “Bir kim ersä dirahıt tiksä taqı anıng mēwası yetilsä, özi mü yesün yā özgägä mü bersün”. ‘Ulamālar aydılar, “Özi ham yesä bolur yā özgä kišigä ham bersä bolur” tedilər. Bu bad-baht hıwad maqşüdi öz qızı bolgan dur. Bu söz birlä turur taqı qızını alur.

Basa, Tabrız ‘ulamāları Hānga ‘arz-dāšt qıldılar kim, “Bu kiši bizdin bir mağlaṭ birlän bir mas’ala ešitdi. Biz anıng ğarazını bilmäyin zāhirına hıkm qılduq. Munıng ğarazı hıwad qızında bolğandur. Hālā qızını aldı. Bu hıwad kāfir boldi. Bizlär ham kāfirğa banda bolup turur biz. Bu kün Pādšāh-i Islām turur siz. Emdi sizgä wājib turur kim musulmānlarnıng başındın [bu kāfirni] daf‘ qılğay siz”. Ayturlar, Hān ikindü namāzın oqup masjidda olturup erdi (50a) kim ‘arz-dāšt keldi. Fı al-hāl ‘ālimlarnı yığıp sordı ki “Sizlär bu sözgä nä aytur siz”. Olar ham aydılar, “Balē, sizgä wājib turur bu kāfirni musulmānlar başındın daf‘ qılğay siz”. Bu sözni ešitdi ki masjiddın yenä ewigä barmadı. Üč kün ol masjidda olturup yarağın qılıp atlandı. Taqı barıp Malik Ašrafni öltürüp Tabrız wa ‘İraq wilāyatlarını aldı. Muddat-i otuz yıl pādšāhlıq sürdi. Andın song Allāhu ta‘ālā rahmatingä wāşil boldi. “İnnā li-llāhi wa innā ilayhi rāji‘ūna”.

Āgāz-i dāstān-i Berdi Beg Hān

Oğlı Berdi Beg atası tahtında hān boldi. Bu Berdi Beg basē bē-‘aql wa bē-

mulāhaza kiši erdi. Özining qarındaşlarını taqı öz oğlanlarını mengä hānlıq talaşur dep öltürür erdi. Ayturlar, Qanlı Tulubay tegän qawmı qarındaşı köp küçlüg kiši erdi. Bu Hānnıng atalıgı erdi. Har nä aytsa anıng sözindin çıqmaz erdi. Anıng bir oğlı bar erdi Şumay atlıg. Alp atğučı erdi. Ol Şumay Jāni Beg Hān zamānında qaraqçılıq qılur erdi. Anıng jihatıdın Hān, ‘alayhi al-raḥma, anı öltürüp erdi. Tulubay ol oğlınıng açığıdın bu kengäşni ol berür, aytur erdi, “Sen hālā yigit turur sen. Bu maḥalldağı toğğan oğlung teng ösär sen kündin küngä qarır sen. Ol yigit bolur. Tangla sen qarıgandın song hānlıgıngni talaşıp alğay. Hālā bularnı öltürä turğıl. Qaçan qarıy başlasang andın song qoyğay sen” ter edi. Ol bē-dawlat ham munung sözigä kirip öltürür erdi. Bu sababdın anga Keräkin Kütän Hān terlär.

Anıng zamānında tafriqalıq bisyār boldı. Ong qolnı Qiyat Mamay alıp el-gün birlä Qırımğa ketdi. Sol qolnı (50b) Qiyat Jir Qutlı oğlı Tengiz Buğa Sır Daryası boynığa alıp ketdi. Hān öz içki[läri] birlä Sarāyda boldı. Üç yıl Sarāy şahrında pādşāh boldı. Andın song wafāt boldı.

Tay Tuğlı Begim ki maşhūr turur, Öz Beg Hānnıng za‘ifası Jāni Beg Hānnıng anası erdi. Ol maḥallda ol ḥayāt[ta] erdi. Şayın Hān naslıdın hēç kiši qalmadı. Begim-i mazkūr aydı kim “Emdi hānlıq bilä yurıt Şıban Hān naslığa tegär” tedi. Ol maḥallda Şıban Hān neslidin Mangūtay oğlı Hızr Oğlan terlär erdi. Şayın Hān salgagan Mangūtaynıng yurtı Aq Köl tegändä bolur erdi. Özgä oğlanlarındın ayrılıp yurtında bolmaqınıng jihatı yoqarıda zıkr qılıp turur biz. Al-qışsa Begim-i mazkūr Hızr Oğlannı ündätip eltip Şayın Hān tahtında Sarāy wilāyatında hān qıldı. Bu söz munda mawqūf bolsun. Biz keldük Qiyat Jir Qutlı oğlı Tengiz Buğanıng eşikindäki oğlanlarnıng ḥikāyatlarığa wa Tengiz Buğanı öltürüp Qara Noğay hān bolğan ḥikāyatlarığa.

Ol maħallda ki Öz Beg Hān, ‘alayhi al-raħmat, ġažab qilip⁷⁴ Yöči Hānning özgä za‘ifasindin bolğan on yetti oğulning nabiralarin el-günlari bilän Qiyat İsatayğa ki qoşun berdi. İsatay-i mazkür ölgändin song oğli Tengiz (51a) Buğağa qaldı. Bu Tengiz Buğa basē bē-adab zālīm kişi erdi. Bu oğlanları ki aning pādšahlığı naslindin erdi⁷⁵ bularğa bisyār jafālar wa bē-adablik qilurlar erdi. Netäk ki atası Jir Qutli üstingä ‘imārat salur boldı, “Ustād qalsun” tep, özgä kişini aralaşdurmay ‘imāratning tamām işin bularğa buyurdı. Hattā ki su taşığan kerpiç qoyğan wa kerpiç taşığan bular erdi. Gāhisinīng arqası yağır bolup erdi, gāhisinīng töşi yağır bolup erdi, gāhisinīng ayaqı toğrulup jafālar yetişip erdi, terlär. Wa Allāhu a‘lam.

Wa taqı har şabāh kelip bu oğlanlar eşikdä qorlar erdi. Har gāh ki şuħbat tutsalar, öz qolığa ki ayaq kelür erdi, sāzandalar ötäk küyin qopsalar erdi. Hamin ki orda içindä ki ötäk küyin qopsay başlasa, bilür erdi,⁷⁶ ki beg qolığa ayaq keldi. Bu oğlanlar bōrūklarin salıp yükünüp tururlar erdi, ol zamānga tegrü ki ayaqnı içkay taqı ötäk qopsamaq bas bolğay. Andin song bōrūklarin keyär erdi.

Ayturlar bir maħallda qış çillası erdi, bu bad-baħt şuħbat tutup erdi. Nāgāh ötäk āwāzı keldi. Bu oğlanlar kündäki dastūrča bōrūklarin salıp yükündilär. Kün sowıq erdi. Hısayn Oğlan tegän Temür Qutluq Hān Oros Hān atalarinīng qarındaşlarindin bolur erdi. Qulaqı üşüdi, taqı yarusindin köpräki tüşdi. Andin song anga Čonaq Hısayn terlär erdi.

Al-qışsa, čün Berdi Beg Hānning pādšahlıqıdın üç yıl keçti, törtünči yıl küznüng (51b) başında Hān ħasta boldı. Hānning zaħmatı uzaq çekdi. Qış tüşdi. Tengiz Buğa-yi mazkürning qışlaqı dāyım Sır boyıda bolur erdi.

⁷⁴ ユーチンは誤って、前段落の“Ол мәһәлдә Шайбан-хан нәслидін Маңқ[ут]ай оғлы Хызр-”という文章をここで繰り返している。

⁷⁵ айырды

⁷⁶ ол зәман

Basa, bu hikāyatlar bu sözlär ki emdi zıkr qılğum⁷⁷ turur, Hažrat-i Hān-i mağfūr wa marhūm, tayyaba⁷⁸ Allāhu šarāhu wa ju'ila al-jannatu mašwāhu, Hažrat-i Il Bars Hāndin ešitip turur men. Olar qarī sözini yaḥšī bilür erdi.

Berdi Beg Hānning pādšāhliqıdın üç yıl ötdi. Törtünči yıl qış küz bašındın Hān ḥasta bolup erdi. Tengiz Buğa Sır boyın qışlap erdi. Hānning ḥastalıq ḥabarī muttaşıl kelür erdi. Kün şabāḥ waqtı erdi. Bu oğlanlar Beg ešikidä qorlap erdilär. Tengiz Buğa ol kün saḥar waqtıdın qopup şuḥbat tutup erdi. Sāzandalarī yaba' qopsap yırawlarī yırlar erdilär, wa ğawġā wa našātlarī bar erdi. Şabāḥı künläri sowıq erdi. Bir güräng aṭ mingän böri terisi tonnı jora keygän aṭı tonı boğa ğutğan kişi ordağa yaqın kelip tüşdi. Taqı aṭın küymä⁷⁹ arabasınga baġladı, oq şadaqını araba üstigä qoyup ordağa endi. Qopsay turğan sāzandalarī yırlay turğan yırawlar barçası bas boldı. Muddat-i madid bu el [ki] majlisda⁸⁰ dur çıqmadı. Andın song yenä sāzandalar qopsay başladılar wa şuḥbat darkard boldı. Bu taşġarīgi oğlanlar bu ḥālatnı mulāḥaza qılıp fikr qılurlar erdi kim, “Āyā, bu kelgän kişi nä kişi bolġay ekän, bu el majlisda⁸¹ bu тариқа mutahayyir boldılar” teyü.

Basa, bu oğlanlar arasında iki kişi bar erdi. Birisi ‘āqıl wa dānā erdi, anıng atın Bögrı Hwāja Aḥmad terlär erdi. Ba'zilar ayturlar, Saġışi Artuq Sayıči Oğlan (52a) terlär erdi. Yenä birisi alp atġuçi bahādur erdi, andağ kim ol zamānda hamġası yoq erdi. Anıng atın Qara Noġay terlär erdi. Songqıda şuḥbat darkard boldı, az furşatdın song Qara Noġayğa ündäkçi keldi kim, “Beg sizni čarlay dur” tep. Bu qopup Beg qaşığa endi. Biraz furşat yenä ḥāmōš boldılar. Andın song yenä şuḥbat darkard boldı.

⁷⁷ кылум

⁷⁸ табә

⁷⁹ кәрім

⁸⁰ бу әл-мәжлидә

⁸¹ бу әл-мәжлидә

Bögri Ҳ^wāja Aḥmad-i mazkūr bu oğlanlarga aydi kim, “Kördingiz mü. Berdi Beg Ḥān ölüp turur. Ol kelgān kiši Ḥānning ölgān ḥabarīn keltürdi. Bularning bir aš bīšim ḥāmōš bolup mutahayyir bolgānī ol sababdīn erdi. Qara Noğaynī čarlap algānī ol turur, anī ḥān kōtārūrlār, taqī tanglaqī kōrnūšdā barčamīznī qīrarlar. Bizning išimiz muškil boldī. Bu kün aḥšam birlā bir iš qīla alsaq, alduq, qīla almasaq, tangla barča ölümgā barğu turur biz”. Čün bular dāyim sīnap erdilār, munung kengāši özgā bolmas erdi, Barčasī aydīlar, “Siz ham nā türliḡ maslaḥat kōrsāngiz, andaḡ qīlalī” tedilār. Ҳ^wāja Aḥmad-i mazkūr aydīlar, “Mašlaḥat ol turur. Noğay mundīn keč aṭlanur. Ewining yarī yolīga yetkändā tutup aṭdīn yīqīp mazbūt baḡlap bīčaqnī boḡzīnḡa qoyup bu ḥabarnī sorali. Agar rāstīn aytīp bizning birlā ittifāq qīlur bolsa, biz ham anī ḥān kōtārāli. Wa agar rāstīn aytmasa, andaḡoq öltürāli, tegmāmiz bir yangā qačali” tedi ersā, barčasī bu söznī ma‘qūl kōrüp ‘ahd wa šarṭ qīldīlar.

Čün namāz-i šām yaqīn boldī ersā, Noğay Beg majlisīnda qaytīp aṭlandī. Bu oğlanlar ham birgā aṭlandīlar. Kōrdilār kim kündāki teg čihrasī ṭawrī ṭariqasī özgāčā bolup erdi. Kündā kōrnūšdin qaytīp ewgā barḡunča oynay külā barur erdi. Bu kün hēč kišigā söz ün qatmay bē-ittifāq barur erdi. Ewlārining yaru yolīga yetdilār ersā, qarangḡu boldī. Fī al-ḥāl jīlawlap aṭdīn yīqīp mazbūt baḡladīlar. Noğay-i mazkūr aydī, “Menim ḡunāḥīm nā turur, mundaḡ qīla turur siz”. Ҳ^wāja Aḥmad aydī, “Sendin bu söz sorar biz. Agar rāstīn aytsang, bizning [birlā] (52b) ittifāq qīlsang, seni ḥān kōtārāli, taqī ‘ahd-i wafā wa šarṭ qīlalī. Sening newkārčilikīngdin boyun tolgamaḡay biz. Agar rāstīn aytmasang, taḥqīq bilgil ki seni bu yerdā öltürā biz”. Aydī, “Nā sora siz⁸². Sorung”. Ҳ^wāja Aḥmad aydī, “Rāstīn aytḡīl, ol kelgān kiši nā aytdī. Wa taqī seni čarlap Beg nā aytdī”. Aydī, “Ol kelgān kiši nā aytḡanīn bilmān. Meni čarlap hēč söz aytmadī” tedi ersā, Ҳ^wāja Aḥmad-i mazkūr aydī, “Ey bād-baḥt, sen aytmasang, men aytayīn. Ol kiši ki keldi, Ḥānning ölgānīn ayta keldi. Taqī seni čarlap algānī ol erdi kim,

⁸² Hə cəpəp ciz

sanga aydī kim, “Seni hān kōtārāli. Walē rāzī bolgīl kim, qarındašlarēngnī öltürāli. Agar öltürmäsāng, olar sendin uluĝ turur, sening hānlīqīnggā boyun sunmas dur” tedi. Ham ol iškā rāzī boldung. Emdi andaĝ qīlmaĝīl. Bu kišidin nā ĥorluqlar körmädük erdi. Sen bizning ičimizdā hān bolup bizgā baš bolsang, anī öltürüp andin açĝimīznī almaq āsān turur. Mening bu sōzümni qabūl qīlgīl” tedi. “Seni hān kōtārāli. Kōtārip sanga newkār bolurĝa nā čaqlī ‘ahd wa šart tesāng, ičāli. Bizning ölärimizgā sabab bolup qiyāmatĝa tegrū yaman atnī betingā alma” tedi ersā, ol taqī aydī, “Andaĝ bolsa, qolum ayaqimnī bošatēngiz. Sizgā rāstīn aytayīn” tedi. Qol ayaqīn bošatdīlar ersā, qopup olturup H^wāja Aħmad-i mazkūrgā köp taħsinlar qīldī. Aydī, “Bu sōzlār firāsāt birlā aydīng, hēč ĥilāfī yoq turur. Wa barčasī rāst erdi. Emdi siz meni hānlaturĝa⁸³ yaħšī ‘ahd wa šart qīlsangiz, mašlahatēngizdīn čīqmayīn” tedi. Bular (53a) taqī ‘ahd wa šart qīldīlar. Nogay aydī, “Tangla ki körnüškā barur biz, ol meni čarlap almaq turur. Andin song sizlārni čarlatur. Sizlār ewĝa kirĝač qatīndaqī kišilār [birlā] bolung, men özi birlā bolayīn” tedi.

Tanglasī körnüškā ki⁸⁴ bardīlar, ol aytĝanča Noĝaynī čarlap aldīlar. Bir zamāndīn song bularnī čarlay kiši keldi. Bular ham yaraĝlanīp kelip edilār. Barčasī köngli yürüp ešikdin kirĝač qol tebrātdīlar. Noĝay Tengiz Buĝa bilā tördā yanaša olturup erdi. Fī al-hāl basa alĝač bašin kesdīlar. Böydā birlā sančīp tašĝaru alīp čīqdīlar, taqī čarlatdīlar, “Özĝa kišigā ölüm yoq turur. Yerlig yeringizdin tebrānmāngiz” teyü. Ĥalq yerlig yeridā qarār tapĝandīn song Noĝaynī aq kizĝa salīp barča ittifaq birlā hān qīldīlar.

Basa, Mangĝtay oĝlī Ĥīzr Ĥān birlā Qara Noĝay ikisi bir ay ičindā hān boldīlar. Walē Ĥīzr Ĥān Sarāy ičindā taħtīnda hān boldī, Qara Noĝay Sīr boyunda sol ičindā hān boldī. Emdi keldik Ĥīzr Ĥān ĥikāyatigā.

⁸³ ханланурĝа

⁸⁴ ユーヂンの転写には欠落。

Ol maħallda ki Tay Duġli Begim Ҳizr Ҳānni čarlap eltip Sarāy taħtında ki Һān qıldı, Öz Beg Һān birlä Jāni Beg Һāndin qalğan altun termāni örgä soldı. Ayturlar, Begim sačini qarağa boyadı, Һānğa tegärgä mayl qıldı. Һānniң ham alurğa mayli bar erdi. Walē Naymandin Qutluğ Buğa atliğ begi bar erdi. Ol rāzi bolmadı. Aydı, “Ol Öz Beggä Jāni Begkä iħtiyār bola kelgän kiši turur. Sen bir turi öskän kiši turur sen. Sendin sīn tapar. Almaġil”. Anıñ sözigä kirip almadı. Čün Begim almasun tuydı ersä, burunqi(53b)din ‘izzat wa Һurmatni kam [qıla] bašladı. Һān ham anga öčäšip altun termāni buzup qazaqlarınğa üläšdürür boldı ersä, ešitip Һānğa Begim kiši yibardı, aydı, “[Andağ] qılmasunlar. Һān bolğan kišigä altun kümüş tapulmas yer dägül dur⁸⁵. Ammā burunqi yaħšilar yasağan ‘imāratni buzmasun” tedi. Anıñ sözingä kirmäyin buzup üläštürdi. Begim taqi anga açiğ qılıp beġlarining içkisini yığıp Һānni qowaladı. Һān qaytıp yenä Aq Kölgä keldi.

Begim-i mazkūr bir kišini Keldi Beg dur tep Һān kötärdi. Özbeglar anga yalğan Keldi Beg terlar. Barča Һäläyiqar aydılar, “Keldi Begni Berdi Beg öltürüp erdi. Ol nečük tirildi” tep.

El anga boyun sunmadılar ersä, Boawul naslidin bolur erdi, Bazarči atliğ, anı Һān kötärdilər. Ol maħallda uluğ beġlardin Sijud ‘Alī Beg bar erdi. Bu “Bazarčiğa boyun sunman⁸⁶” tep, anı čarlatıp keltürüp öltürdi. ‘Alī Begning bir Һasan atliğ oġli bar erdi⁸⁷. Ol qačıp Qongrat Nağaday oġli Aq Һusayn ki Һ^wārazm wilāyatiniң Һākimī erdi, bu Һasan anga yegän bolur erdi. Anıñ qašigä keldi ersä, Begimning bu nāšāyasta Һarakätlaridin Һarāsān bolup Begimdin oray gardān boldılar.

Bu ašnada Aq Һusayn Ҳizr Һānğa elči yibardı aydı, “Ol za‘ifa šaytān yolığa

⁸⁵ алтун-күмуш та болмас йәрдә гүл дур

⁸⁶ сунмаз

⁸⁷ Әлі-бәғниң Барчын оғлы бар әрди

kirip munung teg ʎarakātlar qīla turur. Biz ʎ^wad (54a) andin oray gardān bolduq. Siz agar baš bolup himmat tutsangiz üstüngä yürür biz” tedi. Ol ham açıǵlıǵ kiši erdi. Minnat ‘azīm. Aq ʎusayn ʎ^wārazm laškarin tamām ittifaq qilip Aq Kölǵä barip ʎān-i mazkürni ʎān kötärip Sarāy wilāyatī üstüngä yürüdi. Sarāy üstündä uruš boldi. Bazarçi Begim qolǵa tüšdi. Begimni bir qar küymäǵä mindürüp aǵzini mazbüt qildilar. Taqi bir emläg ayǵir atni yekip baš⁸⁸ salıǵǵa qoya berdilar. Bu emläg aq arabani alip qačip yablarǵa qačularǵa urur erdi, tā Begim halāk boldi. Özbeklar, “Tay Duǵli Begimni ʎizr ʎān öltürüp turur” terlar kayfiyatı bu turur.

Ani öltürüp ʎizr ʎān ikinçi nawbat ki ʎān boldi. Bir yıl yarım pādšāhliq qilip erdi. Burut atlıǵ bir yaman oǵli bar erdi. Atasining ʎānliqıǵa čıdamay ǵāfilliqda sančip öltürüp özi ʎān boldi. Iki üç kün kečmäy ani ham öltürdilär. Andin song buzuqluq wāqi’ boldi. Har kiši țarafǵa baš kötärdi. Sarāy šahrī buzuldi. Elning köpi Qırım wilāyatigä Qiyat Mamay qašıǵa ketdi. Bu söz munda tamām boldi, yenä keldik Qara Noǵay ʎikāyatigä.

Qara Noǵay Sır boyında üç yıl pādšāhliq qildi. Turkistān wilāyatlarinǵa ʎukm qilur erdi. Üč yıldin song wafāt tapdi. Inisi Tuǵli Temür tegän (54b) ʎān boldi. Faḥr-i Salātin ʎāzrat-i Döst Sulțāndaqi daftarda aytip erdi, “Bu Tuǵri Temür uluǵ pādšāh boldi. Samarqand⁸⁹ Buḥārāǵa ʎukm qilur erdi”. Ammā muddat-i pādšāhliqi ma’lüm ermäs.

Andin song Badiq Oǵlan oǵli Oros ʎān boldi. Bu Oros ʎān uluǵ pādšāh boldi. Tamāmī-yi Turkistān wilāyatlarıǵa ʎukm qilur erdi. Toḥtamış ʎān bilä Temür Qutli ʎānǵa ol maḥallda ʎānliq tegmäy dur erdi. Bu ʎān-i mazkürning ʎizmatında bolur erdilär. Čün ‘ināyat-i azali birlä farr-i pādšāhi Toḥtamış Oǵlanning zātında paydā erdi, ʎānning newkärleri taqi özgä ʎalāyiqları ihtiyār

⁸⁸ бәш

⁸⁹ Сәмәрқандә

bu Ođlan-i mazkūrgā paydā⁹⁰ erdilār. Bu bašdīn Hān-i mazkūr yaman aylanīp Tohtamīš Ođlanğa qaşd qīlur boldī.

Basa, Hīṭay Baba ‘Alī Bī tegān Hājī Tarḥānlī ‘Abd al-Karīm Hānning uluđ begi wa nā’ib kišisi erdi. Hān-i mazkūr ölgāndin song Makka ṭawāf qīlīp hājī bolup keldi. Andīn song Sulṭān Ġāzī Sulṭān ḥizmatlarīnğa keldi. Čün Ḥazrat-i Sulṭān ki qarī sözgā bisyār mā’il erdilār, olar sordīlar ki “Tohtamīš Hānī Oros [Hānning] ešikidin čīqğandur terlār. Ol nā ṭarīqa bolğandur” tep sordī ersä, Hājī-yi mazkūr ham bu ṭarīqa ḥikāyat qīldīlar. Faqīr olardīn ešitip turur men. Olar aydī, ol maḥallda Oros Hān Tohtamīš Ođlanğa qaşd qīlur boldī, andīn burunraq Kenägäs Quğan ođlı Darwišak Mīrzanī Čağatay pādšāhlarīnğa (55a) elči yibārip erdi. Širin... yibārip erdi. Bular barīp ki ... nīng ordasī Sīr boyunğa inip erdi bu⁹¹... yaqalap Hān ordasīnğa kelūr erdilār. Kūn sowīq erdi. Sīrning ... kömāl turup erdi. Urīk Temūr Mīrzađin songīraq kelūr erdi. Nāgāh Sīrning yaqasīnğa közi tüşdi. Qamīšning tübindä kördi, bir yalang terlik keygān yigit sudīn čīqīp yüz töbān tüšüp iki bükülüp qaltīray yatīp erdi. Könglidä aydī kim, “Munga ḥ^wad bir iš tüškān kiši turur” tep, yortup Mīrzanīng songīđin yetdi. Taqī aydī, “Mīrzam, ‘ināyatīng bolsa. Hān yarlıqī birlä ḥizmatīng qīlīp kelip erdim. Esān amān el ičingā endingiz. Orda[ğa] yaqīn keldingiz. Hānğa körünüş qīlur kiši men emās men. Meni emgätip eltip netkāy siz. Men mundīn oq ewimni istāsām bolğay mu” tedi ersä, ol Mīrza ham ijāzat berdi. Qaytīp bayaqī yergā keldi. Aṭīn yīrağda bađlap özi yayağ bolup keldi. Ol kišining qašīnğa keldi, kördi ki yüz töbān tüšüp qaltīray yatur erdi, ayaqīda yaman yarasī bar. Bu sordī ki, “Nā kiši sen”. Aydī, “Nā sorar sen. Men bir emgāklig qul men” tedi. Bu aydī, “Men emgāklig ekāningni körä turur men. Atīng aytğīl”. Aydī, “Men Tohtamīš Ođlan men. Burun ham bolsa sezīp yürür erdim. Saḥar waqtī erdi. Hānning kišilāri kelip ewimni bastīlar. Atqīlaša čīqdum, kördüm ki kiši köp dur. Daryā yaqīn erdi. Özümni daryāğa salđim. Suğa tüškāndä atđilar. Bu yaramiz

⁹⁰ ма’ида

⁹¹ 写本が破損しており、この単語の全体は見えないため、正確な読みは不明である。

ham (55b) ... tebrānūr čaqli majālīm yoq ...tedi. Urīk Temūr aydī, “Mening istā ...i erdi. Bašīm mālīng, sening yolīngda qoyayīn. ... [Hūdā-yi] ta‘ālā sanga dawlat bersā, meni unutmāgīl” tedi. Aydī, “Har qačan Hūdā-yi ta‘ālā dawlat bersā, seni dawlatimgā šarik qīlīp sening sōzingni wa oyungni wa ötuningni özgā qılmağay men” tep, anı içdi. Urīk Temūr fī al-ḥāl enginindāki körpā tonīn čıqarıp mazbūt čulğadı taqī alıp yürigān azuqīndīn alnīnda qoydı. Taqī, “Meni “Kelmās” tep könglūngni yaman qılmağīl. Men ki tirig dur men, al-batta sanga kelūr men. Seni ušbu yerdin tapayīn” tep, aṭlandī. Taqī ewigā keldi. Taqī öz uruğlarīndīn bir nečā kišilār bilān ittifaq qīlīp aṭ wa yarağ alıp keldilār. Taqī Oğlan-i mazkūrni Temūr Beg qašīngā alıp qačdılar. Temūr Beg ol maḥallda yangī ḥurūj qīlīp Buḥārā⁹² wa Samarqandni alıp erdi. Bular ki keldilār bisyār yaḥšī körā aldī. Jarrāḥlar keltürdilār, ayaqīndaqī bašaqnī aldurup köp türlüg dārūlar qıldurdī. Tā bir aydīn song yaḥšī boldī.

Ol qīš Beg ḥizmatīda boldilār. Yaz ki açıldı, Beg bir nečā kiši qoşdı. Hān yaylağga čıqıp bara turganda el songīdīn kelip yīlqī qowdılar. Qowgīn yetip uruşup bularnī basdılar. Yenā Beg qašīga qaytıp keldilār. Al-qīşsa Toḥtamīš Oğlan qazaqlap yürüp Hānning elidin yīlqī sūrār erdilār wa el čapar erdi.

Wa Širin Barīn Argun Qīpčağ Toḥtamīš Oğlannīng ata atalarīndīn⁹³ bayrī ellāri erdi. Bu Oğlan-i mazkūr qazaqlap yürüp bu ṭarīqa (56a) işlār qīla başladī. Bu ellārdin da‘wālīg yigītlār barīp anga newkār bolup madat berā başladilār. Wa Oros Hān ham bu ellārgā bisyār jafā qīla başladilār. Bular ham Toḥtamīš Oğlangā kiši yibārdilār, “Sendin sabab Hān bizgā ġazab qīlīp mālīmīznī ala turur. Bašīmīznīng ham ḥaṭarī bar. Bir türlig bizning fikrimīznī qılmasang, sening yaqang bizning elimiz[dā] turur, qiyāmat kūn bolsa” tedilār. Oğlan bu sōzni ešitdi ersā, köngli farēšān bolup kelgān kišigā aydī, “Bu yīl yaylağ[ga] čıqar siz⁹⁴, elning songīnī ala köčūng. Fulān sunung boyīda yaylangīz, taqī

⁹² Бухар

⁹³ ата-аналарындын

yaraġingizni qilip turungiz. Inša'a Allāh, ölmäsäm, özümni yetkürgüm turur sizlārgä" tedi.

Yaz ki boldi, Hān yaylaġga köçdi. Bu el taqi el songidin köçär erdilär. Yaylaġga ki yetdilär, har el bir suning boyinga ketdilär. Bu ellär boljal qilgan suning boyiga kelip yayladilar. Halayiqqlar qimiz icip 'ayš 'iŝratga mašġul erdilär. Bu ašnada Tohtamiš Oġlan bu elning icingä kirip keldi. Čün boljal birlä yaraġlarin qilip erdilär, har kathuday bir telägangä iki aq yekip oġul qizlarin mindürgäč qaçdilar 'Idil Daryasi tarafiġa.

Iki künden song Hānga ġabar keldi, Toqtaqmış Oġlan kelip Širin Barin Arġun Qipčaġ (56b) wa taqi säyir ellärini alip 'Idil Daryasiġa yawuŝdi, tep. Hān qašındaqi kišilar bilän fi al-ġal atlangač taraf janibga kiši çapdurup özi bu ellär songin qowġin saldi. Hānning elläri yaylaġga tarqap erdi. Aqning semirġan maġälli erdi. Hān qatig ilgadi. Yiraqdaqi ellärning çerigi Hānga yetüŝä almadı. Yaqındaqi ellär ham atları semizläp qaldi. Bularġa yaqin yetkän maġallda Hānning qašında kiši az qaldi, iki yüz kiši köp bolsa üç yüz kiši bolġay erdi. Kün uyaġip bara turġanda bu qaçqan elning qarawuli Hānning çangini körüp keldilar. Bular kengäŝ qildilar, "Olarınġ atlarınġ boyni qatip kelä turur. Az köp yetmäŝ har qačan yetsä, bizġa tegär. Biz ġ^wad ölüm kišisi turur biz. El wa 'ayälimiz üstidä ölar biz. Bolmasa, toġmimiz qurumasun. Aqġa barur teg oġlanlar bilä Jaläl al-Din Sulţänni taqi Yaġši Ĥ^wājanı saylap çiqarip iki yol bilür kiši olarġa ta'yin qilali. Ün ešitilür çaqli yerdä örkünning yanında alip yürüsünlär. Agar yaġini biz bassaġ, süränimizdin bilip bizning artimizdin kelġaylär. Agar yaġi bizni bassa, süränidin ma'lüm bolġusi turur. Turmay qaça körsünlär" tep, ittifaq qildilar. Jaläl (57a) al-Din Sulţän bašlig Yaġši Ĥ^wājanı, Urık Temürning uluġ oġli erdi, yenä bir neçä aqġa barur teg oġlanları saylap çiqardilar. Jaläl al-Din Sulţän ol maġallda on iki yašında erdi. Yaġši Ĥwāja ham ol qadar erdilär.

⁹⁴ чықарбиз

Bular bu kečä örkünning yanında ün ešitilür čaqlı yerdä barur erdilär. Tünnüŋ bir baħšı ötkändä Hān bularnıŋ songıdın qowıp yetdi. Köčlärin alnığa salıp songıdın yasap barur erdilär. Hān aydı, “Bu kiši bizdin köp turur. Nāgāh tang atıp bizning azlıqimızni körsä, yaman turur. Kečä birlä oq šawqun salıp tegäli. Azlı köplükimizni bilmäs qačar” tedi. Taqı sürän salıp tegdilär. Bir tolğašıp ki čiqdılar, Urık Temürning atı yiqıldı, faryād qıldı. Aytur, “Ey nāmard Tohtamiš. Söзимiz andağ mu erdi. Qaytıp tolğansa, men qaldım” ter erdi. Ol ašnāda ol oğlanlar aqlarınıŋ bašin tartıp bir yerdä turup qulaq salur erdilär. Yaħšı H^wāja atasınıŋ ünin tanıdı taqı Jalāl al-Dīn Sulṭānğa aydı, “Kördüŋ mü. Ol mening atam turur. Anı tüšürdilär. Dam ba-dam sening atangni ham tüšürülär. Atalarımızdın ayrulıp biz yaš oğlanlar nä kün körgäymiz. Biz ham birgä ölgänimiz yaħšırağ dägül mu” tedi ersä, Allāhu ta’ālāning nušratı birlä Jalāl al-Dīn Sulṭān taqı bu oğlanlar qolğa tafa kelip har birisi bir šer-mard⁹⁵ yigit bigin sürän salıp bir yol⁹⁶ ač saldılar. Hān kišiläri qorqup tizginläri tardılar. Tohtamiš Oğlan qayta salğaç kelip ki tegdilär, kötärip alğaç ketdilär. Hān kišisining aqları(57b)ning boynı qatıp kelip erdi, köp kišisini šundaq oq aldılar. Walē songında qolı bar tep hawf qowa almadılar. Tüškän kišini šol yerdä oqlaš qıldılar, ač yarağın alıp örkinläriŋing songınča yüriy bardılar.

Hānning qolğa tüšmägän kišiläri awlaq čiqıp yığıldılar. Körärlär hēč yerdä Hān yoq. Bularnıŋ birisi aydı, “Men Hān qašında erdim. Hānni iki kiši kelip tutğanin kördüm. Andın song nä bolğanin bilmädim” tedi. Qaytıp uruš yeringä keldilər. Hānning ölügin tapdılar. Fi al-ħāl hānning mayyitın alıp qayta ewläriğä qačdılar. Olar ham songimizdın Hān yetär tep ol yanğa qačtılar. Oros Hānning ölgän[ning]# kayfıyatı bu erdi. Özbeglär ayturlar, “Jalāl al-Dīn Hān oğlan ekänində bir böläk oğlanlarnı başlap atası birlä Oros Hān uruša turganda kündäländin ač salıp Oros Hānni basıp öltürdi” teyürlär. Jihatı bu turur.

⁹⁵ шірә-мәрд

⁹⁶ йола

Tohtamış Oĝlan Oros Hänniŋ ölgänin bilmäy qačıp Kokaday Yisbuĝa tegän yaḥşı otlaglı sulaĝlı yerlär bolur, ol yergä bardılar. Ol ašnāda Šiban Hān nabiralariŋdın Ilfäk [Hänniŋ] oĝlı Qan Bay öz elining içindä hān bolup Kokadaynı yaylap erdi, anıŋ qašıĝa keldi. Ol taqı bē-ḥurmatlik qılıp anga (58a) Tang kalıda orun berdi. Bir nečä kün yürigändin song ināqlariŋdın ayturdı, “Erklig kiši Hān öz atam aĝam turur. Men olarnıŋ qılıčın čaparĝa yupanman⁹⁷. Qara kiši Mamay ḥalq ulusniŋ tamāmıdın alıp turur. Bizgä baš bola bersälär, anıŋ üstigä yürisäk. Tengri ta‘älā anı bizgä bersä ḥ^wad ‘ažimat uluĝ hān bolur erdilär. Bizlär ham aḥlı tonlı bolur erdük” tedi. Qan Bay ham bu sözni işitip bašda aḥlanurnı oḥšatıp erdi. Songıĝa qayta kengäš etip aḥlanurnı bar-ḥaraf qıldı. “Šibanniŋ kerı kengäš” tep bu sözdin laqab qaldı.

Čün Tohtamış Oĝlan bay-i mazkürdın nā-umēd boldı ersä, ijāzat tilāp ketär boldı. Ol maḥallda ki ‘Arab Oĝlan Ḥazrat-i Yādgār Hänniŋ üçünči aqası turur⁹⁸, Qan Bay bilän iki uya oĝlanları erdilär, bisyār mun‘im mälwār erdi, Tohtamış Oĝlanni čarlap ewgä tüšürdi. Aḥlar qoylar köp öltürüp yaḥşı miḥmāndārlıqlar qılıgändin song aydı, “Ḥälā aĝa bolup elimizgä baš bolup turĝan kišimiz Qan Bay erdi. Bu bašlap aḥlangay tep umēdwār erdük. Bu bad-baḥt kerı bardı, aḥlanmadı. Bu čaqlı at atanıp turĝanda munung yaĝisini buzup ketmäkni özümĝä oḥšata almay men. Sen⁹⁹ ilgärü umēdlig yaḥşı kiši körüp turur men¹⁰⁰. (58b) Tengri ta‘älā işingni ongdur qılıĝay. Bu yolı mendin sanga himmat madat ol turur, yilqimni sürüp alıĝa salayın. Saĝar biyälärim manga qalsa yetär. Aḥdın baytaldın har nā yolungĝa yarar čaqlı bolsa, alıp ketgil” tep, yilqisın keltürüp alnı¹⁰¹ ĝa saldı. Ayturlar, dönän bešlik aḥdın wa baytaldın bašĝa altmış tört ḥanalıĝ aḥ tutdılar.

⁹⁷ йубан мән

⁹⁸ [‘Arab Hān, Hājim Hān, Aĝatāy Hān, Araš Hān, Yādgār Hān]#

⁹⁹ Сени

¹⁰⁰ көрнө туруп сән

¹⁰¹ анлыĝә

Andin atlanip 'Idil Daryāsiga keldi. Saray šahrında hān sulṭān yoq erdi. Kelip Sarayni aldı. Taqī ādina masjidında ittifāq qilip huṭba oqup hān boldi. Atlanip Qiyat Mamay üstüngä yüridi. Mamay ham 'azim laškar bilä qaršu keldi. Qatig uruṣ boldi. Mamayning laškarı basıldı. Özi ham qolğa tüşdi. Öltürdilär. El-günün köçürüp 'Idil Daryāsining boyınğa keltürdilär. Bu karrat Tohtamiš Hān Saray šahrında Şayin Hān tahtında uluḡ pādšāh boldi.

Jāni Beg Hāndin qalğan newkär [ellär]ning köpi Mamayda erdi. Mamayni öltürüp el-günün wa newkär sewdärin alip Saray wilāyatınğa ki keldi, Dašt wilāyatındaqı har qayda (59a) sarkaš bolup baš kötärıp yürgän kişilär čarasız bolup özläri kelip muṭi' bolup newkär boldılar. Qan Bay-i mazkür ham keldi. Anga "Özüng bergän ornung dur" tep, Tang Kalıda orun berdi. Ammā 'Arab Oḡlanğa turup körüşdi. Ong qoldin yürütıp özingä yanaşa olturtup yariš sundurdi. Ol majlisda jatba yirlar ayturlar.

"Sen Kokadayda hān bolding Köp Durmang ayartding
 Kökräčiking köpdürding Biz sanga köp tungqayip baš urduq
 Kötimizdän netä kelding Qan Bay"

tep, yirlar erdi. Al-qışsa köp türlüg 'ināyatlar wa soyirgallar 'Arab Oḡlanğa qilip hukm qildi kim "Şiban Hānğa ta'alluq el-gün barı sanga yigilsunlar. Wa har qayda h^wājasidin qačğan qul wa yasagdin qačğan el bolsa..."

Studia Culturae Islamicae No.94

イスラム文化研究第94集

MEIS Series No.10

中東イスラーム研究教育プロジェクトシリーズ第10集

『チンギズ・ナーマ(*Čingīz-nāma*)』
ウテミシュ・ハージー(*Ötämiš Hāji*)著
解題・訳註・転写・校訂テキスト

川口琢司・長峰博之編 菅原睦校閲

2008(平成20)年11月30日

発行 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 府中市朝日町3-11-1

Tel. 042-330-5600

印刷 藤原印刷株式会社

©Takushi KAWAGUCHI, Hiroyuki NAGAMINE, Mutsumi SUGAHARA

ISBN 978-4-86337-017-3

سن کوکادیدا خان بولدینک کوب دورمانک ایارتدنک
کوکراچکنک کوبدوردنک بز سنکا کوب تونک قایب بش اوردوق
کوتیمز دان ننا کلدنک قان بای

تیب یر لار ایردی القصه کوب تورلیک عنایت لار و سویرغال لار عرب اوغلانغه
قلیب حکم قلدی*³⁴⁶ کم شیبان خانغه تعلق ایل کون باری سنکا یغلسونلار و هر قیدا
خواجه سیدین قجغان قول و یساغدین قجغان ایل بولسه...

بخت کری بردی اط لانمادی بو جقلى آت آتانیب تورغانده*³³⁷ مونونک یغیسی نی بوزوب کتماکنی اوزمکا اوخشاتا المای من سن³³⁸ ایلکارو امید لیک یخشی کشی کوروب ترور من*³³⁹ (58b) تنکری تعالی ایشکنی اونکدور قلغای*³⁴⁰ بو یولی من دین سنکا همت مدت اولتورور یلقمنی سوروب النغه سلاین سغار بیا لاریم منکا قالسا یتار اط دین³⁴¹ بیتلدین هر نه یولنک غه یرار جقلى بولسا الیب کتکل تیب یلقى سین کلتوروب النیغه³⁴² سلدی ایتورلار دونان بش لیک اط دین و بیتلدین باشغا التمش تورت طانا لیغ اط توتدیلار

اندین اط لانیب عدیل دریا سیغه کلدی سرای شهرینده خان سلطان یوق ایردی کلیب سراینی الدی تقی آدینه مسجدینده اتفاق قلیب خطبه اوقوب خان بولدی اط لانیب قیات ممای اوستونکا یوریدی ممای هم عظیم لشکر بیلا قرشو کلدی قتیغ اوروش بولدی ممای نک لشکری بسلدی اوزی هم قولغه توشدی اولتوردیلار ایل کونین کوجوروب عدیل دریا سی نک بوینغه کلتوردیلار بو کرت تختمش خان سرای شهرنده صاین خان تختنده اولوغ پادشاه بولدی

جانی بک خان دین قالغان نوکر [ایلار]# نک کوبی مامایده ایردی ماماینی اولتوروب ایل کونین*³⁴³ و نوکار سودارین الیب سرای ولایتنغه که کلدی دشت ولایتنده قی هر قیدا (59a) سرکش بولوب بش کوتاریب یورکان کشی لار جاره سز*³⁴⁴ بولوب اوزلاری کلیب مطیع بولوب نوکار بولدیلار قان بای مذکور هم کلدی انکا اوزونک برکان اورنونک دور تیب تانک کالیده اورون بردی اما عرب اوغلانغه توروب کوروشدی اونک قولدین یوروتیب اوزینکا یاناشا اولتورتوب*³⁴⁵ یارش سوندوردی اول مجلسده جاتبا یرلار ایتورلار

337 تورغاندین

338 سنی

339 کورونا ترور سن

340 اونکدور بولغای

341 اطین

342 انلیغه

343 کوندین

344 جار سز

345 اولتوروب

اولار هم سونکی مز دین خان یتار تیب اول یانغه قجتی لار اوروس خان نک اولکان [نک]# کیفیتی بو ایردی اوزبک لار ایتورلار*³²⁹ جلال الدین خان اوغلان ایکانینده بر بولاک اوغلانلار نی باشلاب آتا سی برلا اوروس خان اوروشا تورغانده کوندالاندین اط سلیب اوروس خان نی بسیب اولتوردی تیورلار جهتی بو ترور

تختمش اوغلان اوروس خان نک اولکانین بلمای قجیب کوکادای یسبوغا تکان یخشی اوتلاغلی سولاغلی یر لار بولور اول یر کا بردیلار اول ائناده شیبان خان نبیره لاریندین*³³⁰ ایلفاک [خان نک]#*³³¹ اوغلی قان بای اوز ایلی نک ایچنده خان بولوب کوکداینی یایلاب ایردی انک قشیغه کلدی اول تقی بی حرمت لیک قلب انکا (58a) تنک کالیده اورون بردی بر نجه کون یوریکاندین سونک ایناق لاریندین ایتوردی ارکلیک کشی خان اوز آتام آغام ترور من اولار نک قلجین جبار غه یوبان من قرا کشی ممای خلق اولوس نک تمامی*³³² دین الیب ترور بز کا بش*³³³ بولا برسالار انک اوستکا یوریساک تنکری تعالی انی بز کا برسا خود عظیمت اولوغ خان بولور ایردی لار بز لار هم اطلی تونلی بولور ایردوک تیدی قان بای هم بو سوز نی اشتیب بشدا اط لانور نی اوخشاتیب ایردی سونک یغه قیته کنکاش ایتب اط لانور نی بر طرف قلدی شیبان نک کری کنکاش تیب بو سوز دین لقب قالدی

جون تختمش اوغلان بای مذکور دین نا امید*³³⁴ بولدی ایرسا ایجازت تلاب کتار بولدی اول محلدا که عرب اوغلان حضرت یادکار خان نک اوگونجی آقا سی ترور*³³⁵ قان بای بلان ایکی اويا اوغلان لاری ایردیلار بسیار منعم مال وار ایردی تختمش اوغلان نی جرلاب او کا توشوردی اط لار قویلار کوب اولتوروب یخشی مهمان دار لیق لار قلغاندین سونک ایدی حالا آغا بولوب ایل میز کا*³³⁶ بش بولوب تورغان کشیمز قان بای ایردی بو بشلاب اط لانغای تیب امید وار ایردوک بو بد

329 ایتولار

330 نبر لاریندین؛ نبره لاریندین [Юдин]

331 اوغلان نک

332 تمام

333 بیش

334 اومید

335 [عرب خان حاجی م خان آغ طای خان ارش خان یادکار خان]#

336 ایا میز کا

اوغلان لار نی سیلاب جیقاردیلار جلال الدین سلطان اول محله اون ایکی یاشنده ایردی یخشی خواجه هم اول قدر ایردیلار

بولار بو کجه اورکون نک یانینده اون ایشتلور³²⁵ جاقلی پر ده برور ایردیلار تونونک بر بخشی اوتکانه خان بولار نک سونکی دین قویب یندی کوچلارین آلیغنه سلیب سونکی دین یساب برور ایردی لار خان ایدی بو کشی بز دین کوب ترور ناکاه تنک اتیب بز نک آزلقیمز نی کورسا یمان ترور کجه برلا اوق شوقون سلیب تکالی آزلی کوبلوکمز نی بلماس قجار تیدی تقی سوران سلیب تکدیلار بر تولغاشیب که جیقدیلار اورک تمور نک اطی یقلدی فریاد قیلدی ایتور ای نا مرد توختمش سوزیمز انداغ مو ایردی قیتب تولغانسا من قالدیم تیر ایردی اول ائنده اول اوغلانلار اط لاری نک بشین ترتیب بر یر ده توروب قولاق سلور ایردیلار یخشی خواجه اتا سی نک اونین تنیدی تقی جلال الدین سلطانغه ایدی کوردنک مو اول منک اتام ترور انی تشوردیلار دمبدم سنک آتا نک نی هم توشورورلار آتا لاریمز دین ایرولیب بز یاش اوغلان لار نه کون کورکایمز بز هم برکا اولکانمز یخشی راق دکل مو تیدی ایرسا الله تعالی نک نصرتی برلا جلال الدین سلطان تقی بو اوغلانلار قولغه تفا کلیب هر بر سی بر شر³²⁶ مرد یکیت بکین سوران سلیب بر یول³²⁷ اط سلدیلار خان کشی لاری قورقوب تیزکین لاری نی³²⁸ تریدیلار تختمش اوغلان قیتا سلغاج کلیب که تکدیلار کوتاریب الغاج کتدیلار خان کشی سی نک اط لاری (57b) نک بوینی قتیب کلیب ایردی کوب کشی سی نی شونداق اوق الدیلار ولی سونکین دا قولی بار تییب خوف قوا المادیلار توشکان کشی نی شول پر ده اوقلاش قلدیلار اط یراغین الیب اورکین لاری نک سونکین جه یوری بردیلار

خان نک قولغه توشماکان کشی لاری اولاق جقیب یغدیلار کورار لار هیچ پر ده خان یوق بولار نک بر سی ایدی من خان قشینه ایردیم خان نی ایکی کشی کلیب توغانین کوردوم اندین سونک نه بولغانین بلمادیم تیدی قیتب اوروش یرینکا کلدیلار خان نک اولوکیب تبدیلار فی الحال خان نک میتین الیب قیته او لاریکا قجدیلار

325 ایشتلور

326 شره

327 یولا

328 تیزکین لاری ن

قلیب ترونکز انشاء الله اولماسام اوزومنی یتکورکوم ترور سز لار کا تیدی

یاز که بولدی خان یایلاغنه کوچدی بو ایل تقی ایل سونکی دین کوجار ایردیلاز
 یایلاغنا که یتدیلاز هر ایل بر سو نک بوینغه کتدیلاز بو ایل لار بولجال قلغان سو
 نک بوینغه کلیب یایلادیلاز³²¹ خلاق لار قمز ایجب عیش عشرتغه مشغول ایردیلاز
 بو ائناده توختمش اوغلان بو ایل نک ایچنکا کریب کلدی جون بولجال برلا
 یراغلارین قلیب ایردیلاز هر کتخدای بر تلاکان کا ایکی اط یکیب اوغول قیز لارین
 مندورکاج قجدیلاز عیدیل دریا سی طرفیغه

ایکی کوندین سونک خان غه خبر کلدی توقتمش اوغلان کلیب شرین بارین
 ارغون قبقاق (56b) و تقی سایر ایل لارینی الیب عیدیل دریا سی غه یوشدی تیب
 خان [قاشن]داقی کشی لار بلان فی الحال اطلانغاج طرف³²² جانب غه کشی
 جابدوروب اوزی بو ایل لار سونکین قوغین سلدی خان نک ایل لاری یایلاغ غه
 ترقاب ایردی اط نک سمرکان³²³ محالی ایردی خان قتغ ایلغادی یراق داقی ایل لار
 نک جریکی خانغه یتوشا المادی یقین داقی ایل لار هم اط لاری سمزلاب قالدی
 بولار غه یقین یتکان محلدا خان نک قشندا کشی آز قالدی ایکی یوز کشی کوب
 بولسا اوج یوز کشی بولغای ایردی کون اویاغیب برا تورغانده بو قبقاق ایل نک
 قراولی خان نک جانکنی کوروب کلدیلاز بولار کنکاش قلدیلاز اولار نک اط لاری
 نک بوینی قتب کلا ترور آز کوب یتماس هر قجان یتسا بز کا تکار بز خود اولوم
 کشی سی ترور بز ایل و عیالیمز اوستیده اولار بز بولماسا توخمیمز قوروماسون اط
 غه برور تک اوغلان لار بیلا جلال الدین سلطان نی تقی یخشی خواجه نی سیلاب
 جقاریب ایکی یول بیلور کشی اولار غه تعین قیلالی اون ایشتلور جقلی یر ده
 اورکون نک یانینده الیب یوروسون لار اکر یغینی*³²⁴ بز بسساق سورانمز دین
 بلیب بز نک آرتمز دین کلکای لار اکر یغی بز نی بسا سورانیدین معلوم بولغو سی
 ترور تورمای قجا کورسون لار تیب اتفاق قلدیلاز جلال (57a) الدین سلطان بشلیغ
 یخشی خواجه نی اورک تمور نک اولوغ اوغلی ایردی ینه بر نجه اط غه برور تک

321 یایلادیلاز

322 طرف

323 سمرکان

324 یغینی

اونوتماغیل تیدی ایدی هر قجان خدای تعالی دولت برسا سنی دولتیمکا شریک قلیب سنک سوزنکنی و اوینکنی و اوتونکنی اوزکا قلماغایمن تیب انط ایجدی اورک تمور فی الحال انکنندا کی کوربه طونین جقاریب مضبوط جولغادی تقی الیب یوریکان ازوقیندین آئنده قویدی تقی منی کلماس تیب کونکلونکنی یمان قلماغیل من که تریک دور من البته سنکا کلور من سنی اوشبو یر دین تباین تیب اطلاندی تقی اویکا کلدی تقی اوز اوروغلاریندین بر نجه کشی لار بلان اتفاق قلیب اط و یراغ الیب کلدیلار تقی اوغلان مذکور نی تمور بک قاشینغه الیب قجدیلار تمور بک اول محله ینکی خروج قلیب بخارا و سمرقند نی³¹⁵ الیب ایردی بولار که کلدیلار بسیار یخشی کوره الدی جراحلار کلتوردی لار ایاقنده قی بشاقنی الدوروب کوب تورلوک دارو لار قلدوردی تا بر آیدین سونک یخشی بولدی

اول قیش بیک خدمتیده³¹⁶ بولدیلار یاز که اجیلدی بیک بر نجه کشی قوشدی خان پایلاغ غه جقیب برا تورغانده ایل سونکی دین کلب یلقی قودیلار قوغین یتیب اورشوب بولار نی بسدیلا ینه بیک قشیغه قیتب کلدیلار القصه توختمش اوغلان قزاقلاب یوروب خان نک ایلی دین یلقی سورار ایردیلا و ایل جبار*³¹⁷ ایردی

و شرین بارین ارغون قبقاق تختمش اوغلان نک آتا آتا لاریندین³¹⁸ بایری ایل لاری ایردی بو اوغلان مذکور قزاق لاب یوروب بو طریقه (56a) ایشلار قلا بشلادی بو ایل لار دین دعوی لیک یکیت لار باریب انکا نوکار بولوب مدت برا بشلادیلا و اروس خان هم بو ایل لار کا بسیار جفا قلا بشلادیلا بولار هم توختمش اوغلانغه کشی یباردیلا سندین سبب خان بزکا غضب قلیب مالیمز نی³¹⁹ الا ترور بشمز نک هم خطری بار بر تورلیک بز نک فکرمز نی قلماسانک سنک یقانک بز نک الیمز [ده] ترور قیامه کون بولسا تیدیلا اوغلان بو سوز نی اشتدی ایرسا کونکلی فریشان بولوب کلکان کشی کا ایدی بو یل پایلاغ [غه]* جقار سز*³²⁰ ایل نک سونکنی الا کوجونک فلان سونک بویدا پایلانکز تقی یراغنکز نی

³¹⁵ بُخارُ و سمرقند نی

³¹⁶ خزمته

³¹⁷ جبار

³¹⁸ آتا انا لاریندین

³¹⁹ مالیمز نی

³²⁰ بز

کلدی اندین سونک سلطان غازی سلطان خدمت لارینغه کلدی جون حضرت سلطان کہ قری سوز کا بسیار مایل*³⁰⁹ ایردیلا ر اولار سوردی لار کہ توقتمش خان نی اروس [خان نک] ایشکیدین جقغاندور تیرلار اول نه طریقه بولغاندور تیب سوردی ایرسا حاجی مذکور هم بو طریقه حکایت قلدیلار فقیر اولار دین ایشتب تورور من اولار ایدی اول محلده اروس خان تختمش اوغلان غه قصد قلور بولدی اندین بورونراق کنه کاس قوغان اوغلی دروشک مرزا نی جغاتای پادشاه لارینغه (55a) ایلجی بیاریب ایردی شرین... بیاریب ایردی بولار باریب که... نک اوردا سی سر بویونغه اینب ایردی بو... یقلاب خان اوردا سنغه کلور ایردیلا کون سویق ایردی سر نک... کومال توروب ایردی اورک تمور مرزا دین³¹⁰ سونکی راق کلور ایردی ناکاه سر نک یقا سنغه کوزی توشدی قمیش نک توبینده کوردی بر یلانک ترلیک کیکان یکت سو دین جقیب یوز توبان توشوب ایکی بولوب قانترا ی یتب ایردی کونکلی ده ایدی کم مونکا خود بر ایش توشکان کشی ترور تیب یورتوب مرزا نک سونکی دین یتدی تقی ایدی مرزام عنایتینک بولسا خان یر لیقی بر لا خدمتنک قلیب کلیم ایردیم اسان ایل ایجنکا ایندینکز اوردا [غہ]* یقین کلدینکز خانغه کورنوش قلور کشی من ایماس من منی ایمکاتیب ایلتب نیتکای سز من موندین اوق اویمنی ایستاسام*³¹¹ بولغایمو تیدی ایرسا اول مرزا هم ایجازت بردی قیتب بیاقی یر کا کلدی اظین یراغدا باغلاب اوزی بیاغ بولوب کلدی اول کشی نک قشینغه کلدی کوردیکه یوز توبان توشوب قلترا ی یتور ایردی ایاقیدا یمان یرا سی بار بو سوردی که نه کشی سن ایدی نه سورار سن من بر امکاک لیک قل من تیدی بو ایدی من امکاک لیک ایکانک نی³¹² کورا ترور من آتنک ایتغل ایدی من تختمش اوغلان من بورون هم بولسا سزب یورور ایردیم سحر وقتی ایردی خان نک کشی لاری کلیم اویمنی بستی لار آتقی لاشا جقدوم کوردوم که کشی کوب دور دریا یقین ایردی اوزومنی دریا غه سلدیم سو غا توشکانده اتدیلا ر*³¹³ بو یارامز³¹⁴ هم (55b) ... تبرانور جقلی مجالیم یوق ... تیدی اورک تمور ایدی منک استا ... ی ایردی بشم مالنک سنک یولینک ده قویاین ... [خدا]ی تعالی سنکا دولت برسا منی

309 قابل

310 اورک تمور یا دین

311 استام

312 انکانک نی

313 اتدیلا ر

314 یارماز

بردیلاز بو املك اط اربا نی الیب قجیب یابلار غه قاجولار غه اورور ایردی تا بیکم
هلاک بولدی اوزبک لار تای دوغلی بیکم نی خضر خان اولتوروب ترور تیرلار
کیفیتی بو تورور

انی اولتوروب خضر خان ایکنجی نوبت که خان بولدی بر یل یاریم پادشاه لیق
قلیب ایردی بوروب آتلغ بر یمان اوغلی بار ایردی آتا سی نک خان لیقی غه
جدامای غافل لیقدا سنجیب اولتوروب اوزی خان بولدی ایکی اوج کون کجمای انی
هم اولتوردیلار اندین سونک بوزوقلوق واقع بولدی هر کشی طرفغه باش کوتاردی
سرای شهری بوزولدی ایل نک کوبی قریم ولایتی کا قیات ممای قاشیغه کندی بو
سوز مونده تمام بولدی ینه کلدیق قرا نوغای حکایتی کا

قرا نوغای سر بوینده اوج یل پادشاه لیق قلدی ترکستان ولایت لارنغه حکم قلور
ایردی اوج یل دین سونک وفات تبدی اینسی توغلی تمور تیکان (54b) خان بولدی
فخر سلاطین حضرت دوست سلطان داقی دفتر ده ایٹیپ ایردی بو توغلی تمور
اولوغ پادشاه بولدی سمرقند³⁰⁶ بخارا غه حکم قلور ایردی اما مدّت پادشاه لیقی
معلوم ایرماس

اندین سونک بادیق اوغلان اوغلی اوروس خان بولدی بو اوروس خان اولوغ
پادشاه بولدی تمامی ترکستان ولایت لاریغه حکم قیلور ایردی تختمش خان بلا تمور
قتلی خان غه اول محله خانلیق تکمایدور ایردی بو خان مذکور نک خدمتنده بولور
ایردی لار جون عنایت ازلی برلا فر پادشاهی تختمش اوغلان نک ذاتینده پیدا
ایردی خان نک نوکار لاری تقی اوزکا خلیق لاری اختیار بو اوغلان مذکور کا
پیدا³⁰⁷ ایردیلاز بو بش دین خان مذکور یمان*³⁰⁸ ایلنپب تختمش اوغلان غه قصد
قلور بولدی

بسه خطای بابا علی بی تیکان حاجی ترخانلی عبد الکریم خان نک اولوغ بکی و
نائب کشی سی ایردی خان مذکور اولکاندین سونک مکه طواف قلیب حاجی بولوب

306 سمرقند

307 ماندا

308 تیمان

بورونقی یخشی لار یساغان عمارتنی بوزماسون تیدی انک سوزینکا کیرماین
بوزوب اولاشتوردی بکم تقی انکا آجیغ قلیب بیک لاری نک*²⁹⁷ ایجکیسی نی
یغیب خان نی قوالادی خان قیتیپ ینه آق کولکا کلدی

بیکم مذکور بیر کشی نی کلدی بک دور تیب خان کوتاردی اوزبیک لار*²⁹⁸
انکا یلغان کلدی بک تیرلار برجه خلائق لار ایدیلار کلدی بکنی بردی بک*²⁹⁹
اولتوروب ایردی اول نجوک تیریلدی تیب

ایل انکا بویون سونمادیلار ایرسا بو اول نسلی دین بولور ایردی بازرجی آتلیغ
انی خان کوتاردیلار اول محله اولوغ بیک لار دین سیجود علی بک بار ایردی بو
بازرجی غه بویون سونمان³⁰⁰ تیب انی جرلاتیب*³⁰¹ کلتوروب اولتوردی علی بک
نک بر حسن آتلیغ اوغلی بار ایردی اول قجیب قونکرات ناغادای اوغلی آق حسین
که خوارزم³⁰² ولایتی نک حاکمی ایردی بو حسن انکا یکن بولور ایردی انک
قاشیغه کلدی ایرسا بکم نک بو ناشائسته حرکات لاریدین هراسان بولوب بیکم دین
اورای کردان بولدیلار

بو ائنده³⁰³ آق حسین خضر خانغه ایلجی بیاردی ایدی اول ضعیفه شیطان یولیغه
کیریب مونونک تک حرکاتلار قیلا ترور بز خود (54a) اندین اورای کردان
بولدوق سز اکر بش بولوب همت توتسانکز اوستونکا یورور بز تیدی اول هم آجیغ
لیغ کشی ایردی منت عظیم آق حسین خوارزم³⁰⁴ لشکرین تمام اتفاق قلیب آق کولکا
باریب خان مذکور نی خان کوتاریب سرای ولایتی اوستونکا یوریدی سرای
اوستوندا*³⁰⁵ اوروش بولدی بازرجی بیکم قولغه توشدی بیکم نی بر قار کویمه کا
مندوروب اغزینی مضبوط قلدیلار تقی بر املك ایغر اطنی یکیب بش سالیغغه قویا

297 بیک لارنی نک

298 اوزکا بیک لار

299 بردی ر بک

300 سونمای ز؛ سونماز [Юдин]

301 جراب تیب

302 خوارزم

303 آئنده

304 خوارزم

305 اوستوند

کورنوش کا برور بز اول منی جراب الماق ترور اندین سونک سز لار نی
جرلاتور سز لار او کا کیرکاج قتنداقی کشی لار [برلا]# بولونک من اوزی برلا
بولاین تیدی

تانکلا سی کورنوش کا کہ بردیلار اول ایتغانجه نوغای نی جراب الیدیلار بر
زماندین سونک بولار نی جرلای*²⁹² کشی کلدی بولار ہم یراغ لانیب کلیب
ایدیلار بارجا سی کونکلی یوروب ایشکدین کیرکاج قول تبراتدیلاز نوغای تنکز
بوغا بیلا تور ده یاناشا اولتوروب ایردی فی الحال بسا الغاج بشین کسدیلار بویدا
برلا سنجیب تاشغارو الیب جیقیدیلاز تقی جرلاتدیلاز اوزکا کشی کا اولوم یوق ترور
یر لیک یرنکز دین تبرانمانکز تیو خلق یر لیک یریده قرار تبغاندین سونک نوغای
نی آق کیز کا سلیب بارجا اتفاق برلا خان قلدیلار

بسہ مانکغتای اوغلی خضر خان برلا قرا نوغای ایکی سی بر آی ایجنده خان
بولدیلاز ولی خضر خان سرای ایجنده تختنده خان بولدی قرا نوغای سر بوپونده
سول ایجنده خان بولدی ایمدی کلدیک خضر خان حکایتی کا

اول محلده کہ تآی دوغلی بیکم خضر خان نی جراب ایلتب سرای تختنده کہ
خان قلدی اوز بک خان برلا جانی بک خاندین قالغان التون ترمہ نی اورکا سلدی
ایتورلار*²⁹³ بیکم ساجینی قرا غا بویادی خانغہ تیکارکا میل قلدی خان نک ہم الور
غہ میلی بار ایردی ولی نیمان دین*²⁹⁴ قوتلوغ بوغا آتلیغ بکی بار ایردی اول
راضی بولمادی ایدی اول اوز بک کا جانی بک کا اختیار بولا کلکان کشی ترور
سن بر توری اوسکان کشی ترور سن سندین سین تبار الماغل انک سوزیکا کیریب
المادی جون بیکم الماسون تویدی ایرسا بورونقی (53b) دین عزت و حرمة نی کم
[قلا]* بشلادی خان ہم انکا اوجاشب التون تیرمه نی بوزوب قزاق لارینغہ
اولاشدورور*²⁹⁵ بولدی ایرسا اشتب خانغہ بیکم کشی بیاردی ایدی [انداغ]#
قلماسون لار خان بولغان کشی کا التون کموش تابولماس یر دکولدور²⁹⁶ اما

292 جرلادی

293 ایتورلا

294 نیما دین

295 اولاشدور

296 یرده کولدور [Юдин]

ایردی بو کون هیچ کشی کا سوز اون قتمای بی اتفاق برور ایردی اولاری نک یارو یولیغہ یتدیلاز ایرسا قرانکغو²⁸³ بولدی فی الحال جلاولاب اط دین یقیب مضبوط باغلا دیلاز نوغای مذکور ایدی منم²⁸⁴ کناهم نا ترور مونداغ قلا ترور سز خواجہ احمد ایدی سندین بو سوز سورار بز اکر راستین ایتسانک بز نک [برلا]* (52b) اتفاق قلسانک سنی خان*²⁸⁵ کوترالی تقی عهد وفا و شرط قلالی سنک نوکار جی لکنک دین بویون تولغاماغای بز اکر راستین ایتسانک تحقیق بیل کل کہ سنی بو یر ده اولتورا بز²⁸⁶ ایدی نا سورا سز²⁸⁷ سورونک خواجہ احمد ایدی راستین ایتغل اول کلکان کشی نا ایتدی و تقی سنی جرلاب بیک نا ایتدی ایدی اول کلکان کشی نہ ایتغانین بلمان منی جرلاب هیچ سوز ایتمادی تیدی ایرسا خواجہ احمد مذکور ایدی ای بد بخت سن ایتسانک من ایتاین اول کشی کہ کلدی خان نک اولکانین ایتا کلدی تقی سنی جرلاب الغانی*²⁸⁸ اول ایردی کم سنکا ایدی کم سنی خان کوترالی ولی راضی بولغل کم قریندش لارنک نی*²⁸⁹ اولتورالی اکر اولتوروماسانک اولار سندین اولوغ ترور سنک خان لکنک غہ بویون سونماس دور تیدی ہم اول ایشکا راضی بولدونک ایدی انداغ قلماغیل بو کشی دین نا خور لوق لار کورمادوک ایردی سن بز نک ایجی مز ده خان بولوب بز کا بش بولسانک انی اولتوروب آندین آجیغمز نی الماق آسان ترور منک بو سوزومنی قبول قل غیل تیدی سنی خان کوترالی کوتاریب سنکا نوکار بولور غہ نا جقلی عهد و شرط تسانک ایجالی بز نک اولاریمز کا سبب بولوب قیامہ غہ تکر و یمان آتنی بتنکا*²⁹⁰ الما تیدی ایرسا اول تقی ایدی انداغ بولسا قولوم ایاقیمنی بوشاتنکز سز کا راستین ایتاین تیدی قول ایاقین بوشاتدیلاز ایرسا قوبوب اولتوروب خواجہ احمد مذکور کا کوب تحسین لار قلدی ایدی بو سوز لار فراست برلا ایدینک هیچ خلاقی یوق ترور و بارجا سی راست ایردی ایدی سز منی خان لاتور*²⁹¹ غہ یخشی عهد و شرط قلسانکز مصلحت نکز دین جقماین تیدی بولار (53a) تقی عهد و شرط قلدیلار نوغای ایدی تانکلا کہ

283 قرانکغو

284 منک [Юдин]

285 خان مذکور

286 اولتور بز

287 سورار سز [Юдин]

288 ایغانی

289 قر ایندش لارنک نی

290 بشنکا

291 خان لانور

انک آتین بوکری خواجه احمد تیرلار ایردی بعضی لار ایتورلار ساغشی ارتوق سایجی اوغلان (52a) تیرلار ایردی ینه برسی آلب انغوجی بهادر ایردی انداغ کم اول زمانده همغا سی یوق ایردی انک آتین قرا نوغای تیرلار ایردی سونکقی ده صحبت در کرد²⁷⁶ بولدی آز فرصت دین سونک قرا نوغای غه*²⁷⁷ اونداکجی کلدی کم بک سز نی جرلای در تیب بو قوبوب بک قاشیغه ایندی برآز فرصت ینه خاموش بولدیلار اندین سونک ینه صحبت در کرد بولدی

بوکری خواجه احمد مذکور بو اوغلان لار غه ایدی کم کوردینکز مو بردی بک خان اولوب ترور اول کلکان کشی خان نک اولکان خبرین کلتوردی بولار نک بر آش بشیم خاموش بولوب متحیر بولغانی اول سبیدین ایردی قرا نوغای نی جرلاب الغانی اول تورور انی خان کوتورلار تقی تنکلاقی کورنوشده بارجا مز نی قرارلار بز نک ایشیمز موشکل²⁷⁸ بولدی بو کون اخشام برلا بر ایش قیلا الساق الدوق قلا الماساق تنکلا برجا اولوم کا برغو ترور بز جون بولار دایم سیناب ایردی لار مونونک کنکاشی اوزکا بولماس ایردی بارجا سی ایدیلا سز هم نه تورلیک مسلحت کورسانکز انداغ قلالی تیدیلا خواجه احمد مذکور ایدیلا مصلحت اول تورور نوغای موندین کج اط لانور اوی نک²⁷⁹ یاری یولیغه یتکانده توتوب اط دین یقیب مضبوط باغلاب بجاق نی بوغزینغه قویوب بو خبر نی سورالی اکر راستین ایتب بز نک برلا اتفاق قلور بولسا بز هم انی خان کوترالی و اکر راستین ایتماسا انداغوق اولتورالی تکمامز بر یانغه قجالی تیدی ایرسا*²⁸⁰ برجا سی بو سوز نی معقول کوروب عهد و شرط قلدیلار*²⁸¹

جون نماز شام یقین بولدی ایرسا نوغای بک مجلسنده قیتب اط لاندی بو اوغلان لار هم برکا اط لاندیلار کوردیلار کم کونداکی تک جهر²⁸² سی طوری طریقه سی اوزکا جه بولوب ایردی کوندا کورنوشدین قیتب او کا برغونجه اوینای کولا برور

276 دوکرد

277 قرا نوغای یغه

278 موشکیل

279 اویی نک

280 تید ایرسا

281 قلدیلا

282 جهره [Юдин]

القصه جون بردی بک خان نک پادشاه لیقی دین اوج یل کجتی تورتنجی یل کوز
نونک (51b) باشینده*²⁶⁸ خان خسته بولدی خان نک زحمتی اوزاق جکدی قیش
توشدی تنکز بوغا مذکور نک قیش لاقی دایم سر بویدا بولور ایردی

بسه بو حکایت لار بو سوز لار که ایمدی ذکر قلغوم ترور²⁶⁹ حضرت خان
مغفور²⁷⁰ و مرحوم طیب²⁷¹ الله تراہ و جعل الجنة مثواه حضرت ایل بارس خان
دین اشتب ترور من اولار قری سوزینی یخشی بیلور ایردی

بردی بک خان نک پادشاه لیقی دین اوج یل اوندی تورتنجی یل قیش کوز*²⁷²
باشندین خان خسته بولوب ایردی تنکز بوغا سر بوین²⁷³ قیش لاب ایردی خان نک
خسته لیق خبری متصل کلور ایردی کون صباح وقتی ایردی بو اوغلان لار بیک
ایشکدا قورلاب ایردی لار تنکز بوغا اول کون سحر وقتیدین قویوب صحبت توتوب
ایردی سازنده لاری یبای قوبساب یراو لاری یرلار ایردی لار و غوغا و نشاط لاری
بار ایردی صباحی کون لاری سویق ایردی بر کورانک اط مینکان بوری ترسی
توننی جورا کیکان اطمی طونی بوغا غوتغان کشی آورده غه یقین کلیب توشدی تقی
اطین کویمه ارابه سینغه باغلادی اوق صداقینی ارابه اوستیکا قویوب اوردا غه
ایندی قوبسای تورغان سازنده لاری یرلای تورغان یراو لار بارجا سی بس بولدی
مَدّت مدید²⁷⁴ بو ایل [که] مجلسدا دور جیقمادی اندین سونک ینه سازنده لار قوبسای
باشلادیلار و صحبت در کرد بولدی بو تشغاری غی اوغلان لار بو حالتنی
ملاحظه قلیب فکر قلورلار ایردی کم ایا بو کلکان کشی نه کشی بولغای ایکان بو
ایل مجلسدا بو طریقہ متحیر بولدی لار تیو²⁷⁵

بسه بو اوغلان لار اراسنده ایکی کشی بار ایردی بری سی عاقل و دانا ایردی

268 باشیند

269 قلم ترور

270 مغفورم

271 طاب

272 کویز

273 بوینن

274 مَدّ مریدوم؛ مَدّ مدید [Юдин]

275 تیورلار [Юдин]

اول محله که اوز بک خان علیه الرحمة غضب قلیب یوجی خان نک اوزکا ضعیفه سیندین بولغان اون یتى اوغول نک نبیره لارین²⁵⁸ ایل کون لاری بلان قیات استایغه که قوشون بردی استای مذکور اولکاندین سونک اوغلی تنکز (51a) بوغا غه قالدی بو تنکز بوغا بسی بی ادب ظالم*²⁵⁹ کشی ایردی بو اوغلان لاری که انک پادشاه لیغی نسلین دین ایردی بولار غا بسیار جفا لار و بی ادب لیک فلورلار ایردی نتاک که اتا سی جر قوتلی اوستنکا عمارت سلور بولدی اوستاد قالسون تیب اوزکا کشی نی ارالاشدورمای عمارت نک تمام ایشین بولار غه بویوردی حتی که سو تاشیخان کر بیج قویغان و کر بیج تاشیخان بولار ایردی کاهی سنک ارقا سی یغر بولوب ایردی کاهی سنک توشی یغر بولوب ایردی کاهی سنک ایاقی توغرولوب جفا لار یتشب ایردی تیرلار و الله اعلم

و تقی هر صباح کلیب بو اوغلان لار ایشکده قورلار ایردی هر کاه که صحبت توتسالار اوز قولیغه که ایاق کلور ایردی سازنده لار اوتاک کویین*²⁶⁰ قوبسالار ایردی همین که اوردا ایچنده که اوتاک کویین*²⁶¹ قوبسای بشلاسا بلور ایردی²⁶² که بک قولیغه ایاق کلدی بو اوغلان لار بوروک لارین سلیب یوکونوب ترورلار ایردی اول زمان غه تکرو که²⁶³ ایاق نی ایچکای تقی اوتاک قوبساماق بس بولغای اندین سونک بوروکلارین کیار ایردی

ایتورلار*²⁶⁴ بر محله قیش جله سی ایردی بو بد بخت صحبت توتوب ایردی ناکاه اوتاک اوازی کلدی بو اوغلانلار کونداکی دستور جا بوروکلارین سلیب یوکوندیلار کون سویق ایردی حسین*²⁶⁵ اوغلان تیکان تمور*²⁶⁶ قوتلوق خان اورس خان اتا لاری نک قریندش لاری ندین*²⁶⁷ بولور ایردی قولاقی اوشودی تقی یارو سندین کوبراکی توشدی اندین سونک انکا جوناق حسین تیرلار ایردی

258 نبره لارین

259 ظلم

260 قویین

261 کوبی

262 اول زما؛ اول زمان [Юдин]

263 اکه

264 ایتولار

265 حسن

266 تمو

267 قریندش لاری ندین

کنکاشنی اول برور ایتور ایردی سن حالا یکت ترور*²⁴⁷ سن بو محلداقی توغغان اوغلنک تنک اوسار سن کوندین کونکا قریر سن اول یکت بولور تانکلا سن قریغاندین سونک خان لغینک نی تالاشب الغای حالا بولار نی اولتورا تورغیل قجان قری بشلاسانک اندین سونک قویغای سن تیر ایدی اول بی دولت هم مونونک سوزیکا کیریپ اولتورور*²⁴⁸ ایردی بوسبیدین²⁴⁹ انکا کرکین کوتان خان تیرلار

انک زمانینده تفریقه لیق بسیار بولدی اونک قولنی قیات مامای الیب ایل کون برلا قریم غه کتدی سول قولنی (50b) قیات جر قوتلی اوغلی تنکز بوغا سر دریا سی بوینغه الیب کتدی خان اوز ایجکی²⁵⁰ [لاری]* برلا سرایده بولدی اوج یل سرای شهریندا پادشاه بولدی اندین سونک وفات بولدی

تای توغلی بکیم که مشهور*²⁵¹ ترور اوز بک خان نک ضعیفه سی جانی بک خان*²⁵² نک انا سی ایردی اول محلدا اول*²⁵³ حیات [ته] ایردی صاین خان نسلی دین هیچ کشی قالمادی بکم مذکور ایدی کم ایمدی خانلیق بلا یوریت شیبان خان نسلی غه تکار تیدی اول محلده شیبان خان نسلی دین مانکغتای*²⁵⁴ اوغلی خضر اوغلان تیرلار ایردی صاین خان سلغاغان مانکغتای نک یورتی*²⁵⁵ آق کول تیکانده بولور ایردی اوزکا اوغلانلاریندین*²⁵⁶ ایریلب یورتنده بولماقی نک جهتی یوقاری ده ذکر قلیپ ترور بز القصه بکم مذکور خضر اوغلان نی*²⁵⁷ اونداتیپ التیب صاین خان تختنده سرای ولایتنده خان قلدی بو سوز موندا موقوف بولسون بز کلدوک قیات جر قوتلی اوغلی تنکز بوغا نک ایشکنداکی اوغلان لار نک حکایت لاریغه و تنکز بوغا نی اولتوروب قرا نوغای خان بولغان حکایت لاری غه

247 ترور
248 اولتور
249 سبیدین
250 ایجکتی
251 مشهور
252 خانی
253 محلدا اول
254 مانکغتای
255 یورتی مانکغتای نک
256 اوغلاریندین
257 خضر اوغلانلاری نی

بسه تبریز علما لاری خانغه عرض داشت قلدیلار کم بو کشی بز دین بر مغلط برلان بر مسئله ایشندی بز انک غرضینی بلماین ظاهرینه حکم قلدوق مونونک غرضی خود قیزینده بولغاندور حالا قیزی نی*²³⁸ الدی بو خود کافر بولدی بز لار هم کافر غه بنده بولوب ترور بز بو کون پادشاه اسلام ترور سز ایدمی سز کا*²³⁹ واجب ترور کم مسلمان لار نک بشندین [بو کافر نی]* دفع قلغای سز ایتور لار*²⁴⁰ خان ایکندو نمازین اوقوب مسجد ده اولتوروب ایردی (50a) کم عرض داشت کلدی فی الحال عالم لار نی یغیب سوردی که سز لار بو سوز کا نه ایتور سز اولار هم ایدیلار بلی سز کا واجب ترور بو کافر نی مسلمان لار*²⁴¹ بشیندین دفع قلغای سز بو سوز نی اشدی که مسجد دین*²⁴² ینه اویکا برمادی اوج کون اول مسجد ده اولتوروب یراغن قلیب اطلاندی تقی بریب ملک اشرف نی²⁴³ اولتوروب تبریز و عراق ولایت لارینی الدی مدت اوتوز یل پادشاه لیق سوردی اندین سونک الله تعالی رحمتنکا واصل بولدی انا الله و انا الیه راجعون

اغاز داستان بردی بک خان

اوغلی بردی بک آتا سی تختینده خان بولدی بو بردی بک بسی بی عقل و بی ملاحظه²⁴⁴ کشی ایردی اوزی نک قریندا ش*²⁴⁵ لاری نی تقی اوز اوغلانلارینی منکا خانلیق تالاشور دیب اولتورور ایردی ایتور لار قانکلی تولوبای تیکان قومی قرینداشی²⁴⁶ کوب کوجلوک کشی ایردی بو خان نک آتا لیغی ایردی هر نه ایتهسه انک سوزیندین جقماز ایردی انک بر اوغلی بار ایردی صُمای آتلیغ الپ اتغوجی ایردی اول صُمای جانی بک خان زمانینده قراق جیلق قلور ایردی انک جهتدین خان علیه الرحمه انی اولتوروب ایردی تولوبای اول اوغلی نک آجغیدین بو

238 قیزی م

239 بز کا

240 ایتور لا

241 مسلمان لا

242 مسجدین

243 اشرف نی

244 ملاحظه

245 قرینداش

246 قرینداش

کوردیلار که جیبه جوغ بکین قزیل بولوب ایردی اما خدای تعالی نک قدرتی برلا بابا نک بر توکی کویماین جقدی بو حالنی خان بشلیغ برجا خلیق لار کوردیلار ایرسا فی الحال شیخ لار نک اتاکلارینی توتوب مسلمان بولدیلار الحمد لله علی دین الاسلام

بسه برکه²²⁹ خان زمانینده اوزبک طائفه سی مسلمان بولوب ایردیلار اولار دین سونک پنه مرتد (49b) بولوب کافر بولوب ایردیلار*²³⁰ بو یول که اوز بک خان مسلمان بولدی اندین بارو اوزبک طائفه سی نک اسلامی تغیر تیمادی ایتورلار اوز بک خان یکرمی یل پادشاه لیق قلدی و بعضی لار ایتورلار اون سکز یل پادشاه لیق قلدی اندین حق رحمتکا واصل بولدی*²³¹ انا لله و انا الیه راجعون

آغاز داستان²³² جان بک خان

جون حضرت جان بک خان مشهور علیه الرحمه آتا سی²³³ تختنده خان بولدی اولار نک عدالتی ولایتی کرامتی مشهور ترور دشت ولایتنده اولار بکین عادل و عابد و ضابط پادشاه کجکانی یوق ترور آتا سی²³⁴ نک تمام دولتینی*²³⁵ حکم قلور ایردی اندین سونک ملک اشرف تیکان تبریز حاکمی ایردی شیطان انی یولدین جقاریب اوز قیزی نی الدی انک قصه سی اول طریقہ ایردی کم بر صاحب جمال قیزی بار ایردی بو بد بخت انکا عاشق بولدی هیچ تورلیک ارامی قراری قالمادی تبریز علما لارندین سوردی که بر کم ایرسا درخت تکسا*²³⁶ تقی انک میوه سی یتلسا اوزیمو یسون یا اوزکا کا مو برسون علما لار ایدیلار اوزی*²³⁷ هم یسه بولور یا اوزکا کشی کا هم برسا بولور تییدیلا بو بد بخت خود مقصودی اوز قیزی بولغاندور بو سوز برلا ترور تقی قیزی نی الور

229 برک

230 بولدیلار ایردی؛ بولوب ایردی [Юдин]

231 بولوب

232 داستان

233 آنا سی

234 آنا سی

235 رویی

236 تک

237 اوز

خان ایدیلار نیجون اولتورا در من پادشاه من سز لار نک هیچ قیسی نکز دین فروایم یوق ترور قیسی نکز نک دینی نکز بر حق بولسه انک برلا بولور من اکر بولار نک دینی نا حق بولسا سز لار نک بو کونداکی ایش لارنکز نجوک باطل بولوب معطل قالدی و سوزلاشکز قیسنکز نک دینکز حق بولسا انکا تابع بولور من تیدی بو ایکی جماعت بری برسی برلا بحث کا توشدی لار کوب غوغا و جدل قلدیلار عاقبت انکا قرار بردیلار کم ایکی تنور قازغایلار هر بریسنی اون اربا سوکسوک بلا قیزدورغایلار بر تنور غا ساحر لار دین بر کشی کیرکای ینه بر تنور غه بولار دین بر کشی کیرکای هر قیسی کویمای جقسا انک دینی حق بولغای تیب قرار بردیلار تانکلا سی ایکی اولوغ تنور قازدیلار سوکسوک اوتون لار دین یغیب قیزدوردیلار برسنی ساحر لار غه تعین قلدیلار ینه برسنی مسلمانلار غه تعین قلدیلار بو عزیز لار بری برسی برلا مراعت قلدیلار قیسمز کیرار بز

بولار نک بریسی کا بابا توکلاس دیر ایدیلار (49a) تمام اعضالارینی توك بسیب²²⁵ ایردی اول ایدی منکا اجازت²²⁶ برینکز²²⁷ من کراین سز منکا همت توتونکز تیدی بو عزیز لار انک حقی نه فاتحه اوقودیلا اول بابا ایدی منکا جیبه حاضر قیلنکز جیبه نی حاضر قلدیلار ایرسا جیبه کیدی یلانک اتکا تقی الله تعالی یادی طلقین بشلاب تنور طرفیغه*²²⁸ متوجه بولدی ایتور بابا نک توکلاری اورا قوبوب جیبه نک کوزلاریدین جقیب ایردی بو حالات نی بارجا کورار ایردی لار بولار یوروب تنور غه کیردی بر قوی اتنی کلتوروب تنور غه اسدیلا اغزینی برکتی لار ایمدی کلدوک کاهن لار قصه سینغه کاهن لار ضرورتدین برسنی جقاریب تنور غه سلدی همین که توشکاج کولی کولی یاشل لی بولوب یالنی تنور نک اغزیندین جقار ایردی بو حالتی خان بشلیغ بارجا خلیق لار کوردیلار ایرسا کونکول لاری کافر دینی دین اورولوب مسلمان لیق غه میل قلدیلار و تقی بابا نک تلقین ایتقان اوازی تنور دین متصل کلور ایردی قوی اتی بشدی تیکان محله تنور نک اغزین اجدیلار بابا مبارک یوزلاریندین تیرلارینی سورتکاج نا آشوقدینکز اکر بر زمان توقف قلسانکز ایردی ایشم تمام بولوب ایردی تیب تنور دین جقدی

²²⁵ توك بسیب [DeWeese]

²²⁶ اجازت

²²⁷ برینکز

²²⁸ طرفه غه

دوستغان²¹² اوزی اول کشی کا برور ایردی برجا بو ساحر کاهن لاری نی خان اوز لاری کا شیخ بلیب یان لاریده یانشا اولتورتوب بسیار اعزاز و اکرام قلور ایردی

اما بر کون که بولار کلیب متوجه بولوب اولتوردیلار کونداکی*²¹³ تک خان مجلس اراسته*²¹⁴ قلدی شیخ لاری برلا کلیب باری اولتوردیلار کونداکی تک بیمانه سی بلا بال کلتوردیلار جورغاتی و دوستغاننی²¹⁵ کلتوروب قویدیلار*²¹⁶ بر خیلی مدت اوتدی کم نه بال کونداکی تک جورغاتیغه قویولور نه دوستغانغه سوزولور ایردی خان بو شیخ لارینغه ایدی نه جهتدین بو بال معطل قالب (48b) ترور شیخ لاری ایدیلار غالب بو یقین محمدی کلیب ترور بو انک علامتی*²¹⁷ ترور تیدیلار خان حکم قلدی کم قور قور دین یوروب ایستانکز لار تقی محمدی*²¹⁸ بولسا الیب کلنکز لار ملازم لار جقیب قور قور دین تفتیش قلدیلار ایرسا کوردیلار قور نک تاشینده تورت اوزکا صورتلیغ کشی لار باش لار نی قویو سالیب اولتورور*²¹⁹ ایردی ملازم لار ایدیلار کم سز لار نه کشی لار ترور*²²⁰ سز بولار ایدیلار بز لار نی خان قاشیغه الیب [برنکز]# کلدیلار خان نک کوزی*²²¹ بولار غه توشدی جون نور هدایت بلا الله تعالی خان نک کونکلی نی منور قلیب ایردی بولار نی که کوردی میل و محبتی کونکلونده بیدا بولدی سوردیلار که سز لار نه²²² کشی لار ترور نه ایشکا یوریور سز نه ایشکا برور سز بولار ایدی لار بز لار محمدی ترور بز خدای تعالی نک [امری برلا]# کلیب ترور بز کم سز لار نی مسلمان قلغای مز بو ائناده*²²³ خان نک شیخ لاری فریاد قلیب ایدیلار بولار یمان کشی لار بولور بولار نی سویلاماک [کراک ماز]#*²²⁴ اولتورماک کراک تیدیلار

212 دوستغان

213 کوندا

214 اراسنده سته

215 دوستغانغه

216 قویدیلار

217 علی متی

218 محمد

219 اولتور

220 ترور

221 کوزوی

222 نی

223 ائناده

224 کا [رکماز]

بسه یوقاریده هم تغریب بلا ذکر قلیب ایردوک جون شیبان خان قلچ لار جاییب یاغی لار ولایت لار اجیب اردی اول جهتدین (48a) انک اوغلانلارینی و نیبره لارینی²⁰⁴ بارجا خلیق لار عزت و حرمت قورلار ایردیلا خان که بو اوغلان لار غه قهر قلیب استای غه قوشون که بردی استای *²⁰⁵ تقی شیبان خان اوغلان لاریغه آتا لاری حرمتین قلیب بیراک بلا قرلیق که ایکی باغلی ایل ترور انی الیب²⁰⁶ بولار نی اوز حالیه قویدیلا صاین خان سلغاغان یورتلاریده بولور ایردی تیپ ترورلار و تقی آلاطای غه منک باغلی ایل ایردی اول²⁰⁷ مشهور ترور اوزبک لار *²⁰⁸ اراسنده ایتورلار استای غه اوروم جشیب آلاطای غه منک بردی دیرلار معنی سی بو تورور

بسه حضرت خان مذکور علیه الرحمه عظمت اولوغ پادشاه ایردی بر نجه یل پادشاه لیق قلغاندین سونک الله تعالی نک عنایتی بولوب مسلمان بولدیلا

حکایت سبب اسلام اوز بک خان

سبب اسلامی اول ایردی کم اول زمان نک ولی لاری دین²⁰⁹ تورت ولی کا الله تعالی دین الهام بولدی کم سز لار باریب اوز بک نی اسلام غه دعوت قلنکز لار تقی الله تعالی نک امری بلا اوز بک خان نک ایشکیکا کلیب قورو نک تاشیده اولتوروب متوجه بولدی لار انداغ روایت قور لار کافر *²¹⁰ ساحر لار برلا کافر کاهن لار خانغه انداغ کرامت کورساتیب ایردیلا که خان نک مجلسی غه سبجاقی بلا [بال] * کلتوروب قویار ایردی لار جورغاتی و دوستغان لار نی *²¹¹ طیار قور ایردی لار بال اوزی جورغاتیغه قویولور ایردی و دوستغانغه سوزولور ایردی و

²⁰⁴ نبره لارینی

²⁰⁵ استای غه

²⁰⁶ بریب [Юдин]

²⁰⁷ اول که [Юдин]

²⁰⁸ اوز بک خان

²⁰⁹ ترور

²¹⁰ کافر لار

²¹¹ دوستیغا لار نی

کشی نک آرتنجا بردی تقي ایدی کم منکا بو سوز نی ایتغل نا سوز ترور اول ایدی کم باجر توق بوغا بک لاری برلا اتفاق قلیب کنکاشدیلار کم سز لار باریب اوردا لار ایشکیکا توشوب ایکی کرات جو جو تیب یاسلاغاندین سونک اولار قول تیراتیب سز لار نی قیرماق بولدیلار اکر سز لار بر کرات جو تیکاج اوستیکا یوروب قول تیراتماسانکز¹⁹⁹ بارجا هلاک بولدینکلار بو سوزوم نک (47b) کیفیتی بو ایردی که سنکا ایتدیم تیدی استای بو خبر نی بک لاری کا ایدیلار ایرسا اتفاق قلدیلار که جو تیکاج قول تیراتماک بولدیلار تانکلا سی یوروب اوردا اولتورغان یر کا یتدیلار باجر توق بوغا اوردا [ایجنده]# تخت اوستونده اولتوروب ایردی بک لاری و نوکر لاری ایشکیدا قورلاب ایردیلار بولار کلیب ایشکدا توشدیلار تقي بر کرات جو جو تیب یاسلاغاندین سونک جه تیکاج باجر توق بوغا نک اوستکا قویولدیلار تا قدین راست قلعونجه استای یتیب بوینونغه جبدی باشی بر قدم یر کا بریب توشدی آلاطای بویده بلا سانجیب یوقارو کوتارکاج فریاد قلدی کم مونا ایاکیز نک بشی یرلیک یرنکز دین تیرانمانکز یتدیلار ایرسا بارجا سی سوست بولوب اولتورا قالدیلار اندین سونک بو باشنی قور قور غه کزدوروب فریاد قلور ایردیلار قرا کشی خان بولماق موندین کلسون تیب جون باجر توق بوغا نی که اولتوردیلار حضرت اوز بک خان نی خان کوتاریب تختدا²⁰⁰ اولتوردیلار

آغاز داستان اوز بک خان

حضرت خان که تختدا اولتوردی²⁰¹ و ایل کون قرار تبغاندین سونک یوجی خان نک اوزکا آنا دین توغ غان اون یتی اوغول نک اوغلانلاری نی جرلاتیب کلتوروب ایدی که سز لار اتا اوغلی ایماس می ایردینکز قرا کشی کا قول نوکر بولوب انکا مطیع بولغانجه سز لار دین بری نکز خانلیق تالاش سانکز می²⁰² جون سز لار قرا کشی نک قول لوقینی نوکار لیکنی قبول قلدینکز²⁰³ ایرسا من هم سز لار نی قرا کشی کا قوشون براین دیب قهر قلیب نوکر سودر نی و ایل کون لاری بارجا سین قیات استای غه سویرغال قلدی

¹⁹⁹ تیراتماسانکز باردینکلار

²⁰⁰ تختدا ولتوردیلار

²⁰¹ تختدا ولتوردی

²⁰² تالاش سانندی کز می؛ تالاش سانکز ایردی [Юдин]

²⁰³ قلدینکز

یباردیلاز ایدیلار ایامز خان یوموشیغه یباریب ایردی اول کشی نی الیب کلا ترور بو کشی هم آتا آتا دین ایالارنکز اوغلی ایردی کراک ایردی انداغ قلماسانکز ایمدی اوزینکز کا اوخشاتیب خان بولوب ترور سز برجا خلایق سز کا مطیع و فرمان بردار بولوب ترور بز لار هم سز کا اوشانداغ مطیع فرمان بردار ترور بز سرکش قلور مز¹⁹⁴ یوق ترور قیلالی تیساک هم کوجومز یتماس*¹⁹⁵ بو بر یاش اوغلان دور ایلنتب قولونکز غه برالی کونکلونکز نه تیلاسا انی قلور سز بولغای تیدیلار مونک اوجوناو ایلمز دین جلاء وطن بولوریمز یوق ترور تیب یباردیلاز

بولار نک ایلجی سی که کلدی بسیار شادمان بولوب کورا الیب سیلادی تقی فی الحال کشی قوشوب قیتاریب (47a) یباردی ایدی که اولار کلکونجه اوزکا کشی باش کوتاریب خان لیق تیلاکای تیب بو ایشنی قلدیم روا بولغایمو کم اوز ایام اوغلی تورغانده من خان بولاین تیکای من پادشاه کلسون لار اوشته خانلق اوشته ایل کون بارجا سی اولار نک ترور تیب یباردی بو سوز که اولار غه یتوشدی فی الحال کوجدیلاز بولار کلماسدین بورون راق باجر توق بوغا بک لاری [برلا]* کنکاشیب اتفاق قلدیلار اولار که طول اوردا نک ایشکنکا توشوب یاس توتارلار*¹⁹⁶ ایکی کرات جو جو تیب یاس توتغاندین سونک قول تیراتالی تیرلار

بسه قلماق نک قاعده سی*¹⁹⁷ اول ترور¹⁹⁸ کم پادشاه لاری یا اولوغ لاری اوتکانده کوروه کوروه قوم لاری برلا کلیب اوج کرت جو جو تیب فریاد قلیب یاس توتارلار ایردی لار اولوغ تاغده اولار نک اراسینده اول رسم هم هنوز بار ایردی

بر کون اوز بک خان بک لاری برلا تانک اتماسدین بورون راق کوجوب ایردیلاز بر اوق سوران کشی بولار نک آلیندین کلیب اوتار ایردی تقی ایتور کم جو تیکل تقی جه تیکیل تیب بر کرات ایتب اوتدی پروای قلمادیلار ایکنجی کرات ینه ایتب قیات استای ایدی کم اول نه تیکانک بولور اول کشی ایدی منک آتم سانکغسون انکلاغای سن سونکغسون تیدی قیات استای ایدی بر سوز بار تیب بو

194 قلور منم

195 نیما تر

196 توتارلا

197 قغده سی

198 ترور

ایردیم حالا هر یلدا انک¹⁸⁷ سلامت لیق خبری کلا ترور بو یل اون تورت یاشینده ترور اکر یارلیق*¹⁸⁸ قلیب کشی یبارسانکز*¹⁸⁹ اول کلور ایدی بولغای تیدی ایرسا خان خوش حالتدین انداغ بولدی کویا که خسته بولماغان تک بولدی ایکی منک تومن ایل کلین بیالین غه سونجه ایتدی تانکلا سی بک لار نی جراب قیات استای بیلا سیجوت الاتای غه قرق منک کشی قوشوب اوز بک خان علیه الرحمه نی کلتورماک کا یباردی بولار بریب کلکونجه توقتاغه خان وفات بولدی

باجر توق بوغا تیکان اویغور اوماقلى بولور ایردی قومی قبیلہ سی*¹⁹⁰ کوب کوجلوک ایل ایردی و تقی خان نک اتا لیقی ایردی شیطان وسوسه بریب قرا کشی ایکان اول خان بولدی کلین بیالین نی تقی خان نک اوزکا ضعیفه لارینی هم الدی بعضی لار ایتورلار باجر اویغور ایردی توق بوغا نوتین ایردی بو سوز غلط اوخشار انک اوجون کم ایکی قومدین ایکی اتفاق برلا بر یر ده خان بولماقی*¹⁹¹ مشکل ترور دورست (46b) راقی اول ترور آتی باجر ایردی لقبی توق بوغا ایردی القصه بو باجر توق بوغا خان بولوب خان نک ضعیفه لارین الیب ایل کون نک تمامین اوزیکا مسخر قلیب ایردی

بو اثناده*¹⁹² اول برغان بک لار حضرت اوز بک خان نی الیب [عدیل دریا سی نک]* قراغیغه کلدیلاز خبر تبدیلاز که خان اولدی تقی باجر توق بوغا خان بولدی بارجا ایل کون نی اوزیکا مسخر قلدی تیپ بو خبر دین بسیار پریشان و غم ناک بولوب کنکاش قلدیلاز کم نه ایش قلساق بولور قیات استای ایدی بورون ده قومی قبیلہ سی کوب کوجلوک کشی ایردی حالا خود تمام خلایق انکا یوز کلتوروب ترور حالا بو یر دین توروب دوشمان لیق ظاهر قلساق ایشمز راست کلماکای بر حیلہ برلا اوزومز نی انکا یتکورا کورالی اندین سونک هر ایش خاطریمز غه تیلاسا¹⁹³ قلور بز تیدی ایرسا بارجا لاری بو سوز نی معقول کوروب ایلجی

187 یلدا انک

188 یارلیق

189 یبارسزنکز

190 قبلسی

191 بولماقی

192 اثناده

193 تیلا بورور؛ کلسا [Юдин]

اولکاندین سونک انکا خان لیق تلاشور تیب اوز قرینداش لارین تقی اوز نسلین برجا سین قیردی حتی که اینسی توغرونلی اولتوردی تیرلار اما بعضی لار ایتورلار توغورول اوزی خسته لیق دین اولدی کلین بیالین آتلغ توغورول نک ضعیفه سی بار ایردی کورلوک ایردی توغورول اولکان محله بر فرزنددی بولدی کوردی که توقتاغه خان اوغلی جهتدین قرینداش لارین قرا ترور بر نجه کشی برلا قاجریب جرکس تاغی غه بیاردیلار اوز بک خان مشهور علیه الرحمه اول اوغلان ترور آز فرصتدین سونک کلین بیالین نی خان الدی انی بسیار سوار ایردی بو قاضیه لاردین نجه یل لار کجتی ایتورلار خان نک عمری توقسان یاشار ایردی اون یاشیده خان بولوب ایردی سکسان یل خان لیق قلدی بعضی لار ایتورلار یکرمی یاشیده خان بولدی یتیمیش یل خان لیق قلدی تیورلار

جون آخر عمرینکا یقین کلدی القسه اوزومدین سونک خان بولسون تیب سقلاغان اوغلی اوزودین بورون اولدی بسه معلوم¹⁸⁴ ترور کم بز دین بر اوغلی بولغای مندین سونک انکا خانلیق تالاشور تیب اوز اوروغین تمام قیرغان بولغای ینه اوزی هم فیرلیک برلا آخر عمرینکا یتمش بولغای بو اوغول تقی اوزیدین بورون اولکای انک نه تورلیک مصیبتی و ندامتی بولغای عاقبت بو غصه دین خسته بولوب خسته لیقی اوزاقغه جکدی بر کون توشاکده یاتیب اول یان بو یان آغاب اه اورار ایردی کلین بیالین بلدی که نه جهتدین بی طاقت بولا ترور ایتدی سز دایم خسته بولور ایردینکز بو یول نجوک بی طاقت بولا ترور سز تیدی (46a) خان ایدی نجوک بی طاقت بولماین یلغوز اوغولوم ایل بسیار¹⁸⁵ غه خان لیق تلاشور تیب اوز اوروغوم نی تمام قیردیم اوغولوم نک هم ایشی اول طریقه بولدی اوزومکا هم اولوم یقین کلدی یوروتوم یات کشی کا توشار بی طاقت لیغیم اول جهتدین ترور تیدی ایرسا کلین بیالین ایدی سز نک یرلیغی نکز دین تاش [من بر] ایش قلیب ترور من اکر کناهمنی بغشلاسانکز*¹⁸⁶ ایتاین تیدی خان فی الحال قیوب اولتوروب سوردی کم نه ایش قلیب ایردنک ایدی اول محلدا که اینی نکز اولدی اینکز دین بر اوغول بولوب ایردی سز نی اولتورکای تیب قاجیریب جرکس ولایتتغه بیاریب

184 بسی معلول [Юдин]

185 ایل بسار [Юдин]

186 بغلاشانک

بعضی لار¹⁷⁵ ایتورلار اون سکز یل خان بولدی بعضی لار ایتورلار سکز یل خانلیق قلدی اندین سونک اینسی مونک تمور¹⁷⁶ یکیت یتلدی ایرسا اوزی اوق انصاف اتدی ایدی مونجه دین بارو کشی یوق دین منی خان قلیب ایردینکز سز لار هم قینالدینکز من هم قینالدیم ایدمی اینم شکر بو جاقلی [اوسدی] #*¹⁷⁷ منک کونکلوم سز لار کا خوش ترور اینم نی خان قلنکز تیب اوز نی خانلقدین عزل قلدی بک لاری هم بو سوز نی¹⁷⁸ خوش حال بولدی لار اینسی مونک تمور نی خان کوتاردیلار

آغاز داستان*¹⁷⁹ مونک تمور خان

بسیار عادل¹⁸⁰ و ضابط عاقل پادشاه ایردی مونک تمور زمانینده ایل کون بسیار رفاهیت ده بولدیلار انک غایت یخشی لیقیندین کولوک خان آت بردیلار*¹⁸¹ انداغ مونک تمور کولوک خان مشهور ترور ایتورلار اون اوج یل خانلیق قیلدی اندین سونک وفات تابدی اندین ایکی اوغول قالدی بری نک آتی توقتاغه بری نک آتی توغول آتاسی اولکاندین سونک توقتاغه خان بولدی

آغاز داستان توقتاغه خان

بو توقتاغه خان بسیار اولوغ پادشاه ایردی صاین خان اوغلانلاری ده مونونک مقابله سینده پادشاه آز بولدی ایتورلار اول طریقه (45b) معظم شولانی بار ایردی اط دین سغر دین قویدین اوزکا جانوار لار دین بشغه هر کونده توقسان قبان شولانیدا*¹⁸² بشار ایردی مونونک بر اوغلی بار ایردی ایل بسیار¹⁸³ اتلیغ من

¹⁷⁵ بعضی لاری

¹⁷⁶ تمر

¹⁷⁷ اوغدی

¹⁷⁸ سوز دین [Юдин]

¹⁷⁹ داستا

¹⁸⁰ عادل

¹⁸¹ بردیلار

¹⁸² شولانیدی

¹⁸³ ایل بشار [Юдин]

سنى اونوتوب ترور بر يلانك يوزلى يكيٲ نى ضعيفه صورتى غه يساب یراق دين كورساتلى بولغای كم ضعيفه سى خاطرینغه توشوب اط لانغای یتدیلار تقى بر اوغلان يكت نى ضعيفه صورتى غه يساب كورساتدیلار ایرسا كوركاج ضعيفه سى خاطرینغه كلدى توشوب¹⁶⁴ ایدی بز نك او دا¹⁶⁵ هم مونونك تك كشى بار ایردی یتب فى الحال اط لانیب ایلغادی بعضى لار بو حكایت نى بر تورلیك قبیح راق*¹⁶⁶ ایتورلار*¹⁶⁷ مناسب كورمادوك بو دفتر ده*¹⁶⁸ بتلكای

جون ایلغالب كه سلى ايكى كوندین سونك عیدیل دریا سى نك قراغیغه كلدى قتنده ايكى جوره سى قالیب ایردی دریا [نك یانیندا]¹⁶⁹ بسغونجاق توزلاقی نك [یانیندا] بیک تبا تك تاغى بار ترور هر كشى كه عیدیل دریا سى نى بسغونجاق یانندین¹⁷⁰ كجیب یایق دریا سینغه كه آرتولور اول تاغ بر كونلوك كا یقین بر كشى نك یانیندین قالماس ترور خان كه عیدیل دریا سى نى كه كجیب ایلغادی كوردى كه بر تاغ هیچ قالماس بر ايكى كرت غضب بر لا بقدى تقى ایدی سن اوق بار من بر من¹⁷¹ یتب اطدین فى الحال توشدى یتدی قتنده قى جوره لارى هم جاره سز*¹⁷² بولوب توشدیلار اول كون (45a) تا اخشام بولغونجه اندا یتدیلار جون اخشام كشى تانیماس بكین كه بولدى اول ايكى جورا سى نك برى سى نك ادراكى بار ایردی فهم لیک كشى ایردی اول ایدی حالا كیچ بولدى اول هم توشوب ترور دم بدم دور كه اوقلاغاندا*¹⁷³ بز اطلانیب ایلغاساق اول بز نى تویماین*¹⁷⁴ قالور یتدی ایرسا بو سوز خان غه بسیار معقول كلدى تقى ایدی یخشى ایدنك اط ایارلانك ایارلادی ایدى اوقلادی تیكان وقتدا اط لاندی تقى ایلغادی لار تانك اتغونجه تانك كه اتدی هیچ یر ده كورمادی تا خان بسیار خوش حال بولدى ایتورلار اوردا سیغه برغاندین سونك كوب سویرغال لار قیلدى تیرلار بو یانكلیغ طرفه دیوانه كشى بولغاندور

164 خاطرینغه توشوب [Юдин]

165 اویدا [Юдин]

166 قلع راق

167 ایتورلا

168 دفتر دى

169 نى

170 یانندین

171 من برمایمن [Юдин]

172 جار سز

173 اقلار اولاقلاندا

174 تویمانى

اوزی بلماکای بلکان لار نک سوزیکا اینکای اول همان بلک لیک ترور انک
تفاوتی یوق ترور دیر ایکاندور*¹⁶¹

القصة تانکلا سی*¹⁶² ایلجی کا کورنوش بردی لار خان نک سلامت لیقتی
سوردی ایل کون نک رفاهیتتی سوردی اندین سونک ایدی سز نک ایلده سجقان
کوب بولور مو ایدی بولور اندین ینه سوردی کم سز نک ایلدا یغمور کوب بولور مو
ایدیلار بلی کوب یغار اول بینی توتوب اولتورغان کشی کوردیکه فریشان سوزلای
بشلادی اول بینی ترتدی خان ایلجی کا ایدی سندین ینه سوز سورار ایردیم و لیکین
ایاقیم دین ترتا ترورلار تیدی بک لار فی الحال ایلجی نی الیب قیتدیلاز تقی اط تون
بریب اوزاتدیلاز اول ایلجی قیتب اوز پادشاهی خدمتی غه کلدی اول خان سوردی
کم قرینداشمیز خان نی نجوک کوردونک و نه تورلیک کشی ترور تیدی ایرسا
ایلجی ایدی بر کرت اوق کورنوش قیلدیم انکو بلمادیم اول کورنوشده سز نک
سلامت لیتکز¹⁶³ نی سوردی تقی ایل کون نک رفاهیت لیقتی سوردی ینه سوردی
کم سز نک ایلده سجقان کوب بولور مو من ایدیم بلی کوب بولور ینه سوردی کم سز
نک ایلده یغمور کوب یغار مو من ایدیم بلی یغار ینه ایدی کم سندین ینه سوز سورار
ایردیم و لیکین [ایاقیم دین]# ترتا ترورلار تیدی اندین بک لار فی الحال توروب
قیتدیلاز من هم قیتدیم خان نی کورکانم اوشال بولدی تیدی بو خان تقی بک لاری بو
سوز کا تفکر قیلدیلاز ایدیلار یغمور کوب یغار مو تیکانی یخشی انک اوجون کم
بارجا خلیق غه یغمور دین رفاهیت بولور و تقی سجقانی هم سورغانی یمان
ایرماس اندین بارجا غه زیان تکار اما (44b) هر نجه فکر قلدیلار بینی ترتا
ترورلار تیکاننی بلا المادیلار تیپ ترورلار

ینه بر حکایت کم اوزی عیدیل دریا سی نی کجه جریک اطلانیب ایردی
جریکدین کم قیتدی دیوانه لیتی غالب [بولدی]* انک عادتت اول ایردی هر گاه که
دیوانه لیتی غالب بولسا هیچ کشی نک سوزینکا التفات قلماس ایردی بر یر کا کلیب
توشدیلاز اون بش کون اول یر دین [اطلانمادی]# جریک نک آزوقی توکاندی
احوال لاری خراب بولدی بک لاری کنکاش قلدیلار و تقی ایدیلار بو حالا ضعیفه

161 انکاندور

162 تانکدایسی

163 سلامت لتکز

تقی بیرری توغان ایردی ساری تقی آتا¹⁵² سی دین (43b) بورون سکز یاشاریده اولدی توغاندین ایکی اوغول قالیب ایردی بری نک آتی توده منکی ینه بری¹⁵³ نک آتی مونک تمر بو مونک تمور یاش ایردی اما توده منکی اکرجه یکیت یتلیب ایردی ولی بی عقل بسیار دیوانه کشی ایردی صاین خان نسلی دین موندین اوزکا کشی تبماین بیک لار اتفاق قلب مشار الیه¹⁵⁴ نی خان قلدیلار موندین عجایب و غرایب سوز لار طرفه*¹⁵⁵ حکایت لار بسیار ترور اما بر ایکی حکایت بو مختصر ده یاد قلدی

ایتورلار بر وقت ده توب خاندین ایلجی لار کلدی بک لاری اتفاق قلب خان مذکور کا ایدیلار بو ایراق دین کلکان ایلجی کلیب ترور مونونک کوزونجه فریشان [قلماغل]#¹⁵⁶ کورماکل خان نک سلامه لیقینی سورغیل تقی ایل نک رفاهیت¹⁵⁷ لیقینی سورغیل اوزکا سوز سورماغیل تیدیلار ینه ایدیلار سز نک اوزونکز کا اختیارنکز یوق ترور سز نک ایاقنکز غه بر یب تقالی تقی تخت نک استنغه بر کشی کیریپ اول یینی توتوب اولتورسن هر کاه که بز نک بو نصیحت یمز نی اونوتوب فریشان سوزلای بشلاسانکز اول یینی تارتسون اول حالده سوزلاماکنی بس قلغای سز*¹⁵⁸ تیدیلار ایرسا اول هم قبول قلدی ایتورلار انک بر یخشی ایشی اول ایردی با وجود اول دیوانه لیقی بله هم هر ایشنی که بک لار اتفاق قلب [انکا]# تیسالار انی قبول قلب اولار نک سوزیندین جقماس ایردی اول جهتدین اون سکز یل دشت ولایتندا پادشاه لیق قلدی تیرلار

ادکو بی رحمت الله علیه ایتور ایکاندور دوشمانکز غه یمان دعا قلور بولسانکز بو طریقه*¹⁵⁹ دعا قلنکز کم بر خدایه منک دوشمانمنی بیلکسز قلغل و تقی بیلکان لار نک هم تیلنکا اینماس قلغل تیب دعا قلنکز تیر ایکاندور*¹⁶⁰ (44a) اکر کشی

152 آنا
153 بر
154 الله
155 طرف
156 قلماقل
157 رفاهیت
158 قلماغای سز
159 طرفه
160 انکاندور

لشکری نک*¹⁴⁴ قریغین کورسا بولماس ایردی اول ائناده¹⁴⁵ حضرت خان اوج کرت قمجی سین سلدادی تقی یاغی غه اوترو اط سلدی هنوز تبا دین اشاق اینماین خدای تعالی (43a) نک قدرتی برلا [یاغی]* لشکری بوزولدی تقی قجتی خان نک لشکری بو حالتی نی کوردی*¹⁴⁶ ایرسا خان سونکیندین اط سلدی لار نجه کون قویب اولتورکانین اولتوروب اولتورماکانین اسیر قلیب قیتدیلا ر آطلارین پراغلارین تمام الدیلار اول توشکان کشی لاردین سورار ایردیلا ر سز اول تبا بشینده قی بر کشی دین نجوک قجتنکز اولار ایتور ایردیلا ر*¹⁴⁷ اول بر کشی کم تبا نک اوستوندا جقیب ترور ایردی انک ایکی یانیندا ایکی اولوغ لشکری بسیار ترور ایردی هر نجا لار کم قرا لار ایردوک اول ایکی لشکر نک اوجنی تقی قراغینی کورا بلماس ایردوک یراق یسال جکیب تورغانمز اول جهتدین ایردی جون اول تبا داکی کشی بز کا اط سلدی اول ایکی عظیم لشکر هم اط سلدی لار خیال قلدوق کم یر کوک اوستومز کا یقلیب کلا تورغان تک بولدی اول جهتدین تورا بلمای قاجدوق تیدیلا ر حضرت خان نک بو کرامتی خلق اراسیندا مشهور ترور

بعضی لار ایتورلا ر هلاکو خان نک [اوغلی] بو لشکر نک ایچندا ایردی بو لشکر بسلغانده اولدی هیچ کشی انک اولکانیدین خیر دار بولمادی اما حضرت دوست سلطان نک تواریخ لاریده ایتوب ترورلا ر بو لشکر که بسلیب*¹⁴⁸ باردی غصه سندین خسته بولوب ایکی آیدین سونک اولدی دیب ترورلا ر و الله اعلم

جون دشت ولایتی*¹⁴⁹ که برکه¹⁵⁰ خان غه مسلم بولدی اکثری کوب کافر لار نی مسلمان قلدی بعضی لار اون اوج یل بعضی لار¹⁵¹ اون التی یل پادشاه لیق قلدی تیپ ترورلا ر اندین حق رحمتی غه واصل بولدی حضرت خاندین نسل قالمادی یوقاریده مذکور بولوب ایردی صاین خان نک ایکی اوغلی بار ایردی بری ساری

144 تک

145 اسناده

146 کودی

147 ایردیلا

148 بیلیب

149 ولایت

150 برک

151 بعضی لا

نک قبہ سی اوزا اور این اکر بولار نک قبہ سی اوزا اومقہ تورسا خود بلنک کہ من بو یاغینی بسر من*¹³¹ خدای (42b) تعالیٰ منکا برور اکر اومقا تورماسا هر نه سز نک ایتغانکز دین جقماین تیدی بو جماعت هم ایدیلار اکر اومقا تورسا بز هم سز کا یک جهت بولالی تا*¹³² جانمز بارنجه تیدیلار خان علیه الرحمه اشوقنی قولیغه الیب الله تعالیٰ یاد قلیب کہ اوردی*¹³³ قبہ نک اوستوندا راست اومقہ توردی بو حالتنی کوردیلار ایرسا کونکول لاریندین*¹³⁴ شک شبهه نی کتاریب برجا سی مطیع و فرمان بردار بولوب عیدیل دریا سنی کجیب قولزوم¹³⁵ دریا سنی یقالاب هلاکو خان لشکرینکا اوترو یوردیلار¹³⁶

اول یولدا مجاق لار قولزوم¹³⁷ دریا سی دین شاخجه شاقجه سولار جیقار یول اول سولار نک بش لارین کسا کیتار قوملی بیک تبا لاری بولور فقیر اول یرلارنی کورکان ترور من قیر مجاق تیرلار اندین نارو دریا دین شاخجه سو جیقماس ترور انک بر اولوغ تفا سی بار برکا خان نک قراویل لاری اول تفا کا جیقیدیلار شیروان طرفیدین عظیم کرد فیدا بولدی خان غه خبر کلتوردیلار¹³⁸ کم یغی نک کردی*¹³⁹ فیدا بولدی هیچ اوجی قراقی یوق ترور تیپ بو بک لار ینه بی دل لیک قلا بشلادیلار خان ایدیلار*¹⁴⁰ من اول تفا کا جیقاین سز لار موندین قراب توروک تقی خدای تعالیٰ نک قدرتینی*¹⁴¹ کورونکز اکر یاغی کلیب منی الور بولسا سز لار موندین اوق قجغای سز لار تیدی بولار هم قبول قلیب توردیلار خان تبا بشینغه جقدی آز زماندین سونک اول طرفدین لشکر فیدا بولدی گروه گروه قول قول بولوب*¹⁴² کلور ایردیلار همین که یقین کلدیلار تقی مقابله سیندا یسال جکا بشلادیلار*¹⁴³ جندان یسال جکیب توردیلار لشکر نک اونکی سونکی یتوشدی

131 من بو یاغینی من بسر من

132 نا

133 اویردی

134 کونکول لاریند

135 قولزوم

136 یوردیلا؛ یوردیلار [Юдин]

137 قولزوم

138 کلتوردیلار

139 کرد

140 ایدیلار

141 قدرتننی

142 بولور

143 بشلادیلار

تبغایمن تقی بریب دونیا نک پادشاه لیغغه تقی مشقتغه اوزمنی سلغایمن شیخ ایدی
اگر تفرقغه¹²¹ توشار سن اکر مشقتغه توشار سن خدای تعالی نک تقدیرینغه
جاره*¹²² یوق ترور تیدی ایرسا خان مذکور هم بیجاره بولوب قبول قلدی بر نجه
کون یراغ قلیب جقدیلار حضرت شیخ بخارا دین قرا کولکا تکر و اوزاته*¹²³ کلدی
خان شیخ نک جلاویده فیاده کلدیلار قرا کولدین شیخ دعا قلیب قیتدیلا ر خان دشت
(42a) ولایتنگه متوجه بولدیلار

حاجی ترخان ولایتنده حاجی نیاز تیکان دولتی¹²⁴ مشهور کشی بار ایردی اول
ایتور ایردی حضرت خان قرا کولدین*¹²⁵ سکز کشی [برلا]* جقیب دشت ولایتنگه
یوریدیلار اول سکز کشی نک هر بر سی منک اویکا آتام ترور تیر ایردی جون
خان علیه الرحمه قرا کولدین جقیب اورکنج [کا] کلدی اورکنج دین سرای جوق
[غه] بردی ایتورلار سرایجوق غه برغانده بش یوز کشی جمع بولدیلار سرایجوق
دین که اوتدی لار عیدیل دریا سی نک یقا سنگه تکونجه*¹²⁶ منک بش یوز کشی
جمع بولدی لار جون عیدیل دریا سی نک یقا سنگه کم کلدیلار خبر تبدیلار کم هلاکو
خان عظیم لشکری بیلان قولزوم¹²⁷ دریا سنی یقالاب کلا ترور تیب بو یغلغان
لشکر لاری بی دل*¹²⁸ بولوب برجا سی اتفاق قلیب ایدیلار کم هلاکو خان اولوغ
عظیم پادشاه ترور لشکری بار بز آز کشی ترور بز انکا اوترو جقیب اوروش
ماقیمز مصلحت بولماغای تیدیلار ایتورلار اول حالده خان نک الینده بر قابسیز
قلقان ترور ایردی بعضی لار ایتور ایردی بر قابسیز تولغه ترور ایردی بر قوی
نک اشوقی هم حاضر ایردی خان بولار نک جوابینده*¹²⁹ ایدی کم من اوز رایم
اوز فکریم بیلان یوریکان کشی ایماس ایردیم سزلار منکا اینان مای ترور سز حالا
بو اشوقی نی قلقان نک یا تولغا نک قبه سنگه اوز قولیمز بلان اومقا قویساق خود
توختاماس ایدمی سز لار برلا بر شرط قلالی من بو آشوقنی بو¹³⁰ قلقان نک یا تولغا

121 تفرقغه

122 جار

123 اوازاته

124 دولق

125 قرا کلدی ن

126 تکر نجه

127 قولزوم؛ [قولزوم]#

128 بی قل

129 حوانینده

130 بر

نک آتی ساری تق بری نک آتی توغان ایردی ساری تق اوزیندین بورون سکز یاشدا اولوب ایردی توغان تقی یاش قالدی بک لار اتقاقی برلا هلاکو خان غه ایلجی یباردیلا^{*113} قلیج سز [غین]#¹¹⁴ یقا سز کونکلاک یباردیلا^{*} یعنی ایل قالدی پادشاه لاری یوق ضعیفه لاری قالدی آرلاری یوق هلاکو خان بو خبر نی ایشندی ایرسا اط لانیب شروان^{*115} ولایتیغه کلدی تقی عظیم لشکر یراغین قلیب قوشوب یباردی بو لشکر هنوز کلماکدا بز کلدوک برکا خان علیه الرحمة و الرضوان^{*116}

آغاز داستان برکا خان

مذکور علیه الرحمة مشهور ترور انا سیندین توغ غانندین بارو مسلمان ایردی اول محلدا دونیا کا کلدی اوز انا سی سوتی (41b) تقی اوزکا کافر ضعیفه لار نک سوتینی آمادی بو جهتدین کاهن لار برلا بیلکا لارینی بقتوردیلار اولار ایدیلار بو محمد ترور محمدیه کافر ضعیفه سوتینی ام ماز تیدیلار ایرسا بر مسلمان ضعیفه فیدا قلیب کلتوردیلار انک سوتینی اما بشلادی

بو واقعه دین نجه یل دین سونک آتا سی یوجی خان اولدی ایرسا کافر لار اراسنده یوری بلمای سیغناق شهرینغه کلب ایردیلا^{*} اول ولایت غه کم کلدی لار شیخ العالم شیخ سیف الدین باخرزی^{*117} که حضرت قطب الاقطاب شیخ نجم الدین کبرا^{*118} نک خلیفه لاریندین ترور اولار نک اوصاف حمیده لارینی اشتب اشتیاق و رغبت^{*119} بیلان خدمت لاریغه کلب نجه یل لار ریاضت لار جکیب اولیا لار کمالی نک نهایتی حاصل قلیب ایردی هنوز شیخ نک خدمتلا^{*} ایردیلا^{*} بو ائناده که صاین خان اولدی بک لاری اتقاق قلیب هلاکو خانغه ایلجی یباردیلا^{*} بر کون حضرت شیخ برکه خانغه ایدی کم ای فرزند خدای تعالی نک امری انداغ بولدی کم سن بریب آتا لار نک یورتنده پادشاه لیغینی [قلغل تیدی]# سز نک خدمت ده^{*120}

¹¹³ یباردیلا

¹¹⁴ غیف

¹¹⁵ شروان

¹¹⁶ علیه الرحمة و الرضوان علیه رحمة

¹¹⁷ باخرزی

¹¹⁸ قطب الاقطاب شیخ نجم الدین کمرو

¹¹⁹ رعیت

¹²⁰ خدمته

یاتیب او قلامادی لار تانک که اتدی بیس قلدیلار ینه اخشام که بولدی بییاقی تک ینه علامتی و غوغا قوباردیلار تا بر هفته اون کونکا تکر و ایش کوچ لاری بو بولدی قلعه خلیق لاری اویقو سز لیقیدین خراب بولور ایردی بو غایت غه تکر و ایتورلار کم اکر بر ایش قلور بولسا قلور ایردی لار شاید بولارنک بو آیلا ده و بو کون لار ده رسمی و عادت بو طریقه بار بولغای تیب فراغت بولدیلار جون شیبان خان بیلدی که بولار فراغت بولدیلار لشکرین یغوردی ایتورلار که اول قلعه بر یالنک قیا نک اوستوندا ترورلار بو اخشام غوغا و صدا نی*¹⁰⁸ کوبراک قلدی قلعه نک تورو ت یانی دین جاقورلار سالدی تا تنک اتقونجه بر کشی جیقار جاقلی یول قلدیلار قلعه خلیق لاری غوغا و صدا¹⁰⁹ جهتیدین میتین اوزین معلوم قلیب خبردار بولا المادیلار یول که طیار بولغاج دروازه غه اوروش سلدیلار قلعه خلیق لاری یوکوروب دروازه غه کلدیلار بر جماعت بهادر لار نی اول یولغا تعین قلیب ترورلار اول یولدین یوکوروب (41a) جقغاج قلعه کا اوزین سلدیلار تقی قلعه نی الدیلار اول قلعه نی کورکان رونده لاردین سورادوق هنوز اول یول نک حدودی بار ترور تیدیلار

اندین سونک اولاق*¹¹⁰ ولایتی اوستونکا یوریدی لار انی فتح قلدی اندین کورال ولایتی اوستونکا یوریدی کورال عظیم اولوغ ولایت ترور انک کوب اوروش لاری بولدی عاقبت فتح قلیب کورالنی پای تخت قلدی اندا وفات بولدی تقی حالا کورال پادشاهی نک اولادی ترور شیخ احمد خان نجه یل اندا توتقون بولوب ینه اندین سلامت جقیب اوز ولایتی حاجی ترخان غه کلدی اول ایتور ایکاندور بز نک اوزبک طائفه سینده هر که اوماقلی ایل که بار ترور بارجا سیندین اندا بار ترور شیبان خان برلا باریب اندا قالیب ترورلار تیر

بسه شیبان خان حکایتین که تمام قلدوق ینه کلدوک صاین خان حکایتنغه صاین خان دشت ولایتیده اولوغ پادشاه¹¹¹ بولدی نجه یل لار دولت سعادت بلا پادشاه لیق سوردی جون اجل¹¹² یتیشب دونیا دین نقل قلدی ایرسا ایکی اوغلی بار ایردی بری

108 و غوغا و سورانی

109 صدا

110 اولاق

111 پادشاه

112 اجل

بسه صاین*⁹⁷ خان بو ولایت لار بلا بو ایل لار نی که ضبط که قلدی اندین
سونک بارجا قرینداهش لارینغه ایل کون بریب یر یوریت لار تعین قلدی اما شیپان
خان غه ایل کون برور⁹⁸ ولایت لار برور جاقی ده بک لاری برلا کنکاشدی ایرسا
بک لاری ایدی بو کشی بسیار اولوغ ایش قلدی حالا مونونک کونکلی اوسوب
ترور مونکا ایل کون [و] ولایت بریب اوز قشندکا سقلاماغنک اوخشاماغای اول
اوتوز منک کشی کا انکا یقین ایردیک اول کشی نی ینه لشکر قوشوب باقماغان
ولایت لار غه بیارکل هر نه ولایت که بقدورسا انک بولسون تیدی بو سوز خانغه
معقول کلیب اول تابون قلغان اوتوز منک کشی کا ینه اون منک قیات یورالدای نی
قوشوب قریم کیفه ولایت لاریغه سلغاب بیاردی

آغاز داستان شیپان⁹⁹ (40b) خان

شیپان خان نک عجایب و غرایب ایشلاری بسیار ترور اول جمله [دین]* بر
ایش نی بو مختصر ده یاد قلدوق اول بر ایشی اول ایردی کم قریم ولایتنده قیرق
یر*¹⁰⁰ تیکان خارا¹⁰¹ آفرین برک قلغه بار ترور کم انک برک لیکی و مضبوط¹⁰²
لیقی عالم ده مشهور ترور نجه یل*¹⁰³ لار قاباب اوروش سلدیلاز الا بلمادیلاز آخر
حکم قلدی کم اخشام دین تنک اتقونجه هر نا کم اواز قلور انی بر برینکا
اوروشدورنک ایکی قول لاریغه الیب بر بریکا جاقیشدورا بشلادیلاز*¹⁰⁴ و بقر
قازان لاری نی و طباق لارنی و جانق لارینی اورا بشلادیلاز قول نک ایچندا بو
صدایی*¹⁰⁵ و علامتی قوبدی که یر کوک زلزله کا کلدی قولاق لار توندی قلغه
خلایق لاری سراسر انک تانک بولوب¹⁰⁶ هر سارو یوکروشور لار نه حال بولدی
تیپ اول اخشام تانک اتقونجه اول صدا¹⁰⁷ و اول غوغا تنمادی قلغه خلیق لاری هم

97 صاصین

98 بور

99 شیپان

100 قیر یری

101 خرا

102 مضوط

103 ایل

104 یشلادیلاز

105 سدانی

106 انک مانک بولوب

107 سبدا

پادشاهی⁸⁹ بسه المای پادشاهی نی توتدیلاز لشکری نک اولتورکانین اولتوردیلار قالغانین یسر قلدیلار جندان مال و یراغ جیبه جوشن توشوب ایدی هیچ حسابی و کتابی یوق ایردی اما شیبان خان حکم قلدی که هر مال و یراغ که هر کشی کا توشوب در دست یابی*⁹⁰ الیب قالماسون لار بارجا سین کلتورسونلار ایتورلار هر جنس دین بر خرمن قیلدیلاز بی حساب خرمن بولوب ایردی

ایکی کوندین سونک [خان]# یتوشدی بو فتح نصرتنی کوردی بو مال یراغ لارنی بارجا سینی کلتوروب جکدیلاز بسیار خوش حال بولوب شیبان خان غه کوب آفرین قلدیلار اندین سونک شیبان خان که کلیب کورنوش لار قیلدی ایرسا کوب تورلیک عنایت (40a) شفقت لار قلیب سویورغال لار اتدی توشکان*⁹¹ مال و یراغ نک بارو سینی شیبان خانغه سویورغال قلیب بارو سین اوز لشکری کا بخشش قیلدی تنکلا سی کوجوب ماسکاو ولایتی غه بریب کیردیلاز بر نجه آی اندا بولوب ولایت نک ایشین کوجین ضبط ربط*⁹² قلیب مال خراجن*⁹³ قبول قلدورب داروغه حاکم لار قویوب مظفر و منصور اوز ولایتغه قیتدیلاز

بسه بولار قیتب کلکونجه ایجان خان نک⁹⁴ نوکلاری ایا سیکا عاصی بولوب ایجان خان نی تمام اوغلانلاری برلا اولتوروب ایردی بو خبر که صاین خانغه کلدی اولوغ مصیبت توتدی اوپکا توشوب آب آش برکاندین سونک جریک یراغینی قلیب بو یاغی اوستونکا⁹⁵ یوریدی بولار هم توروش برمای اولوغ لاری قجتی اوزکا ایل کون نک بارجا سین کوجروب الیب کلیب اوز ایلکا قوشدی و تقی هر ایماقنی بر بیک کا قوشون بردی تا بو جاق غه تکرو عاصی بیلا یاغی*⁹⁶ نک قلیج یالی بولماق لیقی اول جهتدین قالیب ترور

89 پادشاه

90 دسته تابی

91 توشکان

92 ربط

93 خراج ن

94 نی

95 اوستونکا؛ اوستونکا [Юдин]

96 اتما بیلا یالو

اورکا لار سلیب اول اخشام سوئسون قونالغه نی حساب سلدی*⁸⁵ تنکلا سی کورنوش بردی اون ایکی قوری توزولدی و بک لاری بر یاک برلا اولتوردیلار*⁸⁶ جولان جکیب اش طعام بیلکاندین سونک صاین خان قیتب یوکوندی تقی ایدی آتامز اولدی ایرسا اورنیغه همان آتام سن یات یورتغه برا ترور بز تیب خان بولغل تیدیم قبول قلمادی لار نه جهتدین قبول قیلا الماغان لارین بلا المایمن بو عرضیم نی سز کا ایتاین تیب کلدیم تیدی خان ایدی صاین یوسقلی سوز ایتا ترور نا اوجون قبول قلمادنک تیدی ایجان هم یوکونیب ایدی بلی خانم یاشغه اولوغ ایکانم راست و لیکن آتامز انی بسیار سویب ارکا اوستوروب ایردی تا بو جاق غه تکرو من انک محال لارین جککان ایردیم اول منک محالم نی جککان ایماس ایردی خان بولسام بورونقی تک انک محالنی جکا الماغای من آراز ده کینه و عداوت بولغای سز نک کوزینکز کا یمان کورینور من تیب بو جهتدین قبول قلمای من ایمدی اول اوق خان بولسون من انک خان لقین غه جیدار من تیدی ایرسا خان نک بو سوزلار کا کونکلی بوزولوب اوغلی یوجی خان یادیغه توشوب کوز لاریندین یاش لار اقیتب ایکی سی کا تقی کوب دعاء القیش لار قلدی تقی ایدی تنکلا بک لار برلا کنکاشیب سزلار کا جواب برالی تیدی تنکلا سی بک لار برلا کنکاش قلیب اونک قولی برلا (39b) عدیل دریا سی داغی ولایت لارینی خان یوسوقنا صاین خانغه بردی سول قولی برلان سر دریا سی بوینونداقی ولایت لارنی ایجان کا بردیلار

بسه خان کورنوشندین قیتب خان سلغاغان ولایت لارینغه که کلدیلار صاین خان عیدیل دریا سی بوینونغه کلکاج جریک یراغین قلیب اوروس ولایتی نک شهری ماسگاؤ کا یوریدی ایتورلار اول یوروشدا شیبان خانغه اوتوز منک کشی قوشوب قراویل ییاردی اوزی سونکنجه یورور ایردی اوج کون لوک یر [کا]# ایلکارو یوریور ایردی ماسگاؤ پادشاهی*⁸⁷ خبر تبدی یوز الیک منک کشی برلا قرشو جقدی بولار خبر تبدیلار ماسگاؤ پادشاهی قرشو کلا ترور تیب شیبان خان مونک اوستونکا ایلغار من تیب ایدی هر نجه بیک لار منع قلدیلار قبول قلمادی اوج کون لوک یر دین ایلغار⁸⁸ سلیب بی خبر یتغان لشکری نک ایجینکا اینیب کلدی اوروس

85 ساردی

86 اولتوردیلا

87 پادشاه

88 ایلغال

خدمتی غہ یتشدیلار خان بولارغہ اوج اورکا سالدی التون بوسغالی آق اورکا نی صاین خان غہ سلدی کموش بوسغالی (38b) کوک اوردا نی ایجان کا سلدی بولات بوسغلی بوز اوردا نی شیبیان غہ سلدی

بسہ اوج یر ده شیبیان خان اوغلانلاری توختمش خان بلا تمور قتلی*⁷⁶ و اوروس خان اوغلانلاری غہ فخر قلیب مقتانورلار بز سزلار دین ارتوق ترور بز تییب اول بری اورکا ترور ایتورلار آتامز یوجی خان اولکاندین سونک اولوغ بابامز جنکز خان قشنگه آتالاریمز بردیلار ایرسا ایجان برلا صاین دین سونک بز نک آتامز شیبیان خانغہ اورکا سلدی سزلار نک آتالارینکز غہ تلاکان ہم سلمادی تیورلار تقی ایکنجی اول کم اوز بک خان قهر قلیب قیات*⁷⁷ استای غہ اوروم جشیب بارجا اوغلانلارینی ایل کون لاری بلا قوشون بردی ایرسا اول تقی بز نی عزت و حرمت قلیب قلج جبغان یورت اجغان آر شیبیان نک اوغلانلاری دور تییب ایکی باغ لیغ ایلنی*⁷⁸ بز کا بردی بری قرلیق بری بیرک ترور اول ایکی ایلنی الیب صاین [خان]# سلغاغان*⁷⁹ یورتومز*⁸⁰ ده اوز حالیمز غہ قویغاندور بز اول جر قوتلی نک کاشانه سیغہ تاش کربج قویغانده و تقی اوغلی تنکز بوغا نک ایشکیندا قورلاب اوتاکینه یوکونکانده اول ایش لار ده بز یوق ترور*⁸¹ بز تیورلار اول کم صاین خان اوغلانلاری بردی بک خانده تمام بولدی ایرسا جان بک خان نک آنا سی تالی دوالی بیکم ایمدی یوریت تقی خان لیق شیبیان خان اوغلان لاری غہ تکار تییب منکغتای*⁸² اوغلی خضر خان نی اونداتیب ایلتب سرای ولایتنده خان قلدی صاین خان اوغلان (39a) لاریندین سونک اول خان تختنده خانلیق بز کا تک کان دور تیرلار بو بر دفع⁸³ سوز مونداتقریب برلا ایتلدی

ایمدی کلدوک⁸⁴ ینه اولقی سوز نک باشیغہ جون جنکز خان اوغلانلاری غہ

⁷⁶ غور قنای [Баргольд]

⁷⁷ قات

⁷⁸ ایلنی

⁷⁹ سلغان

⁸⁰ یورتورومز

⁸¹ ترو

⁸² منکغتای

⁸³ دفعه

⁸⁴ کلدیک

لار یولو قدی انی قوالاب اطارده اطلدین یقلیب بوینی سینیب⁶² وفات بولدی

[آغاز داستان] ایجان خان [و] صاین خان

ایجان خان بلا صاین خان مشهور ترور تورالی [خان قیزی]# ضعیفه سندین*⁶³ توغغان⁶⁴ ایردی ینه اون یتی اوغول [بار ایردی]* کم اوزکا ضعیفه لاریندین بولوب ایردی بو ایجان برلا صاین (38a) خان لیق نی بر بری سنکا مراعات*⁶⁵ قلدیلار صاین خان کجک ایردی اگا سی ایجان*⁶⁶ کا ایدی آتام اورنو غا اغام سن همان آتام ترور سن یاه یوروتغه برا ترور بز خان بولغل تیدی ایجان ایدی منک سندین یاشغه اولوغ ایکانم راست اما آتامز سنی بسیار سویب ارکا اوستوروب ایردی بو جاق غه تکرو سنک ارکا لیکینکنی*⁶⁷ و محال لارینک نی جکیب ترور من شاید که خان بولسام بورونقی تک محال لارینک نی جکا الماغای من تقی آرامز ده اوروش عداوت بولغای سن اوق خان بولغل سنک خان لیقنکغه من جیدار من اما منک خان لیقم غه سن جداماس سن*⁶⁸ تیدی اول تیکان نه سوز بولور یوساقلی آغام تورغانده منکا نا اوخشار که*⁶⁹ خان بولغای من تیب آغا سیغه کوب تکلیف قلدی قبول قلمادی ایرسا ایدی بولماسا بر ایش*⁷⁰ قلالی اولوغ بابامز جنکز خان قشیغه برالی من هم سوزومنی عرض قلاین سز هم سوزونکز نی عرض قلنکز هر نه بابامز یرلغی بولسا انک برلا بولالی تیدی ایرسا بو سوز نی معقول کوروب قبول قلدی بر*⁷¹ آنا دین توغ غان ایکی اوغول و اوزکا*⁷² آنا دین توغغان⁷³ اون یتی اوغول بارجا سی قوشولوب*⁷⁴ اولوغ خان کورنشیکا بردیلار بولار که خان نک*⁷⁵

- 62 سی نب
63 ضعیفه سندین
64 توغان
65 مراعات
66 ایجانی
67 ارکالیکنی
68 جداماسن
69 ک
70 براویش
71 بو
72 ازکا
73 توغان
74 خوشولوب
75 خانی

بسه غرض بو مقدمات دین اول ترور کم بو نسخه نی حقیر دین او قوغان و اشتکان عزیز لار دین و اولوغ کجکدین یاران لار دین التماس اول دور کم بو سوز لار بو حکایت که بو نسخه بتلدی هیچ دفتر ده و هیچ تواریخ ده یوق ترور بارجا سین ایشتماک برلا بتیب ترور من (37b) مشهور ترور کم قولاق اشتکان سوز نک کوبراکی یلغان تیرلار ناکاه اکر خطاسی یا غلطی واقع بولماس⁴⁹ بولسا غلطنی جقاریب خطاسنی راست قلسالار تقی فقیر نی بو ایشم مامور معذور بلسالار عند الله ده ضایع بولماغای ان الله لا یضیع اجرا المحسنین

آغاز*⁵⁰ داستان*⁵¹ جنکز خان

جون جنکز خان ولایت لار نی فتح*⁵² قلدیلار بر طرفی بغداد*⁵³ و بر طرفی هندوستان و بر طرفی دشت قبجاق دریای عیدیل ایردی بو ولایت لار نی تورت [بش]# اوغلی غه بخشیش⁵⁴ قلدی عراق ولایتینی هلاکو خانغه بردی اوکادای⁵⁵ خان نی اوز ولایتنده قویدی تولى خان نی اوز قشیندا سقلار ایردی جغتای⁵⁶ خان غه بخارا و سمرقند*⁵⁷ و خوراسان و حصار ولایت لارینی بردی اما یوجی خان بارجا اوغلان لاریندین*⁵⁸ اولوغ راق ایردی عظیم لشکر قوشوب دشت*⁵⁹ قبجاق ولایتنغه سلغاب پیاردی اطلارینک کا یم بولسون تیب خوارزم*⁶⁰ ولایتی بردی جون یوجی خان دشت قبجاق ولایتنغه که متوجه بولدی اولوغ تاغ که مشهور ترور انکا یتشدیلار بر کون تاغ اراسنده او اولایی جقیب ایردی بر بولاک مرال⁶¹ کیک

49 بولماش

50 کتاز

51 دواستوان

52 فتح

53 بغداده

54 بخشیق

55 ادکادای

56 جغتای

57 سیمرقند

58 اوغلاریندین

59 دشته

60 خوارزم

61 مرار

حقه*³⁴ بلسام بو جهتدین اوترو کم فلان کشی قری سوزنی یخشی بلور تسه لار البته اندین باریب تحقیق و تفتیش قلور ایردیم و عقل ترازوسیغه موازنه³⁵ قلیب معقولین خاطریمدا کیزلاب نا معقولنی بر طرف قلور ایردیم انداغ بولدی کم هر مجلسدا قدیم پادشاه لار سوزیندین سوز کجیب موشکلی واقع بولسا بز فقیردین کلیب تفتیش و تحقیق قلور بولدیلار و من بو صحبت برلا مشهور بولدیم

بسه³⁶ بو ائناده³⁷ حضرت عالی خان (37a) مملکت پناه ظل الله³⁸ سرور سلاطین ایمان*³⁹ و رهبر*⁴⁰ معرکه میدان خلافت تختی نک کی⁴¹ خسروی و شجاعت میدانی نک رستمی اول که میدان ایجرا هر*⁴² کون رستمی دستان ایرور سر دریا سیجه سلاطین پناه*⁴³ ایش سلطان ایرور تا جهان بارینجه بولغای اول شریف ذاتی آنک معدن جود و کرم هم منبع*⁴⁴ احسان ایرور خلد الله تعالی ملکه⁴⁵ و اید سلطنته⁴⁶ غه داعیه بولدی کم یوجی خان اوغلان لاری نک احوالات و کیفیات لاری و ترتیب برلا کم دین سونک کم خان بولغانلاری تا بو وقت غه تکرر نه ایش بلا و نه کیفیت*⁴⁷ برلا آرالاریندا نه تورلیک اوروش لار نه تورلیک ماجرا لار بولغانین بارجا سین معلوم قلیب خاطر لارینده سقلار غه رغبت قلیب اول جهتدین بو فقیر حقیر نی جرلاتیب کلتوروب انداغ عنایت شفقت لار قلیب بولار احوال کیفیات لاریندین سورار ایردی جون حکایت کوب ایردی کوردیلار کم ایشتماک بلا ضبط*⁴⁸ قلماق بولماس آخر حکم قلدیلار کم منکا بو حکایت لار نی کتابت قلیب برینکز تیب جون فقیر الار نک بنده زاده لاری ایردیم حکم لارینی اوزکا قلا المای بی اختیار بو امر خط نی اختیار قلدیم المأمور معذور

34 كما حق

35 موازنه

36 بس

37 اسناده

38 آله

39 امان

40 رهبر

41 که

42 ایجراه بر

43 شاه

44 منبع

45 ملك

46 سلطان تم

47 کیفیت

48 ضبط

سنگ دوستلق¹⁸ نک اوچون یراتدیم]# و تقی انک آینه و اصحاب محصوص لارینه هر برسی هدایت یولیده ستاره برهان*¹⁹ و شمع روشن ایردی لار کما قال النبی علیه السلام*²⁰ اصحابی کالنجوم باینهم اقتدمتم اهتدیتم و علی سائر المهاجرین و الانصار و التابعین الابرار و الاخیار*²¹ الی یوم القرار

اما بعد حمد خدا*²² و درود رسول ارباب ذوی العقول (36b) خدمت لاریدا معلوم بولغای کم بو فقیر حقیر اوتمیش حاجی ابن مولانا*²³ محمد دوستی حضرت خاقان مغفور مخدوم یادکار خان خان زاده سی نک خانه زاد*²⁴ بنده زاده لاری*²⁵ و قدیم خدمت کار لاریندین ترور اول محلده حضرت سلطان الاعظم و الخان المکرم المغفور بعنایت الملك المنان ابو المنصور ایل بارس*²⁶ بهاتیر خان لطیب²⁷ الله ثراه²⁸ و جعل الجنة مثواه خذمة لارینده بولور ایردیم جون بولار جنکز خان نبیره²⁹ لاری ایردی و من بو خاندان نک نعمتی برلا فرورده بولوب ایردیم [تلار ایردیم]# که کما هوا حقه*³⁰ بلسام جنکز خان اوغلان لاریدین اول دشت ولایتنده کم خان بولغاندین سونک کم خان بولدی و اندین سونک نا وقت غه تکرو نا ترتیب برلا کم لار خان بولا کلدی لار و بولارنک اراسنده نه تورلیک اوروش و نه تورلیک ماجرالار کجتی بولار نک برجه سین کما هوا حقه*³¹ بلسام تواریخ لار که کوردیم بولارنک بر ازراقی نک آتلاری بتک لیک ایردی و بسه³² نه ایش برلا و نه کیفیت*³³ برلا خان بولغان لاری مذکور ایرماس ایردی و کوبراکی نک آتلاری هم مذکور ایرماس ایردی جون منکا داعیه اول ایردی کم بولار نک احوالیدین کما هوا

18 دوستلق

19 برهین؛ پرهیز/برهان [Юдин]

20 لا کمار قال عه م

21 الاخیار

22 حمد و خدا

23 مولانه

24 خان ذات

25 بنده ودالاری

26 یل بارس

27 لطاب

28 نراه

29 نبیره

30 کما حق

31 کما حقه

32 بس

33 کیفیت

(36a) جنکیز نامه

بسم الله الرحمن الرحيم حمد نا محدود و ثناء [نا] * معبود اول پادشاه معبود غه کم عالمی و آدمی یوقدین بار قلدی و عدمدین وجودغه کلتوردی و آدم علیه السلام نی*¹ برجا مخلوقاتدین عزیز و مکرم قلیب مجهد ملانک و خلیفه روی زمین قلدی انداغ که کلام قدیمده*² یریلقادی اذ قال ربک للملائکة³ انی جاعل فی الارض خلیفه⁴ که⁵ آیه⁶ تیب بارجا عالمی عدمدین بار قلغان بیر و بار سن بارجا نک⁷ عیبنی بیقان صانع [و] * ستار سن تقی آدم اوغلان لاریندین بعضی سنی انبیاء و مرسل لار قلدی تا انک بیرلکنی و بارلیغی نی خلیق غه بلدورب احکامنی یوروتکای*⁸ و ینه بر کروهنی پادشاه لار و حاکم لار قلدی تا راست لق بلا خلیق لار⁹ اراسنده حکم قلیب میل مداهنه*¹⁰ قلماغایلار و بربرینکا ظلم زیاده لق قلماق غه قویماغایلار قال الله تعالی انا خلعناک خلیفه فی الارض فاحکم بین الناس بالحق و لا تتبع الحوی فیضلک عن¹¹ سبیل¹² الله آیه [تیب] *

و صلوات زاکیات و تسلیمات*¹³ طاهرات اول مقصود¹⁴ و محبوب لم یزل محمد رسول الله صلی الله علیه و سلم اوزرا بولسون کم عالم و آدم نی یراتماقدین مقصود انک ذاتی شریف و عنصر*¹⁵ لطیفی¹⁶ ایردی کما قال الله تعالی لو لاک لما خلقت الافلاک [تیبان سوزین ایکی جهان چراغی حبیب¹⁷ سن تیدی بو دنیا هم اول دنیا

1 آدم غه علم نی

2 قدیمد

3 ملانکه

4 خلیفه

5 ک

6 آیه

7 بارچنک

8 یوروتکان

9 خلیق غه؛ خلیق لار غه [Юдин]

10 مذاهنه

11 من

12 بسبیل [Юдин]

13 تسلیمات

14 مقصود انه لی ؟

15 عفسر

16 لطفی؛ لطیف [Юдин]

17 جیب [Юдин]

『チンギズ・ナーマ (Čingiz-nāma)』

ウテミシュ・ハージー (Ötämiš Hāji) 著

校訂テキスト (Critical Text)

جنکيز نامه

اوتميش حاجي

مقدمه، ترجمه، علمي تنقيدي متن

تاکوشي کاواگوچی، هيرويوكي ناگاميني

نظارت: موتسومي سوگاھارا

『チンギズ・ナーマ (*Čingiz-nāma*)』 正誤表 (Corrigenda)

頁 (page)・行 (line)	誤 (error)	正 (correction)
p. ix, l. 4	qaranggü	qaranggu
p. xxiv, n. 43, l. 2	ペルシア語史書	ペルシア語文献
p. xxxiv, l. 7	Highnes	Highness
p. xxxiv, l. 21	occuping	occupying
p. xxxv, l. 12	Stepp	Steppe
p. xxxviii, l. 1 p. xxxix, l. 12	magin	margin
p. 3, l. 24	ムハージュールーン	ムハージュールーン
p. 9, n. 22, l. 15	исследвание	исследование
p. 9, n. 22, l. 22	1975	2005
p. 18, l. 16	一カラ・キヨルを	一はカラ・キヨルを
p. 37, n. 87, l. 6-7	<i>Ḥāfiẓ Abrū</i> ; text	<i>Ḥāfiẓ-i Abrū</i> ; textc
p. 43, n. 105, l. 6	可能	可能性
p. 80, l. 2	Külük	Külüg
p. 83, l. 5; p. 86, l. 4-5 p. 88, l. 1	Mengä; mengä	Manga; manga
p. 93, l. 5	Begkä	Beggä

اسلام مدنیتی تنقیقات مجموعہ سی ۹۴
اورتہ شرق و اسلام تنقیقات مجموعہ سی ۱۰

جنکیز نامہ

اوتمیش حاجی

مقدمہ، ترجمہ، علمی تنقیدی متن

تاکوشی کاواگوچی، ہیرویوکی ناگامینی
نظارت: موتسومی سوگاہارا

آسیا و افریقا تیل – مدنیتی تنقیقات اینسٹیوتی
توکیو چیت تیل لار اوئیورسیٹی

